
猫又のサクラ にっ！

アルペジア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫又のサクラ につ！

【Nコード】

N5144K

【作者名】

アルペジア

【あらすじ】

短い別れの果てに、彼女は俺のもとへ帰って来てくれた。

猫又。それはこちらの世界に存在しない未知の生き物。神秘的で、人間に近い生命体。

限りある時間の中で俺は知った。人は、誰かを愛する為に一生懸命になる事を。大切な日常を取り戻す為に、こんなにも素直になれるという事を。

幾度という過ちを繰り返して、やっと理解する。

これからも彼女と一緒に平穏な日常が繰り返される……はずだったが。

「啓太、やらせなさい」

「啓太さん、無視です無視！ それより私としましょう！」

再び違う世界から訪れた、サクラと同様の新たなる変態猫又。

横暴、我侭、そして性欲絶倫。

だけど、こんな彼女との出会いを経て、俺は知らぬ間に新しい世界への第一歩を踏み出すことになる……。

愛と笑いと涙のノンストップ・ドタバタラブコメディー第二弾！

「次回作は『猫又のスノウ』で決定ね」

「させるかあああああ！！！」

「好きにしてくれ……」

猫又のサクラ 続編公開です

プロローグ（前書き）

はじめまして。前作を読んでくれた方はお久しぶりです。作者のS
kyです

前作【猫又のサクラ】の続編を公開致しました。ハイテンションな
サクラたちの日常を、どうぞ再びお楽しみください

プロローグ

安らぎの風は、俺の頬をくすぐるように心地よく吹き抜けていく。こつやつて窓の外をじっくり吟味するのもいいかもしれない。移り変わっていく外の様子を、時には笑い、時には静かに……。線を描いて輝く光は優しさと温かさに包まれているような気がする。まあ、気がするだけなのだが。ふつと、外の景色から目を離し、ベッドで寝ている彼女に視線を向ける。

桃色の長い髪に、凜とした細い眉毛。少し丸みを帯びた綺麗な輪郭。人間らしさを良く晒し出している。

しかし、それを相反させるかのようにピンと張り詰めた猫耳。布団から少しだけはみ出ている尻尾。両方とも、小さな呼吸とともにピコピコと動いている。

そつと、さらりとした長い髪に手を掛けて、ゆっくり撫でてやった。寝息と同時に「きゅう」という声が漏れて少しばかり笑みがこぼれた。

前髪を上げて、額に軽くキスをする。それと同時に彼女が目を覚まし、寝ぼけ眼のまま、目の前の俺の唇を奪った。

……こついうことは行動が早いな。不意打ちをくらった。

「えへへ。啓太さん、おはようのチューです」

「……言う前にするんじゃないよ、ったく。……おはよ、サクラ」

そう言い、おでこをこづいて、もう一度彼女の唇に自分のを重ねる。

……ああ、そっか。

コイツと　サクラと一緒に過ごして、もう数年が経ったんだっけ。

台所にはエプロン姿のサクラが立っている。この風景も、もう見慣れたものだ。少し前までは俺が台所に立っていたはずなのに。ちゃんと料理のコツさえ教えてやれば、サクラも料理が出来るようになる。何度も教えてやったかいがあった。

「啓太さん、今日のお昼ご飯は何がいいですか？」

後ろ向きそのままサクラがたずねてきた。トントンと包丁で野菜を切っていく音が新鮮に聞こえてくる。

「そうだな。今日は啓介の好きなハンバーグとかどうだ？ アイツ、喜ぶぞ」

「ああ、良いですねえ。あの子、ハンバーグ大好きですしね」

頷きながら、切った野菜はボイルに入れてサランラップをかける。そのまま、手馴れた様子で冷蔵庫に入れた。

時刻は既にお昼過ぎ。エプロンを脱いだサクラが、ソファに座っていた俺に身を預けてくる。

こういう時に限って彼女は甘えてくるのだ。もちろん、俺はそれを拒もうとはしない。

「啓太さん……私、幸せです」

自分の鼻を俺の頬に擦り合わせて、瞳を閉じる。猫みたいなのをしているが……まあ猫だから仕方が無い。

彼女の肩に自分の腕を回して、抱き寄せる。愛しくて仕方が無い。

「俺もだよ……。お前と出会えて、本当に良かった」

そう言つて、サクラの首筋にキスをしようとして 止めた。とてととと走つてくる音が聞こえたからだ。

「おとーさーん！」

元気な子供の声。此方へ向けて走ってきた、俺とサクラの子供……

『啓介』をしっかりと抱き上げてやった。

猫耳と尻尾がついている、可愛い男の子だ。いわゆる人間と猫又のハーフってやつかな。

「啓介、お父さんに遊んでもらえてよかったねー」

とサクラ。啓介に俺を取られたせいか、少しばかり不満そうにしていたけど、直ぐにそれは満面の笑みへと変わった。

「うん！ 僕ね、お父さんもお母さんもだーいすき！」

啓介もそれに笑顔で答える。ああ、本当に可愛いやつだ。これを俗に親馬鹿というのか？

「ははっ。お父さんも啓介が大好きだぞー？」

そう言つて頭を撫でてやると、気持ちよさそうに啓介がじゃれてきた。……やっぱり猫だな。

家族となった三人。笑いながら、俺たちの時間は過ぎていく。こうやって、手に入れた大切な日常。

悪くは無い。今から、ずっと続いて行くんだ。この素敵な日常が。これからも、ずっと……。

「な・わ・けあるかああああああつー!!」

大汗をかいて絶叫しながら俺はベッドから跳ね起きる。

肩で息をしながら俺は額を拭い、血走った目をごしごしと擦る。

ゆ、夢……？ 何て非現実的である意味恐怖な夢なんだ……。

前も後ろも汗びっしょりの俺。そして、ふと違和感に気付いた。あれだ、人の気配だ。布団の中から。しかも何か温かい。何か柔らかい。何かくすぐつたい。

しかもぶつちやけ言えば頭見えてる。

……………。

そーっと、布団を少しずつたくし上げていく。そこにはやはりとうか、何というか。

「子供の名前は啓介啓介啓介……いつか峠を最速で駆け抜ける走り屋にしてやるのです……」

柔らかかそうなメロンを俺のおなか部分に押しつぶし、寝言を呟いている猫又の……サクラがいた。猫耳と尻尾は夢の通り健在である。そして無論裸である。マツパである。俺の右足に自分の足を絡ませて、舌でぴちゃぴちゃとミルクを舐めるかのように俺の二の腕を舐めている。

まるでこれは……アレの最中のように。

「……いいいやあああああああああ！？」

……もしかすると、寝ている間に彼女に純潔を奪われたかもしれない。

そんな恐ろしい結末を脳裏によぎらせる、最悪かつ絶望の朝だった。

春の訪れ〜正体不明のホワイト・キャット〜

現状況を確認すれば、ごらんの有様だよ！ の通りサクラが俺にしがみ付きながら眠りこけている。

今さっきの俺の叫び声もサクラには全く聞こえていなかったのか、もしくは耳が猫耳にグレードアップして防音機能が装着されたのか、へっちゃらな寝顔で爆睡しているのである。

だって、あからさまにコイツ、塞ぐように耳をパタンと閉じやがったんだもん。リアル耳栓とか卑怯だよ。咆哮効かないじゃん。

……仕方ない。

とりあえず、ジャックから教えてもらったサクラの弱点とやらを呟いておくか。

「緑のためき」

びくん。

サクラの身体が小さく反応した気がする。

額には少しばかりの汗。気持ちよさそうに眠っていた表情が、今では苦悶なそれに変わっていく。

だけど、俺は尚も続ける。まあ、このまんまじゃ起きれないしね。

「横からひよいつと現れたよ。こっつ、ひよいつと」

「いやああああああっつ！！？？」

頭に手を当てて、全米が震撼するほどの大絶叫と共にサクラが目覚める。

近所迷惑だヴォケーー と叱ろうと思ったが、小さく丸まっていたサクラがその場で跳ね起きたもんだから、視界はぶるんと大きく揺れるそれを直視してしまった。

赤い血飛沫が俺の鼻から吹き出る。しかし何故だろう。感無量だ。もはや何も言うまい。とりあえず冷静に、ぼたぼたと真つ赤な液体があふれる鼻をティッシュで拭いておこう。

「緑のためきはやめてやめてマジでやめて……！　せめて赤いたぬきと緑のきつねがフレーザーバーしてイエス・フォーリンラブ……！」

天皇陛下も小さく拍手喝采する位天晴れな壊れ具合だな。ガタガタと震える辺り、本気で怖いんだろう。

涙目で意味不明な言葉を発し続けているサクラに向けて、俺は冷静に彼女の肢体を見詰めないようにしながら言った。

……え？　み、見詰めてなんかいないし！

「サクラ、お前俺に何か言いたい事はあるか？」

「あ、啓太さん。おはようです。昨日は激しかったですね。ペースに合わせるのがやっとでした。啓太さんってば絶倫なんですから」

軽っ。やけにあっさりしてんな……っておいコラ。

「嘘つくな、嘘を。昨日はお前、俺がおやすみと言った瞬間に寝ただろが。ってというか何故俺のベッドに裸で入ってる？」

「てへへ、私ってば夢遊病なもので。啓太さんのぬくもりを求めるあまり、ついつい脱いじゃうんです。啓太さんはフェロモン出ますから悶々しちゃうんですよ。フェロ悶々」

「……次からはバリケード仕掛けておくか。二、三個緑のためきでも置いておこう」

「緑のためきイイイイイイイツ!? やだやだやだやだらめええええええつ!!」

わあ、また発病しやがった。今度は泣きながら俺に抱きついてきたよジョニー。

俺の胸板に張りのある何かが当たっている。潰れている。先っちょが擦れてくすぐったい。……いかん、また鼻血が……!

半狂乱のサクラをなだめすかし、ベッドからやっと降りられたのは、起きてから十分後だった。

今日は妙に刺激的だな。変な事が起きなければいいんだけど……。

ふわふわと揺れるサクラの桜色の髪を眺めながら、俺はゆっくりと桜並木を散歩する。あ、猫耳と尻尾は人目につくので元に戻すように言っておいた。

彼女が帰ってきてから、数ヶ月が過ぎた。時間の経過というのは本当に早い。ついこないだまで冬だった気分だ。

それにしても、サクラの様子が以前と比べて変わった気がする。髪の色も黒髪から桜色になっているのも、本当の自分の姿になったんからなんだろう。

……俺なりに考えた推測を挙げるなら、サクラは猫又の世界で“何らかの事故”に遭い、魂だけの存在になった。

しかし、肉体は向こうの世界に存在する。だから借り物の肉体が死滅した後、再び魂となって向こうの世界に戻り、肉体を取り戻した。どうやって向こうの世界に行き、どうやって帰ってきたとかは分

からないけど、それでも俺は彼女が帰ってきてくれたから問題ない。こうやって、再び二人で桜を見ることが出来るようになったんだから。細かいことは考えなくてもいいと思っている。難しい疑問を解決するより、今この時を幸せに感じるほうが好きだからさ。

「春ですなー、啓太さん」

「そうだなー……ま、お前の頭はいつでも春だけだな」

「も、もう啓太さんだったら……。褒めても愛液しか出ませんよ?」

「褒めてねえし出すな」

相変わらずコイツの変態発言には困りものです。さっきまでのサンチマンタリズムな気分が台無しだよ。

ちょっとは自重という言葉を知らんのかね、このアホ又は。

サクラと出会った桜の木を通り過ぎて、俺たちは気の向くまま散歩する。

さて今日はそろそろアパートに帰ろうかなーと思った矢先に、俺の視界に妙なものが映った。公園の、少し端に位置している。なんだろう、カラスがあんなに集まっている。動物の死体か何かをついばんでいるんだろうか。

サクラの手を引いて、俺はカラスが集まっている場所まで駆け出し

た。

俺がやってきた途端にいつせいに飛び去っていくカラスたち。その群れが集まっていた場所には……。

「にゃあ……」

地毛が真っ白で、小さい身体を弱弱しく震えさせるにゃんこだった。さっきまでカラスに突付かれていたのか、その姿はボロボロに薄汚れている。しかしまあ……これは可愛らしい。

「ねこー」

手当てしてやろうと思いい、その猫を抱き上げようとした刹那、誰かにがしっ、と肩を掴まれた。

気付けばサクラが俺の肩を掴んで、なにやら不機嫌そうな顔で見詰めている。

「け・い・た・さ・ん？ 浮気は駄目ですよ浮気は！」

「浮気って……撫でてやるくらいはいいだろ？」

「駄目です！ もしそれで懐いたらどうするんですか！ 絶対に近づいたり触っちゃ駄目です！」

「……ちえ。分かったよ」

「それに撫でたいんだったら、私を思う存分愛でて下さればいいじゃないですか 拒んだりしませんよ、いつでもお相手しますにやあ」

「そうですね」

「……ああん！ もっと関心持って！ せっかく語尾に『にゃあ』をつけたのにー！」

にゃあにゃあ言いながら俺の服を引っ張るサクラ。
普段使ってない分わざとらしいわ。

……仕方ない。

じーっとこっち見てる子猫を手当てしてやれないのは残念だけど、こいつがうるさいからなあ。嫉妬は醜いね。

とにかく、家に帰ってお昼ごはんの準備でも取り掛かるのかな。くるっと振り向いて、子猫を後にして歩き出す。サクラも直ぐに後をついてきた。

「……あ、啓太さん。あの家見てくださいよ」

「うん。……どうかしたか？」

「何で、ダイ ハウスなんだ……？」

「お前それが言いたかっただけだろ」

本気でどうでもいいわ。

自室のドアの鍵を開けようとして、ふと、何かの視線が自分に向けられていることに気がついた。

不思議に思って後ろを振り向くが何もいない。いたのはクエスチョ

ンマークを頭に浮かべて首を傾げるサクラの姿だけだった。
……はて。今一瞬だけ妙な気配を感じた気がするんだけどな。
ワックスをつけた茶の自分の髪をわしわしと掻きながら、俺はドアの鍵を開けた。

その瞬間 さっきまで気配が、なんだったのかわかった。
ドアを開けた拍子に、旋風のように中にすりと入ってくる“何か”に気付いたからだ。

「なっ ……!？」

「あっ ……!？」

サクラと同時に驚いた声が出してしまった。動物だろうか。しかし、何が入ってきたんだ。

慌てて中に入り、靴を乱雑に脱ぎ捨ててドタバタと部屋に戻る。変に暴れられて物を荒らされちゃかなわない。

居間を確認する。いない。台所。ここもない。後は俺の寝室だけだが。

「……………あっ」

居間と寝室を境にしていた障子をおそるおそる引いてみると、そこには……………。

「にゃあ」

先ほどの、カラスに苛められていた真っ白の子猫が、俺のベッドの上に乗っかかり、我が物顔で占領していた。

とん、と軽いステップでベッドから降りると、その真っ白猫は俺の

そばまで近寄ってきて、ズボンの足首辺りをほお擦りしてきた。もさもさの柔らかい毛が服と素足の間を何度も擦れて……ふぬおおおお、くすぐったいではないか……！

とりあえずニコニコしながら、その子猫を抱きかかえようとして、誰かが俺の肩を叩いた。少し強めだ。

後ろを振り返ると、サクラが頬を膨らませて、むくれた様子で俺を睨んでいる。それと同時に、子猫にも妙な敵意を発し続けている。

「む〜！ 私と啓太さんの愛のすくつ（何故か変換できない）までついて来ましたが、このドロボー猫はー！」

「すくつじゃなくて巣窟すくくつな。……にしても、よくまあこんなところまでついて来たなあ。全く気がつかなかったぜ」

「私にも気付かれず啓太さんをストーキングするとは……なかなか挑発的な猫ですねー！」

猫の目で真つ白猫を威嚇するサクラ。真つ白猫もサクラを見詰めてふしゃーつと声を荒げている。

「ま、まあまあ。とりあえずさ、この猫汚れてるから、一日だけ置いてやらないか？ 部屋に入ってきて直ぐに追い出すのは可哀想だしさ」

そう言つてサクラをなだめかそうとしたが、本人は全く聞き入れる様子も無くぎゃんぎゃんと反対してきた。

「駄目です！ 駄目です駄目です駄目ですー！ 啓太さんは猫に甘いんですよ猫にい！ 私以外の猫にうつつを抜かしちゃ駄目！ 私だけを見てー！」

半泣きで俺の腕にしがみついてくるサクラ。こういう時はどうすり

やいいかなー……。

……うん。いい手段があった。いや、俺的にあんまり使いたくは無かったけど、今はこれを使うしかないか。……この技は生涯二度と使いたくは無いいものだ。

いつまでもまとわりついてくるサクラをそつと引き離し、俺のベッドに座らせる。俺も、その彼女の隣に座って、その小さな肩を抱き寄せた。

「あつ……」

サクラの小さな声が漏れた。いつ出したのか知らないけど、猫耳は緊張ゆえか大きく反り立った状態だった。尻尾もぴんつ、と大きく立てている。

俺はその耳元に優しく囁きかけた。俺の吐息を直に喰らって、サクラは小刻みに身体を震えさせている。

「なあ、サクラ。そんなに嫉妬ばかりしてたらな、いつもの可愛い顔が台無しだぜ……？ もつと笑えよ、な？」

するりと彼女の脇に手を入れ、優しくゆっくりとくすぐってやる。くねくねと動かしていた尻尾が直角に立った。

「は、はははひい！ あ、あのあの啓太さん！？ まだお昼ですから、あのーそのー、えつとー……ほ、ほらほら猫も見てますよ、ほらー」

「別にいいよ。なんなら、見せ付けてやるっぜ」

ふっと息を吹きかけて、更に彼女を抱き寄せてほお擦りしてやる。

当の本人は顔が真っ赤でガチガチに固まっていた。

「ふああっ！ け、啓太さんの吐息が、耳に……っ！ や、あああ……」

びくびくと身体を小刻みに痙攣させながら、サクラが甘い声を上げて息を荒げる。

見ての通り、こいつは自分からは積極的な分、相手から攻められると縮こまって赤面する変わった奴だ。

初心なのかMなのか良く分からん奴だ本当に。まあ俺が攻める機会など滅多にないし、しないしな。

……さて、そろそろ落とすか。俺もそろそろ恥ずかしくなってきた。マジで。恥ずかしさ全開のまま、俺はサクラに「トドメの言葉をさした。」

「……サクラ。もし俺の言うことを聞いてくれたら、後でいーっぱい気持ちいいことしてやるぜ？ そりゃあ、気持ちよすぎて気を失うくらいいな……」

リミットブレイク。俺の最後らへんの発言「気持ちいいこと」に反応したのか、サクラは沸騰したやかんのように湯気を出してコクコクと頷いた。

よし交渉成立。サクラのエロい表情見てるところちまでドキドキしたけど、まあ乗り越えた。これで一応安泰だ。

「や、約束ですからね……嘘だったら承知しませんよ……一日だけですからね……気持ちいいことしてくださいね……絶対ですからね……」

それつの回らない口調でサクラが繰り返し俺に尋ねてくる。まあ、

嘘じゃないから別にいいんだけど。
さて、とりあえず難問は解決した。しばらくこの手段は次から使わないようにしよう。下手したら自分の身の危険すら感じてしまうからな。

そんなこんなでサクラの了承も経て真つ白猫は一日だけ俺の部屋に住むことになった。

名前は……うん、白くてモサモサしてるから『スノウ』って名づけた。モサモサ関係ないけど。

毛づくろいは普通にしてやれたが、風呂は……サクラにスノウを取られて洗ってやれなかった。

で、あつという間に就寝になって一緒に寝れるかなと思ったら、サクラに「私も一緒にできればどうぞ」と上と下がスケスケのネグリジェ姿で迫って来られたから無理だった。

そのネグリジェは後で没収だ。あまりにも刺激的すぎるわバカヤロウ。

仕方なく、この日の夜は一人で寝ることになった。明日だ。明日一番に起きてほお擦りしてやろう。

あ、スノウをな。

長い長い夜は更け、朝になった。ちゅんちゅんと鳴く雀が耳に届く頃には、既に俺の脳は正常に回転していた。

しかし、なんだろう。身体が重い。主にお腹辺りがずしつとする。人の気配も感じるのは、おそらく気のせいではない。何か、俺の

腹の上で丸まっているのだ。

……何かだと？ そんなの分かりきってることじゃないか。

「おい、サクラ！ あんだけ人のベッドに入るなって何度言えば……
…言え、ば……」

布団をばっ！と捲りあげ、俺はお腹の上に乗っかっているサクラに向けて呼びかけたが、どうやら俺ははまだ夢から覚めていなかったようだ。

だって、サクラじゃなくて、全く知らない女の子が裸で俺のお腹の上で丸くなって寝ているんだぜ？ そんなの夢に決まっているじゃないか。

……あー、もしこれが現実だったらちようど『啓太さん、呼びましたかー？』ってその障子をあけて来て大惨事になるんだろぅなー、と。

でも、これは夢だからそんなことは、

「はい 啓太さん、呼びました……か……？」

相変わらずエロいネグリジェ姿で障子をあげてきたサクラの顔が、一瞬にして曇った。

彼女の目は俺を見ていない。俺の上で寝ている、見知らぬ女の子にただならぬ視線を向けている。

一瞬即発。絶対絶命。うわあ、サクラの身体震えてる。痙攣の如くガタガタ震えている。どうしよう、病院連れて行くか。

びきっ、ぶちっ！！

あ、サクラの額に浮かんだ血管がブチ切れた。

と思った瞬間、彼女の髪が桜色から金色に変わった。身体からはバチバチと火花のようなオーラを発しながら此方を見ている。

…… ような気がした。うん、一瞬だけ。目の錯覚かな。本当に一瞬だけサクラがスーパーサクラになった気がしたんだが……。

…… 逃げたほうがいいかな、俺？

「あ、あのー、サクラ？」

おそろおそろサクラの顔色を窺いながらたずねる俺。だけど当の本人は俺の目もくれずじっと立ち尽くしている。

そして、やっとのことで出た声は…… 想像を絶した。

「啓太さん…… その女ア…… どの畜生の雌猫ですよ……？」

「…… え？ いや、俺も何がなんだか……」

「それでも信じてたんですよ……？ 啓太さんの操は必ず私が奪うんだって、今でもほら、夜からずつとこのカツコで狙ってたんですよ……？」

ひらひらとスケスケネグリジエを見せびらかすサクラ。だが何故だ。何故サクラの「ですよ」口調とネグリジエ姿に萌えぬ。俺の目と耳は腐ってしまったのか？

「しかしまあ、こうやって簡単に奪われちゃったら、いくら温厚な私でも結構シヨクなんですよ…… その女を（ピーー！）して（ズギヤーン！）して（ギヤバーン！）してから（あばよ涙ー！）ってくらいしないと落ち着かないですよ、きつと。だって私、心身ともダメージを食らってるんですよ…… 残りヒットポイント10ですよ……？」

首をゴキベキバキボキヨと不自然な音を鳴らしながら近づいてくるサクラ。口からは血を流しながら、目は血走らせながら。いや、本気で怖い。これを夜見たら、僕はきつと泣くだろう。

「ま、今からその女、もう二度と眠ることの出来ない身体にしてやりますですがよぉ……」
アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！

口元を半月上に歪ませて高笑いを続けるサクラ。もうね、この子どもこのヤンデレかと。

「啓太さん、ところでソイツ、どこの誰ですよぉ？」

「え、え、あ、あのいや「はよ言えや」はい全然知りません。本気で知りません。ごめんなさいすみません」

ここまで自分がヘタレだという事実には驚いた。
とりあえず言おう。マジで怖いと。

俺の上で寝ていた女の子が小さな寝息を漏らす。
雪のように真っ白な肌。すべすべで柔らかい肢体と、まだ成長中であろつその体つき。

肩程度まで伸びた真っ白な髪と幼い少女のような童顔。すやすやと眠るそれは本当に子供みたいだが。

……ああそうか。この感触。このぬくもり。やっぱり夢じゃないんだな、ちくせう。

「とりあえず啓太さん、退いてくれませんか？」

「とりあえずサクラ、落ち着いてくれないか？　これは何かの間違

いだから」

「間違い？ 何を間違える必要がありますかアハハ。私はその娘が啓太さんと寝ている時点で間違いだと思えますが。邪魔な不純物は駆除します」

「駆除てお前。まずは落ち着こうぜ」

「まあともかく。今はそこにいる雌をどっかに逝かせない限り私の怒りはおさまりません。だから」

「……うるさいわね」

俺の上で寝ていた、その女の子の口から発せられた声でぴしゃりと遮られる。

むくりと起き上がり、俺から離れてベッドに腰掛けると、大きなあくびを一つして俺とサクラを交互に見た。

「人がせつかくいい気分で寝てたのに、喧しいったらありやしないわ。……ん、あら？ 何で私こっちで寝てんだっけ？ んー？」

きよろきよろと忙しく周囲を見回す女の子。

自分のいる位置が把握できていないのか、「あ、あれ美味しそう」とミツーマウスのぬいぐるみを見ながら、ぽん、と掌に拳を乗せた。

……美味しそう？

「……ああ、寝ぼけて間違えてこっちに潜り込んだんだ。いやあ、失敬失敬」

やじやら姫様がこの世界にエロしたよじです。

「……で、名前は」

「……………」

「……黙秘権か。フン、まあいい。それより、何でこんなことを仕出かしたんだ？」

「……私は……ううん。ほんの、ほんの出来心だったんです……！」

「出来心でこんなことを仕出かされてもねえ……天国の母さんだつて悲しんでるぞ？」

「か、母さん……！」

「……ほら、サンドイッチ食うか？ 腹減つてんだろっ？」

「……すみません、刑事さん」

「……なあ、何やってんの？ お前ら」

わざわざ俺の部屋からスタンドライト持ってきてからに。
第三者から見ると意味不明な光景だぞ、おい。

「もー、啓太さん。今がいいところだったのにー」

「そうよ啓太。少しは空気読みなさいよね」

口々に愚痴を漏らす猫又二匹。ぶつくさ言いながらライトを片付けて本題に戻りだした。

……なんだろう。すげえ腹立つ。俺がおかしいのか、俺が変なのか？
っていうか名も知らん猫又。いきなり呼び捨てかコラ。

「それじゃ、真面目にしますか。あなたの名前は？」

ようやく尋問らしくなってきたところで、その質問に名も知らん猫又が無い胸を踏ん返り返らせて、威張るように言い放った。

「ふふふ、聞いて驚かないでよね。私の名はアシュリー。アシュリー・ラインハート！ 我が手中である猫又世界『シエアリス』を統括するラインハート家の姫君よ！」

「ふーん」

「ふーん」

「……え、ちょ、何その反応！？ 全く興味無いつてやつ！？ それとも毛の寸先まで信じてないつてやつ！？」

「いや、両方」

「ですね。何、シエアリスつて。何、ラインハートつて。全く理解出来ないです。妄想は大概にしておいた方がいいですよ」

サクラのその一言にカチンときたのか、その猫又……アシュリーと

やらは語気を強めて言い返した。

「妄想じゃない！ あんただってそのウシ乳は大概にしておいた方がいいわよ！ このホルスタイン！」

「な、なんですってー！？ 美乳ならず微乳の娘ツ子が生意気をー！ むしろ巨乳が羨ましくて仕方ないんでしょうが、このつるぺた娘！」

「つ、つるぺたって言うなー！ どうせ乳に全部栄養取られて頭はすっからかんなんでしょうが！ この巨乳馬鹿一代！」

「馬鹿って言ったほうが馬鹿なんですよ！ 貧乳！」

「うるさい！ このロケットおっばい！」

「まな板！」

「垂れ乳！」

「垂れてないわああ！ このミニマムボイン！」

「ミニマム脳味噌！」

「……そ？ そ、掃除！」

「……じ？ じ……自転車！」

「……や、矢！」

「流鏑馬！」

「めだか！」

「カード！」

「ドラえん……あああ！？」

「よっしやー！！！」

「……お前らな」

罵り合いからしりとり始めてどないすんねん。

そんな感じでサクラとアシュリーをなだめかして、本題へ戻る。

どうやら彼女は猫又の世界からやってきたお姫様で、至極高貴でカリスマなお方らしい。

普通は俺たちのような凡人には話しかけることも顔を見ることも出来ぬ、それはそれは気高い　　ってところまで説明されて彼女の頭をはたいた。

啓太チヨップだ。今のは軽めだが、本気だと山を一刀両断するぞ。

そんな俺の軽やかな一撃を見て、サクラは此方に向けて爽やかな笑顔で親指を立ててきた。俺はそのま逆をサクラに向けてしてやった。あ、泣きそうな顔になった。慌てて小指を立ててやると、今度は頬を染めてこっちを見詰めてきた。分かりやすい奴だ。

「いったあ……いきなり何するのよ無礼者ー！　普通の日常を送れなくしてやるわよー！？」

涙目で頭を押さえてこつちを睨みつけるアシユリー……ん？ そう
いえばコイツ、昨日カラスにいじめられてた子猫だったよな。
じゃあアシユリーとか長つたるい名前じゃなく、昨日名づけたスノ
ウって名前で呼ぶか。うん、そうしよう。

「なんだか馬鹿にされてるようだから一発。それにお前、お姫様だ
かなんだか知らんがな、俺の部屋では俺が一番の権力者だとい
うことを忘れるな。分かったか、スノウ？」

「わ、私の名前はスノウとかへんちくりんな名前じゃなくアシユリ

」

「分かったか、ス・ノ・ウ？」

「ぐっ ……はい」

これ以上争っても無駄だと感じたのか、スノウは小さく唸るような
声を上げて黙った。賢明だな。

聞き分けのない猫はちゃんと調教しておかないとな、サクラみたい
に。……あ、別にエロいとか変な意味でなく。

彼女は彼女で後ろから「さっすが啓太さん！ 女殺し人殺しい！」
と言って自前の桜紙吹雪を上に向けてパラパラ投げている……人は
殺してねえよ。

さて、このお姫様とやらをどうするかな……。

「 駄目です」

「 お前ならそう言っと思っただよ。……本当に駄目？」

「だーめーでーすー！ 絶対にだめー！」

「えー。だってさー。面白そうじゃん。コイツが本当にお姫様なら、後から召使とか側近とか来そうだし」

「やだやだやだー！ この空間に他の女が入ってくるなんて私は断じて認めません！ 猫又世界のお姫様ならさっさとそっちに帰ってもらいましょうよー！」

「……救ったご恩とか貰えるかもしれねーのに」

貪欲ですね、はい。

まあ、俺の頭の二十パーセントは貪欲で出来てるからしょうがないか。

「それに啓太さん！ 結構前に私のこと愛してるって言ったばかりじゃないですか！ ほら、あの去年のクリスマスー！ キスしてくれた後に浮気ってどうかと思いますよー！」

「……はて？」

「あー！ー！ 忘れてるー！ 大切なことなんだから忘れないてくださいよー！」

……んな恥ずかしいことを一々覚えてられるかよ。俺はあんまりラッブル（ラブラブカップル）みたいに人前でイチャイチャしたくないんだ。

幸せなのは分かるが、見ててあのウザさは最骨頂だぞ。

因みにお姫様は部屋に置いてあるテレビゲームに没頭中である。ー

日の大半は何してんかとたずねたら『寝てる』と即答しやがった。もはやお姫様でなくお暇様だな本当に。NEET街道は直ぐそこに見えているぞ。

「ま、ともかくさ。今は二ト姫に色々と事情聴取してみようぜ。何か猫又世界のことが分かるかもしれないし。お前も興味あるだろ？」

「う、まあ、興味あるといえば、あると思いますが……」

腕を組んでご不満な様子の子クラ。

コイツは一時期、記憶が消えて自分の暮らしていた場所、家族を全て忘れてしまった猫又なのだが、何故か自分のことだけは思い出しづらい。

ということとは、スノウに話を聞けば家族のことや、向こうの世界のことを思い出すかもしれない。そう思って、俺は彼女を追い出さずに置いてやろうと考えたのだ。

……まあ、コイツ、追い出したとしても立派な社会進出が出来るか分からないし。むしろ寝転がってゲームやってるお姫様が独立できるか不安だし。

……ん？

「あ、いっけね。お昼の準備忘れてた。子クラ、ちょっと行ってくるから留守番してくれないか」

「はい」

「ちょっと待って」

居間から声が聞こえてきた。ゲームを一時中断して此方にやってきたスノウが、何やらにこやかな様子で

「私も連れて行って」

と言った。

……面倒くさいから駄目、と言いかけたが、それを言ったら更に面倒くさくなると思ったので言わなかった。

仕方なく頷いてやると、今度はサクラが「じゃあ私も一緒に行く！」だとか何とか言い出しやがった。

流石に三人もいたら面倒なこと限りないので、サクラには特別任務を出してやった。

「これはお前にしか出来ない仕事だ。ゴッドフェニックスの構えで敵の攻撃から俺の部屋を守っていてくれ。この仕事はお前にしか出来ない。そう、俺が最も愛し最も信頼を置くことが出来るお前にか出来ない仕事だ。大事なことから二度言った。……頼めるか、サクラ？」

至極真面目な表情で言っていると、彼女はツンデレのように唇を尖らせて言った。

「……しょ、しょうがないですねー。啓太さんにもっとも愛されている私にしか出来ない仕事ですからねー。し、仕方ないです。留守番しましょう。あ、べっ別に啓太さんの為にやってるんだから、勘違いしないでよねっ！」

何に勘違いするんだ、何に。

留守番任務をサクラに依頼しておいて、本当にゴッドフェニックスの構えで留守番しただした彼女を（生）温かい目で見守りながら、俺

はスノウと一緒にドアを閉めた。
さて、今日のお昼は何にしようかな。

「そうね。今日は妥当に高級料理店並のフォアグラのチリソース和えね」

「帰れ」

どこが妥当だ。

買い物のために商店街をぶらつく俺とニート姫。

コイツは落ち着きと言うものを知らないらしい。やたら色んな店に入りたがるし、半ば強制的に服屋さんに入れられたかと思ったら、自分が気に入った服を持って清算に向かったり。

高いから駄目、と言いそうになったが、もしコレ（スノウ）が本当にお姫様だったことを考えると、後から大臣やら王に色々とお金やら金品とか貰えるかもしれないと思って、結局買ってやった。まあお姫様じゃなくても、サクラに服をあげれば問題ない。一応お金をいくらか持ってきておいてよかった。昼飯買えなくなるところだったよ。

……今月の俺の小遣いはないけどなっ！

どンドン消えていく財布の中身にハローグッバイと言いながら、俺は隣にいる浪費姫もとい金食い姫を見た。

彼女は、さっき俺にねだってきたアイスを美味しそうに舐めている。一口よこせと突っ込んだら、あからさまに嫌な顔をされた。そんなに嫌だということに軽くシヨックを受けた。

いや、もしくは食い意地が張っているだけなのだろうか。どちらにせよ昼飯前にそんなモンを食べるんじゃないやありません。

「……それにしても、今日のお昼は何を作ろうかなー」

「あ、啓太啓太ー！ あの店って何？ 向こうじゃ見かけないんだけど」

「あー？ あそこは……」

口をつぐんだ。

で、そのまま逃げるように彼女の手を引いて走った。

スノウは首を傾げて三つクエスチョンマークを浮かべていたが、俺の顔が蒼白だったことに気がつくのと、黙って同じように走り出した。……オカマバーとか俺初めて見た。恐ろしい、嗚呼恐ろしい。目を付けられたら最後だ。筋肉隆々のマッスルオカマ族の視界から早く逃れなくては……！

「いいか、お前はここで待ってる。絶対に動くなよ？ 何処にも行くなよ？」

「えー」

商店街の総合スーパーの前。

お昼の準備だけでなくほかの物まで入れそうなので、スノウは入り口前に立たせておくことにした。

もちろん不評を口々に漏らす彼女だったけど、お菓子買ってやると言って即座に黙らせた。まさに子供だ。

「それじゃ、言ってくるから。……どうせならこのまま普通に帰りたいよ」

「め、面倒臭いからって逃げたら泣くぞ？ 直ぐ泣くぞ？ 絶対泣くぞ？ ほーら泣くぞ！？」

「分かったから泣こうとするな」

なんやねんコイツは。

ため息を吐きながら、涙目で見詰めてくるニート姫を見て俺はスパーの中へ入った。

「……うーんっ」

大きく伸びをして、私は空を見上げた。相変わらずの青い空で、雲一つない。

向こうの世界も今はこれくらい青いのだろうなと思って、さっきの啓太と同じようにため息が出た。

「……セツナ、きつと心配しているでしょうね」

勝手に転送装置に入ってこっちに来ちゃったもんなあ。私の姿が子猫になるって事は、まだまだ改良の余地があるわけね。

身勝手とは言え、城を抜け出してこの世界に遊びに来たのは不味かったかしら。いつ帰れるかも分からないしねえ。

……まあ、何とかなるでしょう。あの装置が完成すれば、今度は自由人間界と猫又界を行き来することが出来るのだから。

さほど日数もかからないと思う。せいぜい一週間か、二週間……。

「とりあえず寝床も見つけたし。ご飯にも困らないし。後はあのおう

るさい雌の猫又がいなけりやなあ〜」

確か サクラだとか啓太は言っただけ。やけに私に突っかかってくる、生意気な猫又。

同族だから位無く仲良くしてやろうと言う私の寛大さを無視して、出てけだの帰れだの……全く。上のものに対する教育がなっていない。

今度住民票を見て親族にちゃんと言っておこう。それにしても……。

「お腹空いたなあ……啓太まだかなあ……」

暇だしお腹空いた。やっぱり無理にでも入れればよかったかしら？

「……ちょっと散歩しようかな」

ずっと立っているのも疲れる。それならばこのまま突っ立っておらず、何処かへぶらぶらと歩くのもいいかも知れない。

このスーパードと周りを確認して、と。まだ啓太は出そうにないしね。

「十分くらいで帰ってくればいいでしょ？」

中にいる啓太に呼びかけて、私はその辺りをふらつくことにした。

……そうだ。私がこつちの世界に転送された場所に行ってみよう。

もしかすると、こちらからも向こつちの世界へつながるかもしれない。確か、大きな桜が咲いている木の裏側だったっけ。

歩いてほんの数分。大きい桜の木だから直ぐに分かった。ここから私はこつちの世界に遊びに来たんだ。

桜がたくさん咲いているこの木。樹齢は……四百年くらいだろうか。

未だに枯れることを思わせないその雄大さと立ち誇る姿に、私は威厳さえ感じた。

「さて、ちよつと失礼しますよつと」

その桜の木の裏側に回り、私は大きな幹をじつと見詰め、指先でそつと触れてみた。

ざらざらとした表面と硬い幹だということが良く分かる。そして、指先から感じた“ほんの少しの違和感”を、私は即座に感じ取るこつが出来た。

……やはり、この木は生きている。しかし、普通には生きていない。役割を果たすために、生かされているんだ。

江戸時代。猫又は亀裂により此方の世界にやってきた。そして、自分たちの世界には帰れずに、此方の世界での移住を決心した。

しかし、亀裂に巻き込まれなかった猫又もいた。それが私たちの先祖であり、現在の猫又の世界を統括している種族　ラインハート族だ。

何故、あの時世界と世界をつなぐ亀裂が出来てしまったのか。それはまだ誰にも分かっていない。誰が原因で、誰が引き起こしたのかさえも。

しかし、私たちはその後数百年に及ぶ研究を重ね、ついに亀裂の解明に成功した。

亀裂は次元流砂と呼ばれる、三次元と三次元の間を彷徨う砂塵の暴走により、巻き起こされたものだった。

砂塵は一定のペースで空間を流れ、別世界　私たちの住むパラレルワールドと人間たちの住む世界とを均等に保つ重要な役割を果たしている。

だが、一定のペースで流れた砂塵は『何か』を期に突如狂い始め、均等に保つことが出来なくなり始めていた。

そして、5：5だった砂塵は9：1にまで傾き始め、ついには時空の歪みが発生し、亀裂が生まれたということになる。

お互いの世界は両天秤によって均等を保っている。もし砂塵が10：0にペースが変わってしまった場合は……二つの世界は一つになるそれを防ぐために砂塵を徹底的に解明した結果、互いの世界を均等に保つ装置を完成させた。これは二つの世界が一つになることを未然に防ぐことが出来るようになった、歴史的な発明でもある。

……で、同時に生まれたのが、転送装置。

これは5：5で保っていた砂塵を9：1まで傾けて亀裂を編み出し、自己的に向こう側の世界に行こうという荒業が生んだ装置だ。

もちろん、移動後は瞬時に5：5に戻るらしいので心配は要らない。まあ、9：1に傾けた瞬間に転送装置が壊れたら、世界はあつという間に滅亡するけどね。もちろんもう片方が壊れたりなんかしてもNG。

「……その亀裂を生み出す物が、この桜の木ってわけね」

私がこの場に転送されたのはあながち偶然じゃなかった。おそらく……この木は次元流砂によって生かされている。

初めて亀裂が生まれた日。空間から生まれた亀裂から出る、少量の砂塵の影響を受けてしまったのだろう。

そして、そのまま世界をつなぐ亀裂を作り出す木へとなった。桜の木にとっては迷惑な話ね。未来永劫生き続ける桜の木へと変わったのだから。

だから装置で転送されて直ぐに、私はこの場に出たってわけ。子猫の姿のまま。

「大変ね、あなたも」

大きく聳える桜の木を眺め、一人呟く。
桜も木も心なしか「ほんとだよ」と呟いているように見えた。

「……………ん？」

目を開いた瞬間、私の視界に光が差し込んだ。眩しい、と思う以前に、何故私は目を閉じていたのかと、その場で数秒だけじっくりと考えてみた。

……………。

…………… ああ、そうだ。桜の木を眺めているうちに、そのままウトウトして木の後ろで寝てたんだ…………… って。

「まずい！ 今、どれくらい時間経ったんだろう！ 早く戻らないと！」

多分、十分は絶対に過ぎてている。立ち上がり、直ぐ近にあった時計塔を見ると…………… うわあ、三十分も過ぎてた。

今頃、啓太が必死で探してくれているんだろう。

…………… いや、もしかしたら私をほったらかしてさっさと帰っているのかもしれない。

ありえる。特に二番目が。アイツ、何か甲斐性無さそうだし。

「とにかく。早く戻らなきゃ！」

とりあえず、スーパ―まで戻ろう。急いで戻ればいるかもしれないし、いないかもしれない！

…………… うう、何を言ってるだろう、私。ちょっと落ち着こう。興奮し

すぎ。深呼吸深呼吸。

……啓太、絶対怒ってるだろうなあ。

今まで来た道を駆け足で戻っていく。

道は既に身体で覚えた。いくら方向音痴な私でも、もう大丈夫。向こうの横断歩道を渡って、まっすぐ行けばスーパード。

「大丈夫。ここをまっすぐ、ここをまっすぐ、ここを　　ひゃああ
っ！！」

信号に入り、そのまま一直線というところで、私はあろうことか盛大に転んでしまった。少し角ばった道路に足を引っ掛けてしまったらしい。

ギリギリで受身は取ったものの、あちこちを擦りむいてしまったらしい。肘の辺りから、じわりと血が滲み始めていた。

「うっうっう……痛いよお……ぐすっ……」

ほとんど半泣きの私に、もはやお姫様の威厳は皆無に等しかった。ここが人間界で本当に良かった。もしミスリアにこんなところを見られていたら　　。

と、物思いに耽っていると、横から喧しい音を上げて車が近づいてくるのが直ぐに目に入った。まさか　　改めて信号を確認すると、既に、青信号から赤信号へと変わっていた。

まずい。運転手は私に気付いていない。口笛を吹きながら音楽の自分の世界に入り込んでしまっている。急いで立ち上がってその場を離れようとしたんだけど、足首に痛みが走って、直ぐに動かすことが出来なかった。さっき転んだ拍子に捻挫したんだ。まさか　　こんな時に。

「嫌っ……!!」

上手く立ち上がれない。バランスを崩して直ぐに転倒してしまう。そここうしているうちに、車はもうすぐそこまで迫っていた。

駄目だ。避けられない。もう……間に合わない。

私は観念したかのように、ぎゅっと目を瞑った。痛いかもしれないけど、もしかしたら軽傷で済むかもしれない。身体を丸めて、頭を、大事な部分を守れば。

運転手も、今になって私の存在に気付いたようだ。クラクションが鳴り響く。しかし、もう遅い。ブレーキを踏んでも直ぐには止まらない。

そして、私と車が接触しようとした瞬間、何やら私の身体が大きなものに包まれた気がした。同時に、ふわりと身体が浮かんだようなそんな感覚が。

目を瞑っていたから、それが何なのかは分からない。けど、痛みは感じなかった。

そおっと、目を開けてみる。そこには。

「……あつぶねえな……おい、大丈夫かスノ　　ってぎゃあああああああ！　卵があああああ！」

私を抱きとめつつ、卵と何度も絶叫している啓太の姿が、そこにあった。

しばらく私は呆気にとられた表情で固まっていたが、すぐさま理解した。私は、啓太に助けられたんだ。

今は横断歩道を抜けた手前。心配そうな表情で通行人が私たちを見詰めている。

「ちくしょー。今日はオムライスを作ろうと思ってたのに……。……
しゃあねえ、チキンライスにするか」

私をほったらかしにして、何やらぶつぶつと喋る啓太。それほど卵
はお昼ご飯に必要なものだったらしい。

……今は卵だけじゃなく、私の心配もしてくれりゃいいのに。相変
わらずの鈍感野郎ね。女心が全然分かつちやいない。

まあ、いいか。何にせよ、彼のおかげで助かったんだし。

……さて、そろそろ交代かしら。

……それにしても危機一髪だった。スーパーから出たらスノウがい
なくて焦ったし、横断歩道を見たら、真ん中でうずくまっているス
ノウを見つけて更に焦ったし。

もう少し遅かったら轢かれてたかもしれないな。うむ、さすが俺だ。
身体能力は高校より衰えているかもしれんが、それでも人一倍ある。
……あーあ。でも卵がなあ……。安売りでまとめ買いしてたのに。全
部割れていないことを祈ろう。

「まあいいや。とにかく帰ろう、スノウ」

「ええ、そうね　いつっ！」

立ち上がるうとしたスノウの顔に苦痛の表情が浮かぶ。

さっきの拍子に足首を捻挫をしたんだろう。その部分が少しだけ赤
く腫れていた。

……こりゃあ、普通に歩くの無理かな。仕方ない。

俺はスノウの背中を支えてやると、許可も無く抱き上げた。

命名、俺、「ニート姫抱っこ」だ。お姫様抱っこの改良版で、主に筋トレとして使用される。

スノウはいきなり俺に抱き上げられたのに驚いたのか、顔を真っ赤にしてじたばたと暴れだした。なんだ、恥ずかしいのか？ ういやつめ。

「なっ　　ちよ、ちよちよちよつと啓太！　何でいきなり抱っこするわけ！？　するんだつたらおんぶでいいわよ！」

「おんぶだつたら筋トレにならん！　ウダウダ言っつてねえで行くぞ！　アパートまで走るぜ！」

「え　　きゃあ!？」

レジ袋を片手にもって大爆走。

周囲の異様な目など気にはしない。だつてもう慣れてるから！

恥ずかしそうに顔を隠すスノウと、笑顔で駆ける俺。確かに意味不明な光景だけど、だつてもう慣れて以下略。

途中、きゅつと顔を服の袖で隠したスノウが、「車には轢かれなかつたけど、啓太には惹かれそうね」と囁くように俺に言ってきたが、生憎その彼女の一言も、今の俺にとつては何を意味していたか、直ぐに理解をすることは出来なかった。だつて走るのに必死だったし。

気付けば、もうアパートの目の前についていた。

ドアを開けて、俺はスノウと一緒に部屋に戻る。

居間を見てみると、未だにゴッドフェニックスのポーズで見えない敵と戦い続ける危ない人がいた。話しかけにくいな、怖くて。

「サクラ、帰ったぞ」

危ない人に向けて言うと、その危ない人は直ぐにゴッドフェニックスのポーズを止めてこっちを向いてきた。ああ、良かった。危ない人じゃなかった。サクラだった。

「啓太さーん！ちゃんと留守番しましたよー！ いやー、今さっき倒した暗黒超魔神はなかなか手ごわかったですー！」

「そうか。色々とお疲れ」

やっぱり危ない人だった。

「てなわけで啓太さん。ご褒美として何かください。私の理想としては手先が器用な啓太さんが手淫を私にし」

「よし昼飯にしようか」

そして変態だった。

見るも無残な姿に変わり果てた卵は殻を取り除いてスクランブルエッグにし、予定していたオムライスは急遽変更して、チキンライスにした。

テーブルの上にチキンライスを盛った皿を一枚ずつ載せていく。… あー、ケチャップが少ないな。買い置きしてりゃよかった。

いただきます、と手を合わせて黙々と昼食を取る俺と猫又娘二匹。しばらく黙って食べていたサクラが、何かを思い出したように俺に言ってきた。

「あ、そうだ。啓太さん、トウイントウインって効果音、早口だと手淫手淫に聞こえませんか？」

「お前は手淫から離れろ」

何かと思えばやっぱりそれか。流石変態は考えることが違うわ。そんなの、食事中に話すことじゃねーよ。

「お前は手淫から離れろ……手淫からはなれろ……手淫からは慣れる……慣れる！？　つまりワンステップが手淫ってわけ！？」

「スノウ、お前も何を言っている」

どうやらスノウもサクラと同類だった。ああ悲しいな、悲しいな。コイツはただの我俣娘かと思ってたのに。

「……これでよし、と。もう痛いところはないか？」

「ええ。……ありがとね」

食事も終わった午後。俺は今、怪我をしたスノウを椅子に座らせて手当てをしているところだ。

シップを足首に貼ってやっているのだが、彼女のすべすべとした肌が艶やかに光って色っぽい……っていうかエロい。

スノウは淡色の長いスカートをはいているのだが、今はそれも膝の辺りまでたくし上がって、もう少して彼女の……うん、見えそうなんだ。いや、ちょっと見えた。黒パンだった。

っていうか何故そこまであげるんだ。少しだけ上げてくれればいいのに。

「もう、啓太。そんなに足をジロジロ見ないでよ。……それとも、そんなに見たいの？」

エロっぽい妖艶な笑みで俺を見て、更にスノウはスカートをたくしあげる。際どい黒のトライアングルが見えた。

それにしても胸は無いがむっちりとして柔らかそうな太ももである。大股でパンツが見えるようにしているところ、狙っているのだろう。くそつたれ、俺の理性をぶっ飛ばすつもりか。

「べ、別にそんなんじゃないよ。はやくスカートを戻せ。股を広げんな。はしたない」

「ふふふ、啓太ったら初心ね。でも猫又だから猫が股を広げるのは別に变じゃなくて？」

「そ、そうじゃなくてもっと恥じらいをだな……！」

「啓太さーん。私の香水何処ですかー……って嫌あああああ！？
何その位置！？ 啓太さんがスノウに中山 ン二君ですかー！？」

ドタバタと走ってきたサクラに抱きつかれ引っ張られ、一時離脱。

後頭部に柔らかいものが当たり……っというか乗つかかっている。
……前から思っていたが、コイツ何センチくらいあるんだろ。直に何度かは見たことはあるが、一年前より更に大きくなっている気がする。

……あ。い、いくら一緒に住んでいるとはいえ、揉んでないからな！ そりゃあ、事故で揉んだことは何度かあるけど、故意に触ったことはないぞ！

「サクラ、重いから胸を乗せんな……」

「あ、ごめんなさい啓太さん。……でもちよつとその前に……ほーら、スノウ。あなたはこんなことが出来ますかー？ ほれほれ」

……これは、後頭部ぱふぱふというのであろうか。

乳の隙間に俺の後頭部を入れて遊ぶサクラは、スノウを見て勝ち誇ったように至極ご満悦の様子。

気持ちいいなと思う反面、やばい。DQによく出てくるあれだけど、なんつーか、豊かな胸の隆起が頬に当たって、その……。

……ってまさか。サクラ、今ノーブラだったりする？

そんな冷や汗だらだらの光景を見て、眉をしかめて悔しがるスノウ。自分の胸とサクラの胸を交互に見比べて握りこぶしで唸っている。

「ぐぐぐ……たかが庶民が小生意気な……！」

「だからやめろっつうの……！」

巨乳自慢は俺を抜いてやってくれ。

……あ、性的な意味でなく。

ドタバタとした騒動から一転。あっという間に時間は流れ夜へと変わった。

何とか落ち着きを取り戻した二人は今、のんびりとテレビの前に行き、漫才を見て大爆笑したり、感動的な物語を見て泣いたりしている。

コイツらは仲がいいのか悪いのかわからん。ちょっと前までは罵り合ってたのに、今じゃ仲良さそうにじゃれあっていたりもする。

そんな中、俺はじつとスノウを見る。

白　少し銀髪も入っているのだろうか　の肩まで伸びた髪にガラス球のような綺麗に光る青の眼。

身長はサクラと同じくらいだろう。無邪気に笑う表情は本当にお姫様なのかと疑うくらい、子供っぽくて純粹だった。

……あ。やべえ目が合った。スノウがこっちに來いと手招いている。行くべきだろうか。

「……なんだ？」

「ねえねえ啓太。あなたは猫又の世界に興味はない？」

「猫又の……世界？」

「そう。こっちの世界とは違う、物理的法則を無視した世界。つまり、この世界から飛び出して、幻想的な世界へと行こうってわけ！
どう、興味ない？」

「どっつ、って言われてもなあ……」

幻想入りしたら戻ってこれないような気がする。

「私は賛成ですよ、啓太さん。もしかすると、お母さんやお父さんに会えるかもしれませんし、向こうの人たちといっぱい友達が出るかもしれないから！」

サクラはぐつと拳を握って、俺の顔を窺う。興味津々といった様子なのは恐ろしいくらいにわかった。

猫又の、世界か。今まで考えたこともなかったな。しかし……。

「どうやって向こうまで行くんだ？ 確か、亀裂が無かったら向こうの世界と通じることは出来ないんだろ。それじゃあ……」

「ふふん。その点はぬかりないわ。もう直ぐ向こうでは転送装置の作業が終わるの。それが完成すれば、人間界と猫又界を自由に行ったり来たりすることが可能ってわけ！」

「いや、向こうに転送装置が出来てもさ。こっちから向こうに移動できなければ意味がないんじゃない？」

「……そ、その点も大丈夫！ 装置が完成したら直ぐにこっちの世界に私の使いが来るから！ そうしたら色々手順を踏んで行き方の説明をしてくれると思うわ！」

「ふーん。で、その使いとやらに現在位置を知らせる為の連絡手段は？」

「ない！ 多分、向こうが何とかしてくれると思う！」

「……お前、もっと計画性をだな……」

「しょうがないじゃん！ 荷物も何もなしに未完成の装置に飛び込んだんだから！ 持ってないのは当たり前よ！」

「いばって言うな！ ……たく、とんだお姫様を連れ込んだもんだぜ」

がっくりとうなだれ、テーブルまで戻る。と、同時にスノウが腕を引っ張ってきた。まだ言うことがあるらしい。

…あれ、サクラがいない。トイレにでも行ったのかな。

「話はまだ終わってないわよ。それに、私は転送される場所を知ってるから、連絡を取らなくて平気よ。その場所で待ってればいいんだから。……うーん、多分一週間後くらいに啓太の携帯に着信が来るんじゃない？ 『其方にアシュリーお嬢様はいますか？』って」

「マジで？ 超ヤベエじゃん」

いきなりかかって来たら怖いな。というより何故此方の世界と向こうの世界で電波が通じるんだ。おかしくは無いか。一種のホラーだぞ。

「まあ世の中には知らない方が幸せだということもあるようで。…
…そ・れ・か・ら………」

つつつ、と俺の腕を指で這いずるようにして、スノウが近づいてきた。やばい。何かすごいこの子ニヤニヤしてる。俺危なくね？
すっと彼女の腕が優しく俺の首を絡めてくる。身体は既に密着して
いて、彼女の甘い吐息が微かに鼻頭に当たる。

「そういえば啓太には、ちゃんとしたお礼を返してなかったよね。……うふふつ、私はこういうこと、気に入った人しかないんだー……といっても、啓太が初めてだけだね。気に入った人」

「お、お礼つていったいなんだよ……？　っていうか離してくれ。またサクラに誤解を」

「あつ」

「えつ　んむつ！？」

ぬかった。彼女の指をさす方向に視線を向けた途端　スノウが俺の両頬を手で押さえて　。

俺の唇を、奪った。それも長い間ずっと、ずっと。更にあることか　舌まで入れて。

どさり、と後ろで何かが落ちる音がした。押さえつけられたまま無理やり振り返ってみると、そこには顔面蒼白で啞然としたサクラが立っていた。

目は死んでいる。死んでいる魚のようである。やがて彼女の目に光が戻ってきたと思ったら、今度は大粒の涙がほろほろとこぼれだした。

スノウは体制を変えて、サクラにこれ（キスシーン）を見せびらかすようにして　唇を離し、満足げに言った。

「ふふつ……ご馳走様」

艶やかに光る唇を舌で舐め取りながら、スノウはサクラにっこりと笑った。それと同時に、サクラは泣きながら俺目掛けて闘牛のように突撃してきた。

「ふええええんっ！ 啓太さんが、啓太さんが汚されたあああああ！ もうこうなったら汚染物質と共に啓太さんの全てを吸い尽くすまでですー！ー！！」

「ちょ、待てサクラ！ 落ち着け、落ち着いて んむー！ーっ！？」

……ジャンピングしてきたサクラを避ける暇なく、俺は彼女のディープキスの嵐に数時間耐える羽目になった。

また意図的に舌を入れられましたし。もう俺の心はズタボロです。こんなにもキスが怖いと思っただのは初めてです。

それから後は、何故か記憶になかった。

朝に目が覚めて起きると、俺の両端でサクラとスノウが裸で寝ていた。

幸せそうな寝顔で抱きついている。

……誰か、昨日の夜に何があつたか教えてください。

こんなに卑猥でこんなにも破廉恥な出来事を そっとうもとで囁いてください。

どうか、この真相を暴いてください。

それだけが 私の望みです。

藤咲啓太。

グッバイ地球、ハローシェアリス。

みなさま、おはよう御座います。
と、メタな台詞から始まる今日の一日。相変わらず外は天気でいい気分である。

「ひゃああああつ！ け、啓太さんっ、そこ、駄目えっ！」

もう直ぐ五月に入るんだな。皐月……だっけ。何かいいよね、皐月って。名前が可愛いな。

もし女の子の子供が出来たら「さつき」って名前をつけてやりたいな。

「お、奥で啓太さんのがゴリゴリ当たってます、当たって……やぁん！ そんなに入れるのを強くしちゃ……ああ！」

……とにかく、今日はいい天気だ。嫌なことがスパッと忘れちゃうくらいの、快晴だった。

あ、そういえば。スノウが来てから、もう一週間が過ぎたっけ。っていうことは、もう直ぐ猫又の世界から連絡がかかってくるわけ……。

「はぁぁ……！ 出てる……出てます……私のがたくさん……」

「うっせえ！ ほら、これで終わりだよ！」

「ひゃああああん……！」

……耳掃除くらいで、いちいち感じてんじゃねーよ。

「え、決まってるじゃない。サクラが終わったら次は私の番のはずよ?」

ごろんと人の膝に頭を乗せて、さも当然のごとく言うスノウ。さらさらの銀の髪がとても柔らかいことは、服の上からでも良く分かった。

俺はしばらく黙考した後、彼女の頭を膝からぐいぐいを押し退かしたが、直ぐに姿勢を戻して「はやくー」と急かして来た。

ああ、やるまで絶対退かないってやつね。汚いさすがニート汚い。見た目は綺麗なお嬢様なくせに心は……!

仕方ないからスノウの分もやってやることにした。さて、後どれくらい足が持つかな……。

「ねえ啓太。よく考えたら、私の顔の直ぐ近くに啓太の息子がいるのよね。……暇になったら触っててもいい?」

「あはは、そろそろ黙らねえとめん棒で鼓膜ブチ破るぞ」

一瞬も侮れねえ変態だ……! 変態度はサクラに劣っちゃいないな。

お昼も済み、さて今から何をしようかと思ったとき、俺の携帯が喧しく鳴り響いた。

画面を見ると、見たこともない番号が出ていた。多分、猫又の世界からの連絡なんだ……と思う。

やべえ、何か出るの怖いんだけど。何で俺の電話番号知ってんの?

もしかして俺の個人情報、向こうで流出してんのか?

ピツ、とボタンを押して携帯に出る。向こうの声の主は、やけに若々しい様子の青年みたいな声だった。

『もしもし、そちらは藤咲啓太殿でござ……ございましょうか？』

「……………ござ？ あ、はい。俺は藤咲啓太ですけど。あなたは？」

『これは失礼。挨拶を忘れてござつ……………ございました。拙者……………じゃない私はシエアリスを統括するラインハート族の姫君……………アシユリー様の補佐兼護衛の、セツナと申します。あの、そちらに姫様は……………？』

若々しい声の おそらく青年であろう人 セツナさんは、至極丁寧に説明してくれた後、スノウの所在をたずねてきた。

「ああ、彼女なら今ちょうど」

ゲームをして と言いかけたところで、携帯をバツ、と奪われた。さっきまで遊んでいたスノウがいつの間にか近くに来ていて、俺から携帯を取り上げたのだ。

「もしもし。私だけど。あなたは誰？ セツナ？ カイ？ レン？
それともお兄様？」

電話越しの彼女の声はやけに偉そうな物言いだっただが、まあお姫様だからしょうがないか。

と考えていたところで、携帯から離れていた俺でも良く聞こえるほどの声が聞こえてきた。

それはほとんど怒鳴り声に近かった。

『姫！！ いったい其方で何をなさっているのをござるか！！ いきなり城からいなくなったと思ったら、装置を勝手に使って人間の世界まで行って！ あれはまだ完成してなくて危険だからと、あれほど忠告したのに……！ もし途中で装置が壊れたりなんかしたら、あなたは死んでいたのをござるよ！？』

「ああ、この声はセツナか。ごめんごめん。完成するまで待ちきれなくなっちゃってさ。でも私はちゃんと無事にこっちの世界に着いたよ？ 偉い？」

『え、偉いとかそんな問題ではなくて……ハア、もういいござる。とりあえず、啓太殿に代わってもらえぬだろうか？』

「はいはい。ほら、啓太」

放り投げるようにスノウが携帯を渡してくる。俺は直ぐに携帯に出て声を待った。

『まったく姫は相変わらず無茶ばかりして……！ あ、申し訳ありません、啓太殿。どうやら姫が凄くお世話になっていたみたいで……』

「ええ、それはもう凄く。……とにかく、あなたも大変ですね。えっと、それで用件は……？」

『ああ、本題を忘れていたでござ……います。今日の深夜十二時に、姫を連れて所定の場所に向かってくれますか？ そこで私は待機していますので』

「いいですけど……どうして深夜なんですか？ 俺は今すぐにでも構いませんが」

『今の時間帯だと、おそらく人目に憚る恐れがありますので。とにかく、面倒をおかけします。今宵の十二時に、また』

それだけ言うと、セツナさんは通話を切った。

まさか、本当に電話が来るとは思ってもなかったしな。これでニートがニート姫だっていう確信もついた。

でも、一つだけ問題があるな。あえて言うならば……。

「所定の場所って、どこだ……？」

同時に、セツナさんは真面目そうであまりやだと言っことを学んだ。

果たしてこんなので大丈夫だろうか……。

「大丈夫よ。ほら、転送される場所は私知ってるって前も言ったじゃない」

「おお、そっぴやそうだったな。……で、それって何処なんだ？」

「桜の木、よ。それもこの町で一番大きなところの、ね」

「一番大きな……桜の木？」

ふむ、と顎に手を当てて考える。この桜ヶ丘で一番大きな桜の木と
言えば……。

「啓太さん、もしかして私が啓太さんに拾われたところじゃないですか？」

サクラに言われて、ああなるほどと頷いた。

確かにあの木はこの町で一番大きな桜の木だ。

それと、俺の沢山の思い出が詰まった、大切な場所でもある。

まさかそんな場所が猫又の世界を繋ぐ場所になっているとは……こりゃ運命を感じるねえ。

「まあ、場所もわかったところだし、後は十二時まで待てばOKね。ちゃんと荷物とかは準備しておきなさいよ」

「お前に言われるまでもないよ。……後さ、もう二人くらい猫又を連れていってもいいかな？」

「猫又を？ ……別にいいけど、あんまり大勢は連れて行けないわよ。出来たらその二人だけにしてね」

「ああ、分かった。約束するよ。……それにしても、十二時か……サクラ、ちゃんと起きとけよ？」

この規則正しい猫ちゃんは十二時になると寝るから、ちょっと心配だな。

俺がおぶって移動する羽目になるかもわからんし。

「大丈夫です！ いざとなればゲームで睡眠打破すればいいんですし！ でもってゲームをセーブした後で、啓太さんとベッドで激しく運動すれば尚更大丈夫です！」

「お前はゲームのセーブをする前に逸る気持ちをセーブしろ」

る夜だ。

俺たち五人は待ち合わせ場所　桜の木の下でスノウの使いであるセツナさんが来るのを待っていた。それにしても……。

「ねーむーい……」

「……みい」

二人……サクラとミいちゃんだけは、相変わらず眠たそうに目を擦っている。

ミいちゃんはともかく、サクラはちゃんと言っておいたのに。全くお子様なんだから。

ジャックとスノウは……大丈夫だな。二人してゲームの通信対戦を勤しんでいる。ぶっちゃけ余裕かお前ら。

とにかく、猫又って凄いな。日本人みたいに消極的じゃなくて、見知らぬ人でも直ぐに打ち解けるところが凄い。

「……ミいちゃん、大丈夫か？　俺がおんぶして行くから寝ててもいいんだぞ？」

「うん……大丈夫。私は平気だから……にやふう……」

小さいあくびを一つ漏らし、うつろな目で俺を見るミいちゃん。

……その健気な頑張りがまたお兄さんをそそらせるのだよ本当に。もうちょっとだからね、と言って頭を撫でてやると、隣にいたサクラが俺の背中にもたれかかるようにしてきた。

「啓太さーん、おんぶー」

「だーめ。ミいちゃんだつて頑張るんだから、お前も頑張れよ」

「うにゃ…………うー、それならがんばるですよ…………くう…………」

「言つて早々寝るなよ」

もたれかかつて寝るとかスキル高いなオイ。とりあえず邪魔だし重いから退いてほしい。

ぐーぐー言いながら人の背中で寝ているサクラに心底困りつつあったが、十二時ジャストと同時に直ぐ近くの桜の木が一瞬だけ眩く光つたのが分かった。うお、まぶしっ。

「…………来たわね」

パタンとゲーム機をしまつて、スノウは桜の木の目前まで歩んだ。

その巨大な木の幹は大人一人入れるくらいの大きさだが……………もしかして、もしかすると……………。

やがて、その木の表面から黒い筋のようなものが現れたと思つたその瞬間、木の幹が裂けて大きな穴が音もなく生まれた。バチバチと否妻のような光を放ちながら、その穴は先の見えない世界へ通じているのだと即座に理解することが出来た。

間違いない。これは亀裂で。

「ひゃあああああああ！？」

間違いない、と言おうとした瞬間、何やら黄色い叫び声と共に、その穴から人間 いや、猫又が現れた。

その猫又は思いつきりお尻からダイブした様子で、涙目になりながら自分の尾てい骨を支えていた。

「あいたたたー……もうちょっと丁寧に運ぶことは出来ないのですかねー……」

「……セツナ、あんた何やってんの？」

セツナ　スノウにそう呼ばれた猫又は、改めて俺たちの存在を確認すると、若干赤面しながら、びしっ！　と俺たちに向けて敬礼をした。

「ハッ！　も、申し遅れました！　拙者はアシユリー姫様の護衛を務めさせて頂いている、セツナと申します！　以後ご見知りおきを……でござるー！」

……。しーんとした静寂な空気がその場を流れた。セツナさんは「あれ、あれっ……？」と俺たちの顔を交互に見て困り果てている。

……どうやら声だけで判断するのはよくなかったらしい。俺はてっきりセツナさんは男性の紳士な方かと思っていた。

だが、実際には違っていた。めっちゃ違っていた。

おそらく手作りであろう細部に渡って作られた、忍者が着るような黒い服に、赤いリボンで纏めたポニーテール。腰には何かを入れてあるであろう巾着と、鞘に入った短刀　忍者刀というものだろうか　がしっかりと装着されていた。俗に言うミニスカと黒タイツの格好に近い下半身と、それよりなんと言っても露出の高い……上

半身。

極め付けに……その、セツナさんは、あれだ。うん……その……。

「あの……」

「はい？」

サクラが死んだような目つきでセツナさんを凝視しつつ聞く。

……いや、凝視するところは違っていたが。

震える声で、蚊の鳴くような……っていつか今にも泣きそうなか細い声で、ゆっくりと、一言言った。

「……胸、何センチの何カップですか……？」

恐ろしそうに指でセツナさんの胸を指差しながら。

彼女は見当違いな質問に若干拍子抜けした様子だったが、はっきりと質問には答えた。

「む、胸でござるか……9（ズギヤーン！）の（ドギューン！）カップで……」

その言葉を聞いた瞬間、魂が抜けたかのようにサクラがその場に崩れ落ちた。

セツナさんは慌ててサクラの元に駆け寄るが、当の本人は「燃え尽きたぜ……真っ白にな……」とわけの分からないことを言いながら真っ白になっていた。

ああ、こりゃあサクラは負けたっばいな、うむ。敗北と言う言葉を思い切り味わつたらしい。

それほど……セツナさんは巨乳だった。それも、サクラを越すほど

の巨乳ときたもんだ。

それだから、上半身はやばかった。薄い布地から飛び出るようにしているそのマシユマロは、動いたびに音がするんじゃないのかってくらい揺れていた。

「……………あれは巨乳じゃないよ凶器ですよ凶器のおっぱいですよ……………むしろ魔乳ですよあはは……………啓太さん。向こうに着いたら毎日揉んでくださいね……………アハハ……………」

そうか。

だが断る。

自分で揉め、自分で。

一人理由も分からず戸惑うセツナさんと、恨めしそうにその乳を見詰めるサクラ、と妬ましそうに見詰めるスノウ。

……………別に胸が大きいからってそこまで邪険にしなくても。

ちなみにジャックとミいちゃんは初めて見たのか「忍者、忍者！」とか言っってはしゃいでいた。どうやら突然の来訪者にミいちゃんは目が覚めたみたいですな。この二人は純粹で和む。

「と、ともかく。亀裂がこの世界に生じるのは限られているので、早く移動しないと閉じてしまうでござるよ?」

セツナさんは自分が通ってきた亀裂に指を指すと、中に入るように促してきた。

だが、ここで一つ俺の中で疑問が浮かび上がった。そう、単純な疑問だ。誰にでも分かるくらいの。

「あの、セツナさん。早く移動って言う事は……………この中に飛び込め

「って事ですか？」

おそろおそろ訊いてはみたが、セツナさんは首を傾げてさも当たり前のように言う。

「当然でござるよ？ 飛び込む以外に手段なんてござらんのためにな。さ、啓太殿。早く参られようぞ」

くい、とセツナさんが俺の手を引っ張る。向かう場所は そのえたいの知れない亀裂の中へ。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ ちゃんと向こうにたどり着く保障はあるんですか！？ だってセツナさんは転送装置を使っつてこっちに来たんでしょう、飛び込んで死亡なんてケースは俺、絶対に嫌ですよ！？」

「なーに啓太。もしかして怖いのか？ 怖いんだ？ へえー、怖いんだ？」

異様にニヤついた様子でスノウが話しかけてくる。
いつもなら頭にチョップを叩き込むつもりだったが、今はそんなことをしている場合じゃない。

「当たり前だろうが！ 生きるか死ぬかの瀬戸際だぞ！？」

「大げさねえ。子供じゃないんだから怖がらずに飛び込んでみなさいよ。ほら、死なばもろともってやつ？」

「開き直ってどーする！？」

「アハハッ、そう怖がらなくても大丈夫でござるよ。……多分」

多分ってオイ。

その多分で俺の人生はDead or Aliveの二択に決まるんですよ。

いや、詳しく言うと俺“たち”の人生が決まるわけなんだが。

「とにかく、俺はそんな得たいな物には……って、あれ？」

やけにさっきから静かだった猫又三人の姿を確認しようとしたが、俺の眼にはスノウとセツナさんしか映っていない。

しいて言うなら、この世界に三人の気配が消えた……ような気がするのだが、気のせいだろうか。

「ああ、三人ならとうの昔に亀裂の中に入ったでござるよ。啓太殿が姫様と話している間に」

……マジディスプレイ？

勇気あるというか、無謀と言うか、これで死んだら元も子もないというか。

とにかく断言する。

絶対に入りたくない。ヘタレと言われようが入りたくない。

……けど、それも無理なんでしょうねエ……はあ。

仕方ない。覚悟を決めるか。

「ほら、啓太。怖いなら手を繋いであげるから。一緒に行きましょう、ね？」

「馬鹿にするな！ …… ったくどうしてこんなことに…… ん？」

あれ？ 待てよ。

そういえばセツナさんって、スノウを連れ戻しに来たんだよな。

猫又世界のお姫様だから連れ戻しに来た、と。

つまり、だ。それなら俺たちを向こうの世界に連れていかななくても言い訳だし、第一彼女は、俺たちが向こうの世界に行くということを知らない。

今この場でスノウは彼女に知らせるつもりだったはずだ。

…… だが、彼女は有無を言わず俺たちを向こうの世界へと連れて行くこととする。

あたかも『俺たちが来ると言うことを、以前から知っていた』と言わんばかりに。

ちよつと待て。どうしてだ？

普通の仕えている者なら、重要人だけ向こうの世界に送ればいいと思っっているはずだ。わざわざ異世界の者を連れ込むほど馬鹿ではない。こんな半強制的に見も知らぬ者を別の世界に連れて行くなんて、道理に外れている。それに気がつかないスノウもスノウだ。

「さあ、啓太殿」

手を差し伸べてくるセツナさん。その瞳は全く邪念にとらわれていない澄んだものだったが、果たしてこの手を繋いでよいものか……。と、少しだけ躊躇して考えていると、亀裂が再び眩く光り出した。まさか、もう閉まるのか？ と思った瞬間、その穴からまた猫又が現れた。

それは、俺の悪い予感を的確に命中させるほどの存在であった、猫又だった。

「遅れて申し訳ない！ セツナ、ただ今参上で あ？」

セツナ そう言った彼女は、目の前にいる“もう一人の自分”に対し、驚きの意を露にしていた。

そして、次の瞬間には、腰に携帯してあったクナイを手に、もう一人の自分に向けて叫んでいた。

「貴様、何者だ！ 我が姿にaujて何をしようとしている!？」

セツナさんは自分に変装している者に向けて雄雄しく言つと、慎重にその“変装している者”に近づいていく。

いや、これほどソツクリなのは凄い。本当にセツナさんが二人いるみたいだ。

などという緊張感の欠片も無い俺の考えと同調したのか知らんが、突然セツナさんに変装している奴が笑い出した。まるで無邪気な子供のよう

「……ふふふ……アハハハ！ いやーバレちゃったか。もうちょっと遊んでもよかったんだけどね。スノウ、まだ私のこと分らない？」

顎に指をトントンと当て、スノウの方に顔を向ける。

その瞬間、スノウはまるで化け物を見るかのような、ぎょっとした表情に変わった。

「そ、その声……！ アンタまさか……！」

「……ああ、この声は……」

スノウは驚きの色が隠せないのか、脂汗を垂らしてを凝視する。
一方のセツナさんも誰だか分かったのか、緊張を解いてクナイを再び腰へと戻す。

ソイツは二人の様子をニヤニヤと不気味な笑顔で見詰めると、自分の着ていた服をバツ、と投げ出した。

……ちよ、視聴者サービス！？

「そのまさかですっす 忍者じゃないけど変装十八番、返送ノークレームノーリターンでお願いしますがモットーの、可憐な美少女ミスリア・アインツェルちゃんです！」

某歌姫のように『キラッ』とポーズを決めて素顔を晒した猫又ミスリアと言う彼女は、やけに意気揚々と自己紹介を始めた。金の短髪ショートボブに、真紅のような瞳。禍々しさなど一向に感じさせないその態度と、お姫様のような真っ白な服を着こなしている。

……それにしても、よく忍者服の下に隠せたな、その服。

「ミスリア殿、あまり軽率な行動は取らないで欲しいでござるよ。本当に正体不明の敵かと思っただござる」

セツナさんはため息を吐いて彼女に呼びかけるが、本人は反省の色を示さずに、楽しそうに体を弾ませている。

うわあ、コイツテンション高いな。

「だってさー。セツナちゃん真面目だから、異国の者は入れちゃ駄目って拒むでしょ？ だからセツナちゃんが来る前に私が変装して

みんなを導いたってわけ。こっちの世界の猫又や人間って興味あるしー」

くるくると回って俺に指を差す。

人に指を差しちやいけませんと言おうとしたが、それより先にスノウがやけに嫌そうな声で彼女に言った。

「アンタねえ、混乱するから紛らわしい事をしないでよ！ いちいちこっちの世界にまで来なくて結構よ！」

「つれないねー。もっと盛り上がっていきなよ。ほらほらテンションあげてー！ ね、アシユたん」

「そのテンションがウザいんだっての！ って、誰がアシユたんじやあああああ!?!」

ぎゃんぎゃんと掴みかかるような勢いでスノウが吼える。ミスリアはそれを見てケラケラと楽しそうに笑う。

どうやらスノウとコイツは犬猿の仲、と言っやつなのだろうか。一方的にスノウが嫌っているようにしか見えないのだが。

「……っていうかさ、アンタ啓太たちが来るって事をどうやって知ったのよ」

「あー、それはね。ちょっと前にセツナちゃんがそっちに電話をかけてたじゃない？ それに聞き耳立てたら興味が沸いちゃってねー。是非ともこっちの世界に私めがご招待進ぜようと思ったわけ」

「……で、一週間かけて拙者とソックリな服を作っていたと？ こ

丁寧に武器の模造品まで作って？」

「うん！ いやー結構凝っちゃって大変だったよー」

「……アンタ、馬鹿じゃないの？」

「一週間も部屋に籠って何をしているのかと思ったら……やれやれでいける」

再び盛大なため息をついて肩を落とす二人。

あの、そろそろ地の文でなく実際に発言してもよろしいかな、俺。

「あのー、話に水をさすようで悪いんだけど、早く行かないと亀裂閉じてまずいんじゃないの？」

「え？」

「な？」

「り？」

「オイ、最後繋げるな」

え りか？ えな くんか？

先にシャワー浴びてこいよ！ っていうギャグを突っ込めばそれで満足なのか？

「ああ、そうであった！ 三人とも、閉まる前に急いで中に入るで御座るよー！」

ぐいっとセツナさんに手を引っ張られて穴へと引きずりこまれる俺。ちよ、ちよつと待って！ まだ心の準備が出来て アッー！？

一瞬目を瞑れば、気付くと既に異世界 というわけでもなかった。今は穴の中を落下中……らしい。上も下も分らんが。

得体の知れない場所を通過していくたびに、胸の奥に何かを詰められるような息苦しい感覚と、酷い吐き気や頭痛が俺を襲った。

ああ、やべえ吐きそう。最悪なんすけどこの穴。

もう一歩で口からアウトオブ・GE RO……というところで、下から光が見えた気がする。

その光はまるで俺たちを包み込むかのように瞬いては消え、そして。

「いつ ツ！？」

瞳の奥深くまで突き刺さるような光の集束を食らい、俺の身体は地面に叩きつけられた。

強打した膝がズキズキと痛む。ほかの三人はやはり運動神経がいいというか、猫と言うか、綺麗に着地していた。

「あいつつつ……無事に着いたのか？」

「ええ、ここが猫又の世界『シエアリス』よ。……やっぱりこっちの世界は、空気が美味しいわね」

意気揚々と胸いっぱい深呼吸をするスノウ。確かに、ここは。

小川を流れる清らかな水のせせらぎと、小動物たちが戯れている、緑に埋め尽くされた広大で、美しい森林。人間の世界よりも透き通るビー玉のような青空は穢れを知らない群青色に満ちていた。地面も一面の緑。

スノウは俺の肩を突付くと、西の方角にある国を指差した。

「あそこに見える帝都が、私たちの国　ラインガルドよ。数百年前に私の祖先　初代国王ガルド・ラインハートが作り上げた国で、国名は名称に因んでいるの。現国王は私のお父様　ヴェイル・ラインハートが治めているんだけどね。で、あっちの方角に見えるのが」

……おおう、一気にファンタジーっぽいお話になってきましたな。俺は現実味が無くて、生きているか死んでいるかすら分からない状況なのに。

「なあ、スノウ。俺、ちゃんと生きている？　全然実感が沸かないんだが……」

「生きてるわよ。……まあ、確かに世界が違うから実感が沸かないのも分かるけど。それよりミスリア」

「なーに？」

「サクラたちは何処に行ったの？　姿が見えないようだけど」

スノウにそう言われて、気がついた。

そういえば、三人の姿が何処にも見えていない。あの三人はこの世界は此処に来るのが初めてのはずだが……。

「うーん。多分国の人に迎えられて一足先に城に向かったんじゃない？ 一応私はこの場所にカイを待機しておいたけど……」

「げっ！？ なんでここでカイをチョイスするのよ！？ アイツの事だから、絶対に普通には城に戻らないわよ！」

「だってレンくんやカノンさん、すっごい忙しそうだったしー。一番暇そうだったカイに頼んだんだよー」

「そこは普通に護衛に任せりゃいいじゃない！ ……はあ、先が思いやられるわ」

がっくりと肩を落として頂垂れるスノウ。

「……うーむ、さっぱり理解できん。俺にもわかるように説明してほしいな。」

「やれやれ……。とにかくさ、私たちだけでも城の方へ戻ってみない？ もしかしたら町中へ出て行くわすかもしれないから」

心労の色が隠せないのか、げんなりとした表情のスノウが覇気のない声で言った。

そんなにカイとやらは危ない人物なのだろうか。俺、ちょっと心配になってきた。

「そうだね。一旦お城に戻ろう。……うーん、久しぶりに睡眠でも取るかなー」

首をコキコキと鳴らしながら小さな欠伸を噛み締めるミスリア。……まさかお前、一週間徹夜だったとかじゃなからうな？

「ミスリア殿、頼むから睡眠だけは普通にとってくださいでござる。
……それじゃ、啓太殿。拙者についてきてください」

言われるままに、俺は並列に並ぶ三人の後ろについていった。

帝都 ラインガルド、か。あの美しい景観の元で一体何があるんだらうか。

……やっべ、柄にもなくドキドキしてきたぜ！

「啓太？ 何をそんなにニヤニヤしてんの？ ……はーん、若い女三人の尻を見てニヤニヤしてんのね、この変態。無理やり触らせるわよ？ ほらほら」

「お前のほうがよっぽど変態だ！」

スノウの発言に耳を傾け、顔をほんのりと赤く染めた二人が慌てて自分の尻を両手で隠したのは言うまでもない。
ミスリア・セツナさん

もう少しコイツも恥じらいというものをだな……うん、無理か。

万年欲求猫と張り合うくらいの欲求不満だもんね、コイツ。

ラインガルドで一休み。国の王様は彼女のパパ？

【ラインガルドノ城下町】

緑を越えた先に見えるのは、活気溢れる人　いや、猫又たちが集う町　ラインガルド。

メインストリートから始まり、少し先へと行った十字路では、北に行けばラインガルド城、西に行けば繁華街、東に行けば住宅街のよ
うな場所へと通じている。

一言で言つと、凄い。本当にここが、獣人の世界だと断言出来るくらいなの。

去りゆく猫又たちは皆人間の姿と大差ないが、それでも猫の耳と尻尾だけは全員ちゃんとしていらつしやり、文明もこちらの世界より大分発達しているのか、見たことも無い商品や少し首を傾げてしまふような物が沢山店頭に置かれてあつた。

さすがは異国。さすがは別世界だ。俺、いまだに夢の中でトリップしてるんじゃないのかつて再び心配になつてきたよ。
ためにスノウの頬をつねつてみた。

「いふあつ!?!?　こ、こら啓太あ、何すんのよー!」

眉間にしわを寄せたスノウに、腹部へ思い切りパンチを入られたが、そんなへナチヨコパンチで俺のたくましい腹筋が破られるはずがない。

……いや、すみませんやせ我慢です、はい。鳩尾へ的確に入ったとき、ガチで胃酸が出るかと思ひました。いらん事はしないほうが得策だね。

「いただ……つてそれよりもさ。お前この国のお姫様だろ?　普通

にこの辺をぶらぶらして大丈夫なのか？」

「あー大丈夫大丈夫。別に私がこの辺歩いてても、町の人は気さくに越えかけてくれるしね。……おーい、魚屋のおじさーん！ こないだはお魚ありがとねー！」

スノウはその辺を歩いていたら、いかにも魚屋のおっさんですと言わんばかりの猫又に手を振った。魚屋のおっさんもそれに気付いたのか、笑顔でスノウの元までやってきた。

……なんとまあフリーダムな。

「お、アシユリーちゃんじゃないか。いやいや、喜んでくれたなら私も嬉しいよ。……それで、そちらの人は？ 見たところ、猫又じゃないが」

魚屋のおっさんは不振そうな目つきで俺を見ってくる。

俺も対抗しておっさんに不振な目つきで反撃してやるうかと思っただが、そのおっさんのたくましく光る筋肉隆々の肉体を見て、その判断は即座誤りであることに気付いた。

……くそう、俺がもう少し鍛えてりゃ……おっさんめええ……！

「ああ、彼？ 彼は私のステディーよ。間違ってもスタディーでなくステディーね」

「あ、そうです。自分はスノウのスタディーでなくステディー……っっておい待てコラ」

危づくノリツッコミの段階までいくところだった。危なかった。

「ああ、ステディーってことは、アシユリーちゃんの彼氏か……彼

氏が……彼氏!?」

おっさんが目を「くわっ」と光らせて俺を凝視する。それは半分……いや、半分とかの問題ではなく、血走っていた。やべえ。このおっさん怖い。「娘はやらんぞ!」と頑なに意地を張ってる父親みたいだ。

「そうか……まあ確かに、アシユリーちゃんも良い年齢だからなあ。彼氏の一人や二人くらいいても当然か。……でも、その人は人間だろう?」

「人間でも関係ないわ。私が気に入ったんだもの。それ以上の理由なんてないし、ね」

「まあ、君がそう言うんなら反論はしないけどな。……元気な子を産むんだぞ!」

「うん、任せておじさん!」

「……おい、ちょっとまってコラー」

勝手に話を飛躍させんでほしいな。彼氏云々の話かと思っただら今度は子供を生むだとか物騒な話に変わってるし。それよりも、もっと大事な用があったはずだ。

「スノウ、先にサクラたちを探した方がいいんじゃないのか? あのカイって人が」

「あ、そういやそうね。早いとこ見つけないと……ん? あれ、もしかしてミいちゃんじゃないの?」

スノウが指を指す方角には、茶のショートボブがとても似合う、可愛らしい女の子がいた。確かに、あれはミいちゃんだ。

そして、その隣には、見たことも無い銀髪の男（耳は出ていないが、おそらく猫又だろう）と、何やらオロオロしているジャックの姿がそこにあつた。

サクラの姿は見えていない。おそらく、

「あー、あの銀髪がさっき言ってたカイね。アイツ、また女の子にちょっかいかけて乱暴しようとしてんのかな？」

ふーん。あの人がカイか。

ふーん。ちょっかいかけて乱暴か……。

……何だと？

……ってことは今……。

……ミいちゃんにちょっかいかけて、乱暴しようとしているだと……？

……。

……。

……ほづ。

よほど、死にたいらしいな。

慈愛、哀れみ、同情。思いやりの感情はそれらは全て消えうせた。あるのは破壊、破壊、目の前にいるクスヤロウの全てを破壊するだけの欲望。

身体が軽い。一切の重力の抵抗を感じさせぬほど、それは素早く、獣の如く身体は加速する。

臨機応変に障害物をかわし、奴の下へ。敵は未だ此方に気付いていない。勝機だ。

嗚呼、この感じは久しぶりだ。長い間封印しておいたこの力は、未だに衰える事を知らない。

「ジャック」

一言だけそう言って、彼の背中を借りる。飛び乗ると同時に考慮して靴は脱いでおいた。彼の服が汚れてしまっからな。

たんつ、とジャックの背中を蹴り、俺は跳躍する。疾風の中はとても気持ちがいい。清々しくて 目の前にいる敵が反吐にしか見えないほどだ。

誰よりも速く。

誰よりも強く。

風を身に纏った俺の一撃は、どんなに強固な万物であろうと貫き通す。

もう一度言う。どんなに強者であろうが、俺の膝蹴りは

「シャイニング・啓太・ウィザアアド!!」

全てを、叩き潰す！！

クズヤロウの顔に俺の膝蹴りが命中した瞬間、反動でそのクズ（以下略）は後方へ派手に吹っ飛んだ。ゴミ箱やら何やらの障害物に激突して、ぱらぱらと砂塵が起きている。

ハハハハハ、愉快愉快気分爽快。

ミいちゃんに乱暴するとこの俺が黙っちゃいねえぞ。コラ？ もう一撃食らわせて極楽浄土を垣間見せてやるつか、あ？

……つと、いけない。ヒートしすぎた。あんなクズのことよりミいちゃんの無事を確認するのが先だ。

「ミ、ミいちゃん。大丈夫か？ 怪我はしてないか？ 変なことはされなかったか？」

慌てて彼女に駆け寄って安否を確認する。

ミいちゃんはぽかんとした表情で、俺の顔と吹き飛ばされたクズ（今は瓦礫に埋もれているが）を交互に見ると、首を横に傾げて言った。

「啓太お兄ちゃん？ あれ、さっきの親切なお兄ちゃんは……？」

「………親切な、お兄ちゃん？」

「うん。私かね、ちょっと周囲を見て回りたかったら、案内してあげるよって言うてくれたの」

………。

……。

……ん？

「ジャック、それ、マジっすか？」

「うん。知らない人だから少し心配だったけど……啓太、何であの人をぶっ飛ばしたの？」

……。

うん、まさか、その……えっと、うん。

「スノーウ！！ お前言ってる事が全然違うじゃねえかー！！」
俺の甲高くやかましい声は少し離れた位置にいるスノウによく届いたのか、耳を手で塞いであからさまに嫌そうな表情の彼女が目に入った。
った。

と同時に周りの人たちが何事かと言うような表情で俺を一斉に見詰めた。やべ、恥ずかしい。今だけは見るな！

「そんなに叫ばなくても聞こえてるわよ、うっさいわね！ あんたが勝手に早とちりして勘違いしただけじゃない！」

いや、それはごもつともなんですけどね。

でも、もう少し言い方ってもんがあるでしょう……！？

砂塵が小さく舞うゴミ箱辺りを見てみると、そこにはスラリとした長い足が垣間見えている。

先ずは今さっき俺が蹴飛ばしたスノウのお兄様を急いで救出せねば

……！

カカカツと忍者のように兄様の下へ走って救助に向かう。長い足をゴミ溜めから引っぱり出すと……あらら、目から星を出して気を失ってる。

とにかく城まで背負っていこうと思い、おんぶしたのはいいが……こいつはくせえッ！ ゴミ以下の臭いがプンプンするゼッーッ！！

涙目でセツナさんの指示通りのルートで城を目指した。紛らわしい事を言ったスノウは後でお仕置きだ。

【ラインガルド城】

……これは絶景だな、絶景。

まるで天高くまで届きそうなほど高く聳える白銀の城は、遠くまで広がる果てしない紺碧の空と綺麗にマッチし、美しさを更に際立たせている。

頂にあるのは国旗だろうか。白と赤で塗りたくられた十字架の紋章が中央に位置し、風によって静かにその身を揺らしている。どこぞのテーマパークを彷彿とさせる出来栄だ。

とまあ、立派な城だという事は大体分かるのだが、本当にスノウがこの城のお姫様 っていうかお嬢様か だという事実には心底驚いた。こんなじゃじゃ馬娘がこんな立派な……ああ、妬ましいわね。スノウに手を引かれ、俺は城内へと入っていく。本当に、自分がロールプレイングゲームの世界に入った気分だ。

「……これでよし、っと」

先ず最初に向かった先は、俺が先ほど蹴飛ばした親切なお兄さまの寝室だった。とはいえ、妙に薔薇の香る部屋である。殺風景だし。

「安静にしていたら直ぐに目覚めるわよ。一応猫又なんだし、心配せずとも、ちよつとやそつとじゃ死なないわよ？」

「そうだけどさ。やっぱり、その……罪悪感が」

「そりゃ初対面でいきなり蹴飛ばされちゃね。まあ、大丈夫なんじゃない？ 彼、結構温厚な方だから。……今だけはね」

「そ、そうか。っていつかそれ以前にさ、お前とこの人はどういう関係なんだ？ 見たところ王族の人には違いないんだが……」

ベッドに腰をかけたスノウが横で寝ているお兄さん　カイさんをちらりと見る。

銀色の長い髪は相変わらずサラサラとしていらっしやる。まるで女性性の髪のようだ。

「カイ？ カイは私の兄よ。本名カイ・ラインハート。一応長兄。因みに私は長女で、次男にレン・ラインハートがいるわ」

「へえ、兄と弟か。兄さんはともかく、弟はさぞかし可愛いんだろ

うな」

「シヨタコ……げふん。そりゃ勿論。何たって私の弟でもあるからね。まあカイの方は……ちよっと人格があれだけど」

困ったような笑いを俺に見せるスノウ。人格があれとは一体何の事だろうか。

あまり兄は尊敬しているように見えないスノウが少し引つかかるな。ミイちゃんの件もあるし、特に変な人ではなさそうなんだが……。

とりあえず、此処は王様謁見の間……というのが正しいのだろうか。俺たちはスノウのお兄様の部屋から離れ、王様のご挨拶であると側近の人が言っただけで、そんな場所へと連れてこられた。

キラキラと光物で装飾された窓や王座は見るからに高そうで、高くないイメージを恐ろしく放っていらっしやる。

周りにはSPとかボディガードとかか護衛がその辺に配置され、侵入者をボコボコにする気満々の表情で警備している。

いやいや、これほどのマッスルゲイバーな猫又たちが集ったものだよ。

僕とんでもなく怖いですはい……。

という感じでウホッな筋肉質の男たちに見詰められて正直たまらなく逃げ出したい気分をそっちのけるかのように、奥の部屋から王様が現れた。

あれがスノウの父親兼この国を治める国王なのだろうか。……うー

む、まぶしすぎて見えない。なんというオーラよ。これぞ国王ラ。白銀に光る髪と、同様に生えた長く美しい髭。気の強そうな釣り目はスノウと良く似ている。赤と白の十字架の紋章を胸の部分にペインティングした白衣のような服を着ており、貴族チックな服装だなぁと思う反面、何処か庶民のようなイメージも同時に感じてしまう。ぶっっちゃけ、イケメンな王様だということは良く分かる。

そんなイケメンな王様は、渋くさわやか（以降渋さわ）な声でスノウを見て仰った。

「帰ったか。アシュリー」

「はい、お父様。アシュリー・ラインハート。ただ今人間界から戻って参りました」

膝を突いて頭を下げるスノウ。やはり父親と言えど、礼儀作法などは相当厳しくしつけられたんだろう。いつものスノウとは全く違う事に少し驚いた。

「よい。そう畏まらんでも普通に話せばよい。其方の者は？」

「あ、そう？ えっと、こっちは啓太。藤咲啓太。向こうの世界の人間で、結構お世話になった人なの」

「軽いなオイ!？」

お兄さんその態度の豹変に酷くびっくりですよ！

だが、俺の驚きとは裏腹に、国王 確かヴェイル・ラインハートと言ったか ヴェイルさんは感嘆の声を露にした。

「そうか。啓太と申されるのか。遠路はるばるご苦勞であった。こ

のジャジャ馬娘の相手をしていて、さぞ疲れたであろう?。」

「え、ええ。そりゃもう滅茶苦茶……」

「ん、啓太? そりゃどういう意味ですか? ちょっとお姉さんと向こうで話しましょうか? ん?。」

ぐりぐりと拳を俺の頬に押し付けてニコニコと顔を歪ませて笑う。作り笑いですね、分かります。

くそ……国王の前だからっていい気になりおつてからに……! 引きつった笑顔の俺に向けて、ヴェイルさんが洪さわな声で高らかに笑う。ああ、何て男らしい笑い方でしょう。ちよっとキュンとしましたよ僕。

「はっはっは。アシュリーはよほど啓太殿の事を気に入っているのだな。珍しいものだ。普通の人間なら、猫又を邪険にしがちなものなのにな」

「当然よ、パパ。啓太は私の夫になるべき男だもの。ゆくゆくは時期国王も夢じゃないわ」

その言葉を聞いてヴェイルさんが「なんと!」と瞳孔をくわつと開いて驚いた素振りを見せる。同時に後ろでお茶飲んでくつろいでたセツナさんとミスリアもぎょつとした表情になった。っていうか二人とも何くつろいでんですかコラ。それにこっちもこっちで。勝手に決めるんじゃないやねえ。明らかに誤解されてるじゃないやねえか。

「そうか……ついにお前にも婿の貰い手が……嬉しい反面寂しい気持ちもあるな……だがしかし、その者は」

「人間、って言いたいんでしょ？ 踏まえてパパは啓太の事はまったく知らない。だから、どうしても信用することは出来ない」

「う、む……」

「でもね、私は啓太の事を信頼してる。私が危ない目にあつた時、彼は自分の身の危険を顧みず、私の元へ飛び込んで助けてくれた。あの時一瞬見せた啓太の表情が……その、カッコよかったし、凄く頼もしくって、嬉しかった。それからかな。彼が私に相応しい者であるってことに、この人になら自分の事を任せられることができるかな、って」

「そうだが……」

「それにね、人種云々の問題じゃないわ。要は気持ちの問題よ。好きになった人が偶然人間だっただけ。それに何か問題はある？」

「……いや、お前がそう決めたんだ。私が強制するいわれもない。好きにしろ、とは言わぬが、せめて孫」

「ちよ、ちよちよちよちよと待つてくださいよ！ 勝手に話を進めないでください！」

ここで元祖KYの俺が物を仰ります。良い話だなーと思うが、俺の意見も聴いて欲しいんだなこれが。

「あの、さつきから物騒な話をしてますけど、俺は別に結婚だとか国王になるだとかは全然考えていませんよ！ この地へスノア シュリーを連れてきて、のんびりと観光でもしていけたらいいなと考えていた程度ですし、そもそも話を飛躍させすぎです！ 俺と

彼女は別に　　」

「……………啓太は、嫌なの？」

「……………え？」

不意に横から聞こえた、寂しそうなスノウの声に、俺は言葉を止めた。何故だか、とても悲しそうな、そんな声色。きゅ、と服を握る彼女の手はまだ小さくて、子供のようで。俯いた表情は何処か自分の居場所を求めているような気がして。

ああ、そんな悲しそうな顔で見られても困る。だって俺は　　。

「……………嫌じゃない、嫌じゃないけどさ、俺には……………アイツがいるから。悪いけど、俺はこの国へお前を娶りに来たわけじゃない。だから、駄目なんだ。お前もさっき言ったろ？ 要は気持ちの問題だつて。だとしたら俺の気持ちも察してくれよ。例えヴェイルさんが許してくれたとしても、俺は……………サクラが、好きだから。彼女じゃないと、駄目だから」

ここまで本音がすらすらと言えたのは自分でも驚きだった。それほど俺は、無意識にサクラの事を想っていたのかは知らないが。

でも、やっぱり俺は、サクラがいないと駄目なのかもしれない。何度も何度もこの言葉を繰り返しているかもしれないが、それだけ彼女という存在が俺にとって大きすぎるから。

高校生だったあの日、俺は愛した人を失う怖さを体験した。そして去年のクリスマス。過ちを繰り返すまいと誓って、結局繰り返してしまった。

ようは俺の見解の深さが足りなかったから。もう少し物事を見極め

て、もつと周囲を見ていれば、あんなことには成らなかつたんだ。不可抗力に近かつたとは言えど、もう二度と、あんな出来事は起こしたくない。彼女を、失いたくはない。そして、いつも俺のそばで笑ってくれるサクラを……手放したく無い。

「……結局のところ、私と結婚するのが嫌なだけじゃない。……うそつき」

「う、まあ、そういう事になるんだがな。兎も角、お前と結婚は駄目だ。俺はまだまだやりたいことが沢山あるんだし」

俺の背中にぼふつと顔を埋め、への字口で拗ねている様子を見て、まだまだ彼女は子供なのかなと思う反面、それだけ彼女に想われていた事を実感した。

でも、ここはきっぱりと言ってやらなければ。でないと、本当に結婚が成立してしまう。優柔不断で終わるのは嫌だしな。

と、なんとか未遂のまままで終わりそうだったこの話の流れを覆すかのよう、スノウが何かに気付いたような声を上げた。

ちよ、うっせ。背中て叫ぶな。

「あ、そうだ。パパ！ この国って一夫多妻制は認められていたっけ？」

「む？ うむ……互いの了承を得た場合は成立されるが……」

「だって。じゃあ啓太、結婚しましょ！」

「……お前、さっきの俺の話全ツ然理解してねーだろ！」

何たる馬鹿猫娘だコイツは。話の本筋を全く理解していないのかよ。

「なんでよー。サクラと結婚した後に、今度は私と結婚すればいい話でしょー？ 側室みたいな扱いは嫌だけど、それでも一緒にいられるんだし」

「いやいや、そうは問屋が卸さないって言うか。そんな簡単でどうすんだよ！ 本当にお前はいいのかそれで!？」

「いよいよ」

軽っ。いやあ、軽過ぎてお兄さん困っちゃうよアハハ！

【スノウの部屋】

とまあ、スノウとスノウのお父様に半分言い訳に近い説明をして現在に至る。広々とした寝室のベッドに腰を下ろしたスノウは、手前にある鏡を見て真っ白な髪を櫛でとかしていた。セツナさんとミスリアは此処の部屋に戻っていったところ（セツナさんは何か用事があるとか言ってたが）。

色々と話してみてわかったが、ヴェイルさんは最初に感じていた怖いような、硬いような印象は全くなく、誰からも好かれそうな優しい国王様だった。

それに娘を助けてもらったお礼として、このお城に自由に住んでい

いという条件をつけてもらった。正直連続で宿にでも泊まることを覚悟していた俺にとってそれは、願っても無い朗報だった。

……それにしても、何故国王はあんな性格良いのに娘はこんな性格悪いんだろ。あれか、優しすぎるが故の過ちか。だから娘の言う事をホイホイ聞いてちゃう駄目なパパなのか。

うーむ、王妃の苦勞が知れる。優しいけど子育ては苦手なんだね、王様は。

「なあ、スノウ。ところでサクラは一体どこにいるんだ？」

髪をとかし終えたのか、スノウは櫛を器用にくるりと回して、元あった場所に戻すと、俺の方へ向き直った。

なにやら不服そうな面である。

「サクラ？ サクラなら多分ここを出て左奥にある部屋にいると思うけど……啓太、もう行っちゃおうの？」

「ああ。まだこっちの世界に来て、アイツの顔全然見てないしな。寂しがってるかもしれねえし、行って来るよ」

「そう。……それじゃ、夕飯には呼ぶから部屋にいてね」

「お、おう？ わかった。悪いな、行って来る」

その不満そうな表情とは裏腹に冷めたような声。はて、何か機嫌が悪いのは気のせいだろうか。それにしてもはやけに消極的で、覇気のない声だ。

不思議そうに彼女の顔を見ると、俺は背を向けて目前にあったドアを引き、外へと出た。さて、サクラの部屋は

「……寂しいのは私だって一緒なのに……ばか」

【サクラの部屋】

こざっぱりとした快適な空間が広がるそこに、確かにサクラはいた。ふわふわと長い桜色の髪を揺らして、ベッドの上で寝転んび、猫耳や尻尾も、僕たち元気ですよーと言わんばかりに動いている。多分、彼女の事だから新しい寝具の感触を直で確かめて馴染ませているのだろう。ホテルや旅館に行ったときに、よく同じ事を繰り返していた。何でも、こうした方が良く眠れるのかなんとか。

「おい、サクラ」

「ぬー……これはなかなか良い生地布団ですねー柔らかかや柔らかかや……ん、啓太さん？ ……啓太さん？ 啓太さああああんっ！」

ベッドで寝転んでいた身体を止めて俺の方へ向き直ると、サクラは八重歯をキラリと見せて満面の笑みで俺に飛び掛ってきた。……つてちよ、何で君下着なワケ！？

手を大きく広げて襲い掛かる彼女になすすべなく、俺はその危険なダイビングを両腕で受け止め、抱きしめた。あやや、何この感動シーンみたいなの光景。サクラちゃん今下着ですけど。上も下もぶるんぶるんしてるんですけど。柔らかいんですけど。マシユマロなんですけど。はい。

「えへへー、啓太さんだ啓太さんだ本物の啓太さんだー この石鹸好きの匂いは啓太さんしかありえませんが！ 他の香料を嫌う啓太さんしかありえないです！」

「わ、分かったから離してくれ……この体制で抱きしめるのは辛いんだよ……」

正直、苦しい。気持ちいいんだけど苦しい。サクラから発せられる鼻腔をくすぐるような爽やかな香りがして、とつても良いんですが……苦しい。サクラ、力入れすぎ。が、そんな俺の苦しいオーラなど全く感じようともせず、サクラは身体をいやらしく動かして悶えた声を出す。

「ああっ……私のお腹に啓太さんのかたいモノがっ……」

「当たってません」

きつぱりと言い放つ。だって俺の息子はちょっとやそつとじゃ起動しないから。いろんな経験を経て。

……言っておくが起動しないわけじゃないからな！？ この歳でインッスイブルは嫌だぞ！？

なおも抱きしめて離そうとしないサクラ。嬉しいのは分かるが、もう少し落ち着いて欲しい。

そりゃあ、俺もいつもと変わらないコイツには安堵しているんだけど……もうちょっと節操というか何と言うか、ねえ……。

「サクラ、いい加減離せ……」

「やだ！ 啓太さんの温もりを感じたいの！ ついでに言ったら私

の“中”でも啓太さんの温もりを感じて……ふへへ……」

「抜くぞ」

「下腹部辺りにあるマグナムをですか!？」

「尻尾を」

「……ああ、無理。一瞬痛みを快感に変換出来るかなと思ったけど流石に尻尾は無理……」

なんとまあご大層な頭だな。しかし尻尾は弱点なのか、酷く青ざめた表情で彼女は自分の両腕をそつと後ろの尻尾に回した。するつと俺の背中から抜ける彼女の腕。ふう、ようやく自由になれたよ。

「尻尾つて抜かれるとヤバいのか？」

「いえ、満月の夜に大猿に変身するのを防ぐ程度です」

「お月見が楽しみだ」

「嘘です。本気にしないで下さい。私これでも猫です」

「猫だったのかお前!？」

「何ですかそのリアクション!？ 私はれっきとした猫又ですよー
!」

「だったら初めからそう言えば良いのに……アホめ」

「うつつ……何か凄い理不尽です……理系な婦人？ そりゃ理婦人です……」

不服そうな表情で頬を膨らませて怒ったと思ったら、今度はワケの分からない事を言いながら涙目で俺を見詰めるサクラ。見詰めるのは別に構わないが、せめて早く服を着てくれ。

さっきからお前の桜色のブラの肩紐が落ちそうなんだ。見ていて危なっかしいんだ、マジで。直すか服を着る。いや、直して服を着る。

サクラに替えの服を着せてやってから窓の方へ足を運ぶと、色鮮やかに煌くカーテンをバツと開けた。くわぁ、暗かったから日差しが眩しいぜ……ん？

ちよつと待てよ。確か俺たちは真夜中に穴へ入ってこの世界に来たんだよな？ 多少の時差はあるとは思うけど、どうしてこちらの世界は正午近くのような明るさなんだ？

さっきのスノウの発言も気にかかる。「夕飯」？ 夕飯ならさっき向こうの世界で食べたじゃないか。少し矛盾してないか？

……うん？ 矛盾、しているんだよな……。

「なあ、サクラ。お前今眠たいか？」

「え……いいえ。眠たくないです。それがどうかしたんですか？」

「眠たく、ないよな。俺もだ」

眠たくない。そういえば、眠たくないな。

向こうの世界では午前十二時のはずだった。サクラも眠い眠いとぶつくさ言いながら亀裂の前で言っていたよな。

けど、今彼女は確かに眠くないと言った。そして俺自身も、多少は

眠たかったはずなのに、今では全く眠くない。……これって、どう
いう事だ？

「別に眠くなんてないですよ。……もう、啓太さんったらそんなに私とベッドでパコパコしたいんですか？ 急かさずとも夜は長いですよ」

「どうしてそんな考えになるんだお前は。いやさ、向こうの世界であんなに眠いって言ってたお前が眠たくないだなんて言うから、ちよつと不思議に思ってたさ」

そういうと、サクラは少し首を傾げて自分の顎に手をやった。うつすらと瞳を閉じて何かを考えている様子だが……思い当たる節でもあるのだろうか。

「うーん……たぶん、亀裂の時差……じゃない“時砂”がそういう風に身体を作り変えているんだと思います。難しいんであんまり詳しくは知らないんですけど、亀裂を通じて平行世界に移動を行った際に、身体がそちらの世界での時間などに順応して変調を起こすらしいのです。睡眠欲、食欲は基準　まあ俗に言うお腹空いてないし特に眠くないって状態ですね　を上回っていたり下回っていたりした場合、それら全てを平均に一定させる事を、そのまんま”時砂の影響”って言います。……あれですね、亀裂を通る時のオマケみたいなものですかね？」

「……なんてファンタジーな。俺、身体大丈夫だよな……？」

そもそも身体の基準が分からないんだが。睡眠欲や食欲は人それぞれのはずだし、そう簡単に一定に決める事は無理があると思うんだけれど。

でも食欲が沸いていないし、眠たくないのも事実だ。人間の三代欲求のうちの二つを自由にコントロール出来るとか……時砂、恐ろしい子。

「っていうかさ、お前。何でそんなことを知ってた？ もしかして、こっちの世界での記憶が戻ったのか？」

俺の問いかけに彼女の猫耳がピヨコンとんがった。つい触りたくなっただが必死に耐える。しかしコイツの猫耳はどうしてこっちも触りたくなるんだらう。あれか、毛並みか他と違うからか。

それとも俺の猫耳フェチがストライクゾーン越えてブラスティックゾーンなのだらうか。解せぬ。解せぬが他に何とも言えぬ。

「う？ うーん……そういえば。何となくこの町には見覚えがありましたし、昔からある店には何処か懐かしさを感じました。……おかしい点を上げるなら、未だに両親の事が思い出せないのと、こちらの世界で知り合いがいないって事だけです。私が覚えていなくても、向こうは覚えているはずなのに……変ですよね」

「……何かの拍子やきっかけで、欠落した記憶の一部を思い出したって事か。多分、故郷に帰ってきて昔の空気を味わっているうちに、ちよつとずつ昔の自分を思い出してるだけだよ。この調子だと、直ぐに全部思い出せるかもな」

「はい、そうなんです……」

そこまで言っただけでサクラは口をつぐんだ。なにやら、言い難そうな様子ではあるが。

俯いた彼女の顔は暗い。本当なら、嬉しいはずなのだけれど。

ベッドに腰を下ろしたサクラは、先ほどの明るい様子とは打って変わっていた。

悩み事があるのだろう。寂しそうな表情で俺を見ると、言葉を続けた。

「……私、不安なんです。もし全ての記憶が戻った時、私が『私』ではいられなくなるんじゃないのかと思って。今、啓太さんと過ごす生活はすごく楽しくて、凄く充実しています。でも、その生活を記憶を取り戻した『本当の私』が壊してしまうのではないのかと思って、不安なんです。こんなにも楽しい日常を、自分の手で変えてしまっんじゃないのかと思うと……怖くて」

スカートを両の拳できゅっとなぎ、独り言のように話す彼女の言葉は重い。

確かに、全ての記憶を思い出せば、彼女は今の彼女ではなくなってしまうかもしれない。もしかすると、スノウみたいに一国のお姫様だったり、人間を嫌う猫又かもしれない。

それが嫌で、彼女は悩んでいる。本当の自分が、俺を、藤咲啓太という存在を拒んでしまったらどうしよう、と。

ふう、とため息をついて、俺はサクラの頭を子供のように撫でた。落ち着かせてやりたいときは、いつもこうやって、彼女の頭を撫でてやっている。

「大丈夫だよ。お前はお前だ。それは何の変わりもない。もしもさ、お前が変わっちゃって、今の生活を壊そうなんて考えてたら、実行する前にチョップ数発くらわせて元に戻してやるよ。頭から星がでるくらいとびつきりのやつをな」

「ら、乱暴はいやですよ……」

苦笑いで頭を押さえるサクラ。頭を撫で終わると、彼女の柔らかい頬へそつと手を当てた。一回、二回両の指で優しく撫でて、俺は言葉が続ける。

「だからさ、お前は不安にならなくていい。むしろ、安心してろ。なんたつてお前の傍には俺がいるんだ。心配や不安はゴミ箱にでも捨てて、胸を張って真実に向かっていけ。突き進む途中で躓きそうになったら、俺がしっかりと支えてやる。余計な事は気にせずに、まっすぐに進めばいいんだ。……お前はもう、一人じゃない。それだけは、忘れちゃ駄目だ」

俺は、いつでもお前のそばにいる。

たとえ全部を思い出して、俺の事を拒もうが、俺は彼女が受け入れてくれるまで引き下がらない。

サクラはもう、一人じゃないんだ。俺が、ずっと傍にいるって決めたんだ。

だから、不安も心配も、俺が安心や安堵に変えてやらなければいけないんだ。

「啓太さん……」

そつと、サクラが俺の手に自分の手を重ねてくる。小さいけれど、温かく柔らかい。俺が求めていた、確かな温もり。

彼女は微笑ましい顔で俺を見詰めると、少しだけ顔を朱に染めて上目遣いで言う。

「あの、ですね……でしたら……その、証が欲しいです。私の支えになってくれる、証……」

証？ と聞き返す前に、サクラは少し上に顎を向けて、ゆっくりと

瞳を閉じた。つんと上を向いている、彼女の赤く綺麗な唇は宝石のように煌いては光沢を増しているような気がした。

……ああ、なるほど。そういう事か。全く、恥ずかしい事をやらせてくれる。

「……分かったよ。でも、キスだけだぞ？ それ以上はしないからな」

そつと彼女の肩に手を掛け、彼女の唇に自分のを近づけると、同じように目を閉じた。

もう直ぐお互い触れ合うだろうと思ってた矢先に、彼女の手がいつの間にか俺の背中に回っていたのに気づいた。

それと同時に、上空から感じるただならぬ気配を感じて、俺は天井にバツ！ と眼を向けた。しかし、そこには何もいない。

「……………」

「……………啓太さん？」

いつまで経っても唇が触れない事を不思議に思ったのが、サクラが上目遣いに俺を見てきた。どうしたのって表情だな、うん。どうかしたんだ。

「……………なあ、サクラ。長い棒とかないか、棒」

「棒？ ……確か、部屋の隅の掃除入れに箒が入ってましたが」

「ちよつと借りるぞ」

一旦サクラから離れて、部屋の隅にある掃除道具入れへ。ちよつど

よい長さの箒を選ぶと、俺はそれを手にとって彼女のもとへ。
そこからもう一度天井周辺を見回す。すると、ものすっごい小さな
穴が一箇所だけ天井に空いているのが見えた。俺はその箇所を狙っ
て、ドンッ！　と思いい切り箒の先でどついた。

『ひゅいつ！？』

……おや、河童がいたか。でばがめの河童さんか。こりやお仕置き
しなくてはな。

ドン、ドン、ドカン、ドゴシャ！　と乱暴に箒で天井をどつくと、
悲鳴にも似た声で河童さんが声をかけてきた。

『ちよ、ちよ、ちよ！　やめてやめて！　私だよ、ミスリアだよ！
可憐な美少女ミスリアちゃんだよ！　だから天井叩くのやめて！
お母さんはソフトに天井叩けない息子に育てた覚えはないよ！』

「ほお……盗み聞き&盗み見しておいて母親ヅラとはねえ……？
で、何の用？　場合によっちゃブタ箱に行くか、今すぐ河童のスー
プにしてやるが」

「私河童じゃないよ！？　猫だよ！　あ、ははは……えっとね……
…天井裏を歩いてたら、何やらしい展開で盛り上がったので、つ
いで啓太の股間も盛り上がったるんじゃないのかなーと思って、つ
い盗み見ば」

「3秒以内に云ね。でないと天井ブチ抜いてウヌレの奥歯ガタガタ
言わせる」

「し、失礼しましたあー！」

ドタバタと何かが駆けていく音が聞こえた。それも直ぐに終わり、
今ではシーンとした静寂が耳を過ぎる。

……のも一瞬だった。天井裏ではない別の箇所　直ぐ近くの壁に
て、再び同じような気配を感じた。

その気配がする壁のところまで行くと、俺は壁に貼られてあった『
布のようなもの』を一气にはがした。

「……で、アンタはアンタで。一体ここで、な・に・を・やってん
ス力？」

そこには、冷や汗をダラダラに垂らして、にっこり笑顔のまま固ま
っているセツナさんの姿があった。相変わらずの露出が高い衣装で、
岩のように固まっていた。

「ま、まさか拙者の技が敗れるとは……啓太殿、是非あなたにも忍
びの道をおすすめし」

「んなこたあ勤めているバイト先の店長が仕事中に屁えこいたくら
いどうだっていいんですよ。俺は一体、アンタがそこで何をしてい
るかって訊いてんですよ」

「……あ、あ。い、いやその、あのですね、わ、私は別に二人の情
事を覗き見しようなんて思いはこれっぽっちもありませんでしてね、
ただひたすらに今日一日懸命に生きる事をモットーに願う今この頃
で、あ、あ、そういえば今日は姫やサクラ殿が部屋を何しているか
音が出ない写真でカメラに撮ってこいと言いましたね、はい。泣く
泣くスタンバイした結果がこれなんですよ、はい」

俺の普段見せない剣幕にビビりっぱなしか、半分涙目になりながら
セツナさんは言葉を続けようとしますが、緊張して上手く喋れていな

い様子だった。っていうか口調おかしいし全然伝わらんぞ。エセ忍者がお前。……まあ、なんとなく言いたいことは分かるが。スノウの差し金だな、セツナさんは。

「で、その写真フィルムどこ？」

「あなたの心の中に……」

「あまり私を怒らせない方が良い」

「これです。はい、すみません。命令だったんです。デバガメするつもりなどなかったんです」

すすつとカメラを手渡してくるセツナさん。

彼女の目に溜まった涙がほろほろと地へ零れるのを見て、ちよつとだけ罪悪感が沸いたが、それもほんの一瞬で再び消えうせた。

「……なあ、俺フィルムって言ったよね？ 何でカメラ？ しかもこれ、何でフィルム入ってねえの？」

「あ……い、いえこれは啓太殿の隠し撮りが入って……じゃない！ ち、違います口が滑りました！ け、啓太殿のプライベートも撮ってこいと命令をされましてね、はい！ こ、これも命令なんですよ本当なんですよ！」

最早拙者だのごさるだの言わなくなったセツナさんは完璧にエセ忍者だと言つ事が確定した今、俺は壁に隠れていた彼女の首根っこをつかみ上げると、わしわしと頭を乱暴に撫でて笑顔を向けた。そう、目が笑っていない最高の笑顔。途端に真っ青になるセツナさん。

「ちよつとスノウの部屋まで行こうか、お嬢ちゃん。ん？ 逃げるなよお嬢ちゃん。アンタも共犯なんだからね。俺の隠し撮りだっけ？ それも命令かどうか聞いてみようじゃないか」

ずるずると彼女を引きずって、俺はドアノブを回そうとする。

が、その俺の腰元にしがみ付いてくる一匹の猫がいたことにすっかり忘れていた。

「あーん！ 啓太さーん！ キスして、キスー！ 触れ合う寸前の生殺しはめっちゃキツイですよー！」

「ジャマが入ったからまた今度な！ それじゃ俺、部屋に帰るから。またなっ！」

「えええー！？ あー、もう！ ミスリアとセツナさんのほかあああ！ せつかくいい雰囲気だったのにー！ あとそれから隠し撮り私にもよこせー！」

ばかー！ あほー！ 死にさらせー！ ぼけなすー！ いてこますぞワリヤア！ などというサクラの泣き声（怒号？）が耳を反響しつつも、俺は自室へと足を運んだ。

ああ恥ずかしい恥ずかしい。よく考えたらサクラの部屋で何をやるうとしてたんだ俺は。まだ昼間ですよ本当に。ああ恥ずかしいっからありゃしない……。

変人揃いの異界には参りますよ本当に。

【スノウの部屋】

「入るぞ、スノウ」

二、三度ドアをノックしてスノウの部屋へ。もちろん左手には真っ白に燃え尽きたセツナさんを連れて。

カチャリとドアノブを回して入ると、そこには下着姿のスノウがせつせかと服を着替えていました。うん、ちょうど服を脱いでいたところ。

許可なく入った俺が悪いんだが、何てタイミングだ。上も下も真っ白かコラ。

「え……きゃあつ！　ちよつと啓太、まだ全部脱いでないんだから見ないでよ！」

「全部脱ぐな！　お前今服を着てんだろーが！」

こつちをチラチラと見て、早速真っ白なブラを外しにかかる変態を一喝して後ろを振り向く。コイツの行動もサクラと同じくらい意味が分からん。

「それよりも。サクラの部屋に行ったんじゃないの？　……あつ、やっぱり私が恋しくなって戻ってきちゃったってやつ？　もう、啓太ってばツンデレなんだから」

「ちげーよ。部屋に侵入してたネズミ……っつか猫を連れてきただけだ。何でも、主人の命令だとかな」

「ずるずる引いていた真っ白な彼女を見せると、途端にスノウの顔が『げっ……』と嫌そうな表情になった。ああ、やっぱりセツナさんの言つとおりか。盗撮は犯罪です。ダメ、ゼツタイ。」

「ア、アハハハ……一体何ノコトカシラ？　ワタクシ、全然シラナクテヨ？」

「ワザとらしい喋り方で直ぐに分かるわ。ったく、盗撮は犯罪だぞ？」

「え、盗撮？　……何それ？　尾行しろとは行つたけど、私そんな事知らな」

「姫、そんな事よりカノン殿を啓太殿に紹介なされてはどうですか？　そういえば、まだ会つておらぬでしょう」

「冷や汗をダラダラかきながらセツナさんが強引に話を変える。何か釈然としないが、それよりカノンさんとは一体誰なんだろうか。」

「ああ、お兄様ね。そういえば医務室に籠っていたから、会うことなかったわね。多分居ると思うから、行ってみる？」

「お兄様？」

「あ、私がそう呼んでいるだけだから、本当のお兄様じゃないの。この城の医務室や科学部屋に籠って、いろんな実験を繰り返しているの」

……いろんな実験、ねえ。

何やら危ないもんを開発してそんな気がブンブンするんだけどねえ。ほら、強気になったり内気になったりする薬とか、果てにはハイションとか作ってそう。

「で、行くの？ あそこは臭いがキツイからあまり行きたくはないのよねー」

それほど酷い臭いなんだろうか。ベッドに腰をかけ、顔をしかめて腕組をするスノウはどこか気乗りしない様子だった。そんな彼女の表情を見て、セツナさんが口を挟む。

「まあ、挨拶をして直ぐに失礼すれば大丈夫でござろう。無理をするのも身体に悪いでしょうし」

スノウはそれに少しだけ口を尖らせたが、やがて観念したかのように肩を落として、ベッドから腰を上げる。本当に重い腰を上げてるな。

「それじゃ、参られましようぞ」

その言葉を後に、セツナさんは部屋を出て行く。彼女が出たのを見計らって、俺はスノウにちょっとした疑問をぶつけた。

「なあ、セツナさんってさ、本当に忍者なのか？ 口調といい行動といい、忍者にしては少し変なんだけど」

「ああ、彼女？ あの子、結構影響を受けやすい子なの。私がまだ小さい時にこの城に送られてきてさ。お父様の知り合いの方なんだ

るうけど、『自分たちの代わりに育ててやって欲しい』だってさ。それから少し経って、セツナが急に変な事を言い出したのよ。『私はこの城を守るでござる!』なんてさ。アレね、テレビの影響だと思っわ。主に時代劇の」

「へえ。てことは、その時代劇の影響で忍者になろうと?」

「そうなるわね。あの頃は確か『暁』っていう忍者ドラマが流行ってたから、自分の名前も……っていうか、セツナって名前自体も、その主人公である不知火刹那しらぬいせつなから取ったのよ。上の名はタイトルで、下は主人公の名前を自分で組み合わせて」

ぎしり、とベッドが音を立てる。やれやれといったような表情のスノウは話を続ける。

「お父様は困り果ててたわ。今まで自分が我が娘同様に育てていた子が一体何を言い出すんだ、ってね。結局セツナは色んな人の反対を押し切って、この城の護衛って言う役職に就いたの。この平和な猫又の世界で護衛って、私だって最初は馬鹿げてるとは思ってたけどさ、それでも彼女は本気だったわ。元々正義感の強い子だったからね。自分が何か人の役に立ちたい、誰かを守りたいっていう思いから、そういう仕事を望んだんだってさ」

「……へえ」

まあ、確かに正義感が強いという部分は間違いじゃない。現に俺が偽者セツナさん（ミスリア）に連れて行かれようとした時なんか、敵意むき出しだったからな。

「あ、ちなみに謁見の時にいたSPはみんなセツナの部下だから。」

彼女、昔から死に物狂いで身体を鍛えてさ、リーダーだけあって力強いわよ？ 人間程度なら素手で殺せると思うし」

「それは恐ろしい事を聞いた。さつき変な事しなくて良かったよマジで」

「忍者はリアルモンクタイプだから敵は触れただけで骨になる。で、時々クナイやら毒ガスなどを多用して敵の息の根を止める」

「汚いさすが忍者きたない…… ってそんなモン持たせるなよ危なっかしい！」

「あの……そろそろ、行きますでござるよ？」

いつの間にか、ドアから少しだけ顔を出したセツナさんが困ったような顔でこちらを見ていた。

そうだ、いつまでも話をしている場合じゃない。急いでいるわけじゃないけど、とにかく行くこつ。

【科学部屋】

……おおつ。これまた医療品やら怪しげな薬品を置いている場所ですなここは。

部屋の両端に置かれた棚には薬品や医療の本などがたくさん並べられ、その奥には大きな作業用の机と椅子がある。

その卓上にも本やら試験管が陳列され（あまり綺麗に並べられているとは言えないが）様々なものが乱雑に置かれていた。

「お兄様ー」

スノウの声で、俺の真横からぬうつ、と一、三十代の若い男性が現れた。そう、本当にぬうつと。

久しぶりにチビるかと思いましたが。どっから出てきたんだと思ったら、ドアの手前横にトイレらしきものがあつたんだね。

「やあ、アシユリー。久しぶり。キミが此処に来るなんて珍しいね」

「今日は成り行きでね。この部屋は臭いがキツすぎるから嫌いなもの」

「まあ、医薬品とかも置いてるからね。……それで、こちらの人は？」

くしゃくしゃの長い黒髪と白い白衣とメガネが印象的なこの人カノンさんは、直ぐとなりになっていた俺をチラリと見た。敵意のある目ではないことは確かだ。

「ああそう、この人は啓太。藤咲啓太。人間界からやってきた人間で、一応この城に住む事になったから、お兄様にも挨拶しておこうかなと思って」

「わざわざ挨拶に来るなんて礼儀正しいね。はじめまして。啓太くんといったかな。私の名はカノンだ。よろしく」

すつと俺に手を差し出してくるカノンさん。……トイレから出た後はちゃんと手を洗っていますよね？

とりあえず疑惑の晴れぬまま握手。思っていたよりも大きくごつごつとした手だったので、少し驚いた。

軽く自己紹介をすると、カノンさんは自分の事について簡単に説明してくれた。

「まあ、ここでは調合師と多少の医学技術を買われて雇われているんだ。二つの物品を調合して別の物へと作ってるよ」

「へえ、ということはこっちの世界では調合師の国家資格もあるんですね。例えばどんなものを作るんですか？」

「例えば？ ……うーん、栄養剤や育毛剤、その他には媚薬とか…かな。あんまり危険な調合はしていないからね」

「お兄様、後で媚薬をいくつか頂戴ね。お金は後で支払うから」

「お、即決だね。まいどありー」

オイコラニート。お前俺の顔を見て何をニヤニヤしとるか。つていうかカノンさんも簡単に薬を売るなよ。ノリが八百屋のオッサン並だぞ。

「それよりも。姫、そろそろ戻られた方が良いでござらぬか？ ここに長居しても辛いだけだござろう」

「あー……そうした方がいいかも。そろそろ胃がムカムカしてきた。ごめんねお兄様、私そろそろ帰るわ」

セツナさんの一言が決め手だったか、スノウはあまり居心地の良さそうでない顔で自分の胃の辺りを手でさする。

……そんなにごく、臭いがキツイかな？ 俺はそう感じないんだけど、何ていうか、高校の保健室の匂いと良く似ている気がする。

「人間の嗅覚と猫又の嗅覚を一緒にしないでよ。ただでさえ私は臭いに敏感な方なんだから、この部屋は辛いのに」

「あはは、アシユリーは昔からこの部屋を毛嫌いしていからね。無理はしなくていいよ。今度は過ごしやすい環境にしておくから、またおいで」

「うん、またね」

それだけ言っつて、カノンさんは俺たちを部屋の外へ出して、手を振ってドアを閉めた。

うーん、いい人だ。爽やかで真面目そうな人だから、きっとスノウも好きなんだろうな。本物の兄貴以上に。

挨拶も終わり、俺たちは今、長い長い……っつていうかシルクロード並みに長いんじゃないかとコラと言わんばかりの廊下をゆっくりと歩いている。

うむ、それにしても……うむ。

「どうしたの啓太。考え事？ それとも便秘？」

「年頃の娘が便秘なんて言うんじゃないやありません。……いや、何でも六本木ヘルツっていう単語が頭の中で回っているのが不思議でな」

「それ六本木ヒルズの間違いじゃない？ ヘルツだったら振動数の

単位でしょ」

「あ、そうか。……うーん、分からん。何でこんな事を無意識に考えていたのか自分でもさっぱり分からん」

「納得がいかぬなら、もう間をとって六本木ヘルズでいいではござらぬか」

「そんなヘルズフラッシュみたいなの……」

長い廊下でくだらない会話が続く。このくだらない会話に続きがあるならば、続・くだらない会話だな。某人気音楽アーティストの歌みたいなの。

と、その角を曲がって自分の部屋を目指そうとした矢先 俺の腹部に何かが当たった。というか衝突した。結構勢いがあったので若干だけ痛かった。

腹部の痛みを堪えつつそこを見ると、そこにはサラサラの銀の髪があった。うん、何処かで見覚えのあるような髪色だ。銀色の髪の両端辺りには可愛らしい猫耳がピコピコと動いている。少し後ろを覗くと、やはり尻尾も健在で、左右に規則正しく揺れていた。

「……につ？」

少年は一向に前に進めない事に気づいたのか、俺の腹部に押し当てていた顔を上げた。

瞬間、俺の全身に電撃が走った。アレだ、第二のロリペドフィンが脳内で拡散されたようだ。

多分、この子はシヨタ……じゃない。おそらくスノウの弟の。

「あー、レンじゃない。どしたの、こんなところで？」

「お姉ちゃん？ それからセツナさんも。えっと、さっきまでカイお兄ちゃんの部屋で遊んでただけで、飽きちゃったから戻ってきたんです。えと、この人は」

「俺は藤咲啓太。色々あつてこつちの世界に来た人間や。……どや、兄ちゃんこう見えてエエ声やろ？ これ地声やで？」

「啓太。普通にどうでもいいし、変な関西弁になつてるわよ？ アンタ何緊張してんの？」

「緊張？ ハハハ、俺はいつでも真面目じゃけん緊張なんてせんよ。とりあえずこの子の存在がぼっけえきよーてー」

「啓太殿、とりあえず落ち着くでござる。今度は岡山弁になつてるでござるよ」

俺の母性本能というか、母性を抜いた本能を刺激しているこの子は、レン・ラインハート。

スノウと同じ銀の髪と、その初々しさを残しているフェイスが可愛いらしい。くりくりの大きな目と、キラリと光る八重歯。

うーん、マンドムと言わざるをえないな。

「はじめまして、藤咲さん。ボクの名前はレン・ラインハートです。隣にいるアシュリーお姉ちゃんの弟です。よろしくお願いします」

ペコリと頭を下げた自己紹介するレンくん。……礼儀正しいのう、礼儀正しいのう。ニート姉貴とは大違いさあ。

そんな彼の頭をわしわしと撫でてやりながら、俺は冷静かつクールに言ってる。途中で「うに？」と声を漏らしたのに全力で萌えた。

「俺のことは啓太でいいよ。いや、むしろ弘道お兄さんみたいに啓太お兄さんでもいいよ。レンくん。よろしくな」

「あ、はい。それじゃ啓太……お兄さん。よろしくお願いします」

……………。

ぬっはあああああ。

何このスカッドミサイル並みの殺人的な可愛さあああ!?

しかも礼儀正しくていい子だと来たよ、純粹だよ!

ああ、もう。どうして猫又の子供たちってばこんなに可愛いんだろ
う。マジで俺こっちの世界に移住しようかな。

「啓太。何か顔がヤバイわよ? 道端で悪いもんでも食べた?」

「食べちゃいないさ。この顔は生まれつきでい。文句あつか」

「そのニヤケ面が生まれつきなら転生することをオススメするわ」

「……………悪いかよ。レンくんが礼儀正しくて可愛いから、つい口元が
綻んだだけだ」

「えー、啓太。もしかしてシヨタコンー!?!」

「キモーイ!」

「シヨタコンが許されるのって高校生までだよなー!」

「キャハハハー!」

「……かつくしどりー」

「あああああつ！？ 申し訳ありません申し訳ありませんついノってしまつて申し訳ありません！！ だからその件は内密にー！！」

……多分、セツナさんはこう見えて天然なのだろう。そうに決まっている。そうに違いない。

つてというか高校生ならシヨタコンはいいのかよ。

みんなと別れ、俺は自室へと戻る。

相変わらずゴージャス な部屋だと感心するが、景色もまた格別に良いな。

緑溢れる自然の中に城下町があり、天気も上々。空気も汚染されている事はなく澄んでいた。

「よつこら……せい！」

俺はそんな町並みを見詰めながら、背面にベッドへ飛んだ。いやまあ、バウンドして身体が跳ね返る感覚を楽しみたかったんですよ。

だけど、バウンドする代わりに何やら硬いものに当たった。

「ぶぎやっ！？」

……ん？

これ、どっかで聞いたことがある声っすね……。

不思議に思い、俺は布団の中をちらりと覗いた。

そこには。

「うっうっうっ……痛いです痛いです、特に背中あたりがめっちゃ痛いですよ啓太さん……」

人のベッドの布団へ入り込んで泣いているアホ猫が一匹いた。

いや、まあ俺が悪いっちゃ悪いんだけど、どうして人のベッドにいんしてんのかなコイツは。

「ごめん、サクラ。でもお前、何やってんの？」

「何って……決まってるじゃないですか！ 啓太さんの布団にマーキングしてたんですよ！ 他の雌猫が入ってこないように！」

「つまり、ここは自分の縄張りだと知らせるためにか？」

「そうですよー！」

「帰れ」

あ、部屋に帰れって意味ね。

「ど、どうしてですかー！ 啓太さんが寝取られないようにしてるんですよー！」

「毎回毎回お前に寝取られてたまるか。大丈夫だって。別に変なことなんて起きやしないよ」

笑ってそう言ってやったが、当の本人はほっぺを膨らませてえらくご不満の様子。

膨らませたほっぺを指で突付いてやると、「ふにっ」と空気の漏れ

る音がした。萌え。

「むー。啓太さんは優しすぎるから、かえって危ないんですね。マタタビのようなフェロモンが放出されているから危険」

そこまでサクラが言ったところで、ドアが大きく開かれた。

ドアの向こうにはスノウが一人。手に遊び道具 には絶対に見えない、透明な液の入った瓶に、スイッチを押せば激しく振動するよ
うな棒状のモノを持って。

「けいたー、遊びに来たわよー！」

「ほら来たー！」

「お前絶対マトモに遊ぶ気ないだろ!？」

……部屋に鍵かけといた方がいいかな、マジで。

そこからなんやかんやあって、結局俺の部屋でトランプをすることになった。

ポーカーをするらしく、チャッチャとトランプの束をきって二人に手渡す。一人の持ち数は5枚。いらぬカードを場に捨てて同じ数字や数が並ぶようにカードを揃えていく。

俺の手持ちは10のワンペア以外は揃っていないので捨てる。山から三枚カードを取ると、9が二枚来た。これでツーペアだな。

「んじゃ、せーのでカードを出すぞ。いっせーので」

バツとカードを広げると、自信満々の笑みでこちらを見る彼女らの顔があった。ぶっちゃけ、怖かった。

スノウのカードはトリプルフォース。俗に言う4のスリーカードだった。という事はツーペアの俺よりランクが上だという事で、スノウの方が優位となる。

さて、それじゃサクラの方は……げっ!? 初っ端から10、J、Q、K、Aのコンボだと!?

これってまさか……

「よっしゃ早速来ましたー! ロイヤルストレートハニーフラーツシユー!」

「ハニーはいらんだろ」

どこの露出度高い衣装を着て戦うお姉さんですか。

ロイヤルストレート以下略はポーカーでも最上位に立つので、今回の勝負はサクラの独占一位ということになる。

で、俺はツーペアなんでビリでした。いや普通に考えて初っ端からロイヤル以下略出すとか何なの? 馬鹿なの? 運良すぎでしょ。

サクラは、肩を落として頂垂れる俺の傍にまで寄ってくると、そのニヤニヤした顔で言う。

「くふふ、それじゃ啓太さんにはビリなので罰ゲームでもしてもらいましょうかね? 公開(ニヤー!)に私におっ(ダーン!)から3(ピー!)のどれがいいですか? もちろんまだまだ作りますけどねゲへへ」

それ、何てイジメ?

あと最後は伏字の意味無い気がする。

その発言を聞くな否や、サクラは猛ダツシユで人の布団へダイブしていった。
丸まって「うわあああん……たぬきたぬきおのれたぬき風情が……
我は断じて屈せぬぞ……！」とかうわ言を呟いてガタガタ震えている。

そのサクラの様子を見て、スノウが俺に耳打ちしてくる。

「ねえ、啓太。サクラはどうして緑のためきって言葉が嫌いなの？」

「ああ。以前な。ジャックとミいちゃんの家でカップラーメンが出されたんだ。で、それを食べようとしたんだけど、よっぽどお腹が減ってたのか、冷まさず急いで食ったらしい。それで案の定舌が大火傷したんだって。で、そのパツケージに緑色のためきが載ってたから、それ以降『たぬきじゃ！これはたぬきの仕業じゃ！』とかいってその名前を毛嫌いしてるんだってさ。聞くたびに舌が痛くなるのかなんとか」

「ふうん、何か後々役に立ちそうねそれ。ありがとう」

ぽふ、と肩に手を乗せてにやりと笑うスノウ。

うわあ、この子すっごい悪い顔してる。悪代官顔負けの表情だよ。

遊びに来た二人を自分たちの部屋に帰して、俺は今、ゆっくりとベッドでくつろいでいる。

そういえば、何か凄いことに巻き込まれたなあ。今更ながら振り返ってみただけ。

猫又の世界、シェアリス。そしてそれを統括するラインハート族。人間の世界とは違うパラレルワールドでもあり、未知の人種。このような猫の世界にやってこれたのは嬉しいんだけど、ムキムキのおっさんの猫耳姿を見てもなあ。結構萎えていたりする。

と、そのような事を考えていると、コンコン、とノックをする音が聞こえた。どうぞ、と一声かけると、ドアを開いたそこには、長い銀髪をなびかせる、スノウの兄　カイさんがいた。

あ、やべえ。そういえばちゃんとした謝罪をしてなかったな。わざわざ向こうから来てもらって、ちよつと悪い事をしたな。

彼はゆっくりとした足取りで俺のところまで来ると、軽い会釈をして自己紹介を仕出した。おお、この人も礼儀正しいな。

「啓太くん、だったか。はじめまして。俺の名はカイ。カイ・ラインハート。スノウにキミの事は良く聞かされたよ。何でも、あの子の恋人とか何だとか？」

「あ……はじめまして。藤咲啓太って言います。それと、先ほどは本当に失礼な事を　って、ええ！？　いや俺全然そんなのじゃないですよ！　アイツが勝手に言ってるだけです！　鵜呑みにしちゃだめですよ！」

「そうなのか？　いや、熱心にキミのことを自慢してたからね。自覚があるのか知らないが……　　ありゃあ、かなりキミに惚れ込んでいるよ、間違いなく」

「あ、やっぱり……ですか」

そのせいで色々付きまとわれたりもするんだけどな。

何かもう、第二のサクラみたいで。

「まあ、俺は別に構わないんだがね。あのじゃじゃ馬娘を娶ってくれる人がいてくれるだけで大助かりだし。……約一名を除けば、ね」

キィ、と椅子に座って苦笑いをするカイさん。最後の言葉が少し気になったけれど、黙っておこう。あまり彼もその話題を出したくなさそうな様子だし。

「それじゃ、ゆっくりしていきなよ。人間のお客人。この世界も捨てたもんじゃないからさ。楽しんでもらってかまわな　ほぐアツ
!？」

椅子から腰を上げて、そのまま立ち去ろうとドアの前に立ったカイさんだったけれど、そのドアがこちら側に勢い良く放たれたのだ。

うわあ、何てベタベタな。鼻頭を思い切り強打したカイさんは案の定、頭上にヒヨコを二、三羽くるくると飛ばして崩れ落ちた。ドアを思い切り開けた張本人は、やはりというか何と言うか……。

「ごめん啓太！　思いつきりランプ忘れてたわー！　……って、あれ？　カイじゃない？　どうしてそんなところで寝てんの。行儀悪いわねー」

スノウだった。

しかも全く気づいていなかったのか、その場で倒れているカイさんに悪態をつく始末。

一回コイツには、マナーというものを教えてやらぬとな。

「お前が思い切りぶつけたんだろが！　……っていつかカイさん！　大丈夫ですか!？」

目を回して呻くカイさんを慌てて介抱するが、今度のは俺の膝蹴りよりダメージは大きくなかったのか、少し経ってから、ゆっくりと

意識を取り戻した。

完全に意識が戻ると、何やらそこには挙動不審なカイさんがいた。

……はて。何か、違和感があるな。人柄が変わったような、そんな感じの違和感がある。

「……む。すまん、世話をかける。……ところで、お前は誰だ？」

「……はい？」

え、今さっき、自己紹介したばかりかだよ……まさか、スノウのせいで記憶が飛んじゃったとか。

このカイさんの様子を見て、スノウが「いつけねー」といわんばかりに頭を抱える。

「あー、今のショックで入れ替わっちゃったか。啓太、この人はカイじゃないよ。カイはカイでも」

「……身体はカイだが、俺の名は『ガイ』だ。一応、カイという人格の中に、もう一つの人格を宿してある、いわば二重人格というものだ。……啓太と言ったな。まあ、状況が上手く飲み込めぬと思っただけ、よろしく頼む」

……マジで？

二重人格とか俺、初めて見たんすけど。

「は、はあ……よろしく、お願いします」

差し出された手を握って握手をするが、その手はさっきよりやけにゴツゴツしていて、綺麗な顔には似つかない程の筋肉隆々の身体つきが服越しからでも良くわかった。

……姫様に、忍者、科学者、そして最後は二重人格者と来たもんだ。
ここは相当曲者ぞろいの城みたいだな。
ぶっちゃけた話、こんな変人ばかりの城で、マトモに生活が送れる
のかなあ……。

一般常識を逸しているこの世界じゃ、こっちの世界の常識は全く通
じないんだな。

今日はこの世界へ来て早々、これからの日々が激しく不安になる一
日だった。

く水着姿でよっこらせ。南の島でのバカンスくぜんべん！

「うーん……」

何やら身体が重い。私ことアシユリー・ラインハート（なんかサク
ラや啓太にはスノウとか呼ばれているけど）は、温かい布団の中で
芋虫のようにごそごそと動いていた。

病気にでもなつたのかな。しかし全身にかけての気だるさは、さほ
ど感じられない。風邪とかの病気の類ではなさそうだ。

じゃあ何だろう。あえて言うならば、主に胸の辺りがいつもより重
い気がするんだけど。……胸？

胸？

……まさか。

バツ！と跳ね起きて、かけていた布団をめくり上げる。いつも寝る
ときはブラとショーツだったが、そのブラに何やら違和感を感じた
のだ。

そして、私は絶句した。あんぐりと口を開けたまま、そのブラ
にある「もの」を凝視する。

「こっつ、これは……!？」

異常だ。異常事態発生だ。まさか私の白ブラに、見慣れない大きな
球体がすっぱり収まっているとは。

それは今まで敵視し、妬みを視線を常に送っていた存在 直接的に表現するなら巨乳だ。大きなおっぱいだ。ビッグボインだ。

それが私の胸部にたわわに実って、呼吸と共に小さく揺れている。大きさから見ても、これはもしかしてセツナより大きいのではないのかな？

だったらこれはもう巨乳というレベルじゃないわ。そう、爆乳よ。エクスプロージョン・ボインよ。

じっと見詰めているうちに、次第に笑みがこぼれてた。そう、他者から見ればそれは邪悪な笑いだっただけけれど、最早そんなことを気にしている場合じゃない。

ふっ……ふふふふ……巨乳……巨乳……爆乳……！

「ふ、ふふふふ……あははっ、アハハハハ！ ざまーみるサクラとセツナー！ 良くわかんないけど、これで私もデカ乳の仲間入りじやー！ これ以上貧乳だペチャパイだ希少価値だとか言わせないわよコラー！ アハハハハ！」

天に向かって叫ぶように二人の名を呼ぶ。あの忌々しい爆乳どもに引けを取らぬ乳を私に手に入れた。

移動するたびに揺れている乳に何度嫉妬しただろうか。服からはちきれんばかりに収まっている乳に何度殺意を沸かせたか。

だけど、それももう終わり。今度は私が周囲から嫉妬される番！ さあ啓太！ グラマーな私の身体を見て悶絶するがいいわ！

ああ、もう夢のようだわ。夢みたい。本当に、夢……夢……？
……まさか、本当に夢じゃないよね？

ために、自分の頬を思い切りつねってみた。

目を覚ますと、そこには爆乳があった。

だけどそれは自分のじゃない。セツナの。そのセツナの爆乳が、私の顔をすっぽりと埋めていたのだ。

もしかして自分の乳もコイツくらい大きくなっているのでは？と淡い期待を抱いてみたものの、胸元を見れば、それはそれは平らなフィールドが広がっていた。

ああ、やっぱり夢だったかコンチクショウ。

どうして彼女がここにいるのかは大体わかる。おそらく仕事が終わって、自分の部屋と間違えたんだろう。あろうことが、姫である私の部屋と。

すうすうと寝息を立てて眠っているのが忌々しい。人の苦惱も知らずに寝ている彼女がムカつく。

「……コラ、起きろこのバカネコ忍者娘」

「ふぁ……姫え……？ おはよう御座います、でござる……」

くしくしと目を擦って、小さい欠伸を漏らすセツナ。ポニーテールだった髪型は今やボサボサのウィッグがかかった髪になっており、纏めるのも大変そうだった。

服は忍者服の下に着ていたタンクトップとショーツ。そのタンクトップからふるふると揺れている乳に再び殺意を覚えた。

おのれデカ乳が……特盛つて言えばそれで満足かコノヤロー！あと（ピー）チクうつすら立ってんだよコラ発情期か、おあん！？

「あれ……そういえばどうして姫がここに……？ ああそうか……
姫え、拙者の部屋と自分の部屋を間違えちゃ駄目でござるよお……」

その言葉で私の我慢は終わった。ブチ切れた。ああ、無理さ。この馬鹿には少しばかりお仕置きが必要さね。

布団に戻ってむにやむにやと再び眠ろうとするセツナの乳をわし掴み、思い切り強く揉んでやった。するとどうだろうか。彼女は大きく肩を跳ね上げてベッドから飛び起きた。

くっそ、やっぱり見た目どおり柔らかい。ム力つく。この乳私にも300グラムよこせ！ つか全部よこせ！ 忍者は乳いらないでしょ！ どうせお色気の術とか使わないでしょうが！

「ひええええっ！？ 姫ッいきなり何をするでござるかー！」

「何をするでござるかー！ じゃないわよ！！ あ・ん・た・が！
部屋を間違えてんでしょうが！ 何そのトボケ具合！？ ポケ巨乳キヤラでも狙ってる気！？ ああ腹立たしい腹立たしいソノチチモマズニオクベキカー！！」

無抵抗のセツナに私は更に追撃を加えた。タンクトップ越しに揺れる乳房を蹂躪し、弄ぶ。

さあ私の手で踊れ乳房よ！ 無慈悲なるままに！ そしてすべての巨乳に死と混沌の罪を！

ああ妬ましい妬ましい妬ましいいいいい！！

「ちつくしょー！ 指がすっぱり埋まるデカ乳をしゃがって羨ましいんじゃコラー！ ほれほれー！ ええんかー！？ ここがええん

かー!？」

「お、オヤジですか姫えええ!？ あ、いやっ、ちょっと、そんなところを執拗にいじるのはお止めくださっ……ひっ……ひいやああああああ!？」

結果、体力的にせえせえと喘ぐ私と、別の意味で喘いでいるセツナの姿が数分後そこにあった。

やれやれ、朝から余計な体力使ったわ。これもみんなセツナのせいでよ本当に。私は何も悪くなんかない。

……汗かいた。シャワーでも浴びよう。

「それじゃ、私シャワー浴びるから。寝るならさっさと自分の部屋に戻って寝なさいね」

「はっ……はひっ……」

尚もビクンビクンと変に痙攣しているセツナに別の生き物でも見るような視線を向けながら、私は部屋のシャワールームへと入った。

「と、いうわけで海に行くわよ海。暑すぎる太陽に眩しすぎる魅惑のボディ。火照った身体を冷ますトロピカルジュース……まあそんなわけで、海に行くわよ」

「……いやいや。話の脈絡からして突然すぎんだろ。どうしていきなり海なんだよ、ワケわかんねえ」

「馬鹿ねえ啓太。海といえばビキニ。ビキニと言えば水着。水着といえはおっぱい。そうに決まってるじゃない」

「何がどうして最後がそうなったのかは知らんけどな。どーせお前のことだから、いかがわしい陰謀でも考えてんだろ。魂胆が見え見えなんだよ」

「啓太さんの場合はいかがわしい淫棒なんですけどね」

「誰が淫棒だ！」

上手いこと言っただつもりか。

俺の息子を馬鹿にするんじゃない。

スノウの部屋で一体何の話をするのかと思ったら……海に行こうって話か。

要約すると、何かこのお姫様、日々のストレスが溜まりっぱなしなので、気分解消の為に海に行くんだとか何とか。

で、そのラインハート家が管理するプライベートビーチへ俺たちを招待する為に、ここへ呼んだんだとさ。

ラインガルドからちょうど南の位置にある常夏の島 【レイシャーン】はこの国の領土らしい。領土らしいというのは、このラインハート以外にも、他の猫又が作った国が存在する。

スノウの話によると、中央から円を描くように領土を広げているラインハートの他に、西のアリクトル、東のアインツェル、北のヴェーダエルといった形で世界を分散していたが、現在では東のアイン

ツエルがラインハートと併合し、一つになっている。理由は財政難に陥っていたアインツエル家が、ラインハートに救援を頼んだ事から始まった。が、救援を頼んでからも復興の見直しが付かず、これ以上国の存続が不可能だと察したアインツエルはラインハートと会合し、両国併合を結んだ。アインツエルはラインハートの一部として吸収されたわけだ。結局のところ、ラインハートは世界の半分を手中に収めているのである。これじゃ普通に戦争が起きるだろ……と彼女に突っ込んでみたが、実際のところそれはないらしい。

猫又という人種は戦争という言葉を酷く毛嫌いしている。人間の世界でも幾度と戦争を繰り返し、束の間の平和を得て、再び戦争を繰り返している。それが猫又たちには理解できないらしい。何故、同じ過ちを何度繰り返すのか、何故、人が傷つき死んでいかねばならないのか、と。戦争というものは憎しみや妬みなどの負の感情を経て生まれるものだと思ふ。だが、おそらくこの猫又たちにはその「負」の感情が欠落しているのだ。確かに猫又でも相手に嫉妬し、恨んだりすることはあれど、相手を死へと貶めるような概念は持ち合わせていない。

ただでさえ、普通には死なない猫又だ。相手と争うことが無駄なのだろう。そんな惨めな感情をさらけ出すよりも、もっと自分の技術を磨くために相手が存在する、と考えるのが普通らしい。

なんとも平和な世界へ来たものだ、と最初は驚愕したが、何事にも前向きな世界というのも悪くはない。だから、現在でも戦争は起きていないのだろう。

困っているなら、誰かが支える。助けを求めているなら、誰かが手を差し伸べる。そう言う他者を思いやる心が猫又たちは強いのだろう。人間も、こういうところだけは見習うべきだと思ふな。

さて、アインツェルと来たら、そうだ。ミスリアだ。ミスリア・アインツェルだ。アイツは元々アインツェル家の娘として育てられてきたが、継続不可の現状に耐え兼ねた国王　リガード・アインツェルの決断により、自分の娘をラインハートの国王、ヴェイル・ラインハートに託した。が、その後アインツェルの国王と王妃は消息を絶った。現在でも全土くまなく捜索中らしいが、見つからない。行方不明の状態が続いているのである。

彼女は自分の父と母に捨てられたと思っているらしい。何しろ、自分を預けた後に失踪するという事態は、あまりにも都合が良すぎるケースでもあるからだ。

その件があつてか、ミスリアは育ててくれたヴェイルさんを本当の父親のように思っている。幼い頃から可愛がられ、姉妹のような存在だったスノウや他兄弟達にもよくしてもらい、幸せな毎日を送っている。確かに、あのハイテンションは見習うべきかもしれないな。さて本題がずれてしまったが、その南の位置に存在する島へ行こうというわけだ。

「……………で、どうやってそこまで行くんだよ？　車か、それとも電車か？」

「あのねえ啓太。庶民が普通の海に行くわけじゃないんだから、車や電車とかはありえないでしょ。それもプライベートビーチよ？　飛行機よ飛行機。それも自家用機。滑走路も設置してあるから直に島へ直行出来るわ」

「ふーん、飛行機、ねえ」

飛行機はあんまりいい思い出がないからなあ。

あの、なんていうか、G？ グラビティ？ が嫌い。押し潰される感じがして気分が悪くなるんだ。しかも落ちるのを想像したら……最終的におえっとなる。だって俺、高いところ苦手だもん。

「啓太さん啓太さん！ 私飛行機に乗るの初めてだから凄いいわククします！ 外からいろんな景色が見れるんですよ！」

くいくいと服を引っ張って、子供のように無邪気にはしゃぐサクラ。その瞳はキラキラと輝いていた。

うーん、なんて楽しそうな表情なんだ。お兄さん少しいじめてやりたくなつたよ。

「おう。でもはしゃいで揺らしたり暴れたりなんかしたら、落とすぞ？」

「落とすって……私をオトすですと！？ まっ、ままままさかの力ーセ略ならぬエアプレーンセツ略ですか！？ 気圧とか無視でオウイエスイエスと！？ け、啓太さんつてば鬼畜……！」

「海へ落とすつて事だよ、このバカタレ発情猫娘が」

「エアプレーンセツク略かあ。……結構イケルかもしれないわね」

ここにも発情娘がおつたか。本当に猫又は変態が多くて困る。つていうか略もつと頑張つて！ なんだかどどん仕事しなくなつてきてるから！ 次来たら間違いなくアウトだから！

「まあ、そんなことはどうでもいいわ。とりあえず海に行きましょ、海に」

半ば強引に引つ張られて、俺とサクラは飛行場へと連れて行かれた。同行する人は保護者としてカノンさんに、カイ（ガイ）さん、セツナさん、ミイちゃん、ミスリアの五人。俺らを含めて計八人だ。ジャックは紫外線が強いところは無理なのか、今回はパスするらしい。あのスマートな身体は紫外線に弱いのか、ふーむ。

因みに飛行機の操縦は王国のSPさんがしてくれる。うむむ、何でもこなせるのは凄いな。

と、いうわけで。

それはそれは大きなラインハート家専用ジェット機に搭乗したんだけれど。

……やっぱり高いところ怖いわ……！ なにアレ、お城？ キャツスル？ めっちゃ小さいんだけれど。っていうか高度何フィートだよ。一粒3000フィートかコラ。

そもそもフィートって単位何なんじゃコラ。マイルか？ もしかしてマイルなのか？ 酸っぱい笑顔は酔マイルなのか？

どうでもいいわコラ。

「啓太さん！ 外見てください凄いです！ まるで人がゴミのようです！」

「この高さじゃ人が見えんだろ……」

隣で座っているサクラは相変わらず興奮気味のハイテンション状態
いやもう、本当に元気だなコイツ。スノウはすまし顔で外の景色を
眺めているってのに。

「……あれ、そっぴや。今さっき機内でレンくん見かけたんだ
けど、彼も来るのか？」

「ええ。あの子、皆で海に行くっていったら、自分も行きたいって
言ってきたの。レンは身体が弱いから本当は行かせたくなかつ
ただけど、まあ、ガイがいるから大丈夫だとは思っけどね。何か
あれば彼が何とかするから」

「ふうん。さすがのスノウさんも、弟だけには甘いつてか。まあ、
可愛いしな、レンくん」

「わ、私は誰にでも優しいわよ！ そりゃもうナニをどうするかと
かめっちゃ優しいし、もう何かチョコメチョコメをキョンチョコメにする
くらい優しいわよ！」

まともな返答を期待していたんだけど、まともじゃなかった。やは
りコイツは変態か。嘆かわしい。一度親の顔見てみたいわ。……あ、
見たわ。

「お！ もうすぐ島が見えるよ！」

ミスリアが指を差す方向には、常夏の島とも呼べそうな大きな島が
あった。

あれが【レイシャン】か。うん、こっちの世界で言うハワイみたい
なところっばいな。海も綺麗だし、結構楽しめそうだ。

……うーん、いいね。南国の島。気に入った。もう俺ここに住んでもいいわ。

眩しい太陽に照らされている空は快晴。それも滅茶苦茶いい天気。その下で俺は大きなパラソルと、レジャー用シートを砂浜に引いて寝転んでいる。

目に直射日光を食らわないためにサングラスをかけて。横を見れば砂の城を作って遊んでいる無邪気な子供たち（ミいちゃんとレンくん）がいて、その光景を見ているだけでこちらが癒される。……お、城が完成したな。やったぜって顔で二人がハイタッチしてる。くそっ、あの子達可愛ええ。無邪気すぎる。

海辺ではカイさん（先ほど話しかけたら口調が変わっていたので、おそらく今もカイさんだろう）とカノンさんが気持ち良さそうにゆらゆらと海の中でくつろいでいる。……よくよく考えて、猫って水が嫌いなんだよな？ 猫又は海に入って大丈夫なのか？ そんな疑問を向けながら彼らを見詰めていた。……あ、ミスリアがカノンさんに水をぶっかけた。で、カノンさんが爽やかに笑ってミスリアに水をぶっかけ返した。で、そのとばっちりでカイさんに思い切り水がかかった。怒ったカイさんが二人に向けて水をぶっかけた。

……なにアレ津波！？ 思いっきり二人がぶつとばされたんだけど！？ ガイさんやべえ！ 腕の力強すぎる！

さて、残りの問題児でもあるサクラとスノウと、大抵それらの被害を食らっているセツナさんというところ……。

「啓太さあああん！」

「ふっ……！？」

ほら来たか。避ける間も無く飛び掛ってきたサクラのジャンピングアタックを思い切り食らってしまった。

サクラは人の胸に指で円を書き、にゃんにゃんと俺に頬ずりして甘えている。本人には悪いんだが、ぶっちゃけ重くて苦しい。あと胸を引っ付けないな。つぶれてるぞ。

「ああんもう……サングラスな啓太さんも相変わらずカツコよくて私メモメロですよはい……！ もう今ここで抱かれてもいい……っうか抱いて！ 抱きしめて！ 骨をへし折るくらい私を愛して！」

「むちやくちやを言うな……あと重いからどいてくれ。前までは軽かったのに、最近お前、ちょっと重たいぞ」

「お、重くないですよ失礼な！ ……あ、そうか。ふふっ、おっぱいが大きくなったから、それが重たいんだろって言いたいんですか？ もう、啓太さんってはこの変態！ おっぱいマニア！」

「今すぐ引っ張って海に投げ捨てっぞコラ……！」

まあ、あながち間違っちゃいないがね。最初の頃に比べてコイツ、確かにでかくなってるとるもん。俺の作ってる食事が全部胸にいつてんのかな？

全く、困ったもんだよ。

「なにやってんのよ、あんた達……」

「お二人とも、プライベートビーチとはいえ、もう少し慎んで欲しいでございますよ……まだ年端もいかぬ少年少女もいるのですから」

ふと後ろから声がした。サングラスを外して振り返ると、スノウとセツナさんがいた。けど、二人ともまだ水着は着ていない。これから着替えるのだろうか。

相変わらずの忍者服はどこか暑そうだ。そりゃあ、黒だから思い切り太陽の光を吸収してんだろうね。スノウは涼しげな半そでミニドレスのような格好だけだ。

「それじゃ、着替えてくるわ。セツナ、行きましょ」

「え？ 拙者は泳ぐ気などございせんが……あくまでボディガードとしてこちらに」

「いーから！ さっさと行くわよ！ せっかくアンタのためにエロエロな黒ビキニを用意したんだから！」

「え、ええっ！？ ならば尚更嫌で って姫！ 無視ですか！？ 拙者はそんな薄い下着みたいなもの、着たくは無 だっ、誰か助けてくだされー！」

……あーあ。ずるずると脱衣所に連れていかれちゃったよ、セツナさん。

それから十分くらいが経過した。脱衣所の扉が勢い良く開かれるのと同時に、意気揚々とした顔でスノウがこちらまで歩いてきた。隣には肩を落としてトボトボと歩いているセツナさんも見える。

……っお、これは……ッ!?

すらりと伸びた肢体は艶やかに光り、きゅっと引き締まった腰はスレンダーな美女を彷彿させる。

相変わらずの大きな胸は黒いビキニに包まれているが、ビキニからはみ出ている白い肌が後光をさしていた。ヒップももちろんのこと、何より彼女のおへそがいやらしい。エロ過ぎる。

スノウは真つ白生地ของビキニを着用していた。しかし……相変わらずコイツは太ももと尻がエロい。ピッチピチの肉が水着では覆い隠せてなくて、食い込んだ感じに見えていやらしい。彼女は下半身が魅力的過ぎる。胸は……まあ、あれだが。

「ふっふーん どう、啓太？ 少しは私の美貌に見惚れたかしら？」

左手を頭の後ろに回し、右手は腰の位置へ。明らかに自分のプロポーションを見せ付けるような仕草だ。思いつき「……どや？」顔
なだけけれど。

対するセツナさんは恥ずかしそうに両足を内股にして、その大きなバストを腕で隠そうと必死になっている。逆に隠しきれていなくて、腕で寄せて上げてるようになってんだけど。

セツナさんは俺の視線に気がついたのか、上目遣いで恥ずかしそうに言ってくる。きゅっと腕で胸を隠したんだけど、やっぱり本人は気づいていないのか、寄せて上がっていた。そろそろこぼれるっての。

「け、啓太殿……そんなに見詰めちゃダメでござるよ……」

消え入りそうなほどの小さく、そして震えた声でセツナさんが呟く。

ドキンと心臓が高鳴って、俺はすぐさま視線をそむけた。

「あ、ああ……す、すいません。つい」

「ん、啓太？ 柄にもなく恥ずかしいの？ ほらほら、今なら私の水着の中に手を入れて、思い切りまさぐってもいいのよ？ 色々いじったって私は抵抗なんてしないわよ？」

「お前はもう少し恥ずかしいという感情を持って」

セツナさんと比べると段違いの変態さだな。いや、セツナさんと比較すると、セツナさんが失礼か。サクラあたりと比較するのがちょうどいい。

それから、スノウの身体自慢は続いた。セツナさんは脱衣所に逃げようとして、何度もスノウに捕まっていたけど。

あと、俺の後ろですーっと黙っているサクラが、やけに静かで、やけに不機嫌だった。

それはもう、ものすごいふてくされたような顔で。

「うう、啓太さん。目がエッチです……二人を見る目がすごいエッチです……」

「そ、そんなんじゃないよ。ただ、すごい似合ってるなっていうだけで」

「私には似合ってるなんて言ってくれなかったじゃないですかー！
啓太さんのエロー！ スケベー！」

ぶーぶーと文句を言い始めたサクラはえらくご立腹の様子でした。
やれやれ、世話の焼ける奴だ。嫉妬深いつたらありやしない。

仕方ないねえ本当に。

「はいはい。サクラも似合ってるよ。可愛いし綺麗だ。グラマラス
だよ」

「ほ、ホントですか！？ じゃ、じゃあそのグラマラスをアピール
するために、手始めに私のおっぱいでも鷲掴みに」

「さて、泳ぎに行こうかな」

徐に乳を両手で持ち上げ始めたサクラを放っておいて、俺はさっさ
と衣類を脱いで海へと駆け出した。

もちろんそれを許さないアホ又は涙目になって俺の後をついてくる。

ああもう、結局どないせえっちゅうねん。

「あーん啓太さーん！ 無視しないでえー！ ……あ、でも太陽に
照らされる啓太さんのムキムキボディにハアハアハア………いっその
こと啓太さんのドイツ産アルトバイエルンもムキムキハアハア………
！」

「ついてくんな変態！」

鼻血を垂らして俺に突撃してくるエロ又の追撃を逃れながら、俺は海へと逃げ込む。

流石に海の中じゃ不利だろ……と慢心していたが、意外とサクラは速かった。結構なスピードで逃げてんのに、気づけばもう後ろに迫ってきていた。

やべえ、【桜ヶ丘のミスターフロツガー】と呼ばれた俺がなんという不覚！ このままでは追いつかれてしまつではないか！

「うふふふ啓太さーん？ 海の中じゃ何をしてもOKですよねー？ 遠くにいれば誰にも見えないんだし、立ち泳ぎしたまま行為に及ぶのもオツですよー？ うふふふふふふ」

うわああああ怖ええええええ！

もう目が淫乱だよあの子ー！ 誰か助けてえええー！

ちよ、つていうかもう真後ろじゃん！ もう直ぐ捕まえられるつて……ちよつと！ ホントにやばいやばいやばいつて アッー！？

……結局、何事もなく砂浜に帰ってきた俺（ヒサクラ）だった。ただ、顔中に彼女のキスマークをいっぱいつけられてはいるけれど。

サクラにいたつては「満足満足」と、どや顔でニコニコしていた。畜生、その可愛い顔引つ張るぞ。このエロ又さんめ。

なにはともあれ、海に来たんだ。筋肉痛になるくらい、思いっきり遊ぶか。帰る時は真っ黒になると、SPさんが海の家らしき民宿

と、握りこぶしで意気込んでいて、それにしてもこの人すごい。からスイカを一玉もってきてくれた。それにしてもこの人すごい。

この暑さでこつい黒服でいられるとはただものじゃないな。そのゴ

ツイ顔つきからこの人は修羅だな。SPだからイニシャルは修羅パ
ンツか。よし、この人は今日から修羅パンツだ。

修羅パンツさんからスイカとハチマキと木刀を頂くと、横からサク
ラが興味深そうにスイカを見詰めてきた。めっちゃ瞳輝かせてる。

「わあ、スイカだー　じゃ、私これ持って改札口を通ってきます
ね」

「ああ、最近駅のコンビニヤいろんなところでも使えるようにな
ったからな　ってそれはsuicaだ！」

「……うわ、セツナ。私ノリツツコミはじめて見たよ」

「拙者もです姫。……あ、向こうのあたりは海苔がたくさん浮いて
ますな」

「うん、海苔海苔だね」

「海苔海苔ですな」

「ねえ、キミたちは一体なんの会話をしてんの……？」

横で笑顔を引きつらせて突っ込んでくるカノンさん。やはり良識の
ある人には理解が出来ないのだろうか。

……あ、もつもちろん俺も良識あるから理解なんて出来ないぜ、マ
ジで！　あんな変態どもと一緒にされちゃ困るぜ！

「ねえねえ啓太さん、いつまでもスイカ持ってないで、スイカ割り

しましょ？」

「お、おう。そーだな」

サクラに促されて、ビーチの真ん中辺りにスイカをよっこらせと設置する。木刀は……あった。さて、後はハチマキで目を隠して、と……。

一番手はサクラだった。木刀を彼女に手渡して、きゅっとハチマキを巻いてやる。ハチマキを結ぶとき「あふう……！」とかワケの分からん喘ぎ声を出されて少し驚いた。

んで、そこから彼女の身体をくるくると回してやる。それを見て面白そうだと感じたのか、スノウとミスリアも参戦してサクラを回しだした。

「あふあっ……も、もっと……もっとマワして……！」

「誤解を招く言い方すんじゃねえ」

29、30と、サクラを回し終える。そこには気分を悪くしたのか、顔をすっかり青くさせた彼女の姿があった。

……ちょっと、やりすぎたかな？　なんか立っているのも辛そうだ。

「おうえええっぷ……！　ぐるぐると身体が揺れてしかたがないですぜ……スイカどこー？」

ふらふらと歩くサクラの足取りはどこかきこちない。まるで酔っ払いのおっさんのような千鳥足だ。

横で見ていたスノウやミスリア、セツナさんが彼女に声をかけてい

く。他のメンバーは面白そうにそれを遠目で眺めていた。

「サクラー！ 右行ったら左だよー！」

「サクラ殿ー！ 左を歩きましたら五歩程度まっすぐ行って右ですぞー！」

「サクラー！ 右に行ったらアゴをしゃくれさせて『ダンカン馬鹿野郎』よー！」

おい、一人おかしいぞ。明らかに無茶な注文しているアホがいるぞ。

「ダ、ダンカン馬鹿野郎……コノヤロウ……！」

「無茶するな！ っていつか本当にするんじゃない！」

必死の形相でアゴをしゃくれさせてるサクラなんか見たくない。でも面白いからこっさり写メしておこう。待ち受けにしたら開いた瞬間笑うなこれは。

「……ほら、サクラ。いったん俺のところまで戻ってこいよ。そして最初からスタートにしてやるから」

ハチマキを外してとほとぼ帰ってくるサクラ。

……帰ってくるまでアゴをしゃくれせんな。本気で笑わせるつもりか。

「うー、啓太さん。バトンタッチです……」

木刀とハチマキを渡して青い表情のサクラ。ちょっと気分が悪くな

ったらしい。ギブアップ宣言だそうだ。

しゃあねえ。天下のスイカ割り男と呼ばれた俺がやってやるか。スイカなんぞ真つ二つにしてやるぜ！

ハチマキを巻くと、いそいそと俺を回そうとサクラとスノウが駆け寄ってきた。

……やたらと身体を密着させて回すのはアレか、狙っているのか。柔らかいですけど止めてください。

決まった回数まで回すと、二人は離れていった。ああ、やべえ。気持ち悪い。

けど、この俺に出来ないものはないぜ。さあ、指示を頼むぜ！

「啓太ー！ 右に行ったら右折禁止だよー！」

「啓太殿ー！ 木刀を天に掲げて『真・流星雷神剣！』ですぞー！」

「啓太ー！ カキの天ぷらとエビフライどっちが好きー？」

「啓太さーん！ 私はエビフライの方が好きですー！」

……………。

うおおおおおおおっ……………！

マトモに指示してくれる人がいねえ……………！

「おまつ、おまえらちゃんと指示しろよ！ まっすぐ行けばいいのか！？」

「あー違います啓太さん！ そこで右に行ってまっすぐですー！」

「右に行くんだな、分かった!」

サクラの指示通りに右に行ってまっすぐ行く。そこからミスリアの
声が。

「あー、そこでいったん止まってー! 右に三歩行ったら左に二歩
半、そこで四歩直進して回れ右して後ろに二歩下がるんだよー!」

右に三歩行つて左に二歩半、四歩直進して……。

……分かりにくいわ!!

「啓太殿、さつきは申し訳ございませぬ。その場所から四歩直進し
て左に六歩進めばスイカがあるでござるよ」

おお、やっとセツナさんがマトモに指示してくれた。ありがたい。

やはり素が真面目な人は頼りになるな。

彼女の指示通りに動いて、おそらくスイカがあるであろう位置で足
を止める。

やっとここまでこれたよ。

そして、木刀を振り上げてスイカを割る動作に入ったところだ。

「ほら、私を抱きしめて……」

俺に身体を密着させてくるアホ又のスノウがいた。

思わず木刀を思い切り振り下ろしてやるうかと思っただけど、そこま
で俺は鬼畜じゃない。

つうかこの状況で何をやってんのコイツ？

一人だけ指示してねえと思っいたらいきなり密着してきやがって。

「あー、スノウズー！いい！私も啓太さんに引っ付くー！」

体調も回復したのか、遠くからサクラが駆けつけてくる気がして…

…いや、駆けつけてきた。

お腹辺りにスノウがいて、後ろからはサクラが引っ付いて。正直嬉しいシチュエーションなんだろうけどさ、俺にとっちゃワケわからん。

そりゃあ感触は柔らかいさ、天国さ！

でも何なのこの状況。ケースバイケースって言葉を知らないのかお前らは。

「だー、もう！ 離せお前ら！ スイカが割れねえじゃねーか、鬱陶しいしジャマだ！」

「ひ、酷い！ 私よりスイカの方がいいんですか！？」

「そ、そりゃあ胸はスイカより小さいけどさ、そんな言い方はないんじゃないの！？ 酷いわ啓太！ パパに言っただけで戸籍抹消してやる！」

「さざらりと怖いこと言っただけじゃねえ！」

もう納得するまでこのアホ又二匹は離してくれそうにありませんでした。

ああ、もう色々大変だから離せつつうの……！！

「……ねえセツナ。何でそんなに羨ましそうに二人を見てるの？」

「え、えっ!?! い、いやそんな目など全然しておりませぬぞ! せ、拙者はただ、スイカが美味しそうに見えているだけで……!」

「スイカおいしー」

「結構甘みがあっついていいな。ああ、タネは砂浜に捨てず、ちゃんと袋に捨てとけよ」

「はい。……啓太さんのタネならその場で飲み込むんですがね……ぼっ」

頬に手を当てて恥らうアホ又は置いといて。

あれから無事にスイカを割る事が出来たので、今ではゆったりと海を眺めてスイカタイムを満喫しているところだ。

潮風が気持ちいい。夏 まっしぐらって感じがまたいいね。今はギリギリ夏じゃないけど。

……ん? そういえば……。

「セツナさん、スノウは何処に行ったんですか? さっきから姿が見えないんですけど……」

スイカを小さな口でかぶりつくセツナさんに訊いてみる。彼女はそ

れを聞いてキヨロキヨロと周囲を見回すと、首をかしげた。

「あれ、さっきまでそこにいたはずなのですが……拙者、ちょっと探して参りますね」

そう言っつてセツナさんはその場にスイカを置いて、ビーチをゆつくりと回りだしていった。

スイカも食べずにどこに行ったんだろ、あいつ。さっきからやけに拳動不審だったしな。

まあ、大丈夫か。このビーチはそう広くはないんだし、直ぐに見つかると思うし。

「啓太さん啓太さん！ いきなり海水で服が濡れて『うえっ!?!』としました！」

「ウエット（濡れる）だけにか。ハハハ……っつて喧しいわ！」

「むー、今のギャグは渾身の出来だと思ったのですがねー。啓太さんのツボは何処なんでしょうね。……ん、もしかしてココですか？ ココですか？」

あからさまに人の素股に手を入れてセクハラをしてくる彼女を払いのけて立ち上がる。

こんな彼女に慣れてしまった自分が怖い。

……む、そろそろお昼だな。

「……さて、ちょっと行ってくるよ」

「行ってくるって……トイレですか？ 色気たっぷりの子たち」

を見て欲求が爆発したからトイレに行くんですか？ トイレでヘブ
ン状態の啓太さんを想像してほばイキかけました」

「とりあえずお前は脳内環境を清浄化……いや正常化させる」

……悲しいけど、コイツやっぱり変態なのよね。

「違っつて。ちょっとスノウを探しにいくだけだつて。お前もつい
てくるか？」

「スノウ？ んー、どうしましょうかね。私は今すぐにでも啓太
さんと熱い営みをハッスルしたいのですがねー」

「……そんなに熱いのがいいならしてやるよ。ほら」

彼女の履いていたサンダルをひょいと脱がせ、その素足に冷たい水
が入ったペットボトルをとくとくとぶっかける。

「ひゃんっ！？ 啓太さん冷たっ……あっ……つて今度は熱っ……
熱い熱いあつっい！？ ちょ啓太さんマジで熱いからやめてー！」

で、ぶっかけ終えた後は熱い砂浜に思い切り足を沈めてやる。

うむ、これは熱い。適度に冷やした直後に熱を与えるのは結構効く
ぞ。

ちょっと最近この子セクハラ発言多い気がするからこの辺で躡けて
おかないと。登場するたびにエロトークされたらツッコむ方も疲れ
てくるしな。

足首まで沈めて、そのまま俺はサクラを後にした。

っっていうか放置した。まあこれぐらいでへこたれるような奴でもないから大丈夫。

「も、もっと……もっと熱くなれよおおおおお」

……あ、別方面のスキルも身につけたっばい。

く水着姿でよっこらせ。南の島でのバカンスくちゅうへん！

「ふふふふ……」

みんながいるビーチから少し離れたところに位置する岩場……レー
セン岩（決して東の方の月から来た兎ではない）とか言っただけ？
に私はいた。

ゴツゴツした岩場が目白押し！ っていうような感じの岩場である。
何故そんなところに居るのかといえば、このレーセン岩にはちよっ
とした魔物が存在するからだ。

しかし魔物とは言っても、大きな海洋生物レベルなだけだね。

んで、その海洋動物　大ダコの吸盤を何としても手にいれるた
めに、私は一人でここに居るわけである。今回みんなで行こう
と言ったのもそれが目的。

……まあ、そんなわけで話は少し前に遡ります。

【カノンの部屋】

朝にあったセツナとの件をカノンお兄様に話して、私は彼に泣きついていた。

ベッドの上であぐらをかいてグズグズ泣いている私を、困ったような様子で頭を撫でてくれるお兄様は相変わらず優しくかった。

ちーん！ と小気味良いティッシュをかむ音が静かな部屋を響かせた気がした。

ああ、本当にカノンお兄様が本当のお兄様だったらなあ、って思うときが何度もある。頼りがいがあるって優しい。いつでも支えになってくれる、最高のお兄様。

……それにカイやガイなんて正直使えないし。二人ともただの筋肉バカだし、脳筋族だし。

「ぐすつ……お兄さまぁ……」

「はいはい。セツナが羨ましくて仕方がないんだね。そう急がなくても、ちゃんとアシユリーも成長するよ、きつと」

「そうだけどさぁ……それでもいつ大きくなるか分からないから困ってるのー！ だから巨乳になる薬を作ってよー！」

「巨乳になるって……難しい注文をするなあ本当に」

苦笑いを浮かべるお兄様。確かに無茶だということは承知の上だけど、お兄様ならきつと作ってくれろと信じてるもん。

今までいろんな薬を開発してるっばいから、きつと巨乳になる薬だつて作れるはず。シエアリスの科学力は向こうの世界と比べて遙かに凌駕してるんだし。

「無理だったらE、ううんDでもいいから。これ以上サクラヤセツナに負けた気分になるのは嫌なのー！でもって啓太を振り向かせたいのよー！」

「……全く。全部自分の願望じゃないのかそれって？……まあ、無理ってわけじゃないけれど。ちょっと遠出しなないとね」

「作ることが出来るの？」

「うん。とはいっても、巨乳になる薬じゃなくて、身体の一部を膨らませる薬だけだね。効果はほぼ同じだとは思っけれど。直ぐに作ってあげたいところだけれど、材料が足りてないんだ。この国の領土である」

そこまで聞いて私はお兄様の首根っこを掴みかかった。
きよ、巨乳になる薬を実際に作る事が出来るのよ？
だったら、おおお落ちていてなんかいられないわ！！

「何！？ 材料は一体何が必要なのツ！？ 教えてお兄様！！」

「ぐ、ぐるじっ……！！ こ、ここから少し離れたところにある島
レイシヤンに存在する大ダコの吸盤が必要なんだ……だ、だから
はやぐはなして……！」

苦しそうなお兄様の顔を見てハツとなり、すぐさま離れた。ゲホゴホと数度むせてお兄様は話を続ける。

「げほっ……確か大ダコはレイシヤンの少し離れたにあるレーセン岩によく出没するって言ってたけど……」

「レイシヤンのレーセン岩ね。分かったわ！」

そう言つて、サムズアップした親指をお兄様に向けて部屋を出ようとしたけれど、直ぐお兄様に呼び止められた。

「ちよつと待つた。行くんだつたら私もついていくよ。一人じゃ何かと危険だしね。とはいつても、大ダコだよ？ どうやって吸盤を手に入れるの？」

「う、それはカイヤセツナとかに頼んで……そうだ！ どうせ四人くらいで行くなら、啓太やサクラとかみんなを連れて泳ぎにいかない？ で、みんなには内緒で途中から大ダコの吸盤ゲットに変えて……」

「お、それはいいね。最近は研究で部屋に籠りつきりだったから、ちよつどいいよ」

「それじゃ決定ね。それじゃみんなに伝えてくるわ。……どんな水着着ていこつかな」

「シンプルなのがいいよ。あんまり派手なのは好まれないからね」

「それじゃ白でいく！ 白のビキニでセクシーポーズをとつて、啓太をメッロメロにしてみせるわ！ お兄様も色々ありがとうね。……絶対に巨乳になってやるんだからー！」

意気揚々と叫んで私は部屋から出た。お兄様の「それは私が作らないとダメなんだからね」という後付けも、最早興奮状態と化した私の耳には全く届いていなかった。

……と、まあそういう成り行きで現在に至る。

お兄様をこっさり呼ぼうかなと思っただけれど、奴さんミスリアとかと遊んでいらっしやる。絶対本来の目的忘れてるでしょアレ。はたから見てもめっちゃ楽しんでるし。

今は一人で大ダコを監視中。確か、正午過ぎくらいにこのレーセン岩に身体を休めに来るとか聞いたけど……。

「……来ないわね。っていうか、本当にこの島に大ダコがいるのかしら？」

ふああ、と欠伸を一つ漏らして、ゴツゴツした岩場の隅、自分一人が入れそうなスペースにもぐりこむと、頭の後ろで手を組み、その場に寝転がった。

うーん、ちよつと寝ようかしら。私も遊びすぎて疲れちゃった。三十分程度寝たら、タコも来るだろうし。

この島はプライベートビーチだから変な人はいないだろうから襲われる心配なんか無いし、むしろ啓太なら嫌がってでも無理やり襲わせるわね、うん。

それにこの位置はちょうど岩と岩の窪みのようなところだから、たとえ寝ているうちに大ダコが来ようとも襲われる心配はない。

……ふふふ、完璧ね、完璧すぎるわ。さすが私。ラインハートの姫なだけあるわ。

まあ王妃であるお母様にはどうしても頭が上がらないんだけどね。あれは無理。全知全能すぎて無理。もはや猫又って存在じゃないわあは。

とにかく一休みしよう。寝るのはちょっとだけ、ちょっと……だけ

……

……くう。

ったく。スノウはどこに行ったんだよ。

ゴツゴツした変な岩場まで来たものの、全然彼女らしき人影が見当たらない。

ミスリアはこの辺に行っているのを見かけたと言ってたが……いねえ。周り見ても岩ばっかで人の気配感じられないし。

早くアイツ見つけねーとバーベキュー出来ないじゃないか。海でバーベキューすんの久しぶりだからめっちゃ張り切ってたのに。

「スノウー。いたら返事しろー」

一応呼びかけてみるが、返事なし。この辺りにはいないのだろうか。岩に背をもたせかけて、一息つく。やれやれ、放浪なお姫様なこと少しは落ち着いてりゃいいのに。

……それにしても海が綺麗だ。全然汚れてない。さすがプライベートビーチだな。潮風がすごい気持ちがいいよ。

ざざーんと波が押し寄せてくるのを遠目で見詰めている傍ら、ふつと空が暗くなった気がした。いや、気がしたんじゃないかって、空が暗

くなくなった。

あら？ 確かまだ正午過ぎだったよね。天気は凄いいい天気だし曇ってる様子なんて全く感じられないけど……。ってことは俺の上だけ暗いのか？ なんで？

……まさかな。

そう思つて、そーっと、ゆっくり見上げてみた。そこには、海でよく見慣れている生物がいた。

……ただ、そのスケールというか、普通では考えられない、その大きさを除いては。

「……なんじゃいこりあああああ ！！？」

その絶叫と同じタイミングで、俺の視界が真っ暗に染まった。

【レーセン岩】 同時刻

この近くで誰かの叫び声が聞こえた気がする。

私は転がっていた身体を起こすと、海の方に身体を向けた。そして啞然とした。

……だって目の前に大ダコがいるとか想定の外です。誰だって

驚きますよ普通。

「なんじゃいこりあああああ
！！？」

柄にもなく大声で叫んでしまったので、大ダコがこちらの存在に氣付いて大きく振り向いてきた。

と同時に、何故か啓太がその大ダコにぐるぐる巻きにされていたのが目に入った。

「ス、スノウ、スノウか！？ お前こんなトコにいやがったのか
じゃねえ！ 逃げろ！ 全力ダッシュでここから逃げろ！ タコに捕まっつて俺みたいになるぞ！」

タコの触手でグルグル巻きになった啓太が叫ぶ。私の身体を心配してくれているのはとっても嬉しいけど……正直マヌケね、その格好しかし写メってやりたい。

「いや、言われなくても逃げる気マンマンだけど……心配しなくても大丈夫。そのタコは人を食べたりしないから。ただの悪戯よ。……骨が折れる程度の、ね」

「折られてたまるか！！ この状態だと全部の骨折られるじゃねえか！！ 致命傷だぞそれ！？」

「うーん、変に抵抗しなければ大丈夫じゃない？ あくまで悪戯だから。それに悪戯つても限度があるし」

とそこまで言ったところで、ひゅん、と私の後ろで何かが飛んできた。それが一メートル程度の刃物だって事は直ぐに分かった。

ザンツ！ とタコの触手の一部が切り落とされる。それは狙ったように……狙ったんだろうけど、啓太を束縛してる一部だけだった。

「……啓太は、こちらの世界の客人だ」

後ろを振り返ると、啓太の絶叫を聞きつけてやってきたのか、海で遊んでいたみんなが集まっていた。剣を投げたのはガイね。こんな芸当は彼ぐらいしかしないだろうし。

「その客人に無礼を働く輩は、何人たりとも俺が許さん……！」

額の横辺りに『怒』のマークをはっきり浮かばせて、剣を投げ飛ばしたモーシヨンのガイが言う。それにしてもナイスよガイ。略してナイスガイ。

でも本当ならば私が逃げる振りしてこっそり助けたかったのに、それを上手く横取りしやがったわねコラ。あんなタコ坊主に私が負けるはずないじゃない。

啓太も啓太で、アンタ少し顔赤くさせてんじゃねーわよ。まさか人の兄貴に惚れるとかないでしょうね？ ああ、啓太つては最近だしねえな？ ホントにだらしねえな？

タコの触手ごと海に落ちていく啓太。そこから自力で抜け出してきたのか、ゲホゲホとむせながらこちらへ小走りで戻ってきた。そんな彼にセツナが背中をさすって落ち着かせてやる。サクラにいたっては「チツ……せっかくのサービスシーンが……」とか言っ舌打ちしてた。

……確かにおしかったわね、うん。もうちょい束縛させて水着脱げてアッー！？ なシーンの展開を期待してたんだけどね。さすがにそれは無理か。無理ね。

「ゴホツ……ハア、ハア。すっげーびっくりした。なんだよあのタコ。デカすぎんだろ。突然変異でもしたのか？」

「あれはレイシヤン名物の大ダコよ。時々ああやって人にちよつかにかけてくる悪ダコで、食用。焼くとウマいの」

「食用なのか。ちつくしょー、ぐるぐる巻きにしやがってあのタコヤロウ……」

珍しく啓太が悪態をついている。タコにぐるぐる巻きにされたのがよほど腹が立ったのか、鋭い眼光でタコを睨みつけている。

タコもいきなり自分の触手（足だろうか？）を切り落とされて酷くご立腹の様子だった。ネコに例えるならふしゃーっ！って威嚇してするような状態でこちらを見詰めている。涙目になってるのがちよつとだけ可愛かった。

「大丈夫ですか啓太さん？ 出来ればもう少し束縛してもらって『いいぞタコー！ 水着を脱がせ剥いでしまえー！ 視聴者サービスじゃー！』とか叫びたかったんですけどね」

「誰得だよそりゃ。ほつといたら骨を折られるってのに、そんなことやってられっか」

はあああ、と盛大なため息をついて啓太が腰を下ろす。と、その啓太の近くにミィちゃんがトコトコと近づいてきた。ちよつと心配そうな顔である。

「お兄ちゃん、大丈夫……？」

猫又特有の耳と尻尾をふりふりと動かして啓太の顔を覗き込む。そういえば……ミいちゃんはまだ成人年齢（二十歳）に達していないから、まだ耳やら尻尾を出し入れできないのね。レンみたいに。

それでも一応個人差つてものがあるから、成人年齢に達しなくても扱える人もいるけど。私とか、セツナとかね。

「ああ、大丈夫だよ。ちょっとびっくりしただけだから。それより後ろに行つてなよ。前に来ると危ないからさ」

「……………うん」

よっこらせと立ち上がり、傍にいるミいちゃんを安全なところへ連れて行く啓太。と、その彼に今度はレンが寄ってきた。

「ねえねえ、啓太お兄ちゃん」

……………あ、あの顔は。おねだりね。うん、長い事姉弟として付き合ってるから分かるけど、あのニコニコ顔は絶対におねだりだわ。間違いない。

ぎゅっと腰周りに引っ付く仕草がまた可愛らしさを演出させているけど、どうなんだろう？ 啓太には効果抜群なのかしら。

「僕ね、タコさん見てたら、タコ焼きが食べたくなくなっちゃいました……………」

啓太の腰に顔を引っ付けて、にーにー言いながら甘えるレン。その様子に何故かムツとした顔で見詰めるミいちゃん。そして対抗意識を燃やしたのか、啓太の横にいたミいちゃんも彼の腰周りにがしっ

としがみ付いて、みいみいと甘えだした。

……あわわ、アレってある意味両手に花ってヤツ？ いや両手に花
というか、両腰に花ね。

「……みい。啓太お兄ちゃん。私もタコ焼き食べたいよう……」

ぎゅっと小さな身体で啓太を抱きしめるミいちゃん。レンに啓太を
取られたくないのだろうか。そうだとしたら凄く可愛いわね。初々
しい。

それにしても啓太って、人相悪いくせにやたらと子供に人気あるわ
ね。何か子供を引き寄せるフェロモンでも放出してるのかしら。

さて、そんな板ばさみ状態と化した啓太といえば……。

「我が生涯に、一片の悔い無し。……んじゃ、ちょっと安全なここ
で待っててな二人共。今すぐあのタコスケをタコ焼きに料理してあ
げるからよおおおおお！！」

「みー」

「にー」

……あらら、何だか妙な火がついちちゃったみたいね。これだから口
リシヨタコンは怖いわね。意のままに二人に操られちゃってるし。
これが啓太の有効活用というやつかな。

「そんじゃガイさんとセツナあ！！ 今すぐあのタコをボコボコに
しますんでついて来てくださいよコラア！？ 遅れたりすつと承知

しねーんで覚悟しといて下さいよ!？」

「……応」

「は、はじめて呼び捨てにしてもらった……!」

予備の刀をSPから受け取って、ガイはタコ目掛けて走り出す。セツナもなんか妙に嬉しそうにしながら隠し持っていた小太刀を抜き出してタコの元へ。

そして誰よりも一番早くタコに辿り着いた啓太といえば。

「うるああああああタコスケエエエエエエエ!! 10000
人分のタコ焼きの具材にならんかワレエエエエエ!？」

「!？」

啓太の威圧感に押され、大慌てで逃亡を図る大タコだったけど、頭部目掛けて彼に裏拳を叩きこまれて、手前の砂浜へと追い遣られた。

……ちよ、何で普通の人間が大タコ相手に優勢なの？ おかしくない？ 啓太って本当に人間？ 火事場の馬鹿力って恐ろしいわね、マジで。

そして矢鱈と殺気付いた二人　ガイとセツナもその場へ到着した。手には小太刀と新刀を持って。

……あーあ。なんかタコが可哀想に見えてきた。もう何か涙目で怯えてるし。

その後はもう……タコ殴りって言葉通りの光景だった。砂浜には巨大なタコの触手が三、四本置いてある。

本体は逃がしたものの、これだけあればタコ焼きが500人前くらい作れそうなの、それくらいの大きさだった。

タコ殴りにされた大ダコは、ぐすぐす泣きながら海へと帰っていった。これを機に、猫又に悪さするのを止めてくれると嬉しいんだけどね。

「……っ、疲れた……！」

砂浜にへたり込んで、ぜいぜいと息をする啓太。どうやら興奮が冷めたみたい。隣には涼しい顔でタコの触手を見詰めるガイとセツナがいた。

うん、やっぱり猫又と人間は違うね。啓太も普通の人間だと分かって一安心したわ。

「久しぶりにハイテンションな啓太さんでしたねー」

後ろで黙って傍観してたサクラが啓太のところまでやってくる。手にはタオルとスポーツドリンクを持って。

「お、サンキユ。……いやー、全力で殴ってたから俺も何がなんだか……まあ、最近動いてなかったし、良い運動にはなったよ」

そう言って啓太はキャップを開けてスポーツドリンクを口に含む。

いやまあ運動不足なのは分かるけど、大ダコ相手に格闘して良い運動、ねえ……。

「まあともかく。大ダコも倒したしスノウも見つかったし、さっさと戻ってバーベキューでもしようぜ。もう腹が減って仕方ねえよ」

「おー、バーベキューですかー！ 私もお肉食べたかったところですよ。もう肉欲肉欲じゅるりです！」

「肉欲って言うな」

苦笑しつつ啓太がサクラの額にチョップを喰らわせる。『あいてー！』とか言ってるサクラは額を押さえて大げさに後ろへ転がり込んだ。

ふう。何だかハプニングもあつたけど、無事に終わる事ができて良かったわ。全員が無事で一安心ね。

……さて、隠し持ったタコの吸盤は何処に保管しておこうかしら。後でSPに冷凍保存して品質を保つように言っておかないとね。

うふふふふふ、目標はこれで達成出来たわ。後はこの島で一泊して、明日帰って直ぐにお兄様に調合して貰って……うふふふふふふ……！

時刻はもう夕刻を過ぎている。この島は暗くなるのが早いのだろうか。さっきまで明るかったのに、気がつけば空は真っ暗闇に包まれ

ていた。

バーベキューを終えた今、水着から着替えて『とあるもの』を待ち望んでいた。島の中央に各自空が見やすい位置へ移動して待機して、俺とサクラは砂浜と地面の境にある石段に座って空を見上げていた。

「肉棒祭り、楽しかったですねー！」

「肉棒祭りって言うな」

さつきから肉欲だの肉棒だの……別の意味に聞こえるんだっての。

「いいじゃないですかー。串にお肉が刺さってるから肉棒で間違いはないと思いますよー？ ……あ、もしかして別の意味に捉えてました？ やだー、啓太さんってば変態！ ガチホモ！」

「少なくとも俺はガチホモではない」

絶対コイツガチホモの意味を間違って捉えてるだろ。本当の意味を知ったら絶叫するぞ。

くだらねえ話で盛り上がっていると、真っ暗な空で綺麗な黄や赤などの色が広がった。

そう、花火だ。SPさんがこの場を盛り上げるために、職人級の花火をわざわざ用意してくれたのだ。

一般家庭で使用されるような打ち上げ花火の類ではなく、本物の花火を使っているところ、SPさん以外に花火の打ち上げ職人さんを

いですかー！」

抱きついたらままで、サクラはぎゃんぎゃんと不平不満を言いながら
暴れだした。

いや、だってね。恥ずかしいじゃん。お前の方が綺麗だよ、とか。
マジ恥ずかしさの極みじゃん。

「もー、啓太さんってばツンデレなんですからー。……まあいいで
す。いつかは啓太さんに綺麗だ可愛いだ愛してるだ每晚抱いてやる
だを連呼させてあげますよ。ツンをデレに変えてあげますよー！」

ツンデレになったつもりもないんだがなあ……。胸を踏ん反り返ら
せてガッツポーズをするサクラに、つい苦笑が漏れた。

ほんとと、ポジティブなヤツ。ここまで来ると面白いくらいポジテ
ィブで前向きだってことが分かるよ。

けど、それがサクラのいいところなんだと思う。

昔を振り返らず、物事をいつも前向きに捉え、いつも明るい様子で
振舞うサクラ。過去に捉われ、いつまでも自分の仕出かしてきた行
いを恥じてきた俺と違って、彼女はいつも明るかった。その明るさ
に救われ、その明るさに……。俺はいつしか嫉妬していた。

こんな調子で毎日を送る事が出来れば。こんな風に生きていくこと
が出来ればと、自分には持っていない積極性を、彼女を見ているこ
とでいつの間にか欲していた。

結局それは手に入らないままだったけれど、代わりに……。彼女を、
サクラという存在を手に入れる事が出来たから、もう欲する事も、
追い求める必要もないかなと考えてる。

前向きな彼女と一緒にいることで、俺もいつかは前向きで、ずっと前だけを向いていけるような、そんな存在に変われるかなと思ったから。

だから、この幸せを手放さないようにしよう。

それから……あまり多くの幸せを求め続けないようにしよう。

たくさんの幸せを求めると、自分が求める『本当の幸せ』を逃してしまうから。

「……啓太さん？」

彼女とずっと一緒にいられるという、『本当の幸せ』を逃してしま
うから。

すっと彼女の肩に回した手は、少しだけ震えていた。

ぴったりと寄り添うようにサクラを自分のもとまで引き寄せる。サ
クラも俺の気持ちに気付いたのか、少しだけ頬を染めて、しかし嬉
しそうに笑うと、顎を少し上げて瞳を閉じた。

寄り添うようにした体勢のまま、俺はサクラにキスをしようとして

「……あ、どっかいしょ」

割り込むように俺とサクラの間にスノウが入ってきた。その顔は明

らかにいい雰囲気を買マしてやるわ若造といった雰囲気をよく表していた。

突然割り込まれて不満そうに口を膨らませるサクラを無視して、スノウが人の胸にぐるぐる指で円を描いて甘えてきた。うん、スノウの隣怖え。サクラがすっげえ怖え。

「ねえん啓太あー、花火と私どっちが綺麗ー？」

先ほどのサクラとおんなじことを訊いてきやがった。思考回路も同じかお前ら。

「え、そりゃ花」

「え、私の方が綺麗！？ それ本当！？ 嬉しいわ啓太、愛してるわよー」

「いや、おまつ……何勝手に発言を変えて」

「え、俺もお前を愛してるですつて！？ もー、だったら私たち相思愛ねー！ あ、拳式はいつにする？ 私は海沿いにある教会で式を挙げたいわー」

「あの、だから……話を変えないで」

「ほお、拳式ねえ……」

隣で黙って話を聴いていたサクラが、やたらと渋い声で呟く。

……っつわああああ怖えええ！？

何かサクラの後ろから背徳なオーラがあふれ出てるんですけどー！

？

凄く逃げたい。全力ダッシュでこの場から離脱したい気分だ。

く水着姿でよっこらせ。南の島でのバカンスくこうへん！

何とかしてスノウを引っぺがして、ついでサクラも引っぺがして、そのまま海からさほど遠くない距離にある、海の家に到着した。何でも、今日は一泊して帰るんだとさ。

しかし……これは海の家とは言い難いな。今居るエントランスの周辺を見ても、明らかにこれとの雰囲気漂う高級旅館だし。貸切なのにこんな立派な建物は必要なのかな。

……まあ、畳で寝れるからいいんだけどね。あと旅館って言うくらいだから、温泉も勿論あるんだろう。いいねえ温泉。高校時代を思い出さず。

そんなことを考えてると、ロビーでチェックインを済ませたカノンさんが帰ってきた。少し困った様子だけど、何かあったのだろうか。

「カノンさん、どうかしたんですか？」

「あ、いや。部屋割りの件なんだけど……ちょっと問題があったね」

「勿論啓太さん は私と一緒に部屋です よね!？」

異口同音。声を揃えてサクラとスノウはカノンさんに訊いた。そしてお互いが同じ事を言っているのに気付くと、眉間にしわを寄せて睨みあった。

おお、怖い怖い。どこのスケバン（死語）だお前ら。

「あ、サクラちゃんとアシュリーは一緒の部屋だよ。啓太くんは…
…セツナと一緒の部屋だね」

「ええええええええっ!?!」

「ええええええええっ!?!」

後ろにいたセツナさんに二人が振り向く。セツナさんは自分の名前を言われたことに気がつく、ぽかんとした様子でこっちを見てきた。

「啓太殿は……拙者と一緒の部屋でござるか?」

自分に指を差して訊くセツナさん。

「うん。部屋割りは二人部屋が三つと三人部屋が一つで、本当なら僕とガイ、ミーナちゃんとレン、ミスリアとセツナって感じにしたかったんだけど……そしたら啓太くんとその二人になっちゃうからね。仕方ないからそこにはミーナちゃん、レン、ミスリアに入るようお願いしたんだ。セツナと啓太くんなら男女一緒でも大丈夫かなと思うて」

「二人の面倒は私に任せて大丈夫だよー!」

カノンさんの横からひょいっと姿を現すミスリア。
相変わらずテンション高いけど、今じゃそれが救いだ。

ああ、彼に部屋割り頼んで良かった。本当に良かった。ちゃんと俺が危ないことも考えてくれてた。半分猛獣の檻に入れられるような

モンだし。

セツナさんなら大丈夫だ。謙虚だし律儀だし、心配はいらない。今日は部屋で落ち着いて一日を過ごせそうだ。

……少し前に旅行に行った時、サクラにいろんなトコで襲われたトラウマもあるしなあ。あれを思い出したくは無い。
と、一人落ち着いていると、隣で猫娘どもがにゃーにゃー騒ぎ出した。至極納得のいかない様子ではあるのだが。

「そんな！ 啓太さんの最愛の猫又でもある私が一緒の部屋にならないなんて、不条理にも程がありますよ！」

「いくら！？ いくら出せば啓太と一緒にの部屋になれるのっ！？ お兄様、今なら足元見たって平気よ！？」

「いや、これは最愛とか、いくら払えるとかの問題じゃないんだ。それに子供もいるんだし、部屋も近いんだし……ね。溜まってるのなら、城に帰って存分にしなよ」

さすがカノンさんは年長ゆえに配慮に長けている。天晴れだ。その調子では非ともコイツらを納得させてください。

……ん？ ちょっと待って。今カノンさん、最後に何て言った？
俺の聞き間違い？ だったら凄い嬉しいんだけど。聞き間違いじゃなかったら、城に帰るのがすごい怖いんだけど。

「だって、この辺で早いトコ啓太と合体して既成事実とか作っておかないとダメじゃん！ 先にセツナの子供を見るとか絶対にダメだからー！ー！」

「そーですよー！！　っていうかスノウ！　啓太さんを慰み者にしているのは私だけなんですからね！？」

「おめエらな……！？」

さつきから部屋割りの意味を履き違えるんじゃないやねえ。既成事実だ慰み者だとか、物騒でありやしねえよ。

「ひっ、ひひひひ姫え！？　そっそそんなこと、拙者がするはずがなかるう！？　ふしだらでござるよっ！！　それにサクラ殿も！　拙者は至ってそのような事などしませぬっ！！」

それに対し真つ赤になって二人に反論するセツナさん。当たり前だ。否定しなかったらおかしい。それにしても……いいなあ、ミスリア。後でセツナさん連れて遊びに行こうかな。

ぎゃーぎゃー騒ぐ二人（二匹）を何とかなだめて、俺とセツナさんは部屋に入る。

部屋は……純和風。畳で敷き詰められた床と広々とした空間が目に入り、埃一つ落ちていないほど、隅々まで部屋は綺麗にしてあった。此処に布団ひいて寝るのかな。そう思いながら俺は隅っこに荷物を置き、カーテンを開いて外の景色を眺めた。

今は真つ暗な景色だけど、本当なら青一面と海が広がってるんだろうな。それにしても高い。ここ何階だっけ？　エレベーターで何階まで上がったっけ？

高所恐怖症がレベル5まで発症しかけた俺に、セツナさんがその場で正座し出した。

荷物は俺と同じように隅っこに置いていたんだけど……俺のと密着するように置いてるのはなんでだろう。

……あ、多分セツナさん几帳面だからか。あんまり適当に置いてジヤマにならないようにってか。勝手に納得。

「ふ、ふつつか者ですが、この一夜、どうぞよろしくお願いします
でござる……」

何故か頬を赤らめて、正座したまま深々とお辞儀をするセツナさん。こっちもこっちで反応に困る。別に添い遂げるつもりなんて無いんだけどな。

……あ、多分セツナさん勘違いしてるだけだろうな。一日部屋が一緒ですが、どうぞよろしくって意味だろうね。勝手に納得。

「いや、結婚するわけじゃないんだから、その挨拶はおかしいですよ。普通によろしくお願いしますで大丈夫です」

「そ、そうでござるか……それは失礼しました。……こ、こういう時、自分は何を言えばいいのか分からなくて……」

あはは、と控えめに笑って、セツナさんは自分の長い黒髪を軽く撫でる。うーむ、セツナさんは天然さんだな、天然さん。

しかしそのギャップが逆に良いと言うか、流されやすいけど真面目で良識人だというか。サクラやスノウと比べたら全然落ち着いてて相手しやすいしねえ。

「啓太殿」

と、そんなことを考えていると、セツナさんが俺を呼んできた。わけにもじもじとして、落ち着きの無い様子ではあるが。

「あ、あの……その……も、もう、呼んではくれないのでござるか……？」

「ん、何がですか？」

「あの……大ダコを退治する時に拙者を『セツナ』って呼んでくれたでござるよね？　だ、だから、その……べ、別にこれからそう言った呼び方でも、拙者は全然構わないのでござるが……」

「……………」

……呼んだっけ、俺？

あの時は記憶が曖昧だけど、確かに戦闘に参加できそうな人を誰彼構わず呼んでたような……そんな記憶もあるような、無いような……。

要するに、セツナさんは普通にフレンドリーに接してくれてもいいよと言いたいのだろうか。……まあ、そうだろうな。

呼び捨てでも構わないと言ってくれてるのだから、サクラやスノウみたいに敬語抜きで接してもOKというヤツか。

よし、それならセツナさんにも普通に接しようか。セツナ……っていうと何か普通だから『セツちゃん』でいいか。おお、何だかフレンドリーでいいね。

「セツナさんがいいなら、俺はそれで構いませんよ。それじゃ次からは敬語抜きで話しかけますが、それでもいいですか？」

「あ……ぜ、是非ともお願いしますでござる！　ありがとうございます！」

そう言つて、口元で両手を合わせて喜びを露にするセツナさん。

それにしても、無理やり最後に『ござる』をつけて喋るセツナさん

いや、セツちゃんが、何だか可愛く思えてきたな。

忍者っていうくらいだから古くからの口調を真似てるんだとは思つけれど……どう見てもアレ、漫画の世界だけだよなあ。

「それじゃまあ、改めてよろしくな。セツちゃん」

「せ、セツちゃん！？　セツちゃんてござると！？」

目を大きく見開いて驚くセツちゃん。

あれ、嫌だったのかな。

「あ、ごめん。普通にセツナって呼んだ方が良いかな？」

「あ、い、いえ、そんなことは全く！　ちよ、ちよつといきなりで不意をつかれたので驚いただけでござる！　全然構わないでござるよ！」

そう言つてセツちゃんは手をぶんぶん横に振つて否定する。なら良かった。いきなり不愉快にさせたのかと思つて心配したよ。

それにしても、セツちゃんといたら何か落ち着くなあ。変人が揃う猫又世界の常識人の一人だから、こつやつて落ち着いて話が出来るとのかな。

あとはレンくんやカノンさんやガイさんとかでも落ち着けるかな。

スノウとかミスリアはちよつと慌しいけど。いや、スノウはちよつとじゃないかもな。

「セツちゃんでごじわるか……えへへ」

それに嬉しそうにしている彼女を見てたら、何か気分が安らぐし。なんたる、仲の良い女友達と一緒にいるような、そんな気分だ。

「さて、と……」

ほんわかしたムードが漂う場から一時的に抜け出して、俺はその場にあつたテレビに電源を入れて、テレビのチャンネルを切り替える。そついや野球速報とか出てないかな。そういえば巨人と日ハムの試合がまだ見れて……無理か。

こつちのチャンネルで映るはずがねーか。代わりに全く知らない球団が試合をしたから観ようと思つたけれど、それじゃセツちゃんが一人で暇だろうから止めておいた。

そうだ。どうせなら二人で楽しめる番組でも見ようか。そうだな……なんかのバラエティ番組みたいなのは……。

「……おっ」

パチパチとチャンネルを変えていると、なにやら興味深い番組をしているのを発見した。

……ほほう、これは面白そうだな。これならセツちゃんも楽しめそうだ。

「セツちゃんセツちゃん」

くいくいと手招きして俺はセツちゃんを呼ぶ。彼女は怪訝そうに首をかき上げて此方に近づいてきた。

……さて、この番組が見終わったら、ミスリアンところに遊びに

行くかな。

「（　　）　　ちょ、あんた押さないでよ。せつかくよさげな盗聴場が見
つかりそうなんだから……）」

「（　　）　　うー、スノウばかりですよー。私にも二人が何を
話しているか聞かせてくださいー！」

「（あとで聞かせてあげるから静かにしなさい。二人に気付かれる
でしょ、特にセツナは音に敏感なんだから……）」

「（敏感さなら負けませんよ！　私は色んなスポットが敏感です！）」

「（誰も聞いてないわよ、そんなこと……）」

サクラとスノウの向かいでもある部屋。啓太とセツナの部屋の天井
で二人は声を殺して潜んでいた。
流星は猫というだけあるのだろうか。音を立てずにこっそりと二人
の様子を窺っていた。

……といっても、このホテルもどきの旅館は天井付近も完全に設備
されていて穴という穴が存在しないわけなので、一向に下の様子は
見れないのだが。

「（うーん、何か穴をあける道具でも持ってくればよかったわねー。
目を凝らしても下の様子が見れないわ）」

「（やはりここは声を聴いて何してるのかを想像しなきゃですね。」

……セツナさんが啓太さんを誘惑してなけりゃいいんですけど)」

「（多分大丈夫でしょ。それに啓太もセツナに変な感情は抱いてなさそうだし……あ、ここから少し声が聞こえるわ）」

「（ほんとですか？ それじゃ耳を傾けて、と……）」

小さく身を屈ませて耳を傾ける二人。そこに聞こえてきたのは。

『 見て ぐっしより濡れた 乗って あそこが 水浸
しになって うわあ はっきり見えるぞ』

『 こ、怖い 啓太殿 あんまりそこに指 ないで欲
しいでござる 見えちゃいますで ふええっ いい……』

「……………」

「……………」

しばし静寂な空気が二人の間を過ぎていった。

サクラとスノウはお互いの顔を見合わせ、ニコリと微笑み合つと
声を押し殺しながら吼えた。

「お、おおおのれセツナさんめえええ……！？ 私の啓太さん
を誑かして（自主規制）するとはアアア……！」

「セツナアアア……やっぱりアンタ今月のお小遣い減給じゃコラ
アアアア……！」

メラメラと嫉妬の炎を燃やす猫又一匹。ヒートしたままの状態でサクラとスノウは這いつくばりながら屋根裏部屋を抜けると、大急ぎで啓太の部屋へと向かった。

そして同時刻。

「……ほら、見てセツちゃん。ぐっしより濡れた手が、あの人の肩に乗ってる。あそこが幽霊のいる場所だろうか。海で死んだ霊なのか、すつげえ水浸しになってるな。……うわあ、幽霊、はつきり見えるぞ」

「こ、怖いから実況しないで下され啓太殿……！　そ、それからあんまりそこに指を差さないで欲しいでござる……見たくないのに見えちゃいますで　ふええっ、こわいっ……！」

怖い怖い言ってる癖に、セツちゃんしつかりと見るんだな。しかし怖いけど見たいって気持ちは分かる。すげえ分かる。

怖いもの見たさの好奇心の方が勝ってるのかね。それにしても怖がるセツちゃん可愛い。しつかりしてるから苦手なもんなんて無いと思っただけで、やつぱり女の子だったんだな。

と、彼女の横でしみじみそんなことを考えていると、ピンポンピンポンピンと玄関からチャイムを連打しまくる音が聞こえてきた。やけに訪問者焦ってるな。

「はい、そうチャイム鳴らさなくても開いてますよ」

「いよいよもって死ぬがよおおおいつ……！」

「理想を抱いて溺死しろおおおおお!!」

「どわーーーーー!!!?」

ドアを開けた瞬間、どこぞの首領と剣士を彷彿させる台詞を発しながら二人　サクラとスノウが俺に飛び掛ってきた。

スノウは直ぐに俺から離れ、キツ、っと鋭い目（猫目）でセツちゃんの方を見ると、彼女目掛けて勢いよく跳躍し、彼女の首根っこを掴んでぶんぶん揺すりはじめた。

突然の事態にセツちゃんもワケが分からないのか「あわわわわッ!?!」と混乱状態に陥ってた。

「啓太さん酷いです酷いですう！ 私というものがありませんがセツナさんに手を出すなんてえ！ やっぱりあれですか、忍者コスで色仕掛けですか!? 誘惑されましたか!? 薄い忍者装束を着たセツナさんに腕を捕まれてさりげなく胸に手を持っていかれて、『もつと……強く触ってもいいのでござるよ?』とか言われたんですかコンチクショー!? なら私もスケスケエロ忍者姿で同じことしたら啓太さん襲ってくれますかー!? どうなんですかー!?」

「オメーは部屋に入ってそうそう何を言っとなるんだ!? 脳内ピンクにしても度が過ぎるぞ!?」

「セツナアアアア！ この裏切り者ー!! あんたなら絶対にしないと思ってたのにー！ 主人の好きな男を寝取るなんてどんな神経してんのよあんたはー!! 護衛の風上にもおけないヤロー……いやムスメねコラアアア！ 今すぐ啓太にあんたの恥ずかしいエロエロヌード写真を見せびらかすぞオラアアア！」

「なっとなななな何を言ってるでござるか姫ー!? 寝取る以

前に拙者は啓太殿に何もやってな……っていつの間にそんな写真を撮ったのですか姫ー！ 今すぐ消すでござるー！！」

向こうも向こうで何かスノウが泣きながらセツちゃんにつつかかっているな。一体何が起きてやがるのでしょうか。

「かセツちゃんのエロ写真見せびらかされても俺得にしかならんのだが。本当にあるのなら是非とも焼き増しかZIPでくれ。」

「ちよつと聞いてるんですか啓太さん！ セツナさんの誘惑に負けて胸を強く揉んだ後、どうしても自身の欲望を抑えきれず、おもむろに彼女の服をたくし上げてそこから飛び出た（ピー）をわし（ズギヤーン）してからしゃぶ（今晚はしゃぶしゃぶだね）とか なんてうらやまけしからん！ むしろ私も混ぜやがれです！」

「オメーも妄想は大概にしゃがれ！ それ以上卑猥なこと言ってる と上のほうのお偉いさんから死刑宣告が下るぞ！ 強制的にストツプが来るぞコラ！」

「だ、だってだって啓太さんが うつつつ……ふえええんっ……！」

あーあ。もう何か今度はぐじぐじ言いながら、俺の腰を抱きしめて泣き出したよコイツ。もう本当何なのさ。俺いったい何かした？ ただセツちゃんとテレビ見てただけなんだけど。

それに最近コイツ甘えてくる率がハンパねえな。これで姿が猫だつたら思い切り愛でてやるところだが、人間の姿じゃ意味が違ってくる。

でもまあ、泣いている彼女に追い討ちをかけてやるほど、俺も外道じゃないからなあ。と、そう思いながら、俺はポンポンと彼女の頭を優しく撫でてやった。

「……はいはい。俺がいなくて寂しかったんだな。だからもう泣くな。ハンカチ貸してやるから涙と鼻水を拭け。後どさくさにまぎれて人の股間に手を伸ばすんじゃないやねえよコラ」

「……チツ」

やはり一瞬でもコイツに油断はできんな。わざとか、俺に聞こえるように舌打ちしたのはわざとかコラ。しばくぞ。

向こうも向こうで何か鎮火したみたいだから、ちよつと行ってみるか。やれやれ、面倒くさいったらありゃしない。

「おい、スノウ。一体全体どうしたってんだよ。部屋割りの件はもう諦めたんじゃないのか？」

「うう……、さっきまでセツナとえっちい事してたんでしょ？ こんなんだったら部屋割りの意味が無いじゃない」

「……はあ？ お前何言ってたんだ？」

「とぼけないでよ！ さっきまで『水浸し』とか『ぐっしより』とか『乗って』とか『濡れるッ！』とか言ってたじゃん！ 筒抜けだったんだからー！」

「そんなに声が大きかったのか？ ……ってか『濡れるッ！』は言った覚えがねえけど」

ホラー番組見てた時に色々セツちゃんに言ってた覚えはあるがね。

「ほらー！ やっぱ言ってるじゃんー！ このエロスケベー！」

「や、まあ。そりゃほらーって言われてもホラーだからな。でも工口いこと言ってねえけどなあ……」

「と・も・か・く！ やっぱり啓太さんがセツナさんと一緒の部屋なんてダメです！ これ以上人のダンナにちよっかい出されたらたまったもんじゃないです！」

「そーよそーよ！ しかも部下に伴侶を寝取られるなんて不憫すぎるわ！ こうなったら二度とこんなことが出来ないよう性的な意味で教育しなおさないと ってちよっとなと啓太聞いているの！？ 啓太、けーいーたー ！？？」

「ひええええ……なにアレ怖いですよう……！」

「ちよ……あれマジ洒落になんないでしょ……！？？」

「ふ、二人とも拙者の後ろに隠れないでくだされ……！」

それから何事もなかったかのようにホラー番組を継続して見る三人。いや三匹。さっきまでの喧騒が嘘のような様子である。

この二人が単純なだけかもしれないが、それでも夢中になって見ってしまうホラー番組って凄いいよね。とか思いながら俺は、奥の方にあるイスに座って三人を眺めていた。

……さて、サクラとスノウがテレビに夢中なうちにこっそりと。

「あれ、啓太。浴衣持ってどこに行くの？ まさかお風呂？」

……しまった。ちょうどCMに入りやがったか。
抜き足差し足忍び足で歩いてたのに思い切りばれちゃった。

「お風呂？ お風呂ってことは大浴場ですか？ ていうことはスノウ。流れるに混浴も勿論ありますよね？」

「……うーん、確か、あったような気がするわ。確か混浴の時間帯も今ぐらいで……」

「……ほう。ということは啓太さん……」

「……そういうわけね。やだ啓太ったら……うふふふ……」

途端に二人がにまあ……といやらしさ（ハレンチに限る）を含んだ笑みを浮かべて俺に近づいてくる。

その時の俺は多分無表情で、蛇に睨まれた蛙のように冷や汗を流しながら硬直していただろう。

「一緒にオフロで洗いつこしましよ啓太さああああんっ！ 主には出せないところとかあああ！」

「一緒にオフロ入るわよ啓太あああああ！ 今なら肉体スポンジが無料体験中！」

俺は浴衣をもって今世紀最大級のダッシュでその場を逃げ出した。こうなることを恐れてこっそり行きたかったのに。ちきしょーめ！

まあそんな感じで何やかんやあつて風呂も入り（カノンさんとカイさんに頼んで警備を置いたので二人の乱入はなかった）浴衣になって今に至る。

就寝前だから多少はこの猫又二匹共も落ち着いてんだらうと油断していたが全然そんなじゃなかった。

「浴衣姿の啓太さんギザカツコヨスですよハアハアハア……！」

「やっぱ下つてあれよね？ 下着よね？ いや、もしかして何も履かず？ ……やば、興奮してきた」

むしろヒートアップしてた。もちろん悪い方の意味で。

「何アホなこと言つてんだお前らは。んなことよりさっさと寝ろ。今日は一日遊んで疲れてるんだろーが」

「確かに疲れてるけど………なんだか旅行気分でワクワクしてるんです。もうちょつと遊びましようよー」

「そーよ啓太。せつかくのお泊りなんだから早くに寝たら損よ損」

「修学旅行に来た学生かお前らは。いいよ、んじゃ気の済むまで起きてなさい。俺はもう疲れたから寝るよ」

「ごそごそと二人に背を向けて布団に入る俺。まだ時間は十一時前だったが、どうも今日は疲れた。早く眠りたい。」

「……と、そう思っていたのも束の間。五分も経たないうちに、何やらお腹あたりに違和感を感じた。なんか温かい。」

「……最早何がいるのかくらい検討はついている。はあ、とため息を吐いて掛け布団を捲り上げると、案の定そこにはサクラがいた。」

「何をしておるか貴様」

「え、いやそりゃあもう、ナニをしてるって言われたら、疲れて寝静まった啓太さんをグチヨグチヨのネチヨネチヨにしようかと……あつ、あらやだ、私つてば本音が出ちゃいましたドウヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨ……!」

「やっぱりか……つてお前笑い方汚ねえな!？」

頼むから女の子がそんな邪悪な笑い方しないでくれ。

それからも一向に俺から離れようとしないサクラを見て、やれやれ顔でセツちゃんが俺から彼女を引き剥がしてくれた。

「セツナさんはなしてえーん」とか言いながら、サクラはずるずると布団から追い出されていった。ざまあ。

さて厄介な変態も忍者が引っぺがしてくれだし、早速眠りにつこうかな　と思つた矢先。

やはりというか何と云うか、サクラのようにコソコソとでなく、堂々とソイツは俺の布団を引っぺがして入ってきやがった。

で、俺の横に入ってきたと思つたら、今度は人の胸に手を置いてソイツ　スノウはポツと頬を染めて瞳をうるうるさせながら言った。

「……優しくしてね？」

「帰れ」

ごちん。とその場で啓太チヨップをくらわせてやると、今度は別の意味でスノウが涙目になった。で、ぎゃんぎゃんと俺にくっついてきた。

「いったああああいつ！ なによお啓太！ ほんのジョークなのにぶつことないじゃないー！」

「おめーらが言つとジョークに聞こえないんだってマジで。つてか俺眠いから本当に出て行つてくれるか？ 遊び足りねーんなら明日遊んでやるからさ」

「ぐっ……うっ、まあ遊び足りないっちゃ足りないけど……分かつたわ。それなら明日はエンドレスお医者さんごっこで一日中遊んでもらうからね。もちろん大人のお医者さんごっこね」

そういつてスノウはしぶしぶと布団から出ていった。……なんかとんでもない遊びをやらされそうな気がするな。まあやばくなつたら逃げるか誰かにSOS要請頼もつ。一日中とか死んでしまふ。

なんとか変態猫二匹も興奮が冷めたようで、眠たそうに目を擦りながら自室へと戻っていった。

というのも、二人して人の部屋で寝ようとしたからセツちゃんと二人で彼女達を自室まで送つてやつたんだがな。

本当にあの二人はいるだけで嵐のようだ。二人がいない今、この部屋はとても静かで落ち着いている。セツちゃんは温かそうなお茶をくいくい飲んでいた。

と、そんな様子を見ていた俺の視線に気付き、セツちゃんはニコリと笑つて訊いてきた。

「啓太殿もお茶は如何でござるか？ ここのお茶は天然の三つ葉か

ら作られたお茶っ葉で、健康にもいいでござるよ」

「あ、そうだな。頂くよ」

セツちゃんに湯飲みをもらってお茶を注ぎ、くいつと一杯。

……うん、なんだか独特な味だ。不味いつてわけではないが、なんだか形容しがたい不思議な味だ。

日本茶ぽいのかなと思ってたけど、やはりこちらは猫又の世界。人間とは少し味覚が違うようだ。

と、俺が首を傾げていると、セツちゃんはちよつと困った顔で言う。

「やはり、人間の方には少々なじみの無い味でござったか？ 美味しくなかったら申し訳ないでござる」

「あ、いや、そんなじゃないよ。ちよつと不思議な味がするなと思っただけで。美味しくないわけじゃないぞ」

「あ……それなら良かったでござる。……そろそろ就寝しなさるか？ 拙者も、そろそろ眠気が……」

「ん、そだな。そろそろ寝るか。あの二人にもみくちやにされたけど、布団をなおして寝るか」

いそいそと布団の中に入り、寝る準備に入る。セツちゃんも今日一日疲れたのか、八重歯をきらりと見せながら大きな欠伸をしていた。「こらセツちゃん。女の子がはしたないぞ」と笑っていつてやるとセツちゃんは顔を真っ赤にさせてあたふたと慌てふためき「もつももも申し訳ないでござらんっ！」と言いながら俺にぺこぺこ謝ってきた。そんな頭下げなくてもいいのにな。

セツちゃんは忍者服で寝るのかなと思っただけど、トイレに入って数分経った後、浴衣になって出てきた。

……うーむ、浴衣美人だねセツちゃん。纏めていたポニテ髪もふあさつとおろして、いつもの忍者でなく長髪の和服美人がそこに立っていた。不謹慎だがちよつとドキツとした。

俺がセツちゃんの恋人ならここで「綺麗だよ」とか齒の浮きそうな台詞を言いまくるんだろうな多分。ああ、やっぱり男ってばアホなのね。

電気を全部消して就寝体勢。隣の布団にはセツちゃん。寝る準備はいつでもオーケーだ。普通ならこのシチュエーションは色々とヤバイ雰囲気全開なのかもしれないが、俺は絶対に彼女に手を出さない出すつもりも無い。つか気を許されてもセツちゃんに手を出したりなんかしたら本当に殺されるわ。ボッコボコにされるわ。

数分が経っただろうか。頭に手をやって薄暗い天井のシミを数えていたのが暇になって、「なあ」とセツちゃんに話しかけてみた。彼女もまだ寝ていなかったらしく、ごそごそと布団から顔を出してこちらに覗かせてきた。

「……はい、どうしたでござるか？」

「セツちゃんってさ。スノウのボディガードなんだよな」

「そうでござるが。それが何か……」

「いや、俺とおんなじくらいなのに大変だよな、って思っただけ。死ぬ思いをして身体を鍛えてさ、命をかけてスノウを守るっていうのも……ん？　そういや今日セツちゃんの水着姿見たけど、別に腹筋割

れて無かったような……?」

「きよ、今日の海のことは言わないでください……! 思い出すだけで恥ずかしいでござるっ……! あ、あんな薄い布切れで肢体を晒したなんて……!」

「あ、悪い悪い。……でもさ、セツちゃんすっぱー似合ってたぞ。こっついうのもなんだが……その、可愛かったし」

「……えっ? ……ええっ……ふええっ……!??」

……しまった。口が滑るとはこっついうことか。

迂闊だった。本当に迂闊だった。俺はバカか。セツちゃんはその話はずるなっつてんのに、更に追い討ちかけるようなこと言っつて。

本当に俺は鈍感だ。彼女の気持ちくらい直ぐに察してやらないといけないのに。

セツちゃんにだって護衛としてのプライドがあるはずだ。着たくないものを着て、可愛いなんて言われたって嬉しくもなんとも無いはずなのに。

「……あー、悪い。今の忘れてくれ。何でもない。さてもう本当に寝よう。明日も早いんだし本当に寝よう。それじゃおやすみ。また明日な」

慌てて話題を切り替えて、俺は布団を頭まで被ってそのまま寝に入った。なんだか逃げたみたいだが仕方ない。他の策が浮かばなかったんだ。

……それにしても、何か心臓の音に良く似た奇妙な音(工事の音だか作業の音だか)が近くからすっぱえ聞こえてくるが、多分黒服た

ちが夜遅くまで頑張っている音だろう。夜分遅くまでご苦労さん。後でジューズをおごってやろう。

目を閉じて数分が経った後、俺の頭の中で睡魔が「やあ」と訪れてきた。

俺も「いらつしやい」と睡魔を迎えつつ、おもてなしをしようと動いたところで　ぶつりと意識が無くなった。

チュンチュンとすずめが鳴いているのかと思ったら実は全然そうではなく、物音がしない無音の空間で俺は目が覚めた。

……あー、やべ。筋肉痛だ。身体のふしぶしがすっごい痛い。動くのも出来んくらい身体が痛い。

……まあ、あんな化け物クラスの太タコと戦っただりしたらなあ……よく撃退できたよアレ。下手したら俺死んでたぞ。

まあいいや、とにかく起きよう。まだ朝の七時だけど早めに起きておかないと、あの変態どもの餌食になってしまうからな。

そう思いながら身体をむくりと起き上がらせようとして　ふと、左手にむにゆりと柔らかい物が触れた。なんというかソレは、ゴムマリというか、掌を圧迫するような弾力性に富んでいるというか、とにかく想像を絶する柔らかさだと言うか。

「……………」

寝ぼけ眼のまま俺はその柔らかい物があるところに視点を定め

そして、くわつと目を見開いた。

……オーウ。まさか、俺の布団に入ってすうすう寝ている黒髪の人物はもしかして、This is セツちゃん？

つてことは、この掌の柔らかさは、まさかセツちゃんのおっぱい。まさかそんなこととは思いい、俺は失笑を浮かべながらあいている方の手で布団を退けた。そして俺の脳髄に電撃が走った。

はだけた浴衣に、足をまげてくの字の姿勢で寝ているためか、むつちりとした太ももが浴衣からはみ出て、羞恥もなくあらわになつている。大きく開いた胸元からは、見えそうで見えない超限界領域スーパージミットドが広がっており、その巨大と称するに相応しい物体の上には、俺の手が覆い被さっていた。ものの見事に、掌が大きなそれに埋まっている。その魅力的なプロポーションでぐつぐつと寝ている彼女。セツちゃんは、胸を触られても一向に起きない様子である。

……あー、うん。その。さつさとそのおっぱいから手をどけると言われても仕方ないが、その前にこれだけは言わせて欲しい。

セツちゃん、寝相悪すぎんだろオイ……。

「んっ」

くの字の姿勢から身体を曲げて、更に彼女の浴衣が乱れていく。一瞬だけ見えてはならぬものが見えた気がして心臓が跳ね上がった。

い、いかん。これはマジでヤバイ。刺激的な朝は見慣れたはずだったが、こつても間接的にこられると弱いと言つか、つていうかこんな朝っぱらからエロ展開はよしてほしいと言つか、今二人が突撃でもされたら一巻の終わりだと言つか。

そこでふつと考えるのをやめ、とにかく早く彼女に布団を被せてやるうと手をかけたところで 入り口のドアが勢いよく開いた。

次の瞬間には一番出会いたくなかった二人 サクラとスノウが「突撃！隣の晩飯」的なノリで元気よく入ってきた。

「あつたーらしいあさがきたー きぼーうのあーさーがー
てなわけでお二人とも、おはようございます！ まさか深夜までギシアンやってまだ眠いとかそんなこと」

「ほら二人とも、もう朝よ！ さっさと支度して城に帰って啓太はインドレスお医者さんごっこの準備でも」

そこまで言ったところで、笑顔だった二人の顔が、笑顔のまま硬直してしまった。

ギギギ、とまるで機械人形のように二人は自分たちの顔を見合わせると、機械的な動作ですつと俺の方を向いた。冷や汗と脂汗がだらだら流れ、真っ青のまま硬直している俺に、その感情がこもっていない笑顔を向けた。

そして、何かを弁解しようとして口をあけた瞬間、二人の顔が笑顔から鬼になった。般若と阿修羅、と表現したほうが正しいと思う。

その恐ろしい顔で、二人は目にも留まらぬ猛スピードで俺に飛び掛ってきた。俺、逃げる暇無し。

「捕食、性的な意味で捕食ウ！ 今すぐ啓太さんを齧るって液塗れにしたるわいコンチキシヨウめがあああッッ！」

どーも啓子ですコンチクショウ 1

ピピピピピッ。という携帯のアラーム音。

耳障りとまではいかないが心地よくは無い電子音によって俺の意識はうつすらと戻ってきた。

携帯を開いてアラームをオフにする。時刻は八時をまわっていた。

……うむ、目覚めてからなんだが、頭が痛い。すっごい痛い。

なんつーか……内側から鈍器で軽く殴られ続けているような、そんな痛みを感じてしまう。それになんだか昨日の記憶も曖昧だし……。

まあいいや。とにかく服を着よう。

そう思っただけはベッドから身を乗り出して、洗面台へと向かう。その途中で。

「……………」

なにやら、俺の部屋に見慣れない人物がいることに気がついた。

洗面所の入り口手前にある大きな鏡に、見たことも無い女性が立っていた。

その女性は灰色のハーフパンツと男性用シャツしか着ておらず、ボツサボサの茶髪はところどころにはねてしまっている。いかにも眠たそうな、顔色の悪い女性だった。

どちら様ですか。ここは俺の部屋ですよと言おうとして、ふとあることに気がつく。その女性に手を伸ばそうとして近づいたら、向こうも俺と同じ動作をしてきたからだ。

この辺りで呆然としていた意識が鮮明に、はっきりと戻ってくる。

視界良好、感度良好、オールグリーン。

「……………あれっ？」

しかし、はつきりと描かれていく色彩豊かな世界とは裏腹に、俺の視界に見えるものは全くの偶像といっても良いほどの存在　つまり、俺がいた。

……………いや、訂正しよう。その鏡の向こうには、何故だか知らないが、『女』になつた俺がそこにいた。

「……………なんじゃいこりゃあああああああああッッ！？
！？」

がしいつ！　と大鏡をふん捕まえて、目の前にいる『俺』を凝視する。

向こうも向こうで大層驚いているのか、さっきまで眠たそうだった眼をとつても大きくさせていた。

……………え、ちよつちよつと待てよオイ！　一体全体どーなつてんだよこれー！？　お、俺の姿が女になつて……………鏡の向こうだけじゃないのかこれ！？　マジックミラーじゃなくて本物！？　マジもんの本物！？　とそこまで考えたところで、ふと俺の視線は『ある所』へと向かった。それは真下。俺の自慢の強靭な胸板と呼べるべきものが　いまじゃたぶんつと擬音が発せられるくらい豊満なそれに変わっていた。

間髪いれず、そして何も考えず俺は、その自分の胸をわしつと揉んだ。

あの硬かった胸板が、とても柔らかかった。

ぐにぐにと触って現実逃避して　そしてこの感度と間食が夢じゃないことを知って　絶望した。

「ううううあああああああッッ！！？」

悲痛な叫びが俺の部屋を木霊させた。

窓を開けていようものなら、ドップラー効果を残しながらその声は遠くまで反響していっただろう。

話をしよう。

あれは確か……昨日のことだ。

六月十五日。俺の二十歳の誕生日。確かみんなが盛大に誕生パーティを開いてくれた。

二十歳ということなので初の飲酒経験だったのだが　その盛り上

がり方が尋常じゃなかった。

ミイちゃんやレンくん未成年は何か俺が保護して匿ってやったから、アホな大人どもの飲酒に巻き込まれなかったと思うが……それでもこのパーティは群を抜いて酷かった。

今日二日酔いなのもそのせいだろう。

スノウや他の人に「のーめのめのめー！」とかはやされた記憶も多少はある。

酔ったせいでセツちゃんは「身体があついですう……啓太どのお……」とか言いながら忍者服を脱いで全裸になって俺に飛び掛ってくるし、スノウやサクラは酔って無くても卑猥な言葉を捲し上げて全裸になって俺に飛び掛ってくるので大変だった。その光景をただケラケラと笑いながら見詰める三人　カイさんとカノンさん、ミスリアもまた大量の酒を飲んだのか、一向に助けくれなかった。

未成年二人を国王　ヴェイルさんに預けておいて本当によかったと思う。こんな光景失神ものだったの。

まあ俺も結構酔ってたから、記憶には残ってはいるけど全裸の映像は残ってないんだよな、残念だけど。

……セツちゃんの肉体美がどんなだったかを覚えてないのは癪だが、まあよしとしよう。セツちゃん自身はおそらく脱いだことを忘れていただろうが、むしろそのまま忘れた方がいいと思う。そんなことがあったなんて本人が知ったら絶対に卒倒するだろうし。残りの二人は全裸になっても別になんとも思わないだろうがな。

そんな感じで大酒乱パーティを延々と続けていたんだけど　その後の記憶がどうも曖昧だ。

確か……テールに大量に詰んであったお酒が無くなって、スノウやサクラが地下にある酒蔵庫や厨房の冷蔵庫から大量に持ち運んできて、中には液状の薬みたいな、独特の臭いを放つ酒もあって。

……薬？

液状の……薬……そうだ。

確かスノウが「お酒追加しましたあ　」とか持ってきて、ボトルのようなビンのような、変な入れ物に入った液体を飲まされた……ような覚えがある。

明らかにそれは酒じゃなかった気もするが、何せ気分が高揚しっぱなしだった昨晚のことだ。もらうもんは遠慮なく貰って飲み続けていた。

変な液体を飲んだその後の記憶は、全く無い。

頭の片隅にちょこつとでも残ってれば思い出せそうだが、全くと言ってもよいほど思い出せない。

……うーむう。やはり考えられる原因としては、スノウの持ってきた薬っぽい何かだと思うな。その薬を飲んでしまったせいで、俺の身体が男から女に変わってしまった。っていうのが一番の理由になると思う。それにしても……人の性別を変えてしまう薬があるのは恐ろしいな。身体つきだけじゃなく顔つきも、更に声まで変わってるし。

兎にも角にも。この現状をどうにかしないとほんととも言えないな。半裸のままじゃダメだから、今は服を着よう。

……そうだ、サクラやスノウが来るまでに服を着て何処かへ逃げ込まなければ。

見知らぬ女（俺だけけど）が下着姿で俺の部屋にいるってことを知ったら、絶対あいつ等暴走するだろうし。

まずは服を着て何処か　そうだ、カノンさんの研究室に逃げ込もう。それがいい。事情を話して元に戻してもらおう薬を貰って、ほとぼりが冷めるまで何処かに身を潜めていよう。

そう思い、俺はハンガーにかけてあった服に手をかけて素早く着用した。うむ、いつもならこの辺でサクラかスノウが「おはっよーございまーすっ」とか言っ入ってくるのが落ちだけど、今回はスムーズにいった。毎度毎度同じようなことがあってたまるかっての。その後は流石にボサボサじゃダメだろうと思って髪を櫛で整えたり歯を磨いたりした。余裕そうに見えるが全然余裕じゃない。いつ彼女らが突撃してくるんだと思うだけでヒヤヒヤする。

さて、準備万端。大切なものもちゃんと持った。後はこっそり部屋を出てカノンさんの部屋に向かうだけだ。

そう思いながら俺はドアを開けて一気に廊下を駆け出そうとしたと

ころで。

「ッッ!？」

ドアの目の前に、パジャマ姿で寝ぼけ眼のサクラがいることに気がついた。

「ふにゃあん……啓太さーん……」

手には子猫のデザインがついた枕を携えて、くしくしと手で目を擦りながらサクラが眠そうに呟く。

その桜色のパジャマは胸元が大きく開かれていて、同じく桜色のブラがはつきり見えている姿がえらく刺激的だなと思った。そして何より……。

寝ぼけていたとはいえ、パジャマ上とパンツ一枚で訪問はねーよお前。

誰かに見られたらどうするつもりだったんだ。

「きゅっっ……」

彼女はその場で俺にへなへたと倒れるようにしがみついてきた。

まだ意識が朦朧としているせいか、俺の姿が女になっているのから分らないのだろう。

……しかし、このままではマズい。今はまだ認知していないが、意識がはつきりとした瞬間、俺はおそらく彼女にボコボコにされてしまっただろう。

声が違うから出そうにも出せない。とにかく彼女の束縛から抜け出さなくては。そう思っただけで身体をよじらせた瞬間

「ひいつ!?!」

胸の部分に奇妙な違和感というか、妙な刺激が走って、俺は迂闊にも変な声を上げてしまった。

見るとしがみついていたサクラが、俺の胸を右手で触っていた。ぐにぐにぐにぐにと超ハイペースで揉んでいた。驚きで目を白黒させながら、サクラは一心不乱に人の乳を揉んでいた。

「啓太さんにおっぱいがある……だと……!?!」

……うわあ。サクラちゃん。意識、戻っちゃったよ……。

「あなた、いったい誰ですか……!?! まさか啓太さんを色香で陥れようと部屋で待ち伏せしていたと……!?! おのれ、者どもであえであえ! 曲者じゃ!」

「わーっ! ちょっと待て! と、とりあえず部屋に入れ! 事情話すから叫ぶな、暴れるな、人呼ぶな!」

口を塞いでサクラを俺の部屋に連れ込む。

もごもごと必死に口元を動かして暴れるサクラだったが、やはり彼女も女の子。

俺自身も女になってしまっているが、それでも日々の筋トレの成果もあってか、多少強引ではあるが無事彼女を部屋に連れ込むことが出来た。

とりあえずサクラをベッドに置いて小休止したのはいいが、彼女は一向に落ち着く素振りも見せず、俺を猫目で威嚇しながら言った。

「わ、私を啓太さんの部屋に連れ込んでどうするんですかっ! ……
…まっ、まさか! 啓太さんがいないことをいいことに、前菜とし

て私を力づくで手籠めにしようって言うのですか！？ い、いやー！ 啓太さん助けてー！ 見知らぬ女人に襲われるー！ さすがの私でも知らない人との百合は無理ですー！」

「んなことするかッ！ アホウなことやってねーで落ち着け！ お前、俺が誰だか分からねーのか！？」

「何いってんですか！ わかるはずないですよ！ ってかむしろあなたみたいなのなんて知りたくもないですッ！」

……ぐあっ。今の台詞すっげえ心に来た。グサッと胸に刺さったよ。

「と、とにかく落ち着いて。俺はお前を襲ったりなんかしないから、今は話を聞いてくれ。頼む」

「……むう、一体何なんですか？ それに啓太さんの部屋で何をしていたんですか？」

ぎゃんぎゃん暴れていたサクラもようやく落ち着いたので、しぶしぶと口を尖らせて俺の話に耳を傾けてくれた。それでもえらく敵意をあらわにした目つきで睨まれているが、まあ仕方ない。こんなナリでいれば誰だって怪しむよな普通。

「えっとな……うーん。何から言えばいいかな。つまり、その……」

「はい」

「……率直に言えばな、サクラ。俺は啓太だ。分かるよな？ 藤咲啓太だ」

「……………はあ？」

……………うわ、すっげえ変人のような目で見られてる。
説明不足だろうなとは思ってたけど、ものすっげえキチ イでも見る
ような目で見られてる。

「あなたが啓太さんですって？ ……いやいや、意味がわかんない
です。何処をどう見れば啓太さんに見えるんですか。冗談もほどほ
どにしてください」

「いやそれが冗談じゃないんだって！ 昨日お前、俺と一緒に酒飲
んだよな？ それは覚えてるか？」

「……………う？ うーん、そういえば昨日は啓太さんの誕生パーティで
お酒を飲んだような覚えが……………」

「だろ。その後にみんな酔っ払ってそのまま自分達の部屋に戻った
る。……………で、お前は酔っ払ったフリをして俺の部屋に入り込んで俺
を襲おうとした。……………昨日の出来事だ」

「……………あ、そ、そういえば……………。啓太さんしか知らないのに、何で
あなたが知ってるんですか？」

「……………あーもー、お前もパニくってんのな。……………仕方ない。これか
ら話をしよう。あれは今から」

「……………じゃあお姉さんの名前は？」

「藤咲綾音。現在OLとして活動中。今なお彼氏募集中」

「……じゃあ私の愛用のブラは何色？」

「……桜色です、はい」

「それじゃ私のスリーサイズを」

「上から9……ってもういいだろコラ！ 十分俺だっただけだろ！」

トップを言いかける前に口を噤む俺。

ふう、危ない危ない。危うくサクラのスリーサイズを世間に知らしめてしまうところだったぜ。俺が知ってるのも変な話だけだな。

サクラは腕を組んで首をかしげ「ふーむ」と唸ると、じろじろと舐めるような視線で俺の肢体を見詰めた。なぜか知らんがぞわりとした。

「うーん、話を聞く限り、確かに啓太さんだというのは間違いなさそうなんですけど……それならそれで、何でそんなカッコになっちゃったんですか？ 確かによくよく見れば面影もあるっちゃあるんですけど……それでも、見事なまでに女の子に変身しちゃってますよ。身体つきとか、もうムツチムチじゃありませんか」

「そんなこと言われても嬉しくねーよ。はあ……俺だっただけでこんなことになったのか教えて欲しいくらいだぜ」

改めてこの現状が夢でないことを再認識して、がっくりと肩を落とした。

そんな様子を見かねて、サクラが笑いながら俺の肩に自分の手をほ

んぼんと乗せた。

「そんなに落ち込まなくてもいいじゃないですかー。カノンさんに頼めばなんとかなると思いま　ハッ!?　おちこんでいるで気がつきました!　啓太さん、まさかパンツの中のおちん……もといパンツの中で落ち込んでいるものはちゃんとありますか!?　脈動みなぎる原始のアーキオプテリスは健在ですか!?　ちょっとパンツ脱いでください!　今すぐ私が確認しますから　」

「確認しなくてもねーよ!　……チクシヨウ、俺の全部を持っていかれてんだよ……くそつたれめ……!」

道理でトランク스가スースーすると思ったんだ。

胸に変なモンがついてると思ったら、こっちは綺麗さっぱり消えてなくなつてたつて落ちだよ。

更に肩を落とす俺を見て、サクラが大慌てで手をぶんぶん振り出した。いかにも私急いでますって様子で。

「早くカノンさんのところに行きましょう啓太さん!　もしこのまま治らなければ一巻の終わりです!　啓太さんとの百合展開は誰が何と言おうと全然OKなんですけど、流石にずっとそのままというのはダメです!　物足りません!　なので早く行きましょう!　あ、でもその前に一発、はじめての百合とやらを一緒に味わいませんかドウへへへへ?」

徐にパジャマを脱いでハアハアと息を荒げだした変態を優しく丁寧にしびき倒して、俺は彼女にせつせと服を着せたのち、カノンさんの部屋へと向かった。

とにかく、原因説明が先決だ。手っ取り早く治してもらって、普通の身体に戻してもらおう。

研究室のドアを開けると、なにやら神妙な様子で話をするスノウとカノンさんがいた。

ドアを開けたことにも気付かず、熱心に二人で話し合っている。はて、何かあったのだろうか。

「……それで、どこにも無いんだね。私がつった薬」

「……う、うん。確か昨日、パーティで色んな物をここから持ち出した覚えがあるから、多分その時一緒に持って言ったんじゃないのかと思う……」

「……全く、折角無償で作ってあげたのに。どこに薬を置いたか覚えてないのかい？」

「……うーん、確か啓太にお酒渡してどんちゃん騒ぎして、そこから記憶がなくて……あら？ サクラじゃない。それから……誰、その人？ 見かけない顔だけど」

その辺でようやく気がついたのか、スノウとカノンさんは此方に向き直って話しかけてきた。

二人は当然俺の姿を見て、誰だろうかと思議そうな表情をしていた。当然だ。一発で分かったら逆に怖いぞ。

「あ、えつとですねー、この人は……誰だか分かります？」

「はあ？ 分かるわけじゃない。全然見たこともないし、何だか人相悪くていかにもスケバン（死語）みたいな顔つきしてんじや

ん。バッテン書かれたマスクしたら良く似合うんじゃない？」

「……こ、このヤロウ、まさか正体が俺だと知ってて言ってるのか……！？」

「こらこらアシュリー。初対面の人にそんなこと言っちゃ駄目じゃないか。………すいません、それで、貴女はどちら様ですか？」

「……藤咲、啓太です」

「………はい？」

笑顔で訊いてきたカノンさんが笑顔のまま固まった。

同時に隣にいたスノウが嫌悪をあらわにしながら俺にぎゃんぎゃんと噛み付いてきた。

「あんたバカア？ あんたみたいなチンチクリンが啓太なワケないじゃん。ジョーダンもほどほどにしないと、その変に大きい胸を吸収しちゃうわよ。このスケバ」

「……えらく俺に好戦的な態度を取るじゃねえか。え、向こうの世界で俺に拾われた真っ白仔猫のスノウさんよ？ そんなに啓太チヨップを食らいたいかな？」

「………えっ？」

スノウは驚きの声を上げて後ろへ一歩下がった。何故そんなことを知っているのかって顔だな、うむ。

そりゃあ知ってるさ。本人だもんな。本人かサクラにしか知らねえことだもんな。

「他にもあるぞ。お前には護衛がいて、名前はセツナ・アカツキっていう。ドラマの影響で忍者を始めた、天然だが生真面目な猫又がいる。父親の名前はヴェイル・ラインハート。この国を治める王様で、お前には兄弟がいて、上には兄のカイがいて、下には弟のレンがいる。……どうだ、一通り上げてみたが間違いないか？」

「……な、なんでそんなことまで知ってるのよ。……まっ、まさかあんた、私のストーリーカー!? いやああ、女のストーリーカーとか超キモいんですけれどモー!」

「ストーリーカーじゃねーよ! さっきから俺だっって言ってるんだろがこのボケ猫娘!」

頭を両の手で抱えて、くねくねと不可解な動きを見せてるスノウを一喝。

その彼女の隣にいたカノンさんも「信じられない」といった驚きの表情で俺を見詰めていた。

「まさか……本当に啓太くんなのかい? 一体どうして……女の姿に?」

「その原因を知るためにカノンさんの研究室に来たんです。……多分、昨日のどんちゃん騒ぎの時に、何か変な薬でも飲んだんじゃないのかと思って……カノンさんはそういう薬とか作ってました?」

「いや、性別の変わる薬とかは作った覚えがないよ。……でも、お酒にこんな副作用が出るのはありえないしなあ。啓太くん、あの時研究室に入ったのかい?」

「いえ、入ったのはおそらくスノウかと。確かスノウに薬のような酒を飲まされた覚えがあるんですが……」

パツと全員がスノウの方を向いた。

「わ、私！？　で、でもそんなことした覚えは　あ」

何かを思い出したかのような声を上げるスノウ。「あ……」と間延びした声を漏らしながら、昨日の記憶を模索しているのだろうか。呆けた顔で俺の顔をまじまじと見詰めて　顔面がさあつと真っ青に変わった。俺で例えるなら、筋肉質のオカマに取り囲まれたときに見せるような表情だ。

そしてスノウはパツとカノンさんの方に向くと、彼の腕をひっ捕まえて奥の部屋へと入ってしまった。……何か人体に副作用を与えるもんでも飲ませたのか？

反応からしてすっげえ怖いんだけど。

「どうしようお兄様　あの薬　使っちゃった」

「ええっ！？　ああそうか、だからあんな副作用が　それはもう仕方ないね　残念だけど諦めなよ」

「そんなあ　ぐすん。せっかく手間かけてあんなとこまで行ったのに」

「ほら、泣かないの。　とにかく、今は啓太くんを治すのが先だよ。薬は後回しじゃないと」

「うん……」

途切れ途切れで奥の部屋から声が聞こえてくる。肝心なところは聞こえなかったが、多分スノウにとって大事な薬だったんだろう。

それから数分が経過した後、渋い表情でカノンさんと、えらく落ち込んだ様子のスノウが戻ってきた。

がつくりと肩を落として、疲労感いっぱい顔でスノウは俺を見てくる。そんな目で見るな。俺まで暗くなるだろうが。

「それで、いったいどんな薬を使っただんですか？ 見たところ、結構大切そうな薬っぽそうですけれど……」

「ああ、いや。実際はそんなに大切な薬でもないんだけどね。それにしても猫又用の……それも女型猫又の薬を人間の男性が使用すると、こんな副作用が現れるのか。これはなかなか興味深い……」

まじまじと俺の全身を見詰めてくるカノンさん。

その視線は別にいやらしいものを見るとかの視線ではないのだが、別の意味で鳥肌が立った。

だってカノンさん、思い切り科学者もとい研究者の目をしてるもん。謎を解き明かしてやるうとするオーラがものすごく感じられる。

……だ、大丈夫だね、俺。この人に身体を解剖されたりとかしないよね？

「え、えと、それで結局どんな薬だったんですか？」

身の危険を全身で感じたので、とりあえず話題を逸らす作戦に出た。その言葉は聞いてカノンさんはスノウの方をちらりと向いたが、彼女はぶんぶん激しく首を左右に振って否定の意を露にしていた。

はあ、とため息をついてカノンさんは言う。

「ん、まあ。スノウに使う予定だった薬なんだけどね。本来は別の効果が現れるはずなんだけど　いや一応現れてはいるかな　多分、女型猫又用の薬を人間が使ったから、肉体のホルモンバランスが崩れて、それと同時にXY染色体及びDNAや細胞系列の突然変異が起きてしまったんだと思うんだ。大丈夫だとは思っけれど……一度身体を見せてくれないかな？　見てみない限り、治癒する薬は作れそうにないからね」

……ふーむ、つまり猫又用の薬を人間が使ったから、身体がついていけずに副作用を起こしてしまったのか。

女型の猫又用薬って言うくらいだから、女性の体系を基盤として細胞を作り直されたってわけか。

面影は多少はあるものの、胸だの、声だの、体つきだの、全てが男から女へと変わってしまったている。

……早急に戻してもらわねばな。多分、もとに戻らないってことはないと思うけれど、こんな華奢の身体のままじゃ落ち着かない。腕とかすっごい細くなってるし。

俺はカノンさんに促されたままその場で服を脱ぎ、上着とシャツを椅子にかけてそのまま腰掛ける。

とたんに近くにいた二人が「おおっ」と感嘆の声を漏らした。一人は直ぐに落ち込んだ声に戻ったけど。

「わーお、やはりナマで見てもデカチチ……」

「本当は私がこれを手に入れるはずだったのに……ああもう昨日の私のバカタレエ……！」

「とりあえず出てけお前ら。気が散る」

やはり見られているというのはいささか落ち着かない。猫又二匹を研究所の外に追い出すと、俺はカノンさんに身体を見てもらった。全く、何の因果でこんなことになったのか。全てスノウのせいだよ。チクショウ。

カノンさんによる触診が終わって、俺は今崩れた服を整えて研究室の椅子に腰をもたせかけている。

原因が分かるまでは、なるべく身体を刺激したり過度に動かしたりしてはいけないといわれたが、まあその点なら特に問題はないだろう。

変に刺激を与えて元に戻らないとか言われたら洒落にならないし、とにかく安静にしよう。

「うーむ、結局スノウは俺に何の薬を飲ませたんだろうか　ひええっ!？」

突然　　というか再び胸に電流のような刺激が走って声が出てしまった。

見ると俺の背後から二本の腕がによつきり出っていて、その手が俺の胸を鷲掴みにしていた。この袖の柄は……サクラだなコノヤロウ。こっそり俺の後ろにいた人物　サクラはホクホクと幸せそうな顔で俺の胸をむにむにと弄っていらっしやる。問答無用ではたくぞコラ。

「はー、啓太さんのやわらかおっぱいむにゅむにゅー。ハリも重量感もありますねー。こりゃD……いやEはありまっせダンナア！」

「だああああつ！ やめろつ！ 今刺激を与えんなって言われたばつかりなんだよ、このバカっ！」

「いいじゃないですかちよつとくらいー。ほらほらー、イヤイヤ言つても身体は素直でありんすぜー？」

「アホツ！ 変に刺激すると、男に戻れなくなる可能性もあるんだよ！ いい加減しつけーと、悪魔召喚プログラムでみどりのためき呼ぶぞ！」

「ひいやあああああつ！？ みどりのためきはあかんっ！ あかんてええええええっ！？」

その言葉を聞くなり俺から逃げるように飛び跳ねて、きゃーきゃー言いながら走り回るサクラ。

ああもうコイツテンション高いな。横で肩を落として、名前の通り真っ白に燃え尽きてるスノウをちつとは見習え。

「あ、そうだ。おい、スノウ。落ち込んでないで、ちよつとこつちに来い」

椅子に座ってシヨンボリ顔で頂垂れているスノウを手招きして呼ぶふつと顔を起こしてスノウはこつちを見た。酷く疲れたような表情ではあるが。

ずりずりずりずりと人間とは思えない動作で（まあ人間ではないのだが、例えるならメクジのような動き）俺のところまで接近してこつち言った。

「なあに？ 慰めてくれるの、啓太。……気持ちはあるがたいけど、今は流石に他慰で落ち着くとは思えないわ。……まあ、別の意味で

慰めてくれるなら気持ちよくなると思っけどね」

「落ち込んだ素振りを見せつつ欲求を混ぜんな。……で、一体何の薬だったんだ？ 持病の薬か？」

「うつ……ま、まあそんなところ」

「ほんとですかー？ スノウのことですから、どうせ巨乳になる薬とかカノンさんに作ってもらってたんじゃないのですかー？」

とまあ、意地悪い顔したサクラが横からひよっこり入ってくる。

そんなわけねーだろ、と笑いながらサクラの頭をぼふぼふと撫でてやるが、当のスノウは冷や汗をだらだら流しながらもの苦しそうに黙っていた。

……え、お前。何でそこで言い返さないの？ いつもなら「そんなわけないじゃん！ サクラの馬鹿！ もう知らない！」とか言っ
てそうなのに。

「おい、スノウ。本当にどうしたんだよ。まさかお前、マジでそんな薬なんじゃ」

「……そーよ」

「え？」

彼女によって、唐突に言葉がさえぎられた。

苦虫を噛み潰したような表情でスノウは言葉を発した。

それはとつても不愉快極まりない表情だった。

で、ついに爆発した。瞳に涙を浮かべながら爆発した。

ボケなのか本気なのかわからないことを仰りながら、スノウはあふれんばかりの涙をだーっと流しながら走っていった。

が、途中入り口のドアにぶつかりそうになって、「あ、あぶね」とか冷静に言いながらゆっくりドアを開けて、再び「うわああああんっ！」とか言いながら走りさっていった。

空気読んで仕切りなおすな。一瞬ズッコケそうになったたるが。

そんなアホみたいな行動をしたスノウを見送りつつ、俺は彼女を泣かせた（？）張本人の方へくると向いた。

……多分、俺になんかチョツカイかけようとしていたんだろう。両手をにぎにぎさせてたサクラは、突然俺が振り向いたもんだから、ビクンツと大きく肩を跳ね上げて、急いで両手を後ろに回した。まあ俺は見なかったことにして、他人事のようにサクラに言った。

「……あーあ。スノウ、泣いて出ていっちゃったぞ。どうするんだよ、サクラ」

「演技力溢れる疾走ではありましたが、多分大丈夫でしょう。彼女、あれくらいで泣くタマじゃありませんもん。てゆーか絶対アレ、追いかけて欲しくてやってるでしょうし」

「うむ、それは俺も思った。……で、どうするんだ？ 追いかけるのか？」

「ここであえて追いかけず無視したら面白くありません？ 数分経つても走って来ず、物陰から『何で追いかけてこんのやー！』ってマジ切れするスノウとか見たら大爆笑ものです」

部屋を出てから走っていく音が変に聞こえなかったなと思ったら、やっぱり入り口で待機してたか、この猫娘。多分、その場で地団太を踏んで誤魔化していたんだろう。

一瞬しか見えなかったが、ドアを開けて一步踏み出したサクラが画面右横に吹き飛んだから、スノウは左側から猛烈なタックルを繰り出して抱きついたんだろう。

悲鳴を上げて吹っ飛んでいくサクラと、絶叫を上げて彼女にダイブしていくスノウ。

……ふう、良かった。嫌な予感的中したよ。コイツに先に行かせてよかった。

「うーん……巨乳は敵だけど啓太のやつなら別……って、ちょ!?! 何でアンタがそこにいんのよー!! 話が違っじゃないー!!」

「話も何も、いきなり突撃するお馬鹿がどこにいますかー! スノウの馬鹿ー! 思いつきり腰打ったじゃないですか無乳ー!!」

「や、別に啓太なら私程度のタックルだと倒れずに受け止めてくれるし……ってさりげなく無乳って言うなコラアアアア!! ならその無駄乳を無乳だけにむにゅむにゅしたるぞワレエエエ!?!」

……あーもう、騒がしいなコイツら。

廊下で騒いだら駄目だって先生に習わなかったのか。

「こらこらお前ら、廊下で騒ぐな。周りに迷惑だろう」

「だってスノウが……って啓太さん。もしかしてこれを予期して私を先に行かせたんですか?」

「……あー。まあ、そうなるな。まさか本当に待機してるとは思わなかったが」

そう言うと、サクラは馬乗りになったスノウを普通にぶっ飛ばして頬をハムスターみたいに膨らませて俺の目前まで接近してきた。

それもキス寸前だろというような距離まで顔を近づけて。サクラにぶっ飛ばされたスノウは「あべしっ！」と世紀末的な悲鳴を上げて後ろに転がっていった。

で、そのままスノウは後ろに一回転したくらいで地に両手をついて、力強くバツク転をした。天井が高いので足が激突というネタ的な展開はなく、ふわりと綺麗に空中で体勢を整えた後、地面に着地した。さすが猫だけあって運動神経抜群だな。そのまま「……どや？」顔で彼女はサムズアップしてたけど、サクラに「3点！」と力強く言われ、肩を落として頂垂れた。採点制なのか。

おっと、スノウの方ばかり見てたから、サクラが俺に掴みかからんばかりの勢いで　ってか思い切り胸をにぎにぎと掴みながら、俺に言った。

……頼むから胸ばかり触るなよお前。触られると何かむず痒いし、気持ちが悪くてかなわん。

「もー！　啓太さんってば本当にー！　愛する妻が怪我したらどうするんですかー！　啓太さんに汚されるならまだしも、腰打って怪我とか洒落になんないですよー！」

「さり気なく欲望を混ぜてるくらいだから大丈夫だろ。あとセクハラするな」

いつまでも人の胸をにぎにぎしてる変態の手を払いのけて、冷静に

言う。ぶつちやけ言えばあんまり冷静でもなかったけれど。

俺の物言いにまだ納得がいかないのか、サクラは渋るような顔を見せながら腕を組んだ。まあ、納得はしないだろうな。

「ほら、そんなにむくれんなよ。スケープゴートにしたのは謝るよ、ごめんごめん」

笑って頭を撫でてやると、サクラは少しだけ頬を朱の色に染めて、ちよつとだけ睨みつけるような上目遣いで俺を見詰めてきた。

……おお、可愛い可愛い。ちよつとドキつとしてしまった。

「むー。……それよりも、啓太さんはこれからどうするんですか？」

「どうするってまあ。カノンさんから何か言われないう限り、こつちよつとじつとしているしか……」

「その必要はないよ」

と、後ろからカノンさんの声。振り向くと、手に調合薬の入った瓶を携えていた。

「色々検査してみたんだけどね。どうやら薬を作らなくてもいいみたいなんだ。今は変異が急速に起きているけど、進行にもピークは存在するみたいだし、永続的に変異が行われることもない。体の方も異常が見つからなかったし、今日一日落ち着いて過ごしたら元通りになるよ」

やたら濁った色の瓶をくるくると回しながらカノンさんが言う。そんな彼を見て俺は無意識にほっと胸を撫で下ろしていた。

ああ、良かった。苦い薬飲まずに自然に治るんだ。

俺、意外と『山に登って薬の材料取って来い』とかいうミッションをやらされるのかと思ったよ。

とにかく良かった。もとに戻るのなら安心だよ。

「むう……私的には早く元に戻って欲しい限りなんですけどね……

…お湯被ったら男に戻るとかじゃ無理なんですか？」

「流石なら まじじゃないんだから無理だよ。……それよりもさ。女の子になっただんだし、せつかくだから町でもぶらついてみたらどう？」

その言葉を聞いて、近くにいた二人がとても嫌な顔で笑った。

それは何か悪巧みをしますよと言わんばかりの、とてつもない悪い顔だった。

どーも啓子ですコンチクシヨウ 2

「と、いうわけです！」

「ラインガルドから飛行機で一時間、娯楽と温泉がメインの京の町、その名もシャルバトーレ！」

「……という地名のところにつれてこられたんだとさ。はあ、何でこんなところまで来なくちゃならないんだ……」

自家用機から一時間。前は南の島へ飛んだけど、今回は東の町で、どうやら温泉街の町、シャルバトーレとやらに来たらしい。

ここは自然と居住区がメインであるラインガルドとは違い、娯楽施設や温泉をメインにした今風の町であり、あまり人間界と変わらないような、そんな佇まいを見せるところだった。

俺たちは今メインストリートの真ん中にいるわけだが、やはり温泉街と言うか、商売も盛んに行われていたりする。あちらこちらに温泉旅館が見えるのは、おそらくこの町全体に温泉の地下水脈があるからなんだろう。それらを挟みつつ、桜ヶ丘の商店街を彷彿とさせるようなところもあれば、移動の際に利用する路面電車も通っていた。ここは近代的な町なんだなあ。と、そんな風に町並みを見ると、近くにいた猫又二匹が何か文句を言い出した。

「ちよつとー。啓太さんノリが悪いですよー。ここは台本どおり」
今から三人、楽しんじゃいますっ
『って声色変えて言ってくれないとー」

「そーよ啓太。せつかくアンタのためにここまで来てるんだから、テンション上げなさいよねー」

「気持ち悪いだけだろそんなもん。あと俺は頼んでここに来たわけじゃなくて、お前らに無理やり連れてこられてだな……」

「ほら、啓太さん！ その口調も禁止です！ 今から啓太さんは『啓子』さんになって、色々な服を着ていくのです！」

「は、はあ！？ 意味わからねえよそれ！ それにどーして俺が女物の服を着なきゃならねーんだ！」

「こんな機会がめつたにないからに決まってるじゃない！ ほらほら、ポケっと突っ立ってないで、まずはそのぼさぼさの髪型を変えに美容院行くわよ！」

「その後はお化粧をしてカワイイ服にお着替えお着替えー 女になつたからには女を楽しまなきゃ獅子ソソソソですよー」

「獅子はいらん！ ってか引つ張るなお前ら！ 俺は化粧もコーデもしたくねーよー！ はーなーせー！！」

……とまあ、猫又二人に引つ張られて、結局しぶしぶついていく俺だったけれど。

もう吹っ切れた方がいいのかなあ……はあ。

美容院に行くと豪語していた二人だが、まずは温泉街だから、化粧

する前に身体を綺麗にしておきましょうとかの理由で、スノウがイチオシするという温泉まで連れて行かれた。

こいつがオススメするくらいだから、豪華で派手な印象なんだろうなーとか思っていたけれど、珍しく想像通りとはいかず。老舗の穴場でも呼べるようなその佇まいの温泉施設は、豪華に立ち並ぶ周囲の温泉旅館と相反して、ひっそりとその身を温泉街に現していた。人気があるとは到底思えないが、ここが彼女の一番のお気に入りらしい。

「ほら、二人とも。ここよ、ここ！ オススメ温泉スポット！」

「へー、ここですか。スノウがお勧めするにとしては、えらく質素な雰囲気ですね。もしかして一般の人には知られていない、秘伝の湯があるとか何とかですか？」

「うっ……な、なかなか鋭いわねサクラ！ ……確かにここには流行雑誌やTVなどでも知られていない、秘伝の湯があるの。これは本当に内緒なだけだよー……」

声のトーンを落として、周囲に聞かれまいと努めるスノウ。なるほど、本当に機密事項なのか。

でもまあ、コイツのことだから美容とか健康とか乳とかの効果があるっていう理由で選んでるんだと思うな。おそらく。

なににせよ、俺にとつては温泉に入れるなら何処でもいいわけでのんびりと湯に浸かれるならそれでいい。そういえば疲労回復・筋肉痛に良く効く湯があればいいな……ん？

「ん……？ まあ二人共、あれってセツちゃんじゃねえか？」

「ほうほう、それはそれはなかなかいいお湯ではありませんか……」

えっ？ あ、本当だ。セツナさんですね」

「でしょー。だからいつもここに来たときは欠かさず通ってるの…
…んっ？ あっ、セツナじゃない。そーいや今日は休日だったわね」

口々に言う二人。忍者服を着ていなかったので見間違いかと思ったが、どうやら本人みたいだ。

ふわふわ揺れるポニーテールは健在だが、その上にブルーの帽子といつもの違う白タンクトップの上に黒ジャケット（薄生地なので夏仕様か）、ズボンが男物に近いジーンズを着ていた。猫耳尻尾はいつものように出てないけれど。

それにしてもセツちゃん、何だかカッコいいファッションだな。どつちかといえばセツちゃんの普段着はポップで可愛い系を想像してたんだが、普段も凛々しい感じの服装を好むんだろーうな。

彼女は今、俺たちの様子は全く気付かずに、とある店の前でじっと立ち止まっては数秒後に足を動かし、数歩歩いた後で今度は後ろ向きに歩き、また同じ場所に同じ姿勢で戻るといふ、何だかよく分からない動作を繰り返していた。一体何をやっているんだろーう。とはじめは首を傾げたが、そのとある店が何なのかを知って、不覚にも吹き出してしまった。

ファンシーで可愛いイラストが描かれた大きな看板。その周囲にはディスプレイ越しにたくさんの人形達が並んでいる。ドールでもなく、ガレージキットでもなく、犬や兎などの小動物系のぬいぐるみを扱っている店だった。

なるほど。入りたいけど、理性が邪魔して入れないってジレンマを感じている最中か。勇氣出して入っちゃえばいいのに。相変わらず可愛いな。

くくくっ、と押し殺した笑いを浮かべていると、隣の二人も直ぐに

状況を察したのか、くすくすと笑いながら彼女の様子を見ていた。

「くふふふっ……ちょっと二人とも、ここで待ってて。今からセツナ連れてくるから……」

お腹を押さえながら、セツちゃんのところまで足を運んでいくスノウ。腕を組んで店を眺めている彼女は、全くスノウの様子に気付いていない模様。

……あ、スノウが「わあっ！」という声と一緒にセツちゃんの肩を叩いた。「ふえええあああっ!？」という叫び声と共にセツちゃんはその場で飛び上がった。うわ、すげえ跳躍力。足の力強すぎるだろセツちゃん。自身の危惧を察知したのか、慌てて逃げ去ろうとする彼女の身体をがしっと捕まえて、ずるずると引きずりながらスノウがこちらに戻ってきた。セツちゃんはパニック状態だった。

ごめん。セツちゃんには悪いが、いつもとギャップの違いが凄すぎて、すっげえ面白い。ビデオカメラ持ってくればよかったかな。

「ほら、ちゃんと立ちなさいよ。いつまでも私にもたれかからないの」

「あ、あう……こ、腰が抜けるかと思ったでござるよ」

足を震えさせてスノウにしがみつこうとするセツちゃん。うーむ、こんな情けない彼女は初めてみるな。幻滅したわけじゃあないけど、半泣きでおろおろするセツちゃんをどうにか宥め、落ち着かせる。やっとこさ平静を保ったと思ったら、今度は先ほどの自分の行動が見られていたことを知り、途端に顔を真っ赤にさせた。

タンクトップをぎゅっと握って俯いたまま、一言も発さず黙り込んでしまった。泣きそうになったり真っ赤になったり、あたふたと忙

しいね、セツちゃん。

そんな様子の彼女にスノウが笑いながらぼんぼんと肩を叩いた。

「もー、いつまで落ち込んでるのよー。このことは三人のナイショにしておくから。元気だしなって、ほら。別に女の子だったら変な趣味じゃないじゃん」

「そーですよー。セツナさんにひとつやふたつ少女趣味があったって笑いやしませんからー」

とまあ、さりげないフォローで気を配るところは流石だというか。つていうより俺がデリカシーゼロなだけなんだろう。うむ、分かるん。

「ひ、秘密でござるよ……みんなには絶対秘密でござるよ二人とも……」

ぼそぼそと呟くセツちゃん。ふむ、その二人に果たして俺は入っているんだろうか。

いや、入っていないね。だってセツちゃん、俺が女になってるの知らないし。

「ふう……みつともないところを失礼しました。ところで……そちらのお方はどなたでござるか？」

やっとこさ平常に戻ったセツちゃんが俺の姿を見て首を傾げる。

「ここで秘密にしたら面白くない？」「あー、いいかもしれませぬ。それで後からドッキリって感じで……」

とか後ろでコソコソ囁きあってる二人に「とうっ」軽くチョップをして、俺は彼女に言ってやった。啓太ですって。

……とまあ、セツちゃんを納得させるのに数分くらいはかかったんだけど、俺が知っている情報（盗撮とか）を耳打ちすれば直ぐに信用してくれた。

恐ろしいくらいにコクコクと頷いて肯定してくれた。顔色は真っ青で汗びっしょりに変わっていた。うむむ、そんなヤバイのかな。ちよつと怖くなってきたじゃないか。

そんなわけで、何故だか休暇中のセツちゃんを連れて銭湯へ入る俺たち。城での風呂も悪くないんだが、こういった庶民的な風呂も悪くないな。落ち着く。

番台のお婆ちゃん　スノウは顔見知りなのか、「おっひさー！」とか言つて手を振っていた　にお金を払つて、さあひとつ風呂浴びるかな　と思つた矢先、ぐいつとサクラに肩を掴まれた。

なんだよ、と言いながら振り向くと、否定するかのようには首を横に振つた。

「啓太さん……じゃなかつた啓子さん。あなたは一体どこに行つて
いるんですか？」

「どこつて……風呂に決まつてるじゃないか」

「そりゃ分かつてますよ。でも、そつちは違つてでしょ？　あなたは
こつちです」

ぐいつと身体を引つ張られた先　そこには、男子禁制のあの場所

女湯があつた。

「　いやいや！　アホなこと言つなつて！　確かに今はその……」

あれだけどさ！ でもそつちに行ったら行ったでヤバイだろ！ だから俺は男湯に行く！」

「いやー！ 駄目ですー！ その体で男湯なんかに入ったら、マジで一般受けしない薄い本みたいな展開になっちゃいますからー！ 啓子さんの無事のためにこつちに入ってくださいー！」

「なら俺は入らずにここにいる！ お前らだけでも風呂に入れっつておいコラ！ 三人がかりで引っ張るな！ セツちゃんまでー！ ちよっ……ちよつとマジでやめてえええええっ！！？」

……ああ。

出血多量で死ぬかもしれない。鼻血的な意味で。

三人に「絶対タオル着用だからな」と釘を刺してしぶしぶ女湯に入る俺。サクラの後ろに隠れながら脱衣所を覗くが、幸運にも着替え中の女性客はおらず。

ほっと胸を撫で下ろして一息ついて、いきなり脱ごうとし出したサクラとスノウに向けて「ストップ！ 先に俺が着替えていく！」と言っつて高速で着替え、タオルを巻いて銭湯へ。

「それじゃ私たちは、誰から啓太さんにお背中流してもらうかジャンケンしてますねー」

「勝手にしろ！ 俺は先に入ってるからな！」

なんだかサクラが凄い事言っつたような気もするが、まあ今はこの問題を解決すべきだ。そのまま躊躇いなく俺は、ガララツと横引き

ドアを開けて銭湯へと入った。
で、まぶしい太陽を見るかの如く目を薄めて入ったけれど……なんと奇跡的に、今の時間帯はお年寄りばかりだった。あまりの自分の運の良さに涙が出そうになった。今ならおばあちゃんたちのお背中流してあげても全然構わない。むしろ流させてください。ああ、なんとという幸運の申し子だよ俺って。

すっかり安心しきって油断していた俺の背後で物音が聞こえた。有頂天になって、そのまま勢いよく振り返った俺だったが、見事そんな余裕は粉碎された。

バスタオル一枚だけで身を包んだ、あからさまに場の空気とは馴染めそうにない三人組が現れたからだ。桜色の髪の子はうーんっと腕を伸ばして身体をぐっと伸ばしていた。一歩間違えれば、はらりとタオルが落ちてしまうくらい強く伸びをしていた。対して銀色髪の子は「おー、すいてるすいてるー！」とはしゃぎながらその場でジャンプしていた。だからずり落ちるってば……っていかもう上とかヤバイからおい！ 加えて黒髪の子は……もうね、手を後ろに回して、恥ずかしそうに上目遣いでこっちを見ている時点でアウトです。ずり落ちる以前に、タオルに全て収まりきってないむちむちとした身体が視覚破壊兵器及び肉体凶器すぎてもう何も言えない。本当にありがとございました。見事に理性が半分吹っ飛びそうになりましたよお前様方。

だ、駄目だ……バスタオルだけでも破壊力ありすぎるっ……！
今だけ女の身体で本当に良かったと思う。男の身体だったらもう……言葉に出来ない。

「最初はセツナさんですかー。仕方ない。スノウ、先に髪を洗いましょっ」

「そーね。……ちえっ、いーなー、セツナ」

口々に言いながら二人は自分の場所を見つけて髪を洗い始める。対してもう一人……セツちゃんだけは、俺のところまでトコトコ歩いてきて、ぎゅっと俺の手を繋ぐと、そのまま蛇口まで足を運び、風呂椅子に腰かけた。

で、俺の方をちらりと見ると、ぺこりと小さくお辞儀をして、真っ赤な顔で微笑んだ。銭湯の熱気のせいかな否かはわからなかった。

「え、あ、あのえっど……!?!」

「あ、あの、その……でっ、ではっ。……えっど、お、お背中、よろしくお願いしますでござる……」

それつが回らないのはお互い様か。再びお辞儀をしたセツちゃんはくるりと後ろを振り返ると、その姿勢のまま、はらりと背中だけタオルをだけさせた。

乳白色をしたセツちゃんの綺麗な素肌が目に飛び込んでくる。きめ細かに手入れをされたそれはよく磨かれた宝石のようで、思わずその肢体に魅了されそうになったが、風呂椅子からむちっと出た彼女の尻に見事美術品を見るとかいうような綺麗だという感情がブレイクされ、代わりに理性が危険信号を唱えるまでに暴走し始めていた。

「んっ………どうか、されましたでござるかっ………?」

胸元のタオルを押さえながらセツちゃんがこっちに振り向いて訊いて来る。その表情もまたエロスに満ち溢れた(ような)顔に変わっており、振り向きざまの表情といい、上目遣いといい、水蒸気によって濡れたタオルといい、何もかもが俺の思考回路をクラッシュするに最適な条件をノミネートしていた。最早自分で何言っているか

も分からん。ただいえることは、セツちゃんがやばい。本人はその気がないのかもしれないが、俺にとっては出血大サービストでもいえるくらいエロい。まるでされることを急かすように。待ち望んでいるかのように。身を少しよじってこちらに覗き込むその仕草がもう……たまらんッッ！

……ああ、熱出そう。

とにかく、いつまでも待たせていたら埒があかない。

蛇口横に置いてあるボディソープとスポンジを手に取り、十分に泡立たせてからそつとセツちゃんの背中に当てて擦った。

びくんつと小さく彼女の身体が揺れた。くすぐりたいのか、もしくは俺の手つきが無意識にいやらしかったのか、妙に艶っぽい声を出して。

「んっ……ふっっ……」

「せ、セツちゃん声がエロいよ……！」

「ふっんっ……あ、あははは。ごめんなさいでござる」

笑ってこちらを覗き込むセツちゃん。こっちは笑い事じゃねーってことを察してください。女の身体だからドキドキが増えるだけでは大丈夫だけれど。

で、ひとしきり洗い終えて（前を洗うことは全力で拒否しておいた）、セツちゃんのお背中流しは終了した。途中経過で色々と危ない事もあったけれど割愛。全てを語るとまた鼻血が出そうになる。セツちゃんの次はサクラの出番だ。スノウと談笑していたサクラを呼んでやると「わーい」と子供のようにはしゃぎながらこっちに向か

ってきた。どうやら純粹に背中を流してもらいたかったようだ。ふむ、よきことよきこと。

風呂椅子にちよこんと座ったサクラを、さっきのセツちゃんと同じように洗ってやる。彼女は鼻歌を歌いながら、「ご機嫌な様子で俺に言ってきた。

「えへへー 私、こーいうの結構懂れてたんですよー」

「背中流してもらうことが？ 変な奴だなお前。まあ変なのはずっと前から知ってるけど」

「むー。だって啓太さん、いつもお風呂は一人で入るでしょー？ だからこーいう機会って滅多にないじゃないですか」

「滅多も何も。……まあ、良い子にしてたらたまには良いよ。こーいうのも」

「ほ、ほんとですか！？ じゃ、じゃあそのたまにはを利用して啓太さんのタマを って、ああ！ そーういや啓太さん今タマナシでおうちっ！」

どんだけ純粹だろうと結局シモの方に走るエロ又の頭をタオルで叩いて、熱湯をぶっかけて背中を流してやった。

「ひぎゃああつ！？ ぶっかけるならもっと熱く白く粘っこいものをー！？」とか言ってたから、更に熱湯を加えてやった。全く、そーういう考えしか出来んのかコイツは。

で、サクラの番も終えて今度はスノウの番に移る。呼びかけてやるのと、モデル歩きでくねくねしながらやってきた。

えらく不気味だからアタマを冷ますために冷水をぶっかけてやるう
と思ったが、サクラと同じ反応されると困るから無視の方向に走る
事にした。

で、二人と同じように背中を洗おうとして 止めた。何故かコイ
ツだけは後ろを向かず、こちらに手を広げて座っていた。

「……何やってんの、お前？」

「苦しゅうない、ちこつ寄れ」

「誰が寄るか。俺が訊いてるのは何故背中を向けずこっちに向いて
いるんだと」

「や、だつて。三人共フツーに背中流すだけじゃアンタもつまらな
いっしょ？ だから私はあえてこの体勢でアンタに洗われる事にす
るわ。さあ、このままウォッシュ・ミー！」

「ああ、そうか。俺がお前の後ろに回れば万事解決か。よっこらせ
と」

わざわざ風呂椅子から腰を上げて彼女の後ろに回る と思ったの
も束の間。ぐるんつと勢いをつけてスノウは一回転し、俺と向き合
う姿勢に再び戻した。どや顔で。

面倒くさい思いを抱きつつ、結局俺は正面（背中）の代わりに腕とか
髪とか（を洗ってやった。「きつ、貴様にならもつと別なところを
洗われても構わんぜよ？」とか何キャラを狙ってるのか分からない
口調で上目遣いをされたので、俺は無言で冷水をぶっかけてやった。
あまりの冷たさに飛び跳ねた後、「今度したら 液ぶっかけるわよ
こんちくしょー！」とか言って顔面に冷水ぶっかけられた。台詞は
違えど、やっぱりコイツもサクラと似た台詞を発しやがりました。

そんなこんなで、騒がしい風呂の時間が過ぎていく。
今は三人で誰が俺の背中を流すのかどうかとかで議論してたが……
自分で洗っちゃ駄目かなもつ。そろそろ湯船に浸かりたいんだが。

騒々しい風呂を終えてその次に向かった（というか無理やり連行された）場所は美容院。

さっき言ったとおり、ボツサボサの髪を直したり、可愛い化粧をするためだとか何とか。

ろくに美容院なんて入った事のない俺だったけれど、一緒にいた二人があれこれと美容院のお兄さん（カツコいいんだけど猫耳と尻尾が不釣り合いだな）に指示してくれているから、まあ何とかなるのだろう。……いやいや、何とかなっっちゃ駄目だろ。むしろ化粧とか髪型とかそんなとこ弄らなくてもいいし、今のままで十分なんだけだな。お金かかるだけだし。

と、そんなことを考えていたら、ようやく話が終わったのか、二人がこっちに向けて手招きをしてきた。

……うーん、二人ともいい笑顔だな。凄く楽しんでいる。俺は複雑な気分だけれど。

仕方ない。そう一言呟いて俺は彼女らのいるところまで足を運び、美容院のお兄さんの指示に従いながら椅子に座った。

はてさて、どんな風になるのやら。

美容院に入って一時間。よく分からない単語や名称が飛び交う中、やっとこさお兄さんから終わりの合図を貰って終了。

「どうですか？」と鏡を渡されて自分の顔を見たのはいいんだけど……誰やこの人。少なくともこれは俺じゃない。俺の顔がこんなに可愛いわけではない。

さきほどのボサボサ髪でだるそうな表情とは一転し、睫毛やら口紅やら女性の化粧を丹念に施された、少なくとも美麗と呼ぶ事の出来る女性が出来上がっていた。というのも、それが俺自身だから変な感じだ。なんつーか、自画自賛？しているようでキモいし。

っていうか、最近の美容院は化粧までやってくれるのか。便利な世の中になったものだな。

全ての準備を整え、俺はみんなのところへ。美容院に置いてあった雑誌を熟読していた三人に声をかけると、何やら感嘆の声を上げて俺を凝視してきた。

うわ、みんなの目がすっげー輝いてる。あまりにもキラキラすぎて、心が隅々まで汚濁してる俺が見るのは何か申し訳なくなってる。

「わああ……っ！　もしかして啓太殿ですか？　凄く綺麗になってるぞござるよー」

「……ま、まあ良い感じにはなってるけど、私に比べたらまだまだね！　……でも……うん、まあ……」

「ワチャカナドウ……！？」

ふむ、どうやらかなりの好評らしい。

よく分らんことを呟いてる奴も一人いたけど。

「……なるほどなるほど。分かりました。どうやら啓太さん……じゃない啓子さんには女すら誘惑する力があるのですね。これは同じ女として嫉妬せざるを得ないところですが、まあこの奥の路地裏で

『ちよ、ちよつとだけだからね……！』と恥らいつつ服を脱いで頂けたら、許してあげましようか。そんなわけで啓子さん、路地裏行きましようか」

「待て待て、どんなわけで路地裏に連れ込むつもりだコラ。こんな真昼間からストリップなんて俺は嫌だぞ。……いや夜でも嫌だけど」

「まーまー。そんな固い事言わずにい。ちよつと服の上からブラやショーツとかの下着を抜き出すだけでもいいですからー」

「なおさら嫌だよ。そんな露骨な脱ぎ方嫌過ぎるわ」

「ほんのちよつとだけでいいですからー。ほーら、早く行って脱ぎましようよ」

「嫌だ」

「脱ぎましよう」

「嫌だ」

「いいから脱げよ」

「強制！？ ……つておま！ ちよ！ これボケだろ！？ ジョークだろ！？ いつものようにツッコミ浴びてそこでストップだろ！？ いやっ……ほんとにやめっ……やめアッー！？」

とまあ、そんなわけで。

特に全然問題なく路地裏に連れて行かれることもなく再び二人と合流。

……あ、いや、路地裏連れて行かれたんでなく。

それほど天気ではなかった空も次第に晴れが広がり、太陽はちょうど真上に上がっていた。もう時刻は正午を回っていたんだな。

そろそろ昼飯でも食べに行こうか。隣に居るサクラも「おなかすいたー」ってぐずぐず言ってるし。

「あ、それなら私が良い中華料理屋知ってるわよ。案内しようか」

「へえ。スノウがすすめるってことは、また老舗の店か？」

「……んー。老舗っちゃ老舗かな？ ま、行ってみればわかるつしよ。私もお腹すいたし。行こ行こ！」

そう言つて、三人の背を後ろから押してくるスノウ。その顔は銭湯に行く時と同じくらい嬉々としていた。

……ふーん、お姫様のクセに、結構街中とか行ってるんだな。

まあ、この娘のことだから、王様に無理言わせて行かせたんだろうなー、多分。

苦労かけてるねえ、ヴェイルさん。

「…………ふう」

「いきなり賢者タイムとか啓太さんいやらしい通り越してスケベエ

……」

「行為を起こさず賢者タイムとかレベル高すぎスケベエ……」

「よし、お前から隣に座れ。いや隣で正座しろ。今からため息についてしっかり教えてやる」

スノウが絶賛する中華料理店を出て、外のベンチで一息つく。これでタバコがあればダンディーな雰囲気を放っているんだろうが、生憎俺はタバコ嫌いなんでね。身体に悪いし。

まあ、この一国のトップに君臨するお姫様がすすめるだけあって、確かにこの店の料理は納得のいく代物ばかりだった。

細切り肉（何の肉かは不明）の中華蕎麦とかあっさりとした食感にほどよい旨みも出てたし……あー、（これまた何の肉かは不明）角煮饅頭も美味しかったな。とろふわつとして、中からあつあつの肉汁が出てくるのも良かった。何か観光に来てるって感じで満足満足。またこの街に訪れる事があるなら、お昼はこの店に通おうかな。我、満足也。

「あの店美味しかったなー」

「え、啓子さん。店食べてたんですか？」

「シバくぞ」

「冗談です。でも、確かにあそこのお饅頭は美味しかったですよね。あのプリプリの食感とあふれ出す肉汁と……って、はわわっ、肉汁とかエロス！マジエロス！もう今度からお饅頭見たら卑猥な妄想しか出来ませ　ハッ！？　そうか、このお土産のお饅頭を啓子

さんのお饅頭だと想像して食せば……ハアハアハア啓子さんの溢れんばかりの肉汁ハアハア……！」

……うーん。

なんだろう。言っちゃ悪いが背筋に寒気が走った。

コイツってここまで変態だったのか。お兄さんショックだわ。

「もうお前その辺で爆発してろ」

「ばつ爆発！？ 爆発……ってことはアレですか！ 爆発 熱い 熱いから服が燃える 同時に下着も燃える 全裸……つまり全裸になれという解釈でオツケーなんですね！」

「どつという解釈だよそれ」

むしろその180度捻じ曲がった発想力に敬意を評したいわ。

っていうか、もう黙って饅頭食ってるよ。いつまでもセクハラ紛いの発言を連発してないで、隣で仲良く角煮饅頭を食べてる二人を見習えよ。

なんとか暴走しがちな彼女を冷静なツツコミでなだめながら、俺含む四人はシャルバトーレの街中を歩いていく。

スノウとセツちゃんの間に入って、さつき卑猥だなんだとか言ってた角煮饅頭（二個目）を幸せそうな表情で頬張るサクラを見て、つい笑みがこぼれた。

食べ物って本当偉大だよな。お腹だけじゃなくても心も満たしてくれる。幸せを噛み締めるように、心と身体に満足を与えてくれる。

作る側としても、こんな笑顔を見せられたらきつと嬉しいんだろうな。俺も経験したことあるから、よく分かるよ。

「肉汁肉汁うふふジュルリ……」

あとはこういうセクハラ紛いな発言さえも少し抑えてくれたらな。黙ってりや普通に可愛いのにね。

「さーて、後はどこに行こうかなー……ん？」

ぐーっと腕を伸ばして首を鳴らす傍ら、ふと見たことのある建物が目に入った。

あれは確か そうだ。此処に来て最初に見た うん。ちよつと行ってみるか。彼女の趣味、ちよつと興味あるし。

「なあ、三人とも。ちよつとあの店に入ろうぜ」

そう言つて三人に呼びかけてやる。「おーっ」とか「いいねー」とか言つ声が届こえる傍ら「あっ……あう」と、恥ずかしそうに言う声も聞こえた。

ふふふ、他人の趣味を深追いするのは気が引けるが、それでもちよつと興味あつたんだ。なんていうか、ギャップ萌え？ 普段は真面目だけど、ある物には目がないというね。さて、早速行ってみようか。

セツちゃんが行こうとしてた人形屋さん もといファンシーショップに。

ファンシーショップに入ると、まずぬいぐるみたちの存在感に圧倒された。

いやそりゃあ、ショーウインドウ越しにぬいぐるみたちが見えてたから、多少は種類や量があるんだろうとは思ってたんだけど、まさかこれほどあるとは思わなかった。お兄さんただ驚きでいっぱいです。多種多様なぬいぐるみたちに気圧されながら、正直場違いなオーラを出しつつも他の三人の姿を覗き見た。

……おう、この三人思いつきり女の子してる。ギャルってる。きゅんきゅんわいわいしながら、どのぬいぐるみが可愛いだとか、どれがおススメだとか語り合ってる。

女の子っていいねえ、ぬいぐるみでも盛り上がれるから。なんかその光景を見てるだけでも楽しそうで癒されるな。試しに男だけでぬいぐるみについて熱く談義してみようかな。

……いや、想像したら普通に気持ち悪いな。可愛い猫のぬいぐるみを抱きしめながら「きゃーん！ この猫たんちょバリバリングー」とか言ってる、顔と胸毛が濃いむさ苦しい男を見かけた日にゃあ……駄目だ。抹殺しか選択肢が浮かばねえ。むしろ抹殺も生ぬるい。生き地獄を味あわせてやりたくなる。

とまあ、女性と男性が行うだけでどれほどの差があるかってのは見えての通り。向こう三人からは華やかな雰囲気は漂ってくる。

そんな様子のみんなを見詰めながら俺は一人シヨップの椅子に座り、外を眺めた。外の風景も相変わらず人で賑わっていて、ざわつく喧騒からはお祭り騒ぎの音楽も聞こえてきて。

「…………おや？」

ふと、喧しい温泉街の路地裏で、誰かが口論している姿が見えた。ざっと見てみれば四、五人。そのうち話をしているのは女の子だろ

うか。ひらひらのメイド服を身に纏った姿はまるでコスプレのような感じで。

「あっ！」

男のうちの一人が、女の子の口に何かを被せやがった。

やべえ、あれは少しまずいぞ。女の子意識失ってるっぽいし、男どもは女の子担いで路地裏の奥に入っていきやがったし。

こりゃあ見逃すわけにはいかない。女の子の危機だ。まして、こんな夕刻の時間帯からやりやがるとは……あの男どもには少々、この俺がお仕置きしてやらねえとな。

ともかく、早くここから出て助けにいかなければ。

下手すれば薄い本のような展開に発展するかもしれないし、何より女の子が危ないってことに変わりはない。

「ちよ、ちよつと外に出てくるからな！ 直ぐ戻る！」

と、向こうにいる三人に向けて声をかけ、俺は返事を待たずしてシヨップを出た。

確かあいつらは、ここから真正面の路地裏に入っていたな。ヤバい事態になる前に、なんとか取り押さえねーと。

……セツちゃんだけでも連れてきたほうがよかったかな？
ほんのちよつとだけ後悔しながら俺は走った。

どーも啓子ですコンチクシヨウ 4

あつという間に路地裏に着くと、猫耳つけた男どもは女の子を担いで、路地裏から更に奥の地下に出来たクラブ会場のようなところに入っていた。

埃やゴミがそこら一帯に散布されていて、環境的に良くなさそうな雰囲気のある場所が、俺の中のイメージを更に危ない方向へ駆り立たせる。

連中が入っていったのは、あの古びた外れかけの看板がある場所か虎穴に入らずんば虎子を得ず、とは言ってみるものだが、おそらくそれくらいの危険はあるだろうな。

何せこの下はクラブだ。俺が見た連中が全員とは限らないし、もしかすればもっとヤバい奴がいるかもしれない。

でもまあ、こんな世界の猫又如き、この藤咲啓太様の手にかかればチヨチヨイのチヨイつてもんよ。

「……………あ」

……………そういや俺、確か今、女になってるんだっけ。

うん、今気付いた。単身で男どもの集うクラブに乗り込むとか、正直かなりヤヴァイよね？

……………。

「えーい！ 考えても仕方ない！ おら乗り込むぞコンチクシヨウ」

「！！」

半分涙目になりながら、俺、クラブ会場に突入。……マジでセツちゃん連れてきたほうが良かった。
こりゃあ、油断できない戦いになりそうだぜ……。

日の光があたらない場所でもあつて、そこはとても暗くじめじめした場所だった。今は営業していないのか、もしくは既に閉業しているのか、その場所には人っ子一人いなかった。

節電ゆえか、天井に取り付けられた蛍光灯も何度も消えてはついでを繰り返している。乱雑に置かれた椅子やテーブルは全くといっても良いほど手入れをされていなく、指先でつうつとなぞっただけで指が真っ黒になるほどの鬼畜仕様。俺の中の掃除魂が微かに燃え上がるが、今は関係ないので抑えておく。

900ルクスくらいの明るさに変えるよ蛍光灯……とかぶつぶつ思いながら汚らしいクラブの中を歩いていくと、関係者用っぽい入り口から微かに声が聞こえてきた。

どうやらあそこにいるんだろう。この場所に入ってきたのは間違いないんだし、周りを見てもそれ以外に入り口らしきものは見当たらない。

しかし……突然乱入して暴れだすのもなんだかな。ここはひとまず、様子を見てから飛び込もうか。危なくなったら参上。ヒーローみたいな感じ　いや今はどっちかってつとヒロインかな

だけど、返り討ちを食らうのも嫌だし、不意について殴りこもう。

と、そう考えていたのも束の間、入り口から女の子の悲鳴が聞こえてきた。

いかん、悠長にしている暇なんてなかった。息を殺して耳を傾けて

る場合じゃない！ 今からでも乗り込まねーと！
慌てて駆け出し、俺は入り口のドアを蹴っ飛ばす勢いで開けた。そこに見えてきたのは、なにやら女の子にセーラー服を着替えさせようとしている男たちがいた。

俺がそんな場面に出くわしたためか、一見なんとも言えない雰囲気
に包まれたが、男どものうちの一人が気を取り直して、俺に向けて
大きく怒声を放った。

「誰だ！ ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

「誰だと？ ふんっ……この俺の名はア 藤咲ハーマイオニーだ
あああああああっ……！」

藤咲ハーマイオニーの次回作にご期待下さい！！

(……えっと、監督……あの人誰っすか？)

(……さあ、エキストラでもなさそうだし……ってオイオイ！ 早
く彼女止める……！ セット壊されるぞ……！)

(わー！ 俺の丹精込めて造ったジオラマが……！ 誰か
止めてくれ……！)

「いや本当マジですいませんでした……」

その場 乱闘騒ぎを起こした場所で俺、深く反省中。現在正座で涙目になっています。マジで。

その俺を取り囲むようにスタッフ 映画の製作陣たちが苦笑いに近い、困ったような表情で俺を見詰めていた。ジオラマの製作者さんはめっちゃくちやになつたジオラマを見て泣いてた。号泣してた。それを宥める別の製作スタッフを見て、何か事の元凶である俺も泣きたくなった。

困り顔の監督さんが俺の方へ歩いてきて、くしゃりと自分の髪を荒々しく撫でつつ言う。

「……まあ、故意にしたわけじゃないから咎めるのもなんだしね……」

「それに誤解されてもおかしくないシチュでしたツスもんね。しっかし、どうしますかねえコレ……」

隣にいた助監督らしき人も周りの状況を見て、苦虫を噛み潰したような顔で口々に言う。

そんな様子に耐えかねた俺は、おそろおそろ手をあげて、申し訳なさそうに言った。……いやあ、マジヘタレですね、はい。

「あの、俺……じゃない。私に出来ることなら何でもしますから……本当、すみませんでした」

「いやいや気にしなくてもいいよ。セットもそれほど被害を受けてるわけじゃないし……」

「あ、そうだ監督。なんなら『あの役』をやってもらいましょうよ。この人スタイルいいし、それに次のシーンは……アレですしね」

「ん……おお、そういえばそうか。それならえつと……藤咲ハーマ
イオニーさんでしたっけ？ 是非やって欲しいことがあるんですが
……」

「やります！ お……私、やらせていただけるのなら何でもします
！」

大きく挙手してやる気アピールする俺。

いやね、とりあえず何かしておかないとね、物凄い罪悪感がですね、
後ろから「ヘイヘイヘイ？」って煽ってくるんですよ。

「ヘイハイタッチ！」って返したら負けでしょうか、負けでし
ようね、はい。

だから手伝える事ならなんでもする。まあ濡れ場は正直無理だけど
……それ以外なら大丈夫！ 多分大丈夫！

「よかった。それじゃあ早速、この役をやって欲しいんですが……」

そう言って監督さんが台本らしきものを渡してくる。俺は渡された
それをペラペラと捲って 絶句した。

「 どうやら、ここに啓太はいるらしいわね」

「 ええ、目撃者の証言によれば、この地下にいるらしいんだけどね」

「突然いなくなったからびっくりしましたよ。啓子さん、ここにど
体何をしてるんでしょうね？」

あのファンシーショップから出た私たちは今、啓太が入ったであろう路地裏の地下クラブ前にいる。

それにしても……突然私の前からいなくなつて、一体何をやってるのかしらねコイツは。

その辺にいた人に聞いたらここに入つていつたつて言うし、見るからに胡散臭そうな空気が満載なんだけど。

まあ、愚痴つてても仕方ない。啓太を見つけたら何してたかを聞き出して、さつさとこんな辛気臭いところから抜け出さないと。

ゴミやら色んな匂いが鼻について辛いし、正直さつさとここから抜け出したい気分だし。

「さーね。そんなことより、さつさと入りましょ。こんなところは一秒もいたくはないわ」

そう言つて二人を促して、私はクラブへと入つた。もう下へ降りる階段の不衛生さから逃げ出さなくなつたが、ぐつと堪えて前へ。後ろの二人も足取りからして、同じような顔してるのが良く分かつた。

と、先の方へ一歩入つた途端に、歓声によく似た喚声が聞こえてきた。クラブつて行つたことないけど、やっぱり喧しいもんなのかなー……と思つてたら、騒いでいるはずであるうクラブホールには人一人いなかつた。おかしいなと思ひながら周りを見回すと、どうやらその声やら音楽が流れているのは、このホールからもっと先の、奥の扉からだつた。

あそこに啓太がいるのかしら？　くるりと後ろに振り向くと、ハンカチを口元に当てて頷く二人がいた……あ、いいな二人とも。私もそうしようと。

さて、先ずはあそこから調べてみないと。同じように二人に頷き返して、私たちは奥の扉へと向かつた。

で見えないをキープしています。この絶妙なチラリズムも匠の仕業
と言えるでしょう。

「好きだと言っしてほしいのっ。私をもっと見つめてー」

そして声色を変えて歌を完璧にマスターするこのお方。これはまさしく、アイドルとしてこの世に生まれるべき存在だったのでしょうか。

……なーんてどこぞの増改築番組みたいなナレーションで語ってはみたけれど、正直これ、どう理解してどう判断すべきかしらね。未だにぶっ飛びすぎて思考が追いついてないわよ、私の頭。とりあえず現状を冷静に解説できる程度は出来るけどさ、うん。

……あれ啓太だよな？ 違う人じゃなくて間違いなく啓太だよな？

……うーん、謎だ。なんで啓太があんなことをしてるんだろう。

「ね、ねえ。サクラ、あれって多分……ていうかおそらく啓太」

「私はサクラ。フリーのカメラマンさ……きゃあああ藤咲ハーマイオニイイイイイイイ！ こっち向いてえええええええっ！
！ 激写激写激写アアアアアア！」

……あ、駄目だコイツ。もうこのコンサート会場に順応してる。変な帽子かぶってポラロイドカメラで写真撮りまくってるし。

っていうか、いつ準備したのよ、そのカメラ。

「わああ……啓太殿、綺麗でござる……」

……あーあ。こっちはこっちでなんか目をハートにしてうっとりしてるし。このコ、なんだかんだ言って結構乙女なんだよね。

とまあ、今だカメラをパシャパシャしてるサクラと、両手を組んでコンサートをじっと見てるセツナの二人を呆れ顔で見詰めてたら、

「うーん、やはり私の目に狂いはなかったか……」

隣に突然変な格好のおっさんが現れた。あまりに突然な出現だったので、なんじゃほいコラア！とおっさんに対抗するようなおっさん声で応戦しようかと思ったら、その人は

「あー！ どうかで見たと思ったら！ こないだウチに遊びに来てたカントクじゃん！」

「ん？ ……その声は……おおっ！ あなたは国王の一人娘のアシユリー姫ではありませんか！ ご無沙汰しております」

そう言っただカントクは私を見るなり丁重にお辞儀してきた。そういやこの人、こないだ映画の出演としてお父様を起用しようとしてたわね。

お父様は苦笑いを浮かべながら「演技は得意じゃないから」って言っただ断ったけど。っていうか今思えば、実際の国王をスカウトするとか凄い根性してるわねこの人。

「そんなかたっ苦しい挨拶はいいから。それよりもさ、なんなのこの状況。あそこで踊ってるの、私たちの友人なんだけど……なんでカントクのとこで働いてるわけ？」

「あ。アシユリー様のご友人の方でいらっしやいましたか。……いえいえ、まあ、ちょっとしたわけがありました。彼女が何でもした

いと仰るので役を与えたら、思わぬ大反響を与えてしまったようですね。……エキストラも我を忘れるほど熱中している最中です」

……ふうん。なんかワケありって感じなのはよく分かるけど、少なくとも強制的にやらせたって感じではなさそうね。

だってアイツ、現にノリノリで踊ったり歌ったりしてるし。無理やりならあそこまではつちやけるのは無理だしね。

何がどうして啓太がああなったのかは本人に聞くとして。私も少し楽しもうかしら。あんな啓太見るのはじめてだし、それに……ふふつ。

「……ちょっと私も見物させてもらおうかしらね。カントク、ちょっと良く見える位置を教えてください。それに……してくれたら、良い話持ち出してあげるからさ……説得してあげるし……」

「ほほう……なるほどなるほど。それは確かにいい話ですね。分かりました。全力でご協力しましょう。では、こちらへどうぞ」

そう促されて、私は隣にいたセツナを引っ張りつつ、「あーん、お母さんもうちょっとだけー。もうちょっとだけ見たいのー」とか言ってるサクラを引っ張りつつ、カントクの言う良い位置へ移動した。もちろん、啓太にはバレないような位置でね。

さて、今度はカントクに指示して、啓太のオン・ステージを最初からやり直してもらおうかしらね。ああ、あとビデオカメラと専用のステージも用意させて

「……で」

「ん？」

「はい？」

「どうしたでござるか？」

「いつから見てた？ ていうか、いつからいた？」

「途中から」

「途中から」

「途中からだっただけど、最初からにさせた」

「……ちつつくしょおおおおおおおつっ！！！！！！
つてかテメエスノウ！ あそこで最初からになったの、お前が言った
せいかよ！？ おかしいとおもったんだよおお！！！」

路地裏のクラブから出て直ぐのベンチにて。

アイドルイベントが終了して、身も心もルンルン気分で楽屋に戻つたら、コイツらがタオルやらドリンクやら何やらを持って、笑顔で待っていた。天国から地獄に落とされた気分だった。目の前も真っ白になった。手持ち六匹のボールに入った生き物が全て瀕死状態になった時みたいになつた。で、全てが終わった今、何故かギヤラをたくさんもらって俺のお仕事は終了した。それにしても……いいのかなこれ。あくまでボランティアだったのに、万札こんなにもらっちゃったよ。申し訳ないな。

そんでまあ、今はこの三人娘に詳しく問い詰めている最中です。

話を聞く限り、どうやら全部見てたらしいけどねウワン！

「くつくつく……それにしても啓太、すっごいノリノリで歌ったり踊ってたりしてたわよねー？ほんと、可愛らしかったわぁー」

と。隣でニヤつきながら俺の横腹を肘でつついてくるスノウ。畜生、恥ずかしすぎて反論できない。本当、穴があったら入りたいて感じ。

「本当本当！ もーマジで啓子さん……いや藤咲ハーマイオニーさん萌え萌えきゅんですよぉー！ 焼き尽くすくらい写真も焼き増しましたしー！」

「そうか。なら、その焼き増しした写真は後でポツシユートな。庭で本当に焼いたる」

「んにゃああああ！？ それを焼くなんてとんでもない！ 私の秘蔵コレクションにするんですー！」

「させるものかよ！ ほらっ、さっさと撮った写真出しやがれ！俺の生涯の汚点を、いつまでもこの世界でのさばらせてなるものか」

「いやーあー！ 写真取っちゃだめえええー！ てか、どさくさに紛れて私のおっぱい思いっきり触ってますよ啓太さん！ もう何か触りすぎてワシ ツカミですよ啓太さん！ ほら、いつもみたいにここで躊躇って、顔赤くして恥ずかしがって手を離してついでに写真諦めてくださ」

「ええかげん出さんかコルアアアアアアアア！」

「ひえええええええつー！ー！！？」

「……ここで処分したって、どーせエキストラやら関係者の人たちが写真いっぱい持つてると思うけどなあ……」

「動画もでござるよね。……ふふっ……DVD楽しみだなあ……」

と、いうわけで。

何とかこのアホ又ことサクラちゃんから俺の写真を奪取して、何か妙に長かったシャルバトーレの観光も終わりを迎えた。

今では帰りの電車でのんびり帰路についている。よほどお疲れの様子なのか、セツちゃんとサクラはお互い肩をひっつけて寝息を立てていた。

まあ、サクラは俺に写真とられたせいかな、半分不貞寝だったけど。

スノウはいつもどおりのすまし顔で、移り変わっていく景色を窓から眺めていた。うん、黄昏てるね。

ために悪戯（耳元でふっと息をふきかける）してやったら「あひんっ……！」と艶っぽい声を出した。

そしたら顔を真っ赤にした、半分涙目なスノウに「やあにやあ怒られた。センチメンタル邪魔してすいませんでした。」

「ったくもう！……っっていうかさ。あんた、大丈夫なの？」

唐突に話を切り替えてくるスノウ。何が？と聞くと彼女は、決まってるじゃん、とそっけなく返し、俺の上髪先端から足元までをじっくり眺めて、こう言った。

「身体のことよ。お兄様から安静にしてろって言われてたじゃん。あんなに動いて大丈夫なの？ 動き回った代謝で副作用とか出るかもしれないのに……」

「……あ」

そっぴり忘れたいた。こっちに来る前にカノンさんが言っ
てたのをふっと思ひ出す。

そっぴりえば、コンサートをしている時は無我夢中で踊ったり歌っ
たりしてたから……てかそれ以前に女の子を助けるために一暴れもし
ちやっぴたわけで……。

さあ、つと顔が青くなつた。

もしこれで男に戻らなかつたらどうしよう。

こんなナリで人間世界に戻つたら、育ててくれた父さん母さん卒倒
するかもしれない。

……いや、むしろ父さんは喜ぶかもしれないけど。前々から女の子
欲しいつて言つてたし、アイドル歌手に育ててやるんだとか言つて
たし。

と、そんなことを考えながら青い顔で頭を抱えている俺の姿を見て、
スノウがさも他人事のようにケラケラと笑いながら肩を叩いてきた。

「まーまー、そんな落ち込まなくてもいいじゃん。ほら、もし男に
戻れなくなつても、ちゃんと私がお世話してあげるから。うん、女
の子らしいファッションとか言動とか、色々教えてあげるよ」

「そーいう間違つた方向に対してのプラス思考はいいよ……一番怖
いのは、微妙に男に戻るってことだし。不自由極まりないぜ、そん
なの」

「微妙に男に戻る……両性具有とかそういう系かしら。……確かにそれキツいわね。銭湯とかプールとか、周囲の注目度ナンバー・ワンになるわね。まあ私はふたなつても全然OKだけどね！」

「お前の主観はおかしい。……いや、サクラもおそらく同じ事言うだろうけどさ。ともかく、何も起こらないことを祈ろう。今更祈つても、後の祭りかもしれないけどな」

ハハハツ、と自嘲気味に笑ってスノウから視線を外し、ガタンゴトンといった電車の振動に揺らされながら外の景色を見た。

時速何百キロメートルもの速さで流れ変わっていく風景　今電車が走っているここは郊外地なのか、一面緑色に染まっている田畑とぼつぼつと広がっている農家と、今だ農作業に勤しむ年老いた猫又たちの姿が見える。その背に映えている夕暮れはどこか地球のそれとは違っていて、神秘的な色合いを魅せていた。オレンジの色彩に広がると同時に、夕暮れの中央部にある太陽は、奥床しくも純粹な紅を展開させ、見るもの全てに歓心を与えるような……そんな色をしていた。

怖いくらい濁りのない、猫又の世界の太陽。人間の世界で見る太陽とは違う、何処か優しげな雰囲気を持つ太陽。
だから　それを見ていると、ほんの少しだけ、寂しくなった。今、ここにいるのは俺が、人間がいるべき場所ではない世界　猫又の世界なんだって、実感するから。

「ねえ、啓太。知ってる？」

ふと、いつの間にかスノウが俺の隣に座って、問いかけてきた。短めの銀髪を手でふわりと掻きあげ、まるで語るような感じで。

「そこで寝てるセツナさ。自分の本当の名前、知らないんだよ」

「え？」

視線をセツちゃんに向ける。彼女は相変わらずサクラと一緒に幸せそうな顔で寝ていて（なんか口元にはんのちよつと涎ついてたから、拭いてあげた）一向に起きる様子は見られない。

そんな彼女を見てスノウはふつと笑い、少しだけ声のトーンを落としながら喋りだした。

「どれだけ問い詰めても、どれだけ質問しても、彼女は自分のことや、預けてきた両親のことを、決して喋ろうとはしなかった。『知らない』って、『分からない』って言葉の一点張りでさ。あの頃の私は小さかったしさ、キレちゃって、教えてくれないならあんたとは口きかない！って。……あ、今でも胸が小さいだろとか言ったらグーパン飛ばすわよ。思っても飛ばすわよ」

「言わねーよ、いいからさつさと続ける、と呆れたような声で言つと、気を取り直して彼女は続けた。」

「そしたらさ。はじめてだったかな。黒服やメイドたちを困らせながら、セツナのことを調べさせようとして……パパに……ううん、お父様に、はじめてぶたれたの。凄く痛かったし、それに……今ままでずっと優しくかったお父様も、すごく怖かったし」

スノウは自分の父親に叩かれた光景を思い出したのか、自分の頬をそつと撫でて、さっきの俺みたいに自嘲気味に、少しだけ笑いながら言った。

「凄い剣幕で怒鳴られたよ。『なんで彼女のことを信用してあげないんだ』ってさ。ワケが分からなくなつて、その時は大泣きしたよ。なんで名前を知っちゃいけないの？なんで友達になろうとする人のことを知っちゃいけないの？って、お父様に泣きながら問いかけたわ。……そしたらさ、なんて返つてきたと思う？」

「……さあ。なんて返つてきたんだ？」

「……親のいない猫又の気持ちがお前に分かるのか、ってね。……ホントのこと言うとね、彼女、捨て子なの。お父様の知り合いから預けられたっていうのも、嘘。知っているの、私とお父様やお母様くらいかしらね。もちろんセツナ自身も知らない、三人しか知らない秘密。お父様から聞いた話によると、ぼろぼろの布を身にまとつて、外で泣いてたんだって。ちょうど城から近くの茂みの中でさ」

「捨て子……？ てことは、セツちゃん……」

「うん、出生も不明だし、両親の名称も経歴も不明。猫又の捨て子なんてこつちじゃ前代未聞だったし、ラインハートの一同も、セツナの親を探すために総力を上げたわ。でも、セツナのこと是一切分からなかったの。ラインハートとアインツェルが併合した後の出来事だからね。国土を広げたことによつて情報量も以前より倍以上に増した。でも、分からなかった。ヴェーダエルやアrikトルにも詮索を頼んだけど……分からなかった」

ふっ、と窓の外の景色が真っ黒に染まる。

トンネルに入ったのだらう。轟々という独特な通過音が耳に響く。スノウは未だにトーンの下がった声色と共に語る。時折、昔を懐かしむかのような振る舞いを見せながら。

「過去を知らない猫又がどれだけ苦しいか、悲しいか、お前には分かるのかって。親の愛情を知らない猫又の気持ちがお前には分かるのかって。……当然、分からなかったわ。無知だし、まだ子供だったから。だからなのかもね。その後、お父様はぎゅっと私を抱きしめたわ。抱きしめて、叩いてすまないって言って、叩かれた頬と頭を撫でてくれたの。それで分かったの。セツナはこのぬくもりを知らない、親に愛されるということを知らない、って」

……ああ、そうか。

時折見せる彼女の寂しそうな表情。その彼女の心の奥底には、知る筈もない自分自身の過去と、顔も知らない親たちへの、行き場のない愛情があったのか。

思えば「セツナ」という名前の現れも、ドラマの登場人物と自分を重ねて、自ら存在するための意義を作り出していたんだろ。そうすることで、過去にない自分を創ることが出来るから。

知ることの出来ない過去があるなら、せめてこの先にある未来だけでも自分の手で作ろうと。幼い頃の彼女は、無意識のうちにそう決意していたんだろ。

親を愛することはできても、親から愛されることはない。何のために生き、何のために生まれたか。その答えが 姫である、スノウを守るための護衛だった。

己のために、そして自分によくしてくれているスノウを守るため、そして 自身の親の代わりとなって、愛情を注いで育ててくれたスノウの両親や、周囲の大切な人たちを守るために。

それこそが自分の生きる意味と、彼女は決心したんだ。幼い頃から大切な人々を守ろうと、一生懸命努力を積み重ねてきたんだ。

「それから……私は彼女に謝りに言ったわ。それで、二人で一緒に名前を考えた。……結局、いい名前が浮かばなくてさ、最初は髪が黒だったからクロカミ、ちょっと可愛くないから濁らせて『クウ』

って呼んでたの。……それからすぐかな、セツナが時代劇を見だして、自分から『セツナ』って言い出したの。……あと、それと同じ時期くらいかな。アインツェルの両親がミスリアを預けに来たのは……でもね、ここら辺から私、妙だと思っていることが幾つかあるの。だってね、アインツェル　ミスリアの両親　」

「うっ……うっ……ん……？」

突然の寝言に肩を跳ね上げる俺とスノウ。いつの間にか、当の本人であるセツちゃんが目をしばしばとさせてこちらをのぞきこんでいた。

あまりのタイミングのよさに、思わず心臓が震えるほどビートした。それつの回らない口調で、ふわぁ、と小さく八重歯を見せてセツちゃんが問う。

「ふわぁ……けいらろの……ひめえ……？　ふぁ、せっしや、いつのまにかねむっていたでござるか……？」

……うん、ぐっすり寝てた。でも、会話の途中に起きるのはナンセンスだなセツちゃん。

スノウの方をちらりと見る。未だに動揺しているのか、心臓あたり手に置いて息を荒げていた。相当びっくりしたみたいだな。多分バックンバックン言ってるぞ。

数秒たってようやくスノウも落ち着いたので、俺の顔をちらりと見ると、「この話はまた今度ね」とひそひそ耳打ちして、セツちゃんの方へくると向き直って「あ、あははは」と不自然に笑い出した。突然笑い出されて、セツちゃんは不思議そうに首を傾げてた。

「ところで　さっきからお二人で何かお話をされていたようござるが……一体何のお話をしていたでござるか？」

おお、なんとというド直球。

もう一度スノウの方を見る。彼女もいい返しが思いつかないのか、「こっちみんな」って顔でこっち見てた。おまえこそこっちみんな。「いついや別に何でもないわよ!? あっ! そ、そう、啓太がね! セツナの爆乳おっぱいぶるんぶるーんにしたいとかなんとか! そ、そうよ、そうに決まってるわ! そうに違うない! 全く、いやらしいっいたらありゃしないわね! この変態!」

「は、はあ!? テメコラスノウ! 何セツちゃんに誤解されるようなこと言っただよ!? そんなこと言うスノウなんて大嫌いだ、バーカ! ……あ、でもセツちゃんならそんなこと真に受けず綺麗に受け流して」

「はう……拙者の……え、えっちでござるよお、啓太殿……」

「なかったー!! ほら見る完璧に誤解されてるじゃねーかー!!」
「でしようねー!!」

もう何なんだよこのノリ。落ち着け俺ら。てか落ち着け俺とスノウ。……でも、スノウの発言を真に受けて、胸押さえてもじもじ恥じらってるセツちゃんに何かすっごい萌えた。もしかしてまだ寝惚けてんだらうか。そうだらうな、だってまだ眠そうだもん。

……そういや、こんだけ騒いでんにサクラは全然起きないな。てことは、相当お疲れのようぞ。

「げへへへ……啓太さんのマグナムドライもぐもぐぺろぺろうへへ

……！」

……コイツはもう少し寝かせておこう。マジで。

こんなハヒハヒ言いながら鼻血垂らして時折痙攣しながら寝てる奴を起こせるほど、俺勇気持ってないし。

結局、最後まで聞くことは出来なかった。

けどまあ、次回どこかで聞いてみるか。ミスリアの件も、なんだかひっかかるし。

そんな感じで時間はあっという間にふけていき、気がつけば、もう俺たちが降りる駅まで着こうとしていた。

終点『ラインガルド前』に降りた俺たちはその足で城に戻り、各自此処の部屋に戻っていった。

スノウはレンくんやミイちゃんにお土産を渡すとか言って、一人だけ大広間の方へ向かっていったけど。

部屋の窓から外を眺めてみたら、既に真っ暗。時刻は20時を回っていた。あっという間に今日という日が終わってしまったな。思い返せば色々あったけど。

美容院に行つて髪や化粧を整えて、女物ファッションで街中を歩いて、フリフリのメイド服着てコンサートして……最後は女になつても出来ないだろうな、おそらく。

こちらの世界へ来てから数ヶ月。いつの間にか俺は一日にあった出来事を日記に纏めていた。

普段なら面倒臭いだなんだ言つて放置している日記だけど、この世界で起きている出来事を、本当に自分が体験した出来事なんだと実

感できるように。

へたくソな文章ではあるけれど、こんな経験は一生に一度とないから。せめて記録にでも残していようと思って。

新たな発見をして、また一日は変わっていく。楽しいことばかりではないけれど、それでも充実した、やりがいのある日々が過ぎていく。考え方を変えるだけでも、辛い日が楽しい日へと変わっていく。だから、明日はもっと楽しい日になるといいね、ハム……おっと危ねえ、ここはサクラってことにしておいて、日記の締めとしようか。

とまあ、身体が女になっていることを忘れて、いつもどおり風呂に入ろうとして、黒服や他の人たちを大いに騒がせながら、長いようで短い一日は終わった。

副作用がちょっと怖いけれど、明日はちゃんと男の姿に戻っているといいな。戻ってなかったら俺泣く。カノンさんに泣きつくから。泣いてそのまま藤咲ハーマイオニーで猫又アイドルデビューするから。

さて、今日はもう疲れたから寝よう。

明日もまた、平穏な一日が訪れますように。

で、爽やかな目覚めと共に俺はベッドから飛び起き、布団を跳ね除けて鏡へ猛ダッシュ。颯爽と自分の身体を確認してみた。

……おお、戻ってる。確かに戻ってる。男に戻ってるぞ。ここで普段どおりならガッツポーズして、サクラの部屋に直行して彼女にキスでもしてやるうかつてくらいハイな気分になると思う。

そう、いつもならそれくらいするだろう。いつもなら。

男に戻っているのはいい……戻ってるのは、いいんだけどさあ……。呼吸と共にリズムよく動いている、俺の頭付近にある妙な物体そのいち。

そして、俺の尻でふりふりと無意識に動いている、謎の物体そのに総じてこれらは、どこかで見たことがある。そう、いつものように見慣れているシロモノ。

「……何で俺の耳、猫耳になってるわけ？　なんで……尻に、猫の尻尾が生えてるわけ……!?」

ために手で猫耳を触ってみると、見事な感触。もこもこふわふわした毛玉のようなさわわり心地と、柔軟性に富んだ見事な柔らかさを出している。

柔軟剤使ってるでしょこれ……と某CMで突っ込まれるくらいの柔らかさだ。尻尾もしかり。もっふもふしてる、主に毛が。

……えーっと、ちょっと待てよ。

なんかこの後、サクラが突然部屋に乱入して、「身体の調子はどうですか啓太さん？」とか言ってる俺の姿を見て一瞬固まった後、猫目の襲撃者の形相になるっていうフラグがピンピンなんです。

いやあまさか、前回（レイシヤンの件）のあれで相当酷い目にあつたし、流石に二回目も同じようなフラグが立つわけないよなアハハッ！

それにサクラだって高々俺に猫耳と猫尻尾が生えてきたくらいで欲情するとは到底思えない

と、脂汗をいっぱい浮かばせた無表情でうんうん頷いていたら、突然部屋のドアが開いた。

扉の向こうには案の定空気を読んだかのように出現するバカタレが

いた。もとい、サクラがいた。

「やっほー、けいたさん　調子はどうぞす　」

笑顔で手と尻尾をふりふりさせてた彼女の身体が止まる。ついで喋りかけていた言動も止まる。

さあこの状況どうしようか。ここで笑顔で爽やかに「やあサクラ。いいところに来たね。今から紅茶でも淹れてあげようか？」と癒し系お兄さんみたいに誘ってみるか。

それとも微動だにしなくなったサクラの横を疾風と共に駆け抜けて、カノンさんの場所にまで逃げるべきだろうか。

ふっ、コイツの性格をよく知っている俺なら、この程度の問題など愚問に過ぎんな。何をどうするかなんて、考えるまでもない。

やることは唯一つのみ。それは

逃げるってことだよッ!!!

そう思い、彼女を跳ね飛ばす勢いで全力疾走　しようとしたが。

彼女もまた同じ思考をめぐらせていたか、少しばかり身体を捻ると、無言のまま俺目掛けてタックルしてきた。桜色の髪がなびく中見え、た彼女の瞳から　修羅に近い何かを感じた。

その気迫に飲まれてしまい、俺の身体一時停止。彼女の突撃を避けられる筈もなく、抱き疲れるかのようにぶっ飛ばされた。

今では俺の胸に彼女が埋まっている。今度は俺の胸で硬直してる　と思つた矢先、彼女はふっと顔を上げた。

ぞくり。途端に背筋に走る、禍々しいまでの悪寒。見たものを絶望させるような、慈悲に満ちたその顔。

狂気に満ちているわけでもなく、例えるならば人間に懐き甘えた仔

かーにはる・おぶ・ねこまたーしよーと・すとーりー1

いつの間にベンチに座って眠っていたのだろう。

ふと目を覚ますと、晴天の広がっていた青空は次第に赤みがさして
いて、眩しく輝いていた太陽も、今では半分だけしか顔を覗かせて
いなかった。

ぐるぐると左右を見回すと、少し離れた公園の砂場で夕日を背に遊
んでいる俺の息子 啓介の姿が目映った。本人は夢中で砂の城
を作っている最中だった。

ああ、そっぴや。啓介に公園に行きたいとせがまれて、此処に来て
いたんだっけ。寝てしまうとは何たる監督不届き。自分の子供に何
かあったらどうすんだ、と自分自身に喝を入れて、改めて腰を上げ
る。仕事が忙しいとかはただのいい訳だ。忙しいのはみんな一緒
なんだしさ。

そんなことを考えながら俺は啓介の名を呼ぶ。最近二歳になったば
かりの息子だ。まだ歩き方はぎこちないが、大分安定はしてきた。
今では一人遊びを出来るくらいにまで育っている。

啓介は俺が起きたことに気がつく、まだ小さな猫耳をピコピコと
動かして、可愛らしい笑顔を向けながらやってきた。とてとて歩い
てこつちに来る仕草が本当に可愛らしい。ほったらかしててごめん
な。一緒に遊んであげるよ。

「おとーしゃん」

これまた可愛らしい声で啓介が言うてくる。……あ、そんなに足早
にしたら足がもつれて転

すてんっ。

と、俺の予想通り、啓介は両足をもつれさせて、前のめりにぼふんっ！と転んでしまった。幸い、砂場だったので大きな怪我とかはしていなかったが、本人は相当驚いたんだろう。

砂だらけの顔を手でくしくしさせ、小さなガラス玉のような瞳をうるうるさせると、ついには泣き出してしまった。

「ひぐっ……ふにゃああんっ」

あらら。びっくりしたんだな。砂まみれでびいびい泣き始めちゃったよ。

お気に入りの服も今では砂まみれで、サクラに「もー、また汚したんですか？」とかお小言言われるだろうなーとか考えつつ、駆け足で啓介のところまで向かう。

「よしよし啓介。びっくりしたんだな。ほら、お父さんがだっこしてあげるから。男の子だろう？ こんなことで泣いたら駄目だぞー」

そう言いながら、ハンカチで啓介の顔を拭いてやりながら、小さな身体を優しい抱き上げてやる。

軽いけれど、俺にとっては『全て』が詰まった大切な存在。宝物とも言える、愛する息子。サクラと授かった……世界で一番大切な宝物。……いや、一番大切は『二つ』あるかな。どっちを選べたっていても、選べられないし。

「ひづうう……おとうしゃん……」

とまあ、当の本人は俺にひしっと抱きついてきたりするんだけど。その小さな手で俺の顔をぺたぺたさせながら、肩に顔を埋めてくる

んだけど。

砂が俺の顔に付くんすけど啓介くん。ペタペタはやめて欲しいな。クシャミ出そうになるから。

よしよし、と頭を撫でてやって、落ち着かせてやる。小さな命のぬくもりを、幼い命の温かさを、この身に津々と感じさせながら。

……ああ。

これが幸せって言うんだろっな。

自分の子供と一緒にいられる、確かな幸せ。

当たり前のようにだけけれど、子供を持って分かる親の大変さと、子育てをする楽しさ。

ふと、誰かに呼ばれた気がする。啓介を抱きあげたまま振り返ると、こっちに向けて呼びかけている妻の姿が、そこにはあった。

……その手には、妻と瓜二つの顔をした、幼い少女の手が握られていた。その子も、俺と啓介の姿を見て、無邪気に手を振ってきた。

行かなくちゃ。あの場所へ。

妻ともう一人の娘 「さつき」の待つ、あの場所へ。

……ああ。

やっぱり幸せって、こういうことなのかな。

「……また、この夢か」

滝のような大汗を顔いっぱい身体いっぱいに纏わりつかせて 俺

こと藤咲啓太はそろそろ身体も馴染んできたであろう城のベッドから飛び上がる勢いで目を覚ました。

最近、こういう系統の夢を何度も見る気がする。俺が父親となって家族と暮らす、ほのぼのとしたはいるが奇奇怪怪とした映像。子供の耳は猫耳で、尻には尻尾が生えているような、常軌を逸した奇怪かつファンシーかつエキセントリックと称するに相応しい夢。……まあ、そんな夢を見るのも正直言って悪くは無いんだが、まだ心の準備というものがだな。

と、普段よりも早まりつつあった心拍数を正常にさせつつ、そつと自分の耳を触ってみる。もふもふしていた。その感触から、ああまだ治ってないなチクシヨウと嫌悪の念に苛まれた。

俺が女へと変貌してしまつたあの日。女から男に戻つて一週間は過ぎたが、未だに俺の耳と尻尾が治っていない。ふつわふわのふつさふさの猫耳と尻尾が、今でもなお俺の身体に出来てしまっているのである。

カノンさんに訊いたところ、猫又用内服薬の副作用といった形でこのような症状が現れているらしいのだが……これだけ見たらモロ周囲からは猫又つて勘違いされてしまうよね、間違いない。何より自分では耳や尻尾を収納したり出来ないわけで、このままでは人間の世界にも戻れないのである。今は様子見として放置しているが、カノンさんが言うにはどのみち時間が経過すれば自然消滅してしまうシロモノらしいので、そんなに危惧を感じなくてもいいらしい。

それでもいつ治るかわからないので、本当不治の病にかかった気分だ。と、そう落ち込んでいたら、ことの発端というか黒幕というか首謀者というか、それらを総じて全ての元凶というのが正しいであろうアホ又のスノウが俺のもとを訪れ「まあ帰れなくてもいいじゃん。ってかさ、むしろこっちの世界に永住すればいいじゃん 私

責任もつて一生面倒見てあげるわよー？」とか皮肉めいた戯言をトドメの一撃として仰ってきたわけである。

俺だって人間だ。一応、本当に一応、人間としてのプライドがあるんだ。

たかだか猫耳や尻尾が生えたくらいで、魂まで猫又になるものかよ、と彼女の前で威勢良く豪語したら「猫又になったら生活保障だけでなく毎月の給付金も援助されるわよ。もちろん安定した職業選びも出来るし、王族のコネがあるならどこでも就職できるかもね。ああ、あと新規に作る戸籍も王族に近い身分に相当するわ。これでどう？」

魂売ろうかと思った、マジで。

……だって人間の世界、今職業難で大不況なんだもん！バイト探すのも苦労してるのに、こんな美味しい働き口見せられてホイホイついていけないほうがおかしいよ！

貶すなら貶せ。

今なら俺だって胸張って言えるさ。

人間のクズであると！

……とまあ冗談に聴こえない冗談を至極真剣な顔で考えつつ俺は、かけていた毛布の上にある物体に目を向けた。

そこには丸まって寝ているサクラがいた。

珍しく今回は猫モードで丸まって、くーくー言いながら寝ていた。

いつもなら全裸か半裸かスケスケネグリジェかSM女王様か葉っぱ隊みたいな格好で寝ているクセに珍しいな。まあ、こっちの方が重

量も無いし、もふもふしてるからいいんだけど。

「おい、サクラ。起きろ、こんなところで寝られたら起きられん」

「……うにゃあ？」

ぼふぼふと頭を軽めに撫でてサクラを起こしてやる。眠そうにのそのそとした動きで起き上がった後、くわーっと大あくびしながら伸びをしてみた。

とりあえず俺はサクラを片手で持ち上げて布団を捲って、その下に彼女を置いてやる。まだ彼女は眠たいのか、布団の上でごろごろと身体を左右に転がしてた。なんか可愛いな。

しばらくその光景を眺めていたら、ようやく目が覚めたのかお目目ぱっちりのサクラがそこにいた。

で、早速「啓太さんおはようです！」と言わんばかりに「にゃあっ！」と元気よく片手を挙げた。うむ、おはよう。

「てかさ、お前なんで猫の姿でいるんだ？ 特に深い意味はないんだけど」

「にゃあ？ にゃーうー……」

と訊くと、サクラは少し困ったような表情で俺を見た後、布団の上でふらふらと二足歩行で立ち上がりだした。

そしたら何かわかりやすく両手を使ってジェスチャーしてくれた。にゃあにゃあ言いながら。

「みゃあ！ みゃう、みゃー、みゃい！ にゃー、にゃうう、にゃー！」

……何を言っているかサツパリ分からないがな。本人はわかりやすく説明してくれているんだろが、そろそろ二足歩行も限界になったのか、おぼつかない動作で後ろに倒れこんで「にゃああうっ」と猫のような……っというか猫の悲鳴を上げてこてんと倒れた。ああ、もう何か可愛いなコイツ。猫状態での可愛さは破壊力抜群でござるな。……まあ普段でも可愛いのは、一応、一応認めてやるけど。

「みゃーっつっ……」

倒れこんだ姿勢から普段の四足歩行に戻りつつ、不満そうな顔で唸るサクラ。うーん、何かを伝えようと必死になっているのは分かるんだがな。

っというか伝えたい事があるなら人間の姿に いや、戻んなくていいや。今戻られたら俺の布団が鼻血の海に染まる。そろそろ体毛やら何やらで肢体を隠す技とか出来ないのだろうか。毎度毎度変身するたびに裸に戻られてちゃ、おちおち気を休めることも出来ないよ。

とまあ、久々に猫モードになったサクラなんだから、たまには愛でてやるか と彼女の身体を抱きかかえようとして、サクラは俺の手からするりと抜け出し、そのまま機敏な動作で俺の膝を使って肩にジャンプし、その柔らかかそうな肉球でぺしぺしと俺の頭を叩いた。もふもふした彼女の体毛が顔の側面に広がっていく。

ああ、至福だ……じゃなかった。

「こ、こらサクラ。人の頭を叩くんじゃない。いや痛くは無いんだけど……毛がまた鼻に入っ……入っ……ふえっくし！」

「みにゃー!?!」

おうふ、やってしまった。彼女に直撃とはいかないものの、口を覆わず思い切り顔を背けてくしゃみしたもんだから、サクラちゃん吹っ飛んじやったよ。

でもまあ、やはりコイツはいつもどおり腐っても猫。そのまま布団の上にもふんつと身体を預け、ごろごろと俺の足元あたりまで転がったあと、いつもどおりしゅたっ! と綺麗に立ち上がるうとして、今は猫モードだったことを思い出したのか、上手く体勢を持ち込めず再び後ろの方へこてんと転んだ。萌え。

「何やってんだよお前。人の髪をぺしぺし叩いてさ」

笑いながら問いかけてやるが、本人は転んだままで無粋な表情を浮かべていた。俺と視線を合わせずに瞳をそっぽ向けて、口元はまるで『3』の字をイメージさせるかのような形に変形させつつ、ベツドの横にある、木材製の机に置いてあったペンを見つけると、ハツとしたような表情になって机までジャンプした。そのまま前足を交互にさせながら、ぎこしない仕草でペンを持つ(というか抱える)と、こつちに顔を向けて「にゃあ、にゃあっ!」と俺に何かを問いかけた。

一体ペンで何をしようって言うんだ? 文字を書くならともかく

いや、文字?

そっぴやさっき、俺の髪をぺしぺし叩いてたよな、こいつ。

「てことは、髪……かみ……紙……ああ、そうか。紙ってそういうことか」

面倒くさいジャスチエーだな。と失笑しつつ、机の中に入れておい

たB5サイズのルーズリーフを一枚取り出すと、彼女のところへ一枚置いてやった。

彼女はそれを見て、「ぐっじょぶ！」と言わんばかりの笑顔を俺に見せたあと、身体を使って文字を書き始めた。

んで、数分くらい経ってようやく出来上がったのか、サクラはペンを近くに置いてどさりと腰を落とす。いつまでも二足歩行だと腰に来るのだろうか。そんなことを考えながら俺は彼女から紙を受け取った。

……それは到底文字とは思えない、むしろエジプトや古代の象形文字のような歪に変形した文字だったが、なんとなく、本当になんとなーくだけ彼女が伝えたいことはわかった。

『今日と明日はお祭りなんです』

漢字や平仮名のため、はね、はらい、がとんでもないことになっていたが、まだ読めるのでなんとかわかる。ルーズリーフにはそう書いてあった。

「……これじゃ説明不足だと思うんだが……つまり猫又にとってのお祭りは、自分らが猫になって色々するってことで合ってるか？」

「うー……みゃあ」

その問いにちょっと不服そうなサクラ。表情から見ても、「半分合って半分違う」と言いたげな顔だ。

うーん、他に喋ることの出来る猫又はいないのかね。困ったもんだ。

「……まあ、いいか。たまにゃ猫又が猫になる日もあるってことか

な。それでOK？」

「みゃあ！」

了承してくれた。どうやらそれで間違いはないらしい。喋る事ができなくなるのはちょっと不便だけど、まあそれが普通だよな。猫なんだし。

着替えを済ませて、サクラを肩に乗せて部屋に出ると、直ぐその廊下でミスリアと出会った。

あれ、奴さん猫の姿になってないけど、どうしてだろう。サクラの方へ顔を向けると、彼女も「？」と不思議そうに顔を傾げていた。

「おはよー、二人とも。……どつたの？ そんな奇怪な目で見てさ」

「あ、いや。今日つてさ、何かお祭りみたいなものがあるんじゃないかな。猫又が猫になるとかいうお祭り」

「……あー、そーいやそうだったね。お祭りというか儀式というか、年功行事というか。サクラから何か説明はあった？」

「そのサクラがこれだからな」

肩に乗っていたサクラを親指で示す。途端にミスリアは納得の表情を浮かべた。

「確かに言語が伝わらないね、それじゃあ。まあサクラの代わりに説明してあげるよ。今日は猫又にとって、一年に一度だけ身体を休

める日……全身に流れている、人間などに変化をするためのエネルギーが一時的に失われる日なんだ。といつても、それは長い間変化し続けていた猫又だけに言えることで、定期的に猫になっている猫又にはあまり関係のない日かもしれないね」

「ふうん。てことは、ミスリアは定期的に猫に戻ってたから、エネルギーは失われてなかったってわけか」

「そういうことになるね。うーんでも、そんな定期的に戻る人はヴェイルさんや王族の人たちくらいなものだからねえ。街中を歩いてみた？ きつと猫だらけになっていると思うよ」

街中が猫だらけだと……！？

なんだそのキャットパラダイス。けしからん、実にけしからんぞ。猫好き発狂の地となるぞ。

と、自分なりに町並みを想像（という名の妄想）していたら、サクラに気付かれて顔をもふもふされた。なにやら怒り顔でひしつと顔に抱きつかれた。もふもふ気持ちいいです。ありがとございまして。

とまあサクラに顔の横半分をもふもふされながらミスリアと別れ、ついで自前の二本の尻尾を使って首にしゅるりと巻きつけてきた（締め付けるつもりはないらしい）ところで、

「うにゃー！」

突然背後に猫の気配。それと同時に、今にも飛び掛ってきてそうな鳴き声　　おわあ本当に飛び掛ってきたあああ！？

その声を発した人物もとい猫は俺の頭にぼふんとダイブすると、振り落とされ防止か爪を立てずにひしつと俺の頬に肉球を当てて体勢を保持しやがった。

こんな芸当する奴はサクラを除けば一人しかいねえ。そう考える傍ら、ああコイツも猫化しているんだなとため息をもらしつつ、頭にへばりついてた白猫　スノウを引き剥がし、俺の目前までもっていった。

「くおらスノウ！　いきなり背後から奇襲すんなとあれほど言っただろうが！　こないだ人間の状態でフライングクロスチョップ決めて俺にシバかれたの、もう忘れたのか!？」

「うにゃうつー!」

久しぶりに猫状態のスノウを見たものの、本人は相変わらず俺に向けて威嚇している。

目といい雰囲気といい、おそらく「公然でイチャイチャしてんじやねーわよバカー!」とかでも思っているのだろうか。だろうな。じゃないと奇襲なんてしないもんな。

猫状態でしゅっしゅとジャブしてる奴なんてはじめて見たし。これが猫パンチと言うものか。当たっても全く痛くないな。ぽふぽふ殴られてるけど、むしろ気持ちいいというかなんとというか。

「……あーもー。分かったよ。嫉妬してたんだな、ごめんごめん。サクラも下ろすから許せ。ほら、これでいいんだらう?」

「みゃうつー……」

とサクラ。残念そうな声を上げて俺を見上げたが、すぐに人の足に

身体を擦り寄せてきた。

「にゃううー」

……反面コイツは切り替え早いな。
すねこすりみたいに超高速で人のすねをほお擦りしてるし。

しっかし何だ、この状況。
ものすごい歩きにくいんだけど。ものすごい気持ちいいんだけど。

気持ちはいいんだけど、いいんだけどさあ！

あ。なんか、千春と秋穂の二人で遊びに行ったことを思い出した。
懐かしいな。あの時も確か二人が俺にひつついて離れなかつたわけ。
二人とも変に対抗意識燃やしてたし。

階段に向かうための通路で二人……というか二匹と歩いていたら、
階段の前で毛づくろいをしている一匹の黒猫がいた。

……うん。黒猫っただけでもう誰なのかピンときたな。彼女はまだ
俺たちに気付いていないのか、熱心に自分の毛を直している。
そんな様子を見て横に居た二匹が、何やらニヤリと顔を緩ませた気がした。
あ、こいつら絶対悪戯する気だ。足音立てずに忍び寄ってるし。

そんでこっそりと気配を殺して黒猫の背後まで来ると、二匹はまるで威嚇するかのように前足を上げて大声で鳴いた。

「みにゃー……」

「うにゃー!」

「ふにゃああああああっ!?!」

あ、黒猫さん飛び上がった。猫状態の脚力やべえ。

黒猫さん、もう少しで天井に頭ぶつけるところだったぞ。

……あれ、なんかこの光景どっかで見たことがあるような気がする。はて、つい最近見たような。どこで見たっけな!。

「にゃにゃにゃー!」

「みにゃーん!」

「にゃっ、にゃ、にゃうううう!?!」

とまあ、思いつきり飛び上がった黒猫に飛びかかるように てか飛び掛かる二匹。

しかしその二匹に悪意は全くなく。黒猫を中心に何かじゃれあいだした。すっげー楽しそうに遊びだした。

……くっそ、携帯持ってくるべきだったな。この映像はムービーにおさめておくのが一番なんだが。

しゃアない。脳裏に焼き付けておこう。黒猫も うん、なんか黒猫って言うのが面倒になってきたな。

愛称つけるか。ヤマト。そうだヤマトにしよう。

黒猫つながりで。

「ほーれよしよし。お前らこんなところでヤマト弄っちゃだめだぞー」

二匹を両手で抱き上げて黒猫から離してやる。

腕の中でにゃーにゃー暴れている二匹（さほど嫌でもないらしく、首元に頭をこすり付けたり舐めたりしてる。とてもくすぐったい）の傍らで、黒猫は何故だか「ふにゃあつ!？」と驚いたような鳴き声を上げた。多分ヤマトって呼ばれたからだろう。なんかアタフタとした仕草でクナイを投げるような、短刀を扱うような素振りを見せて、なんか忍者っぽいジェスチャーをやりだした。ふむ、面白いからもうちょっとからかってみるか。

「おー、ジャスチャー上手いなヤマト。なんだか忍者っぽいぞー」

「にゃあつ!？ ……うううう…ふー…にゃうー…」

あ、なんか瞳がうるうるしてるこの黒猫。半泣き状態というやつか。こつちを上目遣いで見詰める仕草が殺人級だというか、対人用殺戮毛玉だというか。

それにしてもこの黒猫可愛らしい。この桜と白の二匹は時々負のオラ出すけど、こやつは純粹というか。

でも今はそういうあざとい仕草を見せないでくれ。人間状態でもヤバイのに猫の状態なんかでやられたら…お兄さん世間から冷たい目で見られるような人になっちゃうじゃないか。

…ま、そろそろ可哀想になってきたから、もうからかうのはやめようかな。

「ごめんごめん。そんな顔するなってセツちゃん。ちょっとからかっただけだからさ」

そう言っつてわしわしと頭を撫でてやる。ついでにそろそろ二匹も下してやるう。なんかコイツら、首元から頭を突っ込んで服の中に入ろうとしてるし。

黒猫 セツちゃんは自分の名前が呼ばれた事にパアッと表情を笑顔に戻したが、からかわれていたのを自覚して、ぷくーつと頬を膨らましたした。

……にしても、コイツら本当に猫なのかな。感情表現が豊かすぎ……あ、違う。猫じゃないや。猫又だ。

傍らに猫三匹を連れて城下町へ。散歩の傍ら街並みを眺めてみたのはいいものの……なんとまあ、眼福というべきか、予想通りというべきか。

こないだまで魚屋でハチマキ巻いて魚売ってたおっちゃんは渋い顔したおっちゃん猫に変わっていたし、周囲も然り。街中にはやーいやーと猫の鳴き声だけで反響していた。

これ絶対社会・生活を行ううえで危機的状況だよなあ、と渋い顔で眺めていたら、猫だらけの街中で一際背の高い男性（といつても、猫耳はついてるけど） カノンさんに出会った。

話を聞けば、この『お祭り』というものは日数を分けて行われる物らしく、異例の事態が発生した時の為に重要な中心人物だけは猫化しないとかなんとか。定期的に猫になっている人も含めて。

そんなわけで街中猫かと思いきや、ちらほら人間姿の猫又たちの姿も見る事が出来た。ふむ、でも区別をつけるために猫耳は常備しているんだな。

「みゃあー、みゃー、みゃうー」

「はいはい。人間だけど、俺にも猫耳はありますよ。だから俺の後頭部にしがみついて人の猫耳を前足でもふもふするのはやめなさい、サクラ」

いつの間にか人の体の上っていたサクラを引き剥が　そうとしてそれが出来ず、「ふんぬっ」と踏ん張るような格好で頭の上でうつ伏せ姿勢で待機してしまったサクラ。

鳩を頭に乗せた西郷どんじゃないんだから、人の頭に乗つかるなよ、と言おうとしたところで、今度はスノウが人の右足に抱きついて「うー、うー、うにー」とか唸ってる。こいつも離そうとしたがそれも出来ず。結局ぐいぐいよじのぼって来て、俺の胸にしがみついたような姿勢で居座ってしまった。このままだと辛そうだから、結局スノウは抱きかかえてやることになった。

かわいいけど面倒くさい奴らだなー、とか苦笑をしていたら、今度はセツちゃんが何か羨ましそうに、物欲しそうにこつちを見ていた。尻尾が直立姿勢で、先っぽがちょっとだけ動いていた。

……確かこれって、好奇心とかを示しているんだっけ。てことは、こつという（サクラやスノウみたいな）行動に興味があるのかな。

ちょっと試してみようか。そう思ってセツちゃんに手を差し出すと、彼女は微かに動かしていた尻尾の先端を綺麗に垂直にさせた。おお、予想通りだ。

彼女は俺の手を使ってよじよじと上ってくると、居場所は肩に決めたのか、行儀正しくちょこんと座って「にゃーう」と鳴いた。えらくご機嫌な様子である。

……うーむ、ハーレムっすねこれは。
でもまあ、こういうハーレムなら大歓迎だ。
人間状態でやったとなれば、確実にR - 18指定になりますがね。
えらいっこちゃですね。

「ははっ、三人は本当に啓太くんが好きなんだね。羨ましい限りだよ」

「いつもこういう甘え方なら全然OKなんですけどね。人間状態は流石に刺激が強すぎますよ」

「まあでも、これほど二人 セツナやアシュリーが人間の人に懐くのは珍しいからさ。なるべく邪険にしてあげないでくれるかな。それほど啓太くんを頼りにしてくれてるって証だから」

二匹の頭をぼんぼん撫でて言うカノンさん。血は繋がってはいないけれど、長年城で過ごしてきた彼にとって二人は妹のような存在なんだろう。

彼に撫でられてセツちゃんとスノウは気持ちよさそうに喉を鳴らしていた。ふと思いついて、頭にのっかかっていたサクラも同じように撫でてやった。彼女も同じようにうにゃうにゃ言いながら頬擦りして喉を鳴らした。

和やかな雰囲気、無意識に笑みが漏れた。

適当に街中を覗いたあと、城に戻ろうとした俺たちに向けて、カノンさんがちよっとした【提案】を挙げた。
何でも自分の自家用車を使って、少し遠出をしようというらしい。

どこへ行くのだろうと思いつつ俺たちは彼の車に乗ってラインガルドを出て、緑溢れる自然の道を通りながら郊外地へ。

ここラインガルド周辺は自然と文化を両立した、いわゆる都会とは言い難い雰囲気を放っている。時に目立った高層ビル群もなければ、車や移動をする際の乗り物もさほど見られない。

それでも文明はこちらの世界よりは進歩しているのか、人間とは違う技術を開発して生活を行っている。ありのままの自然を壊さないように、必要最低限の費用だけを消費してやりくりをしている。それだけでも、普通に生活していけているのが猫又の凄いとこだ。

……というのも、世界がバランスを保つためには、皆が皆同じ物資を同じ形で共有していければ、きつと人間だって普通に生活しているんじゃないのかって、俺は思った。

だからこの世界は緑が澄んでいるのかもしれない。緑だけでなく、心も。他人を思いやる心を誰しも持つ猫又たちが住まう世界だから、世界自身も美しく保つことを実現できている。

闇のない世界。表裏のない世界。人間が心の底で恐れ、望んでいた、確かな世界。本来はこうであるべき人間の世界を、この世界は忠実に表していた。

でも、俺はその世界が少し怖く感じてしまった。

俺は人間だからさ。疑い深い人間だから、その表裏のない世界でもどこかで【闇】が存在しているのではないのかと、そう思ってしまう。

他人の心の闇を常に気にしてしまう人間だからこそ、この平和な猫又の世界が何処か怖くて、その平和ですら、誰かの犠牲の上で成り立ったものなのかもしれないと、そんなことを錯覚してしまう。

どうして猫又は、醜い心を無くしてしまったんだろうか。

それとも一度、無くさざるをえない状況に陥ってしまったのだろうか。

……分からない。本当に、分からない。

良いことなんだろうと思うけれど、どうしてもその真理を求めてしまふ俺がいる。

姿形は似て要れど、やっぱり猫又は人間じゃない。……いや、姿は人間に“似せている”と表現した方がいいのかもしれないな。

「にゃうー」

ふと、物思いにふけていた俺の膝の上に、サクラがちよこんと座っていることに気づいた。桜の毛色に、ふわふわと動かしている、猫又特有の二本の尻尾。

彼女は俺を興味深そうに見つめていた。その愛くるしい顔と、小さくはあるが何処か芯の通ったところをイメージさせる瞳に魅せられて、ふと自分で考えていた事が馬鹿らしくなってきた。

……ほんっと、俺が考え事なんてらしくねーな。

何を思っつてこんなこと考え出したのか知らないが、もう止めよう。こんなことは。

猫又は猫又。人間は人間。それだけの話だ。彼らと俺たちは違う。人が皆個性的であるように、猫又と人間の基準が違うのは当たり前のことだ。

……もしかしたら、俺は羨ましがっていたのかもしいな。理想を持っていた猫又たちを、心の底から。

抱き上げた彼女からは、人間と同じ【命の重さ】を感じた。それだけは人間と変わらない。確かな生命の重さを感じた。

かーにはる・おぶ・ねこまたーしよーと・すとーりー2

辿り着いた場所は、都市部から離れた郊外地の、少し山奥に入ったところに位置する一軒家。

一軒家と言ってもごく一般的な家庭住宅とは違い、大家族が暮らすような大きめな住宅設計を施してある。

猫又の世界とはいえ、郊外地に來れば人間世界の住宅とさほど変わらないんだな。塗装の少し剥げた薄茶の瓦屋根や、庭にある様々な種の花を見てそう感じた。

古びた印象を持つその家は昔から存在しているのがよく分かる風貌で、じっくりと眺めていたら、ふと田舎の親戚宅を思い浮かべた。そっだ、なんだかこの家から懐かしい匂いがするんだ。子供の頃に何度も来た事があるような、そんな感じが。

「最近忙しかったからね。ろくに顔も出せてなかったし、どうせ行くならみんなを連れて行こうと思ってね」

「ここって、カノンさんの……」

「そう。僕の実家。……と言っても、今は祖父と祖母しかいないけれどね」

猫三匹の足を汚さないように、しっかりと抱きかかえて車から降りる。セツちゃんは肩が気に入ったのか、するりと俺の腕を抜けて右肩にちよこんと座った。

カノンさんはそんな様子を見て微笑みながら、こつちだよと俺たちに告げて家の玄関まで歩を進めていく。俺も黙ってその彼の後を追った。

玄関まで来ると、少し離れたところにある縁側で、カノンさんのおじいさんらしき人がお茶を啜りながら庭を眺めている様子が目に入った。猫耳と尻尾があるところ、猫又であることは間違いない。そのおじいさんは落ち着いた様子で庭を眺めているが、俺たちにはまだ気づいてはおらず。一言声をかけようかと思った瞬間、スノウが俺の腕の中で「にゃっ、にゃあ！ にゃうー！」と呼びかけるような声を上げた。それを聞いたおじいさんは不思議そうにちらりと顔を向けて 頬を緩ませた。それは本当に邪気のない 心から喜んでいいるような、そんな笑顔だった。

「おお、カノンじゃあないか。それにアシユリーちゃんやセツナちゃんも。よく来たねえ」

縁側の下に閉まってあつた草履を履いて、おじいさんがこちらにゆつくりと歩み寄ってきた。とたん、俺の胸からスノウが飛び退き、おじいさんの胸へダイブしていった。

スローモーション。まさにそんな表現が正しいであろうスノウの勢いある跳躍は、狙いはずすことなくおじいさんの胸元へひしつとしがみついていた。ごろごろと喉を鳴らしながらおじいさんの頬に自分の頬をこすりつけている様子は、見ていて微笑ましかった。

「よしよし、アシユリーちゃんも大きくなつたねえ。久しぶりに顔が見れて、おじいちゃんはとっても嬉しいよ」

「にゃあーん」

頬をこすりつける傍ら、ちろちろと舌を出しておじいさんの顔を舐めだしたスノウ。

うーん、おじいさんすっごいくすぐったそう。笑いを我慢してるっばいけど、そのせいか顔が若干引きつつちゃってる。

でも、本当幸せそうだなー。

「おーい、おばあさーん。カノンが帰ってきたぞー。おばあさーん」
庭から縁側に向けておじいさんが呼びかける。おばあさんも外に出
ていたのか、すぐに返事が返ってきた。

「あらあらー、本当かい？ 今洗濯物を入れてるから、もうちょつと待っててね〜」

のんびりした調子の声がこちらまで届いた。ふむふむ、洗濯物か。確かに今日は洗濯物を干すのに絶好の日和だ。いい感じに空は快晴
空気も澄んで湿気も無し。

森の中ではあるけれど、ちょうどここは日の光が当たる場所だし、
乾かすのには快適だろうな。

「もう少しかかりそうなら、先に家の中へ上がってるからなー。急
がなくてもいいぞー」

「はーい」

それだけ言って、おじいさんはスノウをあやしなからこちらへやつ
てきた。

ともかく、細かい自己紹介や説明は家の中に入ってからやらせても
らおう。せつかくの再会に水をさすようなことは出来ないしな。

とまあ、築数十年は過ぎているだろうカノンさんのお宅にお邪魔して。

今では日本風の畳の上に座布団を敷いてもらって、カノンさんの祖父母の方々と談笑中。

身内話で俺は蚊帳の外フラグが立つかなーと思っていたが、流石は人（っていうか猫又）の気をすぐに察する猫又であって、色々心配りもしてもらった。

話をしてみたら、なるほどこの人たちはカノンさんのおじいさんおばあさんだと納得できる。髪色や顔つき云々ではなく、雰囲気がよく似ている。

カノンさんの心優しい一面は親譲りかな。俺は人間だというのに（今は擬似猫だけど）警戒心を全く見せることのない二人に、自然と笑みが漏れた。

そんなわけで楽しく話をさせて頂いてるわけなんだが……。

「みゃうーん」

「はいはい。サクラちゃんも良い子良い子。ほーら、よしよし」

コイツの馴染むスピードも半端じゃなく速いというか、なんとというか。

さっきまで俺の腕にいたサクラはいつの間にかカノンさんのおばあちゃんの腕に収まり、まるで赤ん坊のようにあやされている。

本人もそれにはまんざらでもないようで、隣でおじいちゃんに気持ちよさそうに頭を撫でられているスノウと一緒に、至極満悦な顔でくつろいでいる。

しっかしまあ二匹とも、なんとも油断だらけな格好だ。スノウにいたっては仰向けで寝転がってるし。本当、気持ちよさそうだったらありやしない。ちょっと嫉妬。

ちなみにそんな様子の二匹と比べて、セツちゃんは未だに俺の肩に乗って凜々しい顔でいる。

……というのも、本当は甘えたいのだけれど、二匹の邪魔しちゃいけないって思ってるのかな。無表情な顔つきの影に、ちょっとだけ沈んだ表情も見えた。

せつかく来たんだから、セツちゃんだって甘えたいんだよな。でも、本人のプライドがそれを許さないのだろうか。誰よりも他人を優先して生きてきた彼女だから、幸せは自分より他人が先に味わうべきであると、そう考えるようになってしまったんだろうか。

……つたく、仕方ねーな。

俺は肩に乗っていた彼女を両手で支え、膝の上に座る位置を変えてやる。

突然の移動に驚いた彼女だったけれど、俺の視線に気づいてから、すぐに抵抗をやめた。そんなことをしても無意味だと悟ったんだろう。

最初は膝の上でもびしっと座っていたセツちゃんだったけど、ふわふわと俺が頭を撫でたり首をくすぐってやつたりしていたら、次第に姿勢を乱し始めて ついにはこてんと身体を倒して、胡坐をかいていた俺の膝にもたれかかるようにして寝転がりだした。「ふー、にゃうーん……」とえらく呆けたような鳴き声を上げながら、緊張の糸が切れた黒猫は甘えん坊な猫へと早変わり。ごろごろと聞いたことないような甘えた声で彼女は俺の膝でくつろぎだした。

……いや、くつろぐのはいいんだけどさ。膝に自分の腕を絡ませて

もふもふしたり、毛をこすり付けたり、お膝ぺろぺろするのは流石にやめてくれないかセツナさん。
めっちゃくすぐったいねん。めっちゃゾクゾクするねん、そないなことされちゃあ。

とまあ、思いっきりくつろぎモードになったセツちゃんをおばあちゃんに預けて、今度はサクラを抱いて談笑へ戻る。

交わす言葉は世間話ばかりだけど、なんか親戚の家に遊びに来たみたいで新鮮。俺が人間だつてことを伝えても大してびっくりしなかつたし（まあ信じてるかは分からないけど）、どんな話でも邪険にせずしっかり聞いてくれてる。カノンさんも本当に楽しそうに、今まであったことを二人に話している。

……あー、やっぱいいなこういうの。どこの世界でも家族って大事なんだなつてことを思い知らされる。セツちゃんやスノウにも、まるで本当の家族みたいに接してあげている。

そんな優しい二人を見て、俺も向こうに戻ったら、親戚の家に顔出しに行こうかなと考えてみたり。多分行ったら行ったで、どうせ小遣い目的だろーとか茶化されるかもしれないけれど、それでもいい。

無事に毎日をご過ごしていることを確認できたら、俺は満足だからな。

どのくらい話をしていただろうか。気づけば庭から差し込んでいた光は赤みを帯びていて、森全体も少しずつ夕闇に飲まれていた。そういえば、そろそろ夏も終わりに近づいているんだな。夏場だとまだ明るかった空も、今では少しずつ黒に染まっている。こうして夏も過ぎて秋が来て、そして冬がやってくる。

四季があるのは猫又の世界も人間の世界も変わりはない。けれど、猫又の世界の方が夏は短いのかな。温暖化の影響が少ないせいもある。

つてか、こちらでは夏でも過ごしやすく感じてしまう。

耳を澄ませば、庭から鈴虫の音色が聞こえ、その音色と重なり合うように風鈴も風に吹かれて優雅に鳴り響いている。

耳に心地よいその音たちは、静かな世界でひっそりと響いて、余韻を残して消えていく。四季のめぐりと共に、次の季節を迎えては消えていく。

なんだかロマンチックだなあ、と一人感慨深く考えていると、少しうとうと気味だったサクラもその音色を聴いて、ゆっくりと頭を左右に振り出した。楽しそうなのは容易に分かった。

「さて、と……」

重い腰をあげてカノンさんが立ち上がる。もうそろそろ帰るのだろうか。そんな風に彼を見ていたら

「それじゃあ外もそろそろ暗くなってきたから、僕たちはもう帰るね……と言いたいところだけど、啓太くん、車のキーを渡すから、ちょっと車内で待ってて貰えるかな？」

とカノンさんが言ってきた。もちろんそれを拒む理由もない俺は頷いてキーを受け取り、二匹の猫娘を呼んで俺は立ち上がった。

「またいらっしやいね〜」「今度は泊まりに来なさい。盛大におもてなしをするよ」と言ってくれる二人に笑顔で頭を下げ、俺はその場を後にした。

赤くなった空も少しずつ闇色に染まりつつある。セツちゃんは外の色と同化して見えなくなっちゃうな、スノウは暗くても目立つけど、と独り言を呟きながら、車の中へと入った。

それから数分が過ぎた後、カノンさんがこちらに手を振りながらやってきた。

念のためにかけておいたオートロックを外してカノンさんを出迎え、彼が車内に入ってくるのと同時に、キーをすばやく渡す。

「ありがと」と一言だけ言ってカノンさんはエンジンを入れて車を動かし始めた。そして車を動かしている傍ら、庭で手を振っている二人の姿が見えた。

その表情は少し寂しげだったがけれど、また来てくれるのだろうと信じているのか、笑顔だけは忘れていなかった。

さようなら。またお邪魔します。そう呟いて俺は小さく手を振って、座席に深く腰掛けた。猫三匹もミラーに手をかけて、にやあにやあ言いながら彼らを見つめていた。

静かな山中とは不釣合いな、車のエンジン音が辺り一面に響いていく。

発進していく車の中で、いつまでも手を振ってくれている二人を後部座席から見つめながら、俺たちはカノンの実家を後にした。

「カノンさん」

「ん、なんだい？」

「ちょっと野暮なことを聞いちゃうんですが、あの後、三人で何の話をしてたんですか？」

「あはは……それ、聞いちゃう？」

「あつ、いえ。話し難いことなら話さなくて大丈夫です。すいません、変なこと聞いて」

「……いや、話し難いことじゃあないんだけどね。ただ、ちょっと長引いちやうかなって思ってたさ」

「長引くほどの話なんですか？」

「まあ、ね。私も一応研究者であり、医者だし。守秘義務というものがあんだけど……まあ、啓太くんはほとんど身内みたいなものだから、大丈夫かな。本当はいけないんだけどね」

そう言つて、バックミラー越しにカノンさんが俺に向けてウィンクしてくる。……身内、か。人間と猫又つていう、超えることの出来ない境界の間柄ではあるけれど。

「……さつきはさ。二人に薬を渡してたんだ。というのも、顔を出すのはついでみたいなもので、本当は薬を渡しに行きたかったんだ。そろそろ無くなる頃だろうと思つてたし。それで、どうせ顔を出さならみんなを連れて行ったほうがいいかなって思つてさ。特に啓太くんやサクラちゃんとながりを持つてくれたら、尚更いいかなって」

「……薬？ ということは、二人は何かの病気で……」

「……うん。昔、この地で発生した風土病のね。傾向的には良くはなつてきているけど、まだ全快とはいかなくてね」

「風土病？ えっと、このシェアリスで流行つた？」

「そう。……一昔前、病気にかかった猫又たちを死へと誘い……そして私の父と母の命を奪った、治療不可と呼ばれていた悪魔の風土病」

「えっ……？」

カノンさんの父親と母親の命を奪った、治療不可の風土病？でも、それだったら……。

「……少し、理解できないって顔してるね。そりゃあ私たち猫又は、人間とは違ってそれほどヤワな身体ではないし、多少の外傷ならすぐに完治できる。……でも、病気だけはそうそうすぐに完治できない。外から受けた傷は修復できても、中で出来た傷は修復出来ないこともある。人間と同じ、位置によっては二度と元には戻らないところもあるよ」

「でも、そうだとしても。命を奪うほどの風土病って……」

「健康そうな猫又でも、ある日を境に突然命を落として死んでしまう。心不全や心臓発作みたいなものだね。……それもまあ、今となつては解決を得られる病気なんだけど」

「治る病気なんですか？」

「うん。……僕の両親もさ、医者であり、科学者だったんだ。原因解明のためには自分の身体を投げ捨てても取り組むような、ぶっちゃけると医師失格とも呼べそうな二人。その二人がさ、自分たちの身体を使つて、やっと原因を突き止めたんだよ。自分の身を捨てて調べて、世界中に広まるだろう風土病に終止符を突きつけたんだ。……馬鹿だよ。生体にしかならないからって言って、自分たち

も風土病にかかって、死ぬ間際まで身体を追い込んで、経過を調べ……男女共有の特効薬を作って、治るんだと思った瞬間、二人して事切れちゃうなんてさ。本当……馬鹿としか思えないよ。どうしようもない」

口調は相変わらず穏やかではあるけれど。

カノンさんの語りには寂しさと悲しさも含まれていた。辛辣な言葉とは裏腹に、聞こえてくる声は苛立ちも怒りも感じられない。

ただ……哀という感情に支配されている悲しい言葉たちだけが、俺の耳に届いていく。

そんな彼の言葉を真に受けて、俺はカノンに返した。

「……でも、カノンさんはその二人の背中を見てきて、同じ医者として、科学者としての道を歩もうとしたんでしょう？」

「……まあ、そうだね。現に、今でも風土病が治っていない祖父母を助けたくて……ううん、それだけじゃない。ほかにも発生しうるだろう様々な病気からみんなを守りたくて、この道を歩んできた。死と隣り合わせの日常を、ただひたすらに歩んできた」

「私は神じゃない。治せない病気もあるだろう。手に負えない難題もあるだろう。……けれど、この自らの命がある限りは、みんなを病気から守りたい。健康な身体で居て欲しい。その願いは決して嘘じゃない。誰もが傷ついていく悲しみの連鎖から、たくさんの人々を解き放ち、まっとうな生活を送らせてあげる。それが医者としての、本当のあり方なんじゃないだろうか」

彼の言葉を遮る者は、俺以外に誰も居ない。

いつまでも続くカノンさんの語りに、俺は黙って耳を傾けた。風土病。昔は死ぬ病として流行った病気。その病に身を挺して解決策を作り上げたカノンさんの両親。そして今、その二人を引き継いで彼がいる。大国の専属医師として立派に働く、カノンさんの姿がそこにある。

……俺が親だったら、これほど立派なことはないと思うな。誰かを救いたいという信念を貫いて今を生きるカノンさん。その背中はまだ両親を超えているのか分からないけれど。それでも俺は、彼はとても偉大な人だつてことを実感した。ただそれだけを、真摯に感じた。

車がラインガルド構内へと入っていく。

猫三匹は疲れゆえか、すっかり眠ってしまった。やれやれ、まだ風呂にも入っていないのにな。

そつとミラー越しに外を見る。

夕暮れに染まっていた世界は、星空を描きながら闇の世界を静かに映していた。

「さん！ 起きてください！ 啓太さん！」

……む？

あれ、いつの間に眠ってたんだろう。

さっきまで夜だと思ってたのに、気づけばもう朝日が昇って小鳥チユンチユンとは。

むくりと身体を起こす。パジャマ着だつてことは、ちゃんと風呂には入っている。しかし、昨夜の記憶がどーしても思い出せない。

周囲を見回す。サクラの声が聞こえたと思ったけど、周囲にそれらしき人影無し。と思ったら、ドンドンと乱暴にドアをたたく音。それと一緒に俺の名を呼ぶ彼女の声。

「けーいたさーん！ 起きてー！ 起きてくださいにゃー！ 異例の事態発生ですにゃー！ 開けてにゃー！」

……あー、もー。うっせーな。

異例の事態ってなんだよ。まさか身体が猫又じゃなく犬又になったとかか？

……俺、犬コワイからそういうのはやめてほしいな、うん。

盛大なあくびを漏らしつつ、気だるそうにドアを開ける。目をしばしばさせて彼女の姿を見て 最近絶句ばっかしてる気がするけど、とりあえず絶句した。

相変わらずの猫耳と尻尾は健在。

それと同時に、お気に入りの桃色ティーシャツの下から出てる、もふもふした桜色の体毛がふわりと全身に広がっている。大きな目と頬には数本の猫ひげ。きらりと光る八重歯。

サイズ的には間違いない。サクラだ。サクラだけど……見たことがないサクラの姿だ。まるで猫をベースとした人間というか、丸つきり獣人だというか。

まあ、なんていうか……朝一番で度肝抜かれた。驚いた。

驚いたんだけど、その分……。

「うにゃーん……啓太さーん。なんか微妙に元に戻っちゃったっぽくて、まだ猫の面影が残ってるんですにゃー。口調もなんか変だし、助けてくださいにゃー……」

「……なあ、サクラ」

「うにゃ?」

「……ちよつと、抱きしめさせる。いや、かなり抱きしめさせる。それから、とりあえず部屋入れ、な? ここで突っ立ってるのもなんだから、部屋入れ。お茶飲むか? 疲れてないか? まあゆっくりしていけよ。俺の部屋で。主に俺の部屋で」

「にゃっ……にゃあ……? け、啓太さんの目が血走っててなんだか怖いですにゃ……あつ、ちよ、そんな強引に部屋に入れたら駄目だにゃ……って啓太さん落ちていてもうちよつとゆっくり歩かせて……ふにゃー!? 啓太さんそんなところをもふもふしちや駄目ですにゃあああああつ!!!? ふっ……ふにゃアツーー!?!」

そういや、まだ「お祭り」の影響が残っているのかな。

まあ、そんなことはどうだっていいや。とりあえず今を、今を楽しもうかな。ふふ、ふふふふふ……!

私ことアシュリー・ラインハートは、今のこの状況にとても困惑しています。

時刻はまだ朝方。私はまだ寝ている時間帯だというのに、部屋に突然の来訪者が出現。
しかもその来訪者が……

「ふにゃあああ〜ん！」

人のベッドにぺたんこ座り込んで、びーびー泣いている泣き虫さんで、桜色の髪をふわふわさせながらも大粒の涙をこぼしながら、我が物顔で私の部屋に居座っているんです。

ええ、ぶっちゃけると迷惑極まりないですね。泣いている理由も分からないからウザさは全開です。蹴っ飛ばしてやろうかと思ったくらい。

「あーもー！ ピーピー泣いてんじゃないわよ、うっさいわね！」

泣きたいのなら自分の部屋で泣きなさいよ！ なんて私の部屋で泣いてんのよー！」

「だって、だってえ……啓太さんが、啓太さんが……ふえええええん！」

「だー！ もう！ やかましい！ ワケを話しか泣くかどっちかにしなさいー！」

「びええええええええん!!」

「泣くなー!!」

……我ながら滅茶苦茶を言ってるような気がしてるけど、細かいことは気にしない。王族ですから。

とまあ、流石に泣いている子を部屋の外に蹴っ飛ばすほど私も非情ではないので、仕方なく泣き止むまで待つてやることに。

近所迷惑したらありやしない。まだ周りは寝てるかもしれないのに……まあこれが猫らしいつちゃ猫らしいんだけどさ。

それにしても、こんなにコイツが泣くななんて珍しいわね。啓太と派手に喧嘩でもしたのかしら。まあ、そうでしょうね。啓太が啓太がって言ってるもんね。

やれやれ……私はあんたらの仲介人じゃないんだけどなあ……。

「うつく……ひつく……ひぎい……」

「ちったあ落ち着いたみたいね。んで、結局どうしたのよ?」

いまだグズグズ泣いているサクラの鼻にティッシュを当ててやる。

ちーん!と鼻をかむ小気味よい音が聞こえた。

泣いてるせいか目も真っ赤で灼眼みたいなことになってる。まあ、充血してるわけだからかつこよくも何もないんだけど。

とまあそんな感じで彼女を見ていたら、鼻水をたらしながらサクラが勢いよく言ってきた。

「うつうつ……啓太さんが私をシカトするんですー! 昨日からなんにも話してくれなくて、私を見るとすぐに何処か行っちゃうんですー! 避けられてますー!」

「ふ、ふーん……。まあ、どーせあなたのことだから、また何か無意識のうちに啓太を傷つけること言ったんじゃないの？ あいつあぁ見えて繊細だし、知らない間に心を粉々に砕いたとか、そんなの身に覚えはない？」

「ふぎゆう……。うーん……。こないだ料理長と啓太さんの料理を評論家に比較してもらって、それが終わったあと異様に啓太さんが凹んでたような……。ああ、そういうは大切にしたガラスも間違えて割っちゃって……。でもあの時は笑って許してくれてたけど……。ああ、そういや啓太さんが大学へ提出するはずだったレポートに、間違えて私の夢小説をワードで上書きしちゃったっけ。でもあれはまだバシてないしなあ……。あ、上書きで思い出した。確か啓太さんのゲームのセーブデータも上書きを」

ずびしっ！

「いったーい！ 突然何するですかスノウー！」

「身に覚えありまくりじゃないの！ つーか世界レベルの料理長と比較させるとか、あんたどんだけ鬼畜なのよ！？ そりゃフツーは口もきかなくなるわよ！」

「……………つてことは、やっぱり私嫌われてるー……………！ ふっ、ふえええええんごめんなさい啓太さああんっ！！」

「だから泣くなっつーのー！！」

再び泣き出したサクラに盛大なツッコミを入れながら私自身も盛大なため息をつく。

まああの啓太がそれくらいのことではいちいち怒るようなタマでもな

いでしょうけど。おそらくサクラに秘密にしたいことがあって、意図的に避けてるだけでしょうね。

そんなことも分からないこの子は天性の天然っ子というか、ただのアホの子だというか。……ま、面白いからこのままにしておくけど。これからサクラがどういった行動を起こすか、結構見ものだしね。

「……んで、どーすんのよ。ここでびーびー泣いてても仕方ないんだし、もう一回啓太にアタックしてみたら？　もしかしたら誤解かもしれないし」

「ひぐつ……ううー……そうしようとしてさっきもアタックしたんですが、不在だったんです……」

「不在？　城の中とかは？」

「色々聞いて回りましたが、いませんでしたー……セツナさんの部下さんによれば、なんでも今朝早くに遠出して姿を見かけたって」

「ふーん……」

……ははあ、なるほどね。大まかに理解できた。そういやアイツだったものね。

でもそれがサクラを避ける理由になるのかしら。もしかしたら他に何か理由があつてかな。

二人が人間の世界にいた出来事は知らないから、何とも言えないけど。

……本当、いいなあ。サクラ。羨ましいよ。

「……仕方ないわねー」

本日二度目のため息を彼女の前でついて、私はクローゼットの中から服を取り出していく。

きよとんとした顔のサクラに少し大きめの白い帽子を被せてやっつから、きつぱりと彼女に言ってやった。

「この場所にいないんなら、追いかけるわよ。ほら、早く準備しなさい。ちよっとした日帰り旅行に行くわよ」

本来なら俺一人だけでも良かったんだけど、今日はやたらギャラリーが多いんだな。

高速で景色が移動していく最中、俺……というかミスリア、ジャック、ミイちゃんを入れた俺たちはラインガルド駅発の始発の電車の中にいた。

向かうべき場所はここから一度電車を乗り換えて向かう郊外地であり古びた寒村　シックザール。ラインハートとヴェーダエルの境界線上に位置していて、どちらの領地でもない極めて稀な村（領土問題は人間世界と比べて、さほど重要視はされていない。ある意味では一種の区切りがついていない村）で、寒村と言うだけあって若者はおらず、今でもひなびた感じの印象が強いところだとか。

で、何故そんなところに俺たちが向かっているのかと言えば　。

「……みー、啓太お兄ちゃん。じっと懐中時計を眺めて、どうかしたの？」

「……ん、ああ、ごめんな。ちよっと考え事をしてさ」

そう。肌身離さず持ち歩いてきた、この懐中時計を直しに行くためだ。

自分の席があるにもかかわらず、俺の膝の上にちょこんと座ったマイプリティガールことミイちゃんの、スカート越しに感じる柔らかい尻の感触に至極満足しつつ頭を撫でてやりながら、一年前にサクラからもらった懐中時計をじっくりと見つめた。アンティークショップで見つけた故に年季も入っていて、もう直ぐ寿命が来るだろうかとは思っていた。そして最近になって秒針が動かなくなり、動きが止まってしまったのだ。城の中に居た腕利きの職人さんに頼んではみたけど、どうにも無理な様子。中を解体して油をさすなど試してみたんだけど……まるで反応無し。

動かない時計を見てがっくりと頂垂れていたら、職人さんが「世界有数の時計職人がいるから、そこへ行ってみてはどうか」とアドバイスをくれた。

……で、俺たちは今その時計職人さんを求めて、その人が住むシツクザールへ向かっているのである。三人はちよつとした日帰り旅行を楽しむらしい。まあ、遅くならなければとどころ寄り道しても構わないけどな。それほど遠い距離でもないし、早朝に出発したから、着くのも寄り道して大方昼過ぎくらいだろう。現に今も中間地点を通り過ぎている。もうそろそろ乗り換えの駅に到着する頃だし。

しっかしまあ、それにしても……

「この辺は相変わらず田畑が続いてんだなー興味に欠けるよ……よっつ」

そう言って、膝から少しだけ下がつたミイちゃんの身体を支

えて体勢を直して やろつとしたが、

「ふぁっ……ひにゅっっ!?!」

突然のミイちゃんのか細い悲鳴に俺の身体がビクツとなった。ちょっとエッチに聞こえた。

「ご、ごめんミイちゃん! どこか痛かったのか?」

支えたまま、慌ててミイちゃんに聞いてみる。すると彼女は顔を真っ赤にさせてこっちを上目遣いで覗き込んできた。

ちよつとだけ瞳がうるうるしてて、口元からは少しだけ出っ張った八重歯が見えた。そんな彼女は上目遣いをふいつと止めて、今度は恥ずかしそうに下を向いてもじもじ言いだした。

「みい……啓太お兄ちゃん……ミイの胸、触ってる……」

「へっ?」

言われてから気づいた。そついや支えてる箇所が腰と、右手はしっかり彼女の胸元を支えてらっしやいました。いやほんと狙っておらず無意識に。

そついえは何か柔らかい感触がしたなーと思ったら……なんというラッキースケベ。

更に慌てて「ごっごめん!」と謝ると、ミイちゃんは自分の胸元を手で押さえて「……みー」と小さく言った。でも拒絶とか抵抗はせず、俺の首元に頭をこてんと当てて、ふくれっつらで「……啓太お兄ちゃんのえっち。……めっ」とジト目でしかって来た。

……… しませんこの連携コンボで俺のハートはスタボロです。生きててよかった。本当にありがとうございました。今ならアッラーでもハデスでも崇め奉ってあげられる気分だ。

「………ん？ さつきからなーにニヤニヤしてんのロリ太？」

「誰がロリ太だ！ ……それよりジャック。ちょっと前にお前の写真を姉貴に送ったら、姉貴がものすごい声を荒げて『今度会えない！？ ねえ、その人今度会えない！？ ていうか会わせる！ 会わせなかつたら殺す！』とか言ってるんだけど、向こうに戻ったらちょっと会ってくれないか？」

「啓太のお姉さんってヤンデレなの？ ……うーん、まあいいけど、会って何すんの？ みんなで食事？」

「いや、多分会うのはお前と姉貴だけだろうと思うけど………うん、ちょっと相手してくれないかな。本人すごい飢えてるところだから」

「食べ物に？ ……うん、分かった。不健康なのはよくないからね」

微妙にジャックと話がズレてるような気がしないでもないが、まあそれは置いて。

確か今でも婚活真っ只中って言ってたような。玉の輿を狙って暴走した初号機並のオーラ発しながら街中うるついでんだもん。

弟として心配するわあはは、人情的な意味でも社会的な意味でも。

そんなときに話題を持ち出したのが宇都宮の話。ジャックの顔写メ送ったら速攻食いつきおったわ。会わせなかつたら啓太郎屋を貴様の血で染め上げるとか生殖できない身体にするとか鈍でははは笑

いながら追い掛け回すとか言われたし。

さすがバイオレンス・サディステイック・シスターなだけある。つかどんだけ飢えてんだよって話だな。

……待てよ。だとしたらジャックは俺の兄貴になるのかな。

まあ、それも別にかまわないけれど。ミイちゃんと今後もきゅっきやうふふできるなんて血涙物だし、宇都宮と親戚になれるのなら今後の将来は一生安泰ですね、ふひひ。

とまあ、そんな下劣なことを考えていたら、ミスリアが口元を押さえて大あくびしながら聞いてきた。

「ふぁ……そーいやさ、啓太。今日は珍しくサクラを連れてないね。昨日からやけに彼女を避けてるような感じだったけど……普段ずつと一緒にいたのに、どしたの？ 喧嘩でもした？」

「ん……今日は色々あって内緒で来てるからな。諸々の事情があって、一緒には来れないだけだよ。喧嘩もしてないし、むしろ逆かな。ちよつとしたサプライズを考えてる」

昨日からちよいと準備に時間がかかったし。

サクラの目を盗みつつだから苦労するぜ。あいつ、毎日のように俺と一緒にいるからな。

「ふーん……でも、勘違いとかしないの？ サクラって結構思い込み激しいから、避けられてるって思ったらわんわん泣きそうだし。今だってもしかしたら、スノウを連れて啓太を追いかけてるかもしれないしさ」

「ははっ、それはないだろ。あいつもそんな単純じゃないし、城でセツちゃんやレンくんたちと遊んでるだろ」

そう彼女に笑いかけて携帯をポケットから取り出し、「みー」と俺の腕に頭を乗せて携帯画面を覗き込んできた愛らしい少女に全力で萌えつつ、ジャックに普段の姉貴の写真を見せてやる。「おー」といったごく一般的な反応だったので、今度はハーレーに乗った姉貴を見せてやると「すげー！」に変わった。

よかったね姉貴。カッコいいってさ。

それにしても、追いかけてくる……か。

まあ、さすがにそれはないだろ。ちょっと不安だけど、昨日今日会話してないだけでねえ。

城でいい子にしていることを期待しているぞ、サクラ。

「啓太さんいませんね……」

「始発は出発しちゃったし、駅前周辺にはもういないでしょ。それより私たちも早く乗りましょ。さっさと追いついて、さっさと帰ってゆっくりしたいし」

「相変わらず二トですなスノウはー」

「うっさい！ てか、あんたのために来てんでしょが！ そんなこと言っただったら帰るわよー！」

「あー！ 待ってー！ 帰らないで金ヅルー！」

「金ヅルって言うなー！！ 本気で帰るわよコラー！？」

「……にい、お姉ちゃん。帰ったら駄目なのです」

「二人とも、騒がしくしていないで早く行く準備をしろ。日が暮れるぞ」

……とまあ、帰るだ帰らないでだの喧しい言い争いをしつつ。

私たちは今、ラインガルド駅の一番線ホームにいた。SPたちから（サクラに黙って）こっそり事情を聞くと、何でも啓太たち一行は郊外地にあるシックザールに向かったらしい。

なんでまあそんなところに行ったのかと思っただけ、そういやあそこには頑固な腕利きの職人がいたっけ。膨大な金額でスカウトしたんだけど、やはりその道を進む人たちにとって、お金なんていくらあってもはした金にしかならず。好きでやっているから、との理由で断られた覚えがある。

まあ、仕事に縛られなくなかったんだろうね。

本当に好きな人はお金なんかで動こうとしないし、儲けるためにその腕を使っているわけじゃないし。

そんなわけで私たちもその後に向かおうとしたんだけど、その話を聞いていた兄貴（ガイの方）とレンがひょっこりついてきて今に至る。

女だけの二人旅は少し危険だという理由でガイが提案してきたんだけど……ぶっちゃけいらぬ気がする。身代金目的の誘拐とか、そうそう有り得ないし。

レンは単純に暇だったらしく、楽しそうだからといつてついでにきたらしい。……あんまり無理な長旅にしちゃ駄目ね。ただでさえ身体が弱いんだし。

それから私たちは十分後にホームへやってきた電車に乗ってラインガルドからシツクザールへ。

あそこは一度乗り換えをしないと駄目だから、一端電車を降りてシツクザール方面の電車に乗って行く。

もし啓太たちが早朝の始発に乗ったとしたら、おそらく今頃乗り換え地点に到着していると思う。それくらい距離は遠くないし、

……ま、無理して追いつこうとするよりは、シツクザールについてから合流しようかな。

あんまりコイツ（サクラ）みたいに焦るんじゃないで、ゆっくり旅行を楽しむのもたまにはいいし、本当たまには。

しっかし……。

「……サクラ、子供じゃないんだから電車内では落ち着きなさい」

「おおおおお落ち着けるわけないじゃありませんか！ 早いところ啓太さんに合流して誤解を解かなくちゃなんのです！ てか避けられてる理由をしっかり聞かねばなんのです！」

「急がなくても啓太は消えないから安心しなさい。……それにしても、アンタといい啓太といい、本当、幸せ者よねえ」

見ていて羨ましくなるくらい、お互いのことを想い合っているよね、この二人。

今は気持ちが上手い具合にもつれ合っているだけだけれど、きっと向こうについたら、彼女にも全てが分かるのだろう。本当に誤解であったこと、サクラの思い違いであったこと。

……もし私も人間の世界に行って、こうやって啓太と出会っていたら、こんな二人になることが出来るのかな。お互いのことを思い合えるような、そんな関係になっていたのかな。

私も啓太のことが好きだからさ、すっごく羨ましいよ。そういう関係。……でも、何でか嫉妬とかの感情は沸かないんだ。……本当、何でだろうね。

まあ、私の言葉を聞いて即座にクエスチョンマークを浮かばせた彼女は、そんな私の気持ちすら微塵にも分かってないでしょうね。

「それにしても……シックザールですか……うーん」

レンを膝の上に乗せたサクラが少し物思いに耽る表情に変わる。

「どうしたの？」

「いえ、なんかシックザールって言う名前、どこかで聞いたことがある気がして……でも、思い出せないんですよね。……おっかしいですねー、何だか、凄い懐かしいような、そんな感じがするんです」

「ふーん……ん？ そういやアンタ、未だに記憶喪失とか言ってたわよね、すっかり忘れてたけど。もしかしたら、そのシックザールって言う名前が記憶を取り戻すキーワードとかになっただけじゃない？」

「そつでしょうか？ それならそれでいいんですが……うーん」

そうは言ってみただけれど、本人はどこか納得のいかないような様子。

「何よ、うんうん唸って。記憶を取り戻すことになんか不満でもあるの?」

「いや……不満とかはないんですが……正直、怖いんですよ。記憶を取り戻すこと。少し前に啓太さんとも話したんですが、記憶を取り戻したら取り戻したで、今の私という存在が無くなってしまっ
んじゃないのかって、そう思っ
て。この生活には二度と戻れないんじゃないのかって、全部記憶が戻って、啓太さんや、みんなから離れてしまっ
んじゃないのかって……あの時も啓太さんに言われたんです。お前は
お前だから、何も心配する必要はないって。……でも、それでも、心配
なんです。最終的には、誰かを傷つけてしまっ
よう
な、そんな気がして」

「……たとえ昔の記憶を今に重ねても、今の記憶は変わらない。上書きをされることはない。そう俺は思う。啓太だって言ったのだろ
う。ならば、その言葉を信じて前に進むことが大事なんじゃないだ
ろうか。……我々も人間と同じ。互いを傷つけあいながら、そして支えあ
いながら生きています。何もかも上手くいく保障なんてどこにも
ない。傷つけてしまったのならば、許して貰えるまで謝ればいい
自分の何が
いけなかったのか、自身を振り返りながら、見つめなお
しながら、謝れ
ばいい。何事も完璧に上手くいくことなんて、天才
だって出来ない。やらずに後悔するよりは、やっ
てから後悔して、
そして学べばいいんだ」

「……にい、僕もガイお兄ちゃんと同じです。サクラお姉ちゃんは啓太お兄ちゃんのこと
が好きなんですよね? ならその気持ちを忘れずに、胸に残したまま自分の記憶と向き合えばいい
のです。その
想いが偽りでないのなら、きっと記憶を取り戻したとしてもサクラ

お姉ちゃんは啓太お兄ちゃんのことを好きなままでいると思うんです」

口を挟んできた二人にサクラは少し動揺していたけど、やがて大きく息をつくとし納得のいく表情を見せた。

「そう、ですよね……お二人とも、ありがとうございます……あははっ、あの時啓太さんに言われてたのに、私ってばちっとも成長してなかったんですね。お恥ずかしい限りです」

照れくさそうに笑って頭を撫でて、ついで膝に座っていたレンにも「ありがとうね、レンくん」と言って頭を撫でた。

「にー」と甘えるような声を上げてレンがサクラにじゃれ出した。くすぐりたいですよー、と笑う彼女の顔は、さっきまでとは少し違っていた。

……まあ、本当に少しだけ決心してみたいな、そんな表情に変わっていた。

シックザールに行つて、もしも彼女の記憶が戻るのならば、それもまたいいかもしれないわね。

いつまでも自分のことを知らないのは気持ちが悪いし、そうしなければ、いつまでも自分のことを理解できないんだし。

……いつか、私もセツナの記憶を取り戻してあげられることができるのだろうか。

いや、取り戻さないと。絶対に取り戻して、本当の自分を見つけてあげるんだ。

……そうは言ってみただけども。

私はどこか心の奥底で、一抹の不安を感じていた。

なんだろう。嫌な胸騒ぎがする。これを虫の知らせと言っのかな。シックザールで何か悪いことが起きるような、そんな気がする。……本当、何事もなければいいんだけどね。

眩しかった朝の日差しも少しはおさまり、昼前には更に紫外線も強くなるだろうと予想されてたが、AM11:00の現在。生憎空は天気予報の予想通りとはいかず曇り空が広がっていた。まあ、どちらかといえばこれくらいの天気の方が過ごしやすいんだけどね。少しだけ湿気た臭いがするのはいただけないけど、風も気持ちよく吹いているし、気温もそれほど高くないから大分過ごしやすい。体内に熱がたまると猫又つて直ぐバテるしね。レンにとっても調度いい気温だと思うな。本人も元氣そうに鼻歌歌ってるし。

とまあ、そんな感じで私たちは今、シックザール行き乗り換え駅で電車を待っていた。

それにしても……やたら遅いなあ、電車。本当ならもう到着してもいい時間帯なのに、かれこれ15分は過ぎている。レンやガイは近場のショッピングを見に言っちゃったし、隣に座っているサクラは何を考えているのか、さつきからずっと無言で考え事をしてるし。……本当、退屈でたまらない。てか、よく見たらホームの電光掲示板に『ダイヤルの乱れあり』って表示されてるし。こりゃあまだ時間がかかりそうな感じね。時間をどうやって潰そうかな、サクラにちよっかいてもかけてみようか、と人差し指で彼女のほっぺを突っつこうとした瞬間

「なあ、君ら。今ちよつとだけ暇か？」

突然横から男の声が聞こえた。視線を向けると、その先にはやたら

長身で薄い桜髪をした男と、特に変わり映えのない金髪の女がそこにいた。

初秋ということもあってか、二人の格好は少し防寒対策をしたようなファッションで、派手派手しくもなく、どちらかといえば地味な感じに分類しそうだ。

まあ私はその辺にいる、鼻にくるようなくっさい香水振りまく髪ボサボサのギャル男ファッションより、こういう二人のような服装が好きだけど。

……あれ、声をかけてきたってことは、もしかしてナンパ？

……いや、違うか。女連れでナンパするってのはおかしいし、口説こうって雰囲気ですら接しててもない気がする。

まあ、向こうも暇なんですよ。暇を潰せるならいいや。そう思つて二人に声をかけようとしたところで　サクラの様子がおかしいことに気づいた。

何やら、男を見てぼかんと口を開けて呆けている。知り合いなのかなど思つたけど、知り合いだったらこんな反応はしないだろうし、何より彼女の視線が、表情が、少し変だ。

「……あ」

「どうしたの、サクラ？」

「あつ……い、いえ。なんでもありません。それより何か御用ですか？　それとも、お困りごとも？」

「いや、用つつうモンでもないんだがな。隣のコイツが暇してな、ちよつくら話し相手になつて欲しいんだが、いいか？」

男が指を指す相手は、隣の金髪女。女は無愛想な顔で私たちを見て

いたけど、その視線からは劣等も見下しも含めてはいなかった。
……けど、何か不愉快だ。まるで全てを知っているような、私たちが知らないことを全部見通しているような、そんな視線に感じる。そんな私の居心地の悪さを感じ取ったのか、男は少し声を荒げて女に言った。

「こら。せっかく頼んでるのに、お前がそんなでどうするんだよ。
……すまないね、コイツ昔っから無愛想で。ほら、お前からもお願いしろよ」

「……お願いします」

男に言われて、女はショートの前髪を下げてぺこりとお辞儀した。
……ふーむ、やけに素直だ。もつと突っかかってくるのかと思っただのに。悪気はなかったのかな。じゃあ私の顔に免じて許してやるか。

それからというものの。

話題とは言っても大した世間話しか上がってこないし、あまり盛り上がりには欠ける様子。

てか向こうから話しかけてきたくせに、あんまり話しかけてこないってどういうことなのかしら。

金髪の姉さんはあんまり喋ろうとしないし、あいまいな返事しか返さないし。ぶっちゃけ辛いんですけどこの空気。何で私らに話しかけてきたんですかこの人。泣いてもいいですか。

しかしその点……。

「……へえ、恋人を追ってシックザールまで？ それは凄いな。なかなかの行動力と見た」

「でしょー？ それにですね、もう一度あの人に会って、言ってるんです！ 『私からは絶対に逃がしませんよ！ どこまでも追うから覚悟してください！』 って！」

「ははっ、恋人も大変だなそれは。彼氏の気苦労も分かる気がするよ」

「……むぐ、それってどういう意味ですか？」

こっちはこっちで楽しそーに話してるし。いいなあ、なんかイイカンジの雰囲気で。こっちにも少し分けて欲しいよ。

それにしても……この兄さん、話し方といい雰囲気といい、どこかの誰かさんと似てる気がする。凄く親しい誰かと、似ている気がする。

……はて、誰だろうか。思い出せそうで、思い出せない。何だかもどかしいなあ。

「……さて」

サクラの隣で足を組んで座っていたお兄さんが、仕切りなおすかのように声を上げる。

「なんだかんだ言っつて、結局俺だけ語っちまっつたな。……てか、お前もそろそろ人見知り直せよ。全然会話が弾んでないじゃないか」

「……だって、お腹空いたし」

「関係ねーだろ、それは。……本当に、相変わらずだな、お前も」

そんな小言を言いつつも、お兄さんは金髪の女性に向けてふつと笑う。

……付き合っているのかな、この二人。まあ、そりゃあそうでしょうね。じゃないとこんなところで仲良くしてるわけないし。

私もお兄さんに何か質問でもしてみようかと、そう考え出した矢先

「お。もうそろそろ時間だ。……悪いな、一方的な話ばかりしてさ。そろそろ俺たち、行くな」

すくつとホームのベンチから立ち上がり、うーんと背伸びをしつつ深呼吸。隣にいた金髪の彼女も同じような動作をしつつ立ち上がった。

「もう行っちゃうんですか？」

「ああ。残念だけど、時間だからな。……君の名前は……サクラ、だっけ。今、君は彼氏を追いかけてるんだよな？」

その言葉に、小さくうなづくサクラ。そんな彼女の姿を見て、お兄さんは少し意味深な言葉を言い出した。

「……たとえどんなに避けられていようと、自分の本意を伝える。その選択は間違つてないよ。俺たち猫又にも限りはある。伝えられない思いを半ばにして、誰にも知られず消えていった者たちもたくさんいる。今を生きている時間が大切だからこそ、大好きな人に想いを伝える。その考えは決して愚かじゃない。前向きで、次に繋ぐ未来を僅かながら描いている」

「……えっ？」

「だからこそ、今の幸せを手放さないよう、しっかりと捕まえてくれ。そうすれば、きつと君は」

そこまで饒舌に話したところでお兄さんは、ぽかんと口を開けて、困ったように首をかしげているサクラの様子を見て、ふふつと笑った。

そして小さく身体を屈めると、サクラの耳元でそつと『何か』をささやいた。その言葉を聞いたサクラは、再び「えっ？」と疑問を含めた声を上げた。

「……まあ、その言葉の意味を理解するのは、まだ少し早いかもな。……それじゃ、二人とも、今日は話し相手になってくれてありがとうな。俺たち、そろそろ行くな」

「……今日はありがとう」

一緒に小さく頭を下げ、二人は私たちの方を何度か振り向いて、手を小さく振りながら、やがて足早にそこから去っていった。

会話で賑やかだったホームが、再び静寂へと戻る。やたら謎の多い二人だったわねーとサクラに話しかけたが、本人は反応なし。ていうか、呆然としている。

あ、そうだ。せつかくだから、あの人に何を言われたのか聞いてみようかな。反応するか分からないけど。

「……………」

「ねえねえサクラ。あのお兄さんに何言われたの？」

「……………」

「ちょっとサクラ？　ねえ、サークーラー？　……サクラっ！」

「ふあっ！？　び、びっくりしました凄いびっくりしました！　な、なんですかスノウ？　大きな声を出して」

「もう。急に呆けちゃって。本当にどうしたのよ、サクラ。……はあ、さてはあのお兄さんに惚れちゃったとか？　それか、あのお兄さんがサクラに惚れちゃったとか？」

わざと噛み付かれるような言葉を選んでみたけれど、サクラの言葉は消極的だった。

もっと啓太がどうのとか、スノウには啓太さんを渡さねー！とか言う返事を期待していたんだけれど。

「そんなじゃないです。……でも、なんていうか、あの人からはとても懐かしい感じがしました。今日初めて会ったばかりの人なのに、凄く温かくて、話しやすくて、まるで……」

「まるで？」

「……いえ、なんでもありません。それよりも……」

遠くから電車の走ってくる音が聞こえてきた。タイミングよく来たわね。良い暇つぶしにはなったわ。

ばかりと骨を鳴らしつつ、ベンチから腰を上げて立ち上がる。

ちょうどいいタイミング　というか、紙袋をたくさん持ったレンとガイが、慌ててこちらに向かってくる様子も見えた。何をそんな買ってんのよあんたらは。

そんな二人を見て微笑みつつ、サクラは自分の髪を撫でながら私に言った。

「結局、お二人の名前を聞いていませんでしたね」

「本当に、そっくりだったな……」

「それはそうよ。だって本人だもの。……どうだった、彼女？」

「ああ、変わらなかった。昔と比べても瓜二つだよ。……本当、会えてよかった。これで俺も、何も悔いはないよ。ありがとう」

「そう、それはよかったわ。……これで、あなたの願いは叶ったわけね。真実を知らせるのも酷かも知れないけれど……本当に辛いのは、もしかして彼女に真実を明かすことの出来ないあなた自身なのかもしれないわね、ルードリツヒ」

「……付き合いも長いんだしさ、いい加減名前で呼んでくれよ。マキナ」

男は女に向けて笑いかけると、ふっ視線を外して、ホームで合流した四人　そのうちの、長い桜髪をした女性を眺めながら、寂しそうに、けれどどこか懐かしそうに　そつと呟いた。

「……幸せにな、ソフィア」

小さく響いた男の声は彼女には届かず。やがて男は誰にも知られることなく、音を発することもなく　その姿を消した。

そばにいた金髪の女は、羽織っていたコートから一枚の写真を取り出した。

それは、仲睦まじそうに肩を並べた、壮年間近な夫婦と、その二人に抱きしめられた小さな女の子の写真が写されていた。

やがてその写真に一人の男の姿が浮かび上がった。夫婦と女の子がいるその隣　誰もいない、空白であった場所に、笑顔でこちらに向けて微笑む、桜髪の青年がそこにはあった。

それを見た金髪の女は、ふう、とため息をついて、憂いの表情で空を見上げ、そのまま物憂げな声で、ぽつりと呟いた。

「……さようなら、リカルド。今はゆっくり……眠りなさい」

糸と糸の縫れ合い 2

晴天の広がっていた空も次第に薄暗くなり、もしかすれば小雨が降るかもしれないなと思い始めてきた午後刻。時間は今でちょうど13時を回ったところだ。

来るまでに色々な寄り道もあつたけれど、なんとか夕暮れまでに寒村 シックザールに辿り着いた俺たちの目に映ったのは、色あせた家屋がそこいら中に並び、都会らしいものが一切ない風景（田畑とか）が広がる、確かにひなびたって言葉が良く似合う場所だった。道もコンクリートではなく、自然のままの砂利道。ざつざつと聞こえてくる、砂利を踏む音がやたらと新鮮に聞こえてくる。時折走つていく車の方が背景と不釣合いなほどだ。

新鮮に聞こえてくるならまだいいけど……俺が一番最初に疑問を感じたのは、人……もとい、猫又たちの姿をあまり見かけないってことだ。

無人の駅から降りたのはいいものの、必要最低限の駅員をちらほらみかけたくらいで、駅周辺でも猫又たちの姿を見かけることは少ない。

あまり良い表現ではないが、ゴーストタウンみたいだ。こんなところに腕利きの職人がいるのだろうか。

「ヴェイルさんもね。ヴェーダエルの国王さまと話し合つて、共同でこの寒村を立ち直らせようとしてるんだけどさ、それもなかなか上手くいかないらしいの。……実を言うと、ここなんだよね」

「ここって、何が？」

「あれ、啓太はカノンさんから聞かなかったの？ 風土病のこと。実はね、ここの土地から風土病 猫又が死に至る病気 が流行したって言われているの」

「……………えっ、そうなの？ 風土病のことは話に聞いてはいたけれど……………ってか、大丈夫なのよ。そんなところに俺たちが入ってさ」

「うん。そのことなだけでさ……………風土病が流行って、その解決策が浮かんだ後にこの村全体を検査したらしいんだけど、それらしい伝染病や病気の類はこの村では検出されなかったんだって。その風土病のワクチンが作られた後、その村の人たちの許可を得て、一時的に村を廃村にしたんだ。原因説明のためにね。今は風土病対策のワクチンが村一体に散布されているはずだから、大丈夫だと思うよ」

「思うよ、って……………」

もしその風土病が俺に感染して、それを地球に持ち帰ったりなんかしたらどうするんだよ。最高に危ないパンデミックが人間の世界で起きるぞ。

向こうの世界にワクチンなんてモンは存在しねーだろうし。

「……………それでも危険だからと言って村を閉鎖させようかと、当時の国王たちは躍起になって考えてたんだ。だけど、その時の政治情勢は過去最低と言われるくらい悪化しててさ、略奪や暴動なんかは起きなかったけど、風土病で亡くなっていく人たちを見て、精神的に病んでしまう猫又たちが急増したんだ。薬による集団自決も増えて、大変だったんだよ。外傷では猫又はそうそう死なないからね。神経系を傷つけたら、不自由な身体になることは人間と変わりないけど」

「そうなのか……。でも、どうしてこの村でそんな病気が流行ったんだろうな」

「さあ。多分、この村で何か重大なことが起きたってことだろうね。この世界の　　ううん、ごめん。なんでもない。それよりさ、こんなところに突っ立ってないで、早いところ職人さんのところ行こうよ」

ミスリアに手を引かれてつつも、後ろでミイちゃんを肩車しながら歩くジャック（いいなあ）がついていることを確認して、俺たちは猫又のいる場所までゆっくりと歩を進めた。

まずはその職人さんがどこにいるか、その辺りを訊いて回ってみようかな。

数分ほど歩いて、着いた場所は古びた時計工場。なんでも、この工場で一人、腕利きの職人さんがいると訊いた。

昔は時計職人として全国を馳せていたらしいが、風土病の発生で一時的に隔離され、そのまま現在に至るといふ。既に隔離命令は解除されているのだが、その人は村にそのまま居座ってしまい、自らの足で世界を歩むことを止めてしまったようだ。年老いてもなお洗練された達人の腕を借りに、時折その職人さんのもとへうかがう人がいるのだけれど、その場で作成、受領して終わってしまうことがしばしばらしい。絶対に自分から別の場所へ移動しないってところが、なるほど頑固そうな腕利き職人のイメージを浮かばせる。

そんなわけで機械工場へ、失礼ながら足を踏み入れさせて頂く。工業音が響いているのかと思っただが、周辺にあった機械は動作を停止していた。

工場独特の油臭さもなく、俺たちの足音を聞いたのか、無音の環境の中で年老いた男の人がこちらに歩み寄ってきた。この人が、例の職人さんだろうか。髪は薄い白髪をしており、少しだけ猫背になったその様子からは、結構な年齢だとうかがえる。グレーの丸縁メガネをかけており、その奥にある瞳はどこか眠たげな雰囲気を見せていた。

「なんでえ、おめえたちは？」

「あ……はじめまして。えっと、あなたが……エルジさんですか？」

「ふん……確かにわしの名はエルジだが……若えの。わざわざこんなところまで来て、こんな老いぼれに何か用かい？」

さも興味のなさそうに、近場の椅子に座ってくつろぐ時計職人エルジさん。

あまり人と関わりを持たない人物なのだろうか。それにしても、この場所を教えてくれた人の情報とは違うな。もっと社交的で、誰にでも優しく接する良いお爺さんなのだと聞いたけれど。

「あ、はい。実は……これを直してもらおうと思って。懐中時計なんです、針が止まってしまっ、動かないんです」

懐に閉まってあった懐中時計を出して、エルジさんに見えるように差し出す。椅子に座っていたエルジさんがちらりとこちらに向けて、俺からその懐中時計をそつと受け取った。

……あれ、もつと乱暴に取るのかと思っただけ、凄く優しい手つきで受け取ったな。ちよつと意外。

ふーむ。エルジさんが時計を眺めながら唸る。何度か蓋を開けて中の構造をチェックしているようだ。

「……良く使い込まれている。それに、何度も手入れをした後があるな。ズレがちな針をミニドライバで固定して、油を差してきちん」と時刻と合わせるようにしている。……が、流石に中身がねえ、数十年も前の品を使っているから、中がもうボロボロになっちまっただんだな」

「……あの、もしかして直らないんですか？」

「……いんや。そんなこたアないよ。ちょっとそこで待っててな。替えの部品があるか探してみる」

よっこらせ。そう言ってエルジさんは椅子から腰を上げて　　ふらりと後ろに倒れかけた。

「あつ！　だつ、大丈夫ですか？」

すかさず背中を支えに入った俺。おう、とエルジさんが少しあわてたような声を上げた。

ありがとう。直ぐにそう言ったエルジさんだけど、次の瞬間には子供のような、少し拗ねたような顔を俺に向けて、こう言った。

「……最近足が悪くなってしまったのう、歳を重ねるのはこれだから嫌なんじゃ。細かな作業も、少しずつ出来なくなってきておる。目も見えなくなってきたから、ぼちぼちメガネのピントも直さんと駄目じゃのう」

俺に支えられたまま、メガネを外してポケットからメガネ拭きを取

り出すエルジさん。

うーむ、それにしてもマイペースな人だ。しかし、このマイペースさ、誰かに似ている気がする。

親しい人の中でこんな感じの人がいたような……ふむ、一体誰だろう。

まあいいや。助けのいるご老体はちゃんと支えてあげるのが若者の使命。

たとえ他人でも、おじいちゃんおばあちゃんは大切にしないとね。

「んじゃあ、俺が手を引きますよ。倒れないように。……さて、部品があるところはどこですか？」

そう彼に言ってみただけだ。エルジさんはメガネを拭くのを止めてぽかんとした顔で俺を見つめた。

……ん、なんか俺の顔についてますか？ そう言おうとしたところで

「……すまないね、若いの」

それだけ言っただけで、エルジさんはこっちだよ、と指を差してゆっくりと歩き出した。

……なんだ、結構いい人じゃん。頑固っぽいイメージはあるけど、人見知りってわけでもなさそうだ。

入ったところは、小部屋のような、一人が生活していけれそうな広さを持つ個室。作業風景が先ほどと違うことから、ここでエルジさんは仕事をしているのだろう。

作業に集中したいから、と言って、依頼人である俺以外は外に出さ

れてしまった。仕方ないから、三人は村の中を見て回れよとだけ告げて、俺だけ小部屋の中へ。替えの部品も必要数はあったから、数十分あれば直るよ、と言って、俺は直ぐ近くの椅子に座らせられた。エルジさんは時計を持って、早々と作業に入り始めた。

それから十分程度が過ぎただろうか。単調な作業の繰り返しでそろそろ眠くなってきたなと思った矢先、エルジさんが俺に声をかけた。

「暇かい？」

「……あつ、いえ。そんな」

「はぐらかさなくていいよ。まあ、確かに興味のない人にとっては暇な作業かもしれんが。……それにしても、こんな古びた時計を直しに、こんな辺鄙なところまでやってきて……お前さんは変わり者だね」

「いえ、そんな。……その時計は大切な人から貰った物ですし、どうしても直さなきゃって思っ……」

「ふうん……なるほど、だからか。こんなに丁寧に手入れをしている人なんて初めてみたよ。お前さん、相当な几帳面だろう？」

「そんなじゃないです。物は大切にしないと。そう思って使い続けてきただけです」

「……そう言ってくれれば、きっとこの時計も喜んでくれるよ」

ふつと笑って、再び作業に没頭しだすエルジさん。そんな彼と俺はもつと話がしたかったんだろうか。無意識のうちに不謹慎な話題を挙げてしまった。

「……あの、余計なことを聞いちゃうかもしれないが、その……ご家族とかはどうなされたんですか？ お一人でここに住んでいるってことは……」

と、そう言ったが。やはりこの質問は禁句だったかもしれない。しまった、と俺はすぐさま自分の発言の甘さに気づく羽目となった。エルジさんは作業を止め、少し顔に陰りを見せたが、ふう、と息を吐いて、こちらに顔を向けて言った。

「……ああ、君の察するとおり。家族も嫁も、みんな死んじまつたよ。あの風土病のせいだな。わしだけが生き残った。残った村のみんなも感染を恐れて、ほとんど村から出て行っちゃったし……本当、寂しいったらありやしないよ」

「でつ、でも。だとしたらエルジさんも此処から離れて、みんなと暮らした方がいいんじゃないですか？ きつとヴェイルさ ラインガルドの王様だって、何とかしてくれるでしょうし」

「王様は本当良くしてくれているよ。わしの気持ちもきちんと分かっている。……でもな、わしは一人になってもここを離れたくないんだよ。たとえもう一度風土病が起きてもさ、この村を捨てたくないんだよ。今この村から出て行っちゃったら、みんながいたあの頃の思い出も一緒に、わしの記憶から出ていっちゃまうんじゃないのかなって思ってたさあ」

俺から視線を逸らし、エルジさんは悲しそうな目で遠くを見つめた。

彼が見つめるその先には、一体何が映っているのだろうか。当事者ではない俺が知らない世界を、エルジさんは友人とともに見てきた。そして、幾たびの悲しみを経験した。それらを乗り越えた先に、今の自分がある。変えることが出来ない過去だけれど、全てを失ってしまった過去だけれど、それでも彼は今を生きている。悲しみを背負って、孤独に生きていくんだ。

エルジさんは自分の頭を掻いて、女々しい話をしちまったなと俺に申し訳なさそうに呟くと、少しだけ意気込んで肩を力強くまわした。肩がこる作業だもんなと思っただけで見ていたら、彼は俺の方を見て、真剣な口調で語りだした。ふざけ半分の欠片も宿さない、至って真面目な様子で。

俺はその言葉に黙って耳を傾けた。

「……なあ、若えの。お前さんもさ、今はまだ幸せかもしれないけどな。その幸せはいつまで続くかはわからねえ。いきなり目の前が真っ暗になったり、自分以外の人間が突然おっ死んじまったりするかもしれない。そこでああすればよかった、こうすればよかったってよく後悔する前に、きちんと人生、責任持って生きていけよ。方向さえ間違わなければ、自分が信じた道は決して無駄にはならねえ。一度失ったものは、もう戻らねえことだってあるのさ。」

だからよ……わしみてえに、後悔して、後悔して、やっと自分の愚かさ気づく前に、大切だと思うものはその胸にしっかりと刻みつけておけな。賢えお前さんなら分かるはずだ」

「こうやって壊れた時計は、部品があればすぐ直る。けど、身体は直ぐには治らねえ。パーツがあったとしても、身体は前みてえに戻

せねえんだ。……弱く脆いのさ、身体ってやつあ

しみじみと語る彼の言葉からは哀愁が込み上げてきていた。

けれど、照れ隠しゆえかそれ以上は弱みを見せたくないのか、さつきとつって変わってぶっきらぼうな口調で、直した懐中時計をその手に翳した。

「ほら、出来上がったぞ。これで前みたいに動くはずだ。……無茶をしねえ限りはな」

エルジさんから時計を受け取る。確かに秒針が少しずつ動いて、今の時間を刻んでいた。

城の職人たちが出来なかったのに……改めてこの人は凄い。そう実感した。

それから……

「ありがとうございます……あの……」

「ん？ なんだい、まだ何かあるのかい？」

「えっと実は、もう一つ用があつて　　を　　してもらえますか？」

「　　ふむ、なるほどな……分かった、それじゃあ今から取り掛かるう」

「ありがとうございます。……すみませんお手数かけちゃって」

「なあに、これが仕事さ。……それに、もうしばらく誰かと話がし

たかったところだしのう」

口角を上げてエルジさんがニコリと微笑んだ。それにつられて、俺も無意識に笑顔になってしまった。もうしばらく。話をしていよう。何だか懐かしさを感じるこの人と。もう少しだけ……。

「また、ここに来てもいいですか？」

「おう、楽しみにしてる。そんな時ア、彼女さん連れて来いよ。お前さんの彼女だから、きつとべっぴんさんだろうなあ」

「はい。きつと、必ず」

それだけ言って、啓太は頭を上げて小部屋から出て行った。人が一人いなくなるだけで、こんなにも静かになるものだろうか。改めて彼の存在の大きさを知って、エルジは少しだけ寂しさを知った。

久しぶりにこんなに長く他人と会話をしたと思う。それも、会話が楽しいと思えるくらい喋ったのは、果たして何年ぶりだろうか。それ故にこの空間は、時間は、彼にとつては辛いものだった。孤独を嫌でも感じてしまう、寂しい時でもあるのだから。

「あの懐中時計……向こうの世界にもあったのか。……物を大切に
する主人に買われて、本当良かったのう」

今では彼の手の中にある、思い出深い懐中時計を思い出しながら、エルジはぼつりと感傷的な声で言った。

無意識にこぼしたんだろう。彼の瞳から一滴の雫が流れ落ちて
いった。

「これもまた、何かの運命なのかう……」

私たちがシックザールに到着する頃には、時刻は既に午後三時を迎えていた。到着するやいなや、サクラは落ち着かない身振り手振りで近辺をキョロキョロと見回した。

おそらく いや、おそらくじゃないか。啓太を探していることに間違いはないのだけれど。

「サクラ。帰るとしても、流石に駅前周辺にはまだいないでしょ。もっとゆっくりしているとと思うわ」

「そうでしょうか……。でも、早いところ啓太さんを見つけないと行き違いになるのも嫌ですし……」

腕を組んでため息を一つつき、肩を落として頂垂れるサクラ。ジエスチャーの多い奴ねーとからかおうかと思ったけれど、本人にはそんな余裕もないみたいで。

私の手を引いて「早く行きましょよ」とせかす彼女はまるで遊園地に行く子供のような、純粋な瞳の色をしていた。まあ、純粋とはいえ時々濁るけれど。

はいはいと親のような気分になりつつも、駅の小さなロッカーに荷物を入れている二人 ガイとレンを呼んで、私たちは駅を離れた。

向かう目的地は、シックザールの職人であるエルジさんの工場。あそこを訪ねたら、きっと啓太たちがいるはずだわ。

駅から北に歩いて数分程度。エルジさんの工場が手前に見えてきたところでミスリアたちと出会った。

彼女らは一通り村を歩き回っていたのか、手にはこの村の観光名物が入った袋を掲げていた。そんな中、まさか出会うとは予想だにできなかったんだろう。

ミスリアは私たちを見て目を大きくさせて驚いてた。ま、それが普通の反応よね。

「あ、あれ？ アシュリーとサクラ……それからレンくんとかいさんじゃん。どしたの、こんなところまで来てさ」

手荷物を隣に居たジャックに持たせて、彼女がこちらに歩み寄ってくる。

その刹那、サクラがミスリアに掴みかからんばかりの勢いでにじり寄った。そのためか、二人は危うくぶつかりそうになった。

「け、啓太さんはどこにいますかミスリア！ 教えてください！ ぜひと教えてください！ 超スピードで向かいますから！」

いきなりすぎたんだろう。彼女が突然何を言い出してるのか理解できないミスリアは「え、え、え？」と戸惑うようなしぐさを見せつつ、サクラの豹変にうろたえた。

そんなサクラに向けて一発、啓太直伝のアシュリーチョップを彼女の頭にくらわせる私。「ひぬあつ！」とよく分からない悲鳴を上げてサクラがミスリアから一歩後退した。

「ほら、落ち着きなさいお馬鹿。ミスリアがヒいてんじゃん」

「ぬあああ……ごめんなさいミスリア……ちょっとパニックって

ました……啓太さんがどこにいるか知りませんか？」

「啓太？ ああ、啓太ならまだこの時計工場の中にいると思うよ。私たちが出て二時間くらい経ったから、もうすぐ出てくるだろうとは思っけれど……」

そう言って時計工場を指差す。なるほど、私の予想は大当たりだったというわけね。

「その工場ですね！ ありがとうございます、んじゃ早速入って啓太さんを探してきます！」

ミスリアに礼を言っ、ずんずんと先に進んでいくサクラ。そんな彼女の背中を眺めつつ、私もその後を追った。

そして入り口寸前のところまで来たところで、彼女の足がぴたりと止まった。どうしたんだろう。そう思っ、後ろから覗き込んだら

先ほどのミスリアのように、驚きゆえに目を大きくさせた啓太の姿がそこにあっ。た。

……えーと。

ちよつと待て。考える時間が欲しい。

確か今さっき、エルジさんと「彼女を連れてまた来てくれ」って話をしたばっかなはずだ。

んで、今俺の目の前にいるのは、まさしくその彼女に値するだろうサクラの姿がそこにあるわけで。

えーと、つまり……なんだ？

俺はミスリアたちと合流するために戻るんじゃないやなくて、彼女を呼び戻しに戻ってきたというのか？

……え、俺何時の間に未来に飛んだの？ だってさっきまでサクラいなかったじゃん。なんでここにいるんだよ。

とまあ、混乱して纏まらない頭の中をどうにか整理して、とりあえず最初は目の前にいるサクラに声をかけてやろうとして　それが出来ないことに直ぐ気づいた。

しばらく黙って俺の顔を見て呆けていた彼女の瞳から、ぶわっ、と、そう表現するのが正しいくらいの涙があふれ出た。呆け顔が泣き顔に変わっていく様子を見て、俺は声が詰まった。

そして次の瞬間には、彼女が押し倒さんばかりの勢いで俺に抱きついてきた。構えておいてよかった。倒れずには済んだ。

倒れずには済んだけれど……その俺の胸の中でサクラは大声を張り上げて泣いた。子供のように、泣きじゃくった。

「ふうっ……う、うああああああんっ！！」

彼女の悲痛な思いがこもった泣き声が耳に届く。

何故彼女が泣いているのか、俺にはいまだ理解ができていなかった。そして何より、何故彼女がこんなところまで来ていたのか、検討がつかなかった。

「ばかばかばかー！　啓太さんのばかー！　寂しかったんですよ悲しかったんですよ苦しかったんですよー！！　啓太さんのばか、ばかあつ！！　わああああああんっ！！」

「なっ……な、な……!？」

こりゃ一体全体どうしたとか。

出会った瞬間抱きつかれて大泣きされて馬鹿呼ばわりされて。

彼女自身も何を伝えたいのか、頭の中で混乱してきたんだろう。

ただ、泣いて、泣いて、自分の思いを言葉に出来ずぶちまけて。

そうやって俺に何かを伝えようとしている。とまあ、このままじゃ埒があかねえ。

俺自身意味がわからねーし、そもそもこうやって此処まで来たのは誰のためでもないコイツのためで。

おさまりがつかないまま途方にくれていると、未だにわんわん泣くサクラの後ろで、なにやら呆れ顔でこちらをじっと見ているスノウの姿がそこにあった。助け舟を出す気配は全くなさそうだ。畜生、それくらい自分で何とかしろってことかよ。

……まあ、まずは此処から離れて、じっくり話しあうしかないな。それが一番だ。

「と、とりあえずさ。向こうで話し合おう、な？　ここじゃ人目がつきすぎるといっつか……うん！　積もる話もあるし、人気のないところで二人じっくり話し合おうな！」

抱きついているサクラの身体を少し乱暴に退かして、手を引いてみんながいないところへ駆け出す。

さて、どこかいいところがないだろうか……お、対面沿いに、建物で隠れた細道があるじゃん。あそこなら多少声が大きくなってもみんなには聞こえないだろう。

ぐすぐす泣いている彼女の手を引きつつも、俺は少し早足で向こうまで駆けた。

来た場所は、少しだけ地面に草が生い茂る、建物で隠れた細道。まあ、路地裏というか建物裏というのかな。

ここならば多少は無茶やつても平気だろう。……いや、変な意味の無茶はするつもりないが。

「……さて、サクラ。これで二人つきりになれたわけだが……」

「ひぐっ……うっ……ああああんっ……!!」

……うーむ。一向に泣き止む気配を見せないな。ぼろぼろ涙をこぼすだけで、ちっとも話が進まない。

どうしたものか。俺から質問責めにしてもダメだろうし、かといって安易に大丈夫だとか安心しろとか言ったら更に感極まって泣きそっだし。

……やっぱ、あれしかないかな。仕方ない。そうでもしないと、サクラは泣き止んでくれそうにないし。いや、それで泣き止むのは極端な話かも知れないけど、しないよりはマシだ。

やれやれ。ため息をつき、俺はそっと彼女のほほを撫でる。泣きながら彼女が俺の手に自分の手を重ねたところで そっと唇を重ねた。

不意打ちに驚いたんだろうか。さっき俺のように目を大きくさせたサクラは、やがて力を抜いて、俺の方へもたれかかってきた。そんな彼女を支え、ぎゅっと抱きしめてやる。

震えていた肩は幾ばくかおさまり、やがて全身の緊張も解かれてきたところで、やっと俺は彼女から唇を離れた。離れた瞬間、そこには顔を真っ赤にさせて、俺の肩に顎を乗せているサクラの姿があった。

「……少しは、落ち着いたか？」

背中を撫で、嗚咽を漏らす彼女に聞く。

けれど彼女はそんな俺に対してやたらと卑屈めいた声で言う。

「ひぐつ……ふ、ふんつ……今更キスなんかしても……啓太さんなんか……啓太さんなんか……！」

俺を両手で押し返し、涙で潤んだ表情で俺に何かを言おうとして、言おうとして　ぽふん。と俺の胸に顔をうずめて、震えた声で一言呟いた。

「……やっぱり、大好きです……」

やれやれ。もう一度大きいため息をつきつつ、頭をなでてやった。

しばらくは落ち着くまで、このままでいようかな。言葉を整理して伝えてくれた方が、俺的にもありがたいいな。

そう思っていたが俺が予想していたよりも彼女は立ち直りが早かった。大分落ち着いてきた様子なので、俺はその場でサクラにこう促した。

「立って話すのもなんだから、ちょっとそこに座ろっぜ。座った方が渡しやすいいな」

「渡す……?」

「うん、お前に渡すものがあるんだ。……それよりも、まずは何でお前がここにいるのか、教えてくれないか?　そこだけ、未だに頭の中が混乱しててな……」

「あ、はい。わかりました。じゃあ……」

そう言っつてサクラは話を始めた。

つーつと垂れた涙をハンカチで拭ってやりながら、俺は彼女の話に耳を傾けた。

そこからどれくらい話をしただろうか。既に空は夕暮れ色に染まっていた。

まあ、彼女の話聞いて概ね事情は理解できた。ようは俺が無視しちゃったのが彼女を傷つけたみたいだな。

秘密にしようとして避けていただけなんだが……悪いことしたな。

「そっか、それでか……ごめんな、サクラ。でもお前が嫌いになつたから避けてたわけじゃないんだ。それだけはわかって欲しい」

「はい……いえ、こちらこそ。ばかばか言っつてごめんなさい。啓太さんはばかじゃないです。ちゃんと考えてます」

「まあ、考えてるかどうかは分からんがな……それと、さっきお前に渡したいものがあるっつて言っつたよな?」

「え、あ、はい。それって、一体何ですか？」

「ああ、見せてやるよ。ほら……これ」

そう言って俺は、彼女に「渡したかったもの」を懐から取り出し、彼女に手渡してやった。

サクラの顔が驚きで満ち溢れた。「わあ……！」と言う声には、どんな感情が込められていたんだろう。少なくとも嫌悪ではない気がするが。

彼女に渡したもの。それは。

一年前の誕生日に、彼女から送られたプレゼント　桜色の懐中時計だ。

それもただの時計じゃない。彼女から送られた時計はエルジさんにしっかり修理してもらったし、彼女に渡したものは時計職人が腕によりをかけて造った、プレミア物の懐中時計だ。

まあ、ペアルックで懐中時計というのも聊か変な話かもしれないが、それでも俺はこれで十分だと思ってる。

たとえそれがアンティークショップで買われた中古品でも。自分のなけなしのお金を使ってプレゼントしてくれたサクラがくれた、大切な物だから。

だから大切に持ち歩いてきた。でもその分　時計のことばかりを考えすぎて、最近は彼女のことを忘れていた。プレゼントしてくれた人を、構ってあげられなかった。

その点は反省すべきところだな、俺も。酷ければ彼女の信頼を失うところだった。

「……パールツクだな、これで」

「そうですね……えへへ、嬉しいです。とっても嬉しいです……」

こてん。と、俺の肩に頭を乗せて微笑むサクラ。紆余曲折を経ているんことはあつたけれど、最終的にその笑顔が見ただけで俺は幸せだった。

そつと手を回して肩を寄せてやると、彼女はうにゃーんと甘えた声を上げて俺の頬に鼻をこすりつけてきた。もう機嫌も直ったみたいだな。よかったよかった。

「……さて、そろそろみんなのところに戻るか。今日もなんか色々あつたし、そろそろ城に戻りたいしな」

「そうですね。それじゃ、戻りますか!」

「ああ……あ、でもエルジさんに挨拶だけでもしておこうかな。お前のこと」

「へ? 私のこと? ……もっもしかしてこれが僕の花嫁ですとか、結婚式にはぜひ来てくださいとかの挨拶ですか!? も、もうやだあー啓太さんったら! まだ早いですよう!」

「気が早えーのはお前だよ」

笑って、ぽふぽふと彼女の頭を軽く叩いてやる。「私はいつでも大丈夫なのに……」とかうつむいて愚痴ってるサクラだったが、直ぐに表情を変えて俺に向き直った。

「それじゃ啓太さん! あの夕日に向かってれつつらごーですよ!

たかもしれない。もしかしたら、少し怪我をしてしまったたかもしれない。そんな罪悪感と後悔に苛まれながら、俺は側面からくる車に視線を向けた。間近で聞こえてくるせいか、駆動する音がやけに喧しい。

ブレーキの音。クラクションの音。それら全てが入り混じった音を耳に届かせながらも、俺はどこか安心していた。

彼女を助けられて、安心した。ほっと、全身の力が抜けていった。不自然な笑みが、俺の表情に現れていった。

その笑みが変わる頃には 俺の身体は宙に浮かんでいた。スローモーション。それが一番適切な表現かもしれないな。でも、そんな空を飛ぶような感覚に包まれたのも一瞬のうちで。次の瞬間には背中に激しい衝撃が加わった。鈍い音が聞こえた気がする。同時に、口から真っ赤な液体がごぼっとあふれ出てきた。

いや、口からだけじゃない。見れば、全身から夥しい量の赤いモノが流れ出していた。

痛い。それを感じたのも一瞬だった。

今では何にも感じられない。痛いとも、苦しいとも思えなかった。気がつけば全身から力は抜けていて、動かせるはずの手足もぴくりとしなかった。

あれ……おかしいな……俺、こんなに弱かったっけ……。

「け、けいた、さん……？」

サクラの声が横から聞こえてくる。その声は何処か震えていた。俺はそんな彼女をなんとか安心させようとして、口の筋肉を精一杯

使って、言葉を出した。

「さ、サク……よ、よか……」

でも、なんでだろうな。ちゃんと口に出せなかった。まともな言葉を出すことが出来なかった。

なんかさ、すつごく眠たくなって。やっとのことで出せた言葉すら、言葉になっていなくてさ。

でも、よかった。サクラが無事で。今のでせつかく直った時計がまた壊れちゃったかもしれないけど……時計よりも大切なものが壊れなくて……本当、よかった……。

……サクラ……

ごめん……もう……俺、眠たくて……さ……

お前のこと……見て、あげられな……

「え、あ、や、や……嫌あああああああッ!!!」

啓太さん、啓太さああああああんっッ!! わあああああ

あああああ!」

サ、クラ……

……ごめん、な……

もう……俺……

ごとりと。そんな音を上げて意識を失う前、俺の中の何かが消えてしまう前に、聞こえた気がする。見えた気がする。

でも、今の俺には、そんな物自体どうでもよかった。

だって……俺……は……

まず私は自分の目を疑った。そして自分の勘の良さを、今だけ心の底から呪った。

目の前 道路の中央には、何処もかしこも血にまみれた啓太と、それを抱きかかえて泣き叫ぶサクラの姿があった。

信じたくはない光景だった。一番起きて欲しくない光景だった。虫の知らせが呼んだ事態はこれのことだったんだらう。

どうして啓太が車に跳ねられたのかは概ね分かる。この場所は一通りが少なく一直線。見渡しも悪く視界も良好ではないために、突然出てきた人影に車も対応しきれなかったんだらう。

そして轢いた人物が人間。そう、易々と身体を再生できない人間を轢いてしまったんだ。猫又だったら轢いてもいい、って馬鹿げた理屈を言うつもりはない。けれど、これは……。

そこまで考えて私は頭を左右に振り、彼らの元へ駆け出した。私の姿を見たサクラは、動転して、言葉足らずのまま泣きじゃくりつつも、事情を伝えようとすがり付いてきた。

「スノ……助け、啓太さんが、啓太さんが！ 啓太さんが死んじゃう！ 私を庇って、血がいつぱい出て！ 助けて、お願い、助けて！」

「落ち着きなさい！ それから啓太の身体を揺らしちゃ駄目！ ……脈、微かに、心臓も……くうっつ！」

落ち着け。落ち着きなさい私。焦るな、焦ったら駄目だ。

正常値に戻すんだ。なんとかして酸素を全身に行き渡らせなければ。

じゃないと……啓太が死んでしまう。

でも、どうやって？ こんなに血を流しているのに、どうやって啓太を助ければいいの？

「退け、アシユリー」

と、背後から聞き覚えのある声。いつの間にかこちらに来ていたんだろう。乱暴に私を押しつけ、ガイは啓太に胸骨圧迫を始めた。

せめて人工呼吸だけでも手伝おうかと思っただけ、ガイに手で制された。

「いらぬ世話だ。それより、早く救急の要請を。確か、ミスリアが携帯を持っていたはずだ。近くの病院に運んだ後、呼吸器をつないで、直ぐに城に移そう。それまで……俺がやっておく」

聞くところによれば、人工呼吸で場をつなぐより、胸骨圧迫を繰り返す方が効率よいらしい。

私はガイを信用して、サクラを連れてその場を離れようとした。けれど、サクラはその場を一向に離れようとしなかった。

なにやってんのよ！そう彼女に叱咤しようとしたところで サクラの様子が異常であることに気づいた。

顔いっぱい汗をかいて。手足身体は痙攣を起こしているのかと思うくらい震えていて。動悸も仕草も一般人のそれを比べて、明らかに変わった。

やがて啓太を眺めながらサクラがポツリポツリと言葉を発していく。その声に 私はぞくりと肩を震わせた。

「……お」

「えっ？ ……お？ ど、どうしたのよ。サクラ？ 何？」

「…………お……お、お父さん、お母さん、お兄さん、同じ、みんな同じ。また、また消える。残して、消える。また、みんな。大切な人、消える、消えていく。…………い、嫌、嫌、一人。嫌、一人にしないで…………！」

「なっ…………何？ 何なのよ一体…………！？」

頭を押さえて、目を涙で真っ赤にさせて。

何かに取り付かれたかのようにガタガタと震えている彼女に、不気味なほどの恐怖を覚えた。

怖くて、怖くて、そんな彼女から一歩引こうとした時

「アシュリー！ 何をしているんだ！ サクラを連れて、早くみんなのところに戻れ！」

ガイの叱咤が背後から飛んできた。その言葉で我に返って、私はぐっとあふれ出てきた感情を飲み込んだ。

何をしているんだ、私は。このままでは啓太が死んでしまう。それだけは駄目だ。なんと少しでも食い止めなきゃ。

そばで震えていたサクラも、今では意味深な言葉を残して気絶してしまっていた。不謹慎だが、今はそのの方が効率がいい。

サクラを抱いて、私はみんなのいるところまで走った。早く、早く。一刻を争うから。

…………お願い、死なないで、啓太…………！！

夢を見ていた気がする。それは誰しも見ることが出来ないだろう、常軌を逸した不可思議な夢。

この夢は……そうだ。あの時。千春と一緒にいた時に見た夢だ。

あの時も　確か、誰かは知らない女の人が、歌を歌っていたんだっけ。綺麗で透き通った声で、しかし悲しさと寂しさに満ちた、あの声で。

なんで、俺はこんな夢を二度も見ているんだろう。なんで今更になつて、この夢を見ているんだろう。

そうだ。この夢を見るときは、決まって誰かが悲しんでいた、苦しんでいた。

夢から覚める時、また俺は、もしくは俺以外の誰かが、悲しい思いをしてしまうのだろうか。苦しい思いをしてしまうのだろうか。

……それならばいつそ、覚めなければいいのにな。嫌なことが起きてしまうのだったら、悪夢と何ら変わらないよ。

あの時は、遠くで歌を歌っていた女性を、黙って傍観しているだけだった。悲しい歌声に触れて、意識が覚醒したんだっけか。

でも今は、身体を動かせる。手も、足も、腕も、全部を動かせることが出来るんだ。たとえそれが夢の中の出来事だとしても、俺は、あの人が誰なのかを、知ることが出来るんだ。

真っ白な世界。真っ白に塗られた、何も無い空間で。俺は一步、前に足を踏み出した。まるで地面の感覚がないその場所で、歩を進めた。

遠くで歌を歌っていた女性は俺の存在に気づいて、歌うのを止めた。緩急をつけて、静かに、消えていくように、歌声を止めていった。その姿が俺の目でもはっきりと分かるようになった時　世界がまた、色を変えて変化していった。

そして女性の姿を見た瞬間　俺は、何ともいえない感情に襲われていった。同時に酷く懐かしい感情が、俺の胸を過っていった。

「お兄様、啓太の様子は？」

「相変わらず、意識が戻ることなく昏睡状態。……やれやれ、まさかこんな事態に陥るとは思わなかったよ……」

頭を抱えて、苦虫を噛み潰したような顔でお兄様が唸る。目の下のくまが酷いことから、徹夜で啓太を見てくれていたんだらう。それと、もう二人の患者も。

私は人工呼吸器に繋がれた啓太を一瞥した。全身打撲と、左腕骨折。猛スピードで走っていく車にそれだけで済んだのは本当に幸運だった。

けれど、その時のショックで啓太は今も眠り続けている。ガイがやった咄嗟の胸骨圧迫が幸を成したか、あと少し遅ければ本当に危ないところだった。

しかし、それでも啓太の呼吸は乱れていて、人工呼吸器に繋げなければ命の危険すら危ない。そんな状態だった。

おそらく意識レベルも……いや、そんなこと言わなくても分かりきっているか。そんな啓太の様子を見て、隣に居たお兄様が呟く。

「……サクラちゃんも、いったいどうしたんだらうね。啓太くんが倒れた後、よく分からないことを口走ってたそうだし……」

よく分からないこと。

そうだ、あの時。啓太が倒れたあとの、彼女の変貌。

あの様子は異常と表現する以外に他ならなかった。頭を抱え、身体

を小刻みに震わせて。

まるで何かに怯えているようで、恐怖しているようで。少しだけ薄気味が悪かった。

ただ、気になったのは。家族の名前を呼んでいたこと。

おそらく彼女は、啓太を探しに行ったあの地、シックザールで記憶を取り戻しかけたのだと思う。

だとしても。あの変貌は常軌を逸している。まるで触れてはいけない部分に触れてしまったかのような、今まで抑制された記憶が、啓太の事故をきっかけに紐解かれていったような、そんな懐疑を感じてしまう。間近で彼女を見た私だから分かることだけれど……どうも、引つかかる。彼女に何があったのだろう。過去に、何が起きたのだろう。

「そういえば……お兄様。あの車に乗ってた人たちは大丈夫なの？」

車。そう、啓太と正面衝突した車。

本来なら怒鳴りつけて城にまで連れて行こうと思ったけれど、こちらも様子が普通のとは違っていた。

若い夫婦と、後部座席にはチャイルドシートに乗せられた小さな子供。子供の様子がおかしいことに即座に気づいた。

話を聞けば、寝静まっていた子供が急に高熱を起こし、焦った夫婦は車に乗せて近くの病院にまで駆け込もうとしていたらしい。

この地のことだ。もしかすれば風土病の可能性があるかもしれない。その焦りも相俟って、スピードを出していたところ、啓太とぶつかったらしい。

衝突はしたものの、もしもの為の衝撃緩和材やクッションシートを多重に使っていたおかげか、運良く後部の子供も怪我はなく、夫婦も多少の擦り傷程度で済んだらしい。

重篤なのは、ここでぐったりと寝ている啓太だけ。

「うん。夫婦は傷も浅かったし、子供も問題ないよ。風土病かなと思っただけで、特に伝染病や寄生虫の類も見られなかった。身体も健常だったし、おそらく小さな子供によくある症状だと思っよ」

「そう。それならよかったわ。……でも、問題なのは……」

「こつちの方だね……」

今なお眠り続けている啓太を見て、お兄様は肩を落とす。

猫又と比べて、人間は治癒代謝が著しく遅く時間がかかる。それに身体が治癒できたとしても、意識が戻らなければ意味がない。ただの植物人間と化してしまう。

そうならないために、最先端医療技術をもって治療に取り掛かるんだけれど……それでも心配。

「アシュリー。君も少し休みなさい。啓太君の看病で疲れているんだろう。私が見ておくから、部屋に戻って睡眠をとりなさい」

「えっ……でも」

「アシュリーまで倒れたら、私の手も回らなくなるからね。さ、こは私に任せて。大丈夫、アシュリーが起きる頃には、きっと啓太君も目覚めているよ」

そう言ってお兄様はにこりと笑い、私の頭を優しく撫でた。

そつだ。お兄様までとはいかないが、私もずいぶん起きていた気がする。お兄様に言われるまで気がつかなかった。

……そつだよ。きつと私が起きている頃には、啓太も起きている

よね。

「うん。お兄様……お休み」

そう言っただけはお兄様を医務室へ残して、自分の部屋に向かった。そうだ。念のためにサクラの様子も見てこよう。彼女もあれから目を覚ましていない。お兄様は精神的なショックだと言っていたけど、こっちもこっちで心配ね。目を覚ましてればいいんだけど……。

夢見ていたことがある。それは睡眠時に起こる夢の類でなく、希望や、願望、それらと類似した、大きく、そして叶うはずもない途方な夢。

一度だけでもいいから、彼女に会いたい。会って、これまでのことを、たくさん伝えたい。彼女の知らない出来事を、思うままに話してやりたい。ガキのような馬鹿げた夢ではあるけれど、いつかできることなら、叶えたい。そう思っていた。そんな叶うはずもない期待を胸に生きてきて、数年が経つただろうか。現実でも、夢でも、決して出会うことのなかった彼女は

今、俺の目の前ではつきりと、姿を現していた。

腰までかかる長い黒髪に、あの頃と同じ学園の服を着こなして、彼女。千春は、あてもない場所へと向けて、静かに歌を歌っていたけれど、俺の存在に気づいて彼女は歌を止め、ゆっくりと身体の向きを変えた。その表情は少しだけ驚いたような感じだった。

「ち、はる……?」

「けい、た……？」

半信半疑な声で呼びかけた。と思ったら、向こうも向こうで俺と同じような声で呼んできた。

不意に、ふっと笑みがこぼれた。同時に、驚いた様子の千春の表情も、いつしか柔和な顔つきへと変わっていた。

そして風景は一転する。この景色は　　そうだ。あの大きな桜の木があった場所。千春と、最後に話したところだ。

あの木がないってことは、もう少し先に行ったところにあるのだろうか。

「……お久しぶりです、啓太」

「……ああ、久しぶり。千春。もう何年ぶりになるかな」

「そうですね。もう、4、5年くらい過ぎたでしょうか。……あ、立ち話もなんですから、向こうで話しませんか？ あっちは椅子がありますから」

そう言って彼女は俺の手を持って、向こうに行くよう促していく。久しぶりの彼女の温かく、柔らかな手。はっきりと分かる体温。耳に届く心地よい声。

それら全てが新鮮で、懐かしく、とても愛しい筈だったのに……。

どうしてだろう。

ずっと、会える日を望んでいたのに。いつの日かきつと、巡り合えると信じていたのに。

どうして俺は、こんなにも冷めきってしまったのだろうか。

彼女の言っていたベンチに座って一息つく。目の前には、大きな桜の木が目映る。

あの時は、ベンチもなくて地べたに座って二人いたっけな。こう都合よくあるってことは……やっぱりこれは……。

「しっかしまあ。まさか夢見ていたことが、夢の中で叶っちゃうなんてなあ……皮肉だと言うか、何で今まで見なかったのかというか」

「……？ 啓太？ 夢って……何を言っているのですか？」

「……え？ だってこれ。俺の夢じゃないのか？ じゃないとあ」

そうだ。忘れていた。

俺、そういや彼女 サクラを跳ね飛ばして、代わりに自分が車とぶつかって うん、てことは……。

冷や汗がつつと流れていく俺の青い顔を見て、千春がくすつと笑う。

「啓太。今、私とあなたが出会っているのは、決して『夢』なんかではありませんよ。啓太の妄想でも空想でもなければ、私はちゃんと、この空間に存在しています」

「え……空間？ 存在？ てことはやっぱりここは」

「……強大な自己の意識が留まって、構築の為に一時的に隔離される場所 それをあの人たちは空間世界と呼んでいます。人間界というアース、猫又世界というシェアリス、そして、空間世界 パラフィリア。次元流砂によって繋がった二つの世界の更に深淵にあ

る、閉ざされた意識が反芻し、輪廻の導きとともにあるべき道を作
つていく　まあ、二つの世界を共通する天国みたいなものですね」
あの人たちという言葉に反応したが、どうせ死神か天使なんかだ
ろう。

これだけ聞いたら、それくらいしか連想できなくなる。
しかし……まさか本当に死んでしまうとは。しかもここ天国とは。
地獄じゃないだけマシだが……弱ったなあ。現世に未練残しまくり
なまま死んじまったもんだ。
もういつその事自縛霊としてウロウロしてやるうかと思ったけど、
ある事に気づいて彼女に問いかけた。

「ちょっと待て。この空間世界が天国だというのは大まかに理解で
きたとしても、どうしてお前は猫又の存在を知っている？　だって
お前はあの時はもう　」

そこまで言って口を噤んだ。次の言葉は出したくはなかった。たと
え頭の中で理解していようと、彼女にそれを伝えたくない自分がい
るから。

千春は俺の気持ちを察したのか、自分から話してくれた。

「……思い出したからですよ、何もかも。啓太はそれを知らないだ
け。まあ、もうじき知ることになると思いますけどね」

ふふっ、と子供のような笑みを見せて、千春が俺の肩に身体を預け
てくる。

肩越しに触れ合う彼女の身体は温かくて、柔らかくて、それでいて

親しい誰かをふと連想してしまう。

ふーっと息を吐いて、桜の木を眺めながら彼女に言った。

「なんか……変わっちゃったな、お前」

「そうですか？　むしろ、変わったのは啓太だと思いますよ？　だって、あの頃に比べたらすごい成長してますし。もう二十歳なんでしょう？　羨ましいなあ……」

「悲しいこと言つなよ」

その意味は、俺にとっても、お前にとっても。

歳を重ねるごとに、一つずつ何かを失っているような、そんな気がする。情熱に燃えていたあの頃の俺は今ではどこにもなく、流れていく時の中で静かに怠惰に日々を繰り返して。

むなしさと悲しさを詰め込んだまま、今を生きている。希望や未来を掲げないまま、ただ呼吸をして、命を繋いでいる。そんなことばかりしている気がして。

そして彼女は、全てを失って今ここにいます。歳を取ることさえ出来ずに、あの頃の時間が止まったまま、悠久の時間の中に居続いている。

あの頃に全てを失った彼女と、こうして一つずつ何かを失っていく自分がここにいます。

……なんだろうな。彼女と出会えたのに、どうして、こんな悲しい気持ちになるんだろうな。

あの頃の俺なら、きっと馬鹿みてえに泣き叫んで、彼女を抱きしめているはずなのにな。

「……ついこないだまで『ひゃっはー、汚物は消毒ですー！』だの『ケータリングって、啓太が発明したんですか？』とか、そんなトボケたことを言ってたように思ってたけどなあ」

「……むっ。誰がトボケてるですか。私は啓太が居ない間も、ちゃんと勉強してますよーだっ。あなたが気づくまで、しっかり学んでいますよーだっ」

ぶいっと顔を背けて、ついで体ごとそっぽを向く千春。ごめんごめんと謝っても、頬を膨らませて、黙り込んでしまった。

やれやれ、多少知的にはなってるが、こういうところは変わってないな。

でも……彼女が千春であるなら、夢じゃないのなら、聞かせて欲しい。

俺はあの時も、確かに見た。忘れもしない、あの病室の中で。

「千春」

真剣な俺の声色に気づいたんだろう。

彼女は身体をこちらに向けて、俺と視線を合わせた。

「はい？」

「一つ……教えてくれ。あの時……千春が居なくなる前にも、俺は今と同じような光景を見たんだ。あの時も、今のお前と同じように、遠くで歌を歌っている女性がいたんだ。……教えてくれ、千春。あれはお前だったのか？ それとも……まさか……」

「それも……さっき言ったのと同じ。いずれ、全て分かることですよ。でも……」

そこまで言って千春は、スカートの裾をぐっと握り、視線を逸らしてうつむいた。

「ごめんなさい。私からは……全ては言えないんです。あなたが自分で気づかない限り、私はどうすることもできないんです。ここで私が伝えたとしても、それはあなたの為にはならないし、彼女の為にもならない。自分の意思で知らなければ、全て收拾がつかないんです」

自分で分からなければ意味がない。それだけ伝えて、彼女は黙り込んでしまう。彼女、とは一体誰のことだろう。と思ったが、野暮な質問は止めておいた。

しばらくうつむいていた千春だったが、やがて何かを決意したようにふつと顔を上げて、少し躊躇いの表情を見せたあと、そのままぎゅっと俺を抱きしめた。

優しい彼女の声が耳元でささやかれていく。その言葉に俺は、ただ黙って耳を傾けた。

「でも、これだけは知っておいてください。

……私とあなたは、出会うために生まれてきた。それはただの常套句でなく、本当の意味で。彼女が無意識にあなたを彼と重ねていたように、あなたもまた、彼女の姿を私と重ねていた。それは似ているからではなく、こうなることが運命であったから。愛される喜びを、別れの悲しみを、お互いが知っていたから。だから……再び、巡り会えた」

「……えっ……おい、それってどういう意味……っ!？」

そう問いかけようとしたところで、世界が、少しずつ変化し始めていった。

穏やかな顔で俺を抱きしめていた彼女は、ふつと俺から離れて、一

歩後ろに下がって、ニコリと笑った。

視界が、まるで壊れかけのテレビのように途切れていく。雑音が混じり、視界もホログラフィが映り、バチツバチツと映像がぶれ出していく。

その中で千春は 俺に、ぽつりぽつりと語りかけてきた。

彼女の身体も一点に定まらず いや、まるで定まらないことが当たり前のように、彼女の声と、もう一つ よく聞いた事のある声が、俺の耳に届いた。

その声を聞いて、俺の脳は考えることをやめた。驚きを隠せないまま、その声たちを聞き入っていたからだ。

『……忘れないで。私のことを』

「……あの人の欠片となつて生きていた」

『短命を抱えたまま、私はあなたと出会えた』

「これ以上の幸せはなかった」

『生まれてはじめて、もっと生きたいと願った』

「そうして、輪廻は導かれた」

『全ては、こうなる運命だった』

「……だから、忘れてあげないでください」

『私があなたを愛したように、彼女もまた、あなたを愛しているから』

「 彼女のことを」

『 しっかり支えてあげてね 』

「 啓太 さん 」

『 啓 太 』

『 「あなたを、愛しています」 』

ぶれ出した視界が、やがて濁流のように音もなく暗転していく。千春だったその体に、あの『彼女の姿』が少しずつ上書きされていた。

そして、意識が混沌の渦に巻き込まれていくその刹那、俺は確かに見た。黒髪だったその色が、桜色に変わっていくその様子を。

まさか、まさか、まさか。

千春は 彼女は ！

ブツリ。

「ッッ！」

一瞬だけの途切れた声を上げ、嫌な汗を纏わりつかせたまま、けだるい身体の重みとともに俺は目覚めた。

掛け布団が幾重にもかけており、背中には寝汗用のタオルケットと防水シートが一枚。呼吸器が口元につけられていた。

俺が目を覚ましたのは、無機質な機械音が何度も響き木霊している部屋だった。どのくらいあるのだろうか。おそらく俺が今住ませてもらっている部屋の二倍くらいか、やたらと広々とした空間が広がっている。口元に酸素吸入器がつけられているところを見ると医務室、いや医務室にもこのようなものはないか。おそらく、ICU（重症患者を隔離する集中治療室）だろうか。それも、この広さで個室のようだ。

何ともご大層なところで俺は寝ているんだと苦笑いしつつ起き上がる。

電撃を浴びたかのような激痛が全身を駆け巡ったが、落ち着いてゆっくり息を吐き、酸素吸入器を外して、その姿勢のまま……少しの間記憶を反芻させた。

確か俺は、あの時サクラを庇って事故にあった。その時にぶつかった衝撃は覚えているが、その後はさっぱり覚えていない。

サクラが俺に何かを言っていた気がするが……あの時は意識も疎らだったのか、それすらも覚えていない。

けれど、その事故の形跡を物語るかのように俺の左腕はさっぱり動

かない。加えて全身がきしむかのような痛みが走っている。立って歩くのもまだ無理かもしれないぐらい、全身が痛い。それくらいヤバい事故に俺は巻き込まれてしまったのか、それとも単に俺が打たれ弱いだけなのか。

しばらくぼーっとしたまま、俺は部屋の風景を一巡して見ていく。遊び道具も、テレビも何も無い。あるのは目の前に飾られてあった一枚の絵画だけ。

何も無い空間が広がっているためか、まるで現実世界から隔離されたような奇妙な寂しさをこの部屋から感じてしまう。

何も無い故に、視点は常に目の前の絵画に向いてしまう。その絵は二人の男女が描かれていた。お互いの背中で預けあったまま、二人は空を見上げていた。

男が見上げている世界は雲ひとつ無い晴天の空で、虹の輝きと共に燦燦とした太陽が描かれている。

太陽はまるで自らの命を燃やしているかのように、熱く強く輝いているような印象があった。

対称に女が見上げている世界は暗黒に包まれた、月光の光だけが世界を凌駕しているような静観な風景。

三日月は闇に映え、微かに光っていた。太陽のそれとは違う、控えめな輝きを見せながら、漆黒の夜の狭間で小さく輝いていた。

そして、二人はその陽陰が包み込む世界の中心で 手を繋いでいた。背を互いに預けたまま、しっかりと手を握っていた。

何の絵だろう、これは。

何かを伝えたいことは分かるんだけど、意味が分からない。

分からないけれど……吸い込まれる。意識が、視線が、全てがその絵の中に吸い込まれていくかのような、そんな錯覚を覚えるくらい、俺はその絵を黙って凝視していた。

どのくらいその絵を眺めていただろうか。俺から右隣のドアがキィと音を上げて開いた。

そこには、資料を片手に佇むカノンさんがいた。彼は俺が起き上がってくる様子を見ると、あわててこちらに歩み寄ってきた。

「啓太くん！ よかった、眼が覚めたんだね。意識が戻らないから心配してたんだ。いや、本当によかった……」

ふーっと息をついて力を抜くカノンさん。どうやら、かなり心配させてしまったみたいだ。

おそらく……他のみんなにも、同じくらい心配をかけちゃったみたいだろうしな。

「すみません、ご迷惑かけて。でも、カノンさんやみんなのおかげで元気になりました。ありがとうございます」

「いやいや。僕はそれをするのが当たり前だからね。とにかく、身体にも異常はなさそうだったよ。アシユリーを呼んでこようか？ 彼女、凄く心配してたみたいだからさ」

「そうですね……あいつにも心配かけちゃったし。お願いします。」

……あ、その前に。カノンさん、この絵って……」

「え？ ……ああ、この絵か。これはこの部屋があまりに殺風景だからと言って、王様が持ってきてくれた絵なんだ。名前は……何と言ったかな。額縁かどこかに書いてないかな」

そう言って彼は俺から離れて絵のほうに向かうと、あれかこれやと

見て、あつと小さな声を上げた。

「ああ、あつたあつた。えっと、題名は……『二人の輪廻』だね。著者は……あれ、記載されてないな」

「……………ッ!？」

え…………。

輪、廻…………？

まてよ、輪廻つて…………。

あれ…………。

俺は何か…………。
大切なことを、忘れている気がする…………。

輪廻…………。

りん、ね…………？

『そうして、輪廻は導かれた』

誰かの声が、耳元で響いた。酷く聞き覚えのある、けれど愛らしい声色で。

その刹那、俺の頭の中で何かが弾けた。脳の中で記憶が逆流していく。あの日あの場所で見えた景色が風景が、まるで今ここで起きているかのような現象に陥った。

それは一瞬だけ見えた風景だった。けれど次に来る頭痛を前に、その風景は形を変えて様々な「モノ」へと姿を変えていった。

「ぐっ　　!？」

まるで頭の中で意思を持つ「何か」が蠢き這いずり回り、脳の記憶中枢に暴虐の限りを尽くし、根底まで際際無く犯していくかのよう
な苛烈さ。

激痛はまるで外部から内部へと叩き込まれるかのようにシグナルを介して「何か」と一緒に流れてくる。次第に頭が熱くなってくるのが分かった。激痛とともに倦怠感とよく似た気だるさが全身を襲う。そして叩きつけられた記憶の一つ一つがまとまりを持ち始め、形はあれど今だ混濁した「誰か」の記憶が俺の記憶に上乘せされていく。真っ白で不透明なビジョンが脳裏に焼きつき、やがてそれらは鮮明な風景へと、人物へと変わっていった。

けれどその光景は

ただ　視線を逸らし物言わぬ者たちの成れの果てと
怒号、悲鳴、絶望、哀憐、負の感情たちを全て吐き出したかのよう
な世界で

ただ憐憫に、忘れ去られたかのように虚しく放置された　　“彼ら”
の累々とした死体の山だった。

その中に　彼女は居た。

“俺”の姿も　その中であつた。

うつろに向けられた視線だけは　この醜くも見える灰色の空を眺
めたままで

そうは言っても。カノンさんは訝しげな表情で俺を見つめてくる。思い出したとは言っても、おそらく事故のことを思い出したと彼は考えるだろう。

もしかしたら定期的に精神安定剤を服用するかもしれないな。そう思いながらカノンさんに笑いかけると、入り口のドアが再び開いた。今度は入り口で果物や飲み物を抱えて入ってくるスノウの姿が眼に入った。

彼女は俺の姿を見るなり顔を安堵の表情に変えたが、頭を振る素振りを一瞬だけ見せると、平然とした、どこか冷たげな顔つきに変わって俺の前までコツコツと歩いてきた。

そして大きく息を吸って、同じように大きく吐き 勢いをつけて、俺の頬をひっぱたいた。部屋中に響くような音が聞こえたが、不思議と痛みは感じなかった。うっすらと涙で滲んだ彼女の目元を見ていたら、痛みなんて感じなかった。

「どれだけ……心配かけたと思ってんのよ……！」

「……すまん」

「ずっと……ずっと、起きて、待ってたんだからね……！」

「……悪かった」

「ほんとなら、もう一発叩いてやろうかと思ったけど……そんな気なくなつたじゃない……！」

彼女は大きく振りかぶった手をゆっくり下げ、俺のそばまで近寄ると、ぼふっと首元に頭を預けて、嗚咽を漏らした。

そんな彼女の背中を動けるほうの腕でゆっくりとさすってやる。さらさらの銀髪が首元に触れるのがくすぐったかったが、それを理由に拒むのも気が引ける。

スノウが落ち着くまで、こうしていた方がいいな。笑うところではないが、気づかれないうちにふっと笑って、彼女を引き寄せた。

「あんたは猫又じゃないんだから……無茶しないでよ……このバカ……バカッ……バカ啓太……！」

「ん……まあ、思い返してみればバカだったな」

これだけ心配されているのに、あんな無茶してさ。

でも、それだけ助けてやりたかったんだ。自分の身体が犠牲になるうとも、目の前にして傷ついてく人を見たくは無かったから。

「確かに俺は猫又じゃないよ。……でも、少しだけ、分かった気がするんだ」

「……？」

ぼろぼろと涙をこぼすスノウの目尻をそっと拭い、俺はカノンさんに向けて静かに言った。

思えばあの時もそうだった。いつからか、自分に対して疑問を感じていたことが山ほどあった。納得いかないことも、少なくとも無い。でも、それも今日で終わりだ。あの場所で彼女と話した事実が、あの世界が、俺の記憶が正しいのならば　全て、今日のうちに知ることが出来る。

真実を知るためにも　俺は、行かなくちゃいけない。

たとえ　それが慄然とした事実を叩きつけられようとも。

「カノンさん。少しだけでいいんです。ヴェイルさんと……王様と話がしたいです」

「啓太。さっきはごめんなさいね。叩いちゃって」

「ん？　ああ、気にするなよ。むしろ嬉しかったしさ」

そんだけ心配されてたつてことがよく分かったし。

あまり心配かけたくはなかったけど、今回はちと無茶すぎたか。反省。

「え、叩かれて嬉しいって……啓太ってドM？　ちょっとそれは引くわ……」

「直接的な意味に捉えんな、このアホ又が」

「誰がアホ又よ！　……まあ、いいわ。とりあえずお詫びにちゅーしてあげるからこつち向きなさい。ほら、ちゅー」

んーと背伸びして俺の口元を狙ってくるこやつをぐいぐい押しのかつつつ、長い廊下を歩いていく。

今、俺たちは王様の謁見の場へ足を運んでいる。まだ休んでおいた方が良くというカノンさんの説得を押し切って、動かない腕に包帯を巻いて向かっている。

聞きたいことは……二つある。おそらく。本当におそらくだけど、

王様だけが知っている事実、王様しか知らない真実が多分あるのだと思う。

推測で訪ねるのは聊か無礼かもしれないが……あの出来事を『夢』のままでは終わらせたくはないし、俺には最後の手段がある。

やがて「んーっ！ んー！」とパッション屋良みたいな声を上げてたスノウがぴたりと黙り込んだ。

目の前には何やらごっつい体つきをした黒服黒メガネの執事さんが二、三人いた。こちらに何か伝えたいことがあるようで、コツコツを歩み寄ってくる。

俺なんかやったかな……と、少し不安な気持ちになっただけど、どうやら用件はスノウにあるようだった。

「姫様。今日は三国会合が開かれます。それまでに準備をして頂きたいのですが」

「会合？ ……あー、あのオジサンたちが集まって話し合う井戸端会議みたいなの？ でもさ、どうせ三人ともどんちゃん騒ぎするだけだろうし、私いらんじやないの？」

「そういうわけにはいきません。一国の王女である貴女もお話に加わって頂かなければ。それに見合いの話も窺っていますか……」

「なおさらムリ！ 見合いとか絶対ムリ！ 私には啓太っていう最愛の夫が」

そこら辺まで言ったところで、俺は彼女を片手で抱いて（かなり辛かった）、ぱいっと黒服さんたちめがけて投げ飛ばした。

「あんま黒服さんたちを困らせんなよ。それじゃ、俺はヴェイルさんのところに行くから」

そう言つて踵を返してさっさとその場を離れていく。

ご迷惑をおかけします、と黒服さんたちが頭を下げた瞬間、ぎゃんぎゃんわめき散らすスノウの声が後ろから聞こえてきた。

うっせえな、エビフライぶつけるぞ。

「けいたー！ー！！ この人でなし……いや猫でなしー！！！」

あとでタバスコぶっかけるから覚悟しときなさいよー！！ 夜

中普通に寝られない身体にしてやるー！！！」

どういふ脅し台文句だ。確かにタバスコはぶっかけられたくはないけれど。そう突っ込みたかつたけど我慢した。

でも去り際に一度だけ振り向いて、笑顔で手を振つて、その後あざわらうかのように見下して鼻で笑つたら、更に彼女を激昂させてしまった。

黒服さんたちすいません。こちらこそ面倒かけてすいません。といった申し訳ない気持ちを含ませつつスノウの後ろの黒服さんたちに頭を上げて、足早にその場を離れた。

「…………ふー」

スノウと別れて早五分。少し歩いただけでもう身体が根をあげてしまった。

まだまだ先は長いというのに（思ったけど、広すぎるってのも問題

だよ。車椅子が欲しかったりもする（こんな体たらくじゃ日が暮れちまうぞ。

そんな感じで自分に活を入れようと、頬をぴしゃりと叩いて、大きく一歩歩んだところで

「……………あれ？」

なんだろう。急にめまいが酷くなってきた。視界がぐらりと歪んで、目先がどんどん暗くなっていく。

貧血だろうか。どのくらい寝ていたか分からないけれど、おそらく長い間ベッドで寝ていたから、少し身体が不調をきたしているんだろう。

ちよつとそこで休もうかな。丁度休憩室らしき部屋があるし、落ち着くまでそこで休んでいよう。うむ、何事も無理は禁物だ……………いや、今の状態が無理しているんですよね、分かります。

確かヴェイルさんは三国での会合があると黒服さんたちが言ったが……………まあ、それが始まるまでに聞きたいことだけ聞けば大丈夫かな。こっちは急ぎの用でもないんだし。

そう思いながら休憩室に入り、近くに設置されていた長いすに横たわって、しばらく眼を閉じた。

部屋にかかっていた暖房が、やたらと暑く感じた。

「ん……………」

どれくらい眠っていたんだろう。少々休憩するつもりが、いつの間
にやら仮眠を取ってしまうとは。

やはり疲れていたのか。まあ……あれだけ衝撃的な事故を起こして
いるから、当たり前といえば当たり前か。

ぐっ、ぐっ。と身体を伸ばして深呼吸。先ほどまで感じていた倦怠
感や貧血の症状は見られない。腕の骨折はあるものの、基本は概ね
良好といったところか。

さて……それで何をするんだったか。

……。

「……ああ、そうだ。確か……ヴェイルのところに行くんだった
けか」

危ない危ない。危うく本来の目的を忘れるところだった。痴呆がか
かるのはまだまだ早いぞオレ。

とにかく、体調が戻ったのなら早く行こうか。会合が開かれる前
にカタをつけたいところだし、おそらく長話にもなる。

それにしても……

「……いつまで経っても、慣れねえよなあ」

そろそろ身体に染み込んでいくだろうとは思ったけど、どーもこの
城の雰囲気はいつになっても好かないね。

やっぱり庶民は庶民らしい生活が向いているのかねえ。体質つーも
んもあるのだろうか。分かんが。

とまあ、そんなくだらないことを思いながら、オレは休憩室を足早
に出て、謁見の間に向かった。

部屋の温度に慣れてしまったせいか、休憩室を出た廊下がやたらと寒く感じた。

「…………あれ？」

いつまで眠っていたんだろう。んで、どうして俺はここで寝ているんだろう。

確か…………休憩室の長いすに寝っ転がって休んでいたはずなのに。廊下で膝立てて寝てるってどういうこと？

……………まさか俺、夢遊病患ってる？ それは不味いな。ただでさえ今は身体が不調なのに。

やっぱり事故のショックで色々頭がおかしくなってるのかな。今は少し休んだ方がいいだろうか。

…………いや、ダメだ。今は休めない。真実を知って、ゆっくり休むべきだ。それを知ることが出来なければ、きっと俺は落ち着けない。もやもやした気持ちのままでは嫌なんだ。

よっ、と足を上げて立ち上がる。軽い立ちくらみが来たが、問題ない。今は早く謁見の間に

「…………あれ？」

行こうとしたんだけど。

どうやら俺が眠っていた場所は謁見の間の入り口右手前だったみたいで、視線の先には入り口の階段が見えていた。

とんだ俺は眠りながら歩いてきてんだよ。と苦笑いしつつため息をついて、気を取り直して階段を上り、謁見の間の扉を開いた。

そこには王の椅子に、無骨な表情でこちらを見つめて座っているヴ

エイルさんと、何やら俺の姿を見て驚いたような、それでいて戸惑うような顔を見せているセツちゃんの姿があった。周囲にはSPさんたちが相変わらずの様子で佇んでいる。王様は普段どおりだけれど、セツちゃんはどうしたんだろう。何か不審そうに俺を見つめている気がするのだが。とりあえず笑って手を振ってやると、彼女は眉間に皺を寄せて小さく一礼した。……うん、変だ。変だけれど……まあいいか。今は用事を済ますことが先だ。その後でゆっくり話をするか。

「ヴェイルさん。遅くなつてすみません。それと、時間をとらせちゃって申し訳ありません。会合があるのに勝手に時間を割いちゃつて……」

「よい。会合など、直ぐに終わる。それに……そなたが聞きたいことも、分かっている」

「え？」

「……残念だが、私からは、そなたに話すことなど何も無い。以上だ」

それだけ言つて、ヴェイルさんは席を外そうとする。

あまりに突然すぎて思考が回らなかつたが、直ぐに再開させてヴェイルさんを引き止めた。

冗談じゃない。話あわずに済んでたまるもんか。

「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！ 話すことがないって……それに俺はまだ何も言ってますん！ ヴェイルさんの勘違いかもしれないじゃないですか！」

「勘違いなどではない。そなたが何を聞きたいか、何を知らりたいのか……私には分かる。分かるから……駄目なのだ。これは君が首を突っ込んでいい問題ではないし、何より君が知ってはいけないことだ。知らない方がいいことだってあるし、まさしく今、君はそれを知らうとしている……悪いことは言わない。今日はもう休みなさい」

いつも通りの、王の威厳がひしひしと伝わる言い方でぴしゃりと告げられる。

それらの中には俺に気を使ってか、辛い言葉も含まれてはいたが今はそれに甘えていられるほど心中穏やかじゃない。

話があるとお願いでここへ来たんだ。それにヴェイルさんがOKしてくれたんだ。なのに今となって訊かないなんて……あんまりじゃないか。

そう思った故に……俺は失礼ながらも、身勝手に自分の主張を通した。それを聞いたヴェイルさんは、やはりかと言ったような、納得の表情でこちらを見つめた。

「……空間世界と、その世界への干渉。そして、それを事細かに記載した情報を、あなたは知っているはずです。俺はそれが知りたいだけなんです」

「ならぬ。空間世界とは……パラフィリアとは関わりを持つな。知ってどうこう出来るわけでもないし、君にとつて後悔しか生まれない、禍々しいだけの産物なのだ」

……やっぱり、王様も知っていたのか。

空間世界とは何なのか。干渉とは何なのか。輪廻とは一体何なのか。自分のこと。そして誰でもない大切な彼女のこと。それらが嘘偽り無く知りたいから、俺は此処まで来たんだ。

……だつて、気持ち悪いじゃないか。

本当の自分のことを知らずに生きていくなんて。

たとえ後悔しか生まれずとも、俺はその後悔を背負つてでも「自分を知らりたいんだ。」

だから……

「だとしても……お願いします、ヴェイルさん。俺は見たんです。

あの事故で意識を失っているときに、パラフィリアを。そこで出会ったんです。昔に死別した彼女と。……それに、彼女だけじゃない。俺も、思い出したんですよ。彼のことを。俺は……俺は本当は……」

そこまで言ったところで。ヴェイルさんの視線を覆うかのように、俺の目の前にセツちゃんが立ち塞がった。

その瞳は鋭くて、言葉を発さずとも冷たいオーラを発していた。いつもと違う、あの温和な彼女の姿は何処にも無く、今では別人のような顔つきへと変貌していた。

その彼女は 無言で懐から短剣を引き抜き、眼にも留まらぬ速さで俺の首元にピタリと鋭利な刃先を向けた。殺される と思い、一瞬庇うような姿勢になりかけたが、これが脅しであることを知って、そのままの体勢で身構えた。じわりと嫌な汗が全身から吹き出る。張り詰めた緊張感が半端じゃなく漂い始めた。そんな空気の中、彼女は俺に向けて一言、聞いたことも無い声色で静かに言った。

「申し訳ありませんが、ここはお引取りください」

「せ、セツちゃん……?」

「啓太殿。国王が知らなくて良い、と申されたのです。今はそれに従うべきではござらんか? これは猫又にしか知りえぬ事実。人間が簡単に口を挟んでいい問題ではない。それに、啓太殿の夢の中で

見た世界など……所詮は幻。ただの夢でしか有り得ないことでござるよ」

「だ、だけど！ 俺は真実を、本当のことを知りたいだけなんだ！ 見たことを口外する気なんかさらさらない！ 人間が口を挟むことができないことだけれど、それでも俺は確かに見たんだ！ あれはただの夢なんかじゃない！ 全部、全部真実なんだろう！？」

「真実？ それは推測、憶測の間違いであろう？ そのようなこと、所詮は啓太殿の世迷いごとにしかり成りえませぬ。……それに、口ではなんとでも言えるでござるよ。貴殿は猫又でなく人間。良を裏切り、善を偽り、そして悪意の塊で出来た人間の言葉など……信用に値せぬでござるよ」

信用できない。冷徹な口調で届いたセツちゃんの言葉が、胸に深く突き刺さった。

それじゃあ、今まで関わった猫又たちは、俺のことを信用していなかったのか。人間という存在だけで、ただ嫌悪の対象としか見えていなかったのか。

じゃあ、じゃあなんで……。なんで俺をもてなしたんだ。なんで俺をあれだけ祝福してくれてたんだ。

なんだよ……。じゃあ、あの楽しかった日々は……。全部……。人間に對しての社交辞令だったってことかよ。

長い間ここに住ませてもらって。きつと家族みたいに思われてるんだって、そう思ってた。

けれどそれは俺だけが感じていただけで。他の人たちは……。ただ、人間だと。厄介者だとしか、感じていなかったのか……。

「国王は優しく仰っておりますが、私は違います。簡潔に述べます。人間は信用できない。だから教えられない。……これで理解できま

したね？」

「し、しかし……」

「まだ分かりませんか？ 私はあなたに向けて『消える』と申し込んでいるのです。これ以上我々と意見を交わそうなどと馬鹿げたことを繰り返さずようであるなら、しばらくあなたは何処かへ隔離してもらうことになります。もしくは……今此処で命を絶つて、知りたかったパラフィリアとやらへ旅立つか。どちらか、よく考えてお選び下さい」

水平にしていた短剣の刃先が少しずつ傾斜に変わっていく。もう少しで刃先が皮膚へ食い込んでいくかもしれない。頸動脈を静かに切られるかも知れない。

……本気だ。彼女は俺を……本気で殺すつもりか。ささやくような彼女の言葉に感情は無い。感情がない故に、怖かった。少しでも彼女が手を動かせば、いつでも殺されてもおかしくない状況だったから。

そんな殺されるか殺されまいかという境界の中で、俺は静かに悟った。絶望の淵に立たされて人は冷静さを取り戻すこともあるのだろう。今まで拒み、避け続けた考えを、頭の中で反芻させていった。

……まあ、そうだよな。普通に考えてみたら、そうだよな。

猫又にとって、人間は嫌悪の対象であり、最も嫌煙すべきものではない。こうして今までよくされてきたのも、この国の姫 スノウを助けたためであったのこと。

人間であるならば絶対に干渉を許されない。そういう境界線を引いているからこそ、彼らは今日まで平和に暮らしているんだろう。

ここで反論するならいくらでも出来た。猫又たちに思いのたけをぶつけることだって出来た。けど、俺はそれをしなかった。

……それをして、一体何になるってんだ？　こんなに嫌悪されてまで、なんで猫又という存在を知ろうとしてるんだ？　どうして、ここまで拒絶されなければならないんだ。どうして……。

「人間、もうお部屋に戻られよ。でない……拙者は秘密を守るために、貴方を傷つけなければならなくなる。そうなる前に……どうかお引取りを」

冷たく乾いたセツちゃんの声が耳を過る。その言葉を聞いて、俺は後ろ向きで歩を進めた。

彼女は追及しようとしなかった。短剣を懐に戻し、先ほどと変わらない気嫌うような視線を向けて、すつと王様の斜め後ろへ下がっていった。

「すみません、ヴェイルさん……俺、どうかしてました。しばらく、頭を冷やしてきます」

穏やかじゃない奥底の感情を必死で押し殺しつつ、ヴェイルさんに頭を下げた。

彼はそんな俺を見て、ぼつりと、独り言を言うかのような口調で話しかけた。

「……もうじきあれも完成する。無理してこの世界に居座る気はないぞ。こんなことを言われても居心地が悪いだけだろう。元居た場所で、平穩に暮らすのもそなたの自由だ」

あれ、とは何なのか。それを問う気にすらならなかった。

もう、全てがどうでもよくなってきた。ここまで嫌われていることを知って。自分ひとりだけが浮かれてたことに、思い上がっていた

ことに、ひたすら恥ずかしくなつて。

俺は、この世界にはいられないのかもしれない。

存在するだけで嫌悪されているなら………いつその事、消えてしまつたほうがいいのではないのかと。馬鹿げてはいるが、そう思うようになってしまつて。

もう一度だけ頭を下げて、黙って謁見の間を後にした。やたらと扉が重く感じる。腕が痛い。けれど………心はもつと痛かった。

「………はあ」

あれから半日程度の時間が経過しただろうか。時刻は既に深夜12時を迎えていた。今宵は満月だな。それにしても見たことも無い色をした大きな月が、静かにそこで佇んでいるのは何か違和感を感じる。ちよつと緑のかかった月は不気味だな、そう思いながら首をぼきりと鳴らしてもう一度ベッドに横になった。

カノンさんに無理を言わせてもらつて、今ではICUでなく自室のベッドで身体を横にしている。あそこは広すぎて落ち着かないし、何より今はあの絵を見たく無かつた。謁見の間で言われたことを思い出して、自己嫌悪に陥つてしまうから。

「元居た世界に帰るべきなのだろうか………俺は」

独り言をぼつりと呟く。ここで誰かが居ようものならイエスかノーか返事が返ってくるだろうが、生憎今は俺一人しかいない。それに返事が返ってきたとしても、それは自分で考えたことではない。ただ他人に言われて促されてやったことにしか過ぎない。

「……アイツが眼を覚ましたら、少し話をしてみようか」

彼女　サクラは今も眠っている。この間からずっとだ。話によれば、俺が倒れた日からずっと眠っているのだと聞く。

それだけシヨックだったという事実には驚きだったが、まあ彼女のことでだ。きっといつも通り復活して、いつもの笑顔を見せてくれるだろう。

……それまでに、俺も腕を治しておかないといけないが。

さて、いつまでも寝転がってるのも何だし、ちょっとサクラの様子を見てくるかな。

もしかしたら目覚めているかもしれないし。ひょっこり眼が覚めて、「啓太さんおはようです」とか惚けた感じで言ってくれると気が楽になるんだけどなあ。

そんなことを考えながらベッドから降りて立ち上がり、ドアを開けて彼女の部屋まで行こうと思ったけれど……。

「ヴェイルさん……？」

ドアを開けたその先には、何とヴェイルさんが目の前にいた。寝衣だろうか。いつもの白と赤十字の服装でない、真っ白のローブを羽織っている。

こんな夜更けに、一体何の用事ですか？ と訊こうとしたが、そんなことはお構いなしと言わんばかりに、ヴェイルさんは俺に向けて深く頭を下げた。

突然の事態に内心動揺した。っていうか、ヴェイルさんが俺の部屋の目の前にいる時点で驚いた。

「……すまなかった」

「な、何をやっているんですか、国王とあろうものが！ 頭を上げてください！」

とは言っても、ヴェイルさんは頑なに頭を上げてくれない。こんな国王様が頭を下げてるのを見てたら、何だかこちらが申し訳なくなってきたよ。

頭を下げたまま、ぼつりぼつりとヴェイルさんは俺に言葉を飛ばしてくる。

「昼間は、本当に申し訳ないことを言ってしまった。故に、その詫びをしに参った。謝って気の済むことではないが、あの場ではあ言っしかなかった。国王の威厳を保つためには、皆の信頼を得るためには、時として非情になるしかなかったのだ。君の尊厳を酷く傷つけたことには間違いない。……本当に、すまない」

深々と頭を下げて謝る国王様のその言葉に嘘は感じられない。むしろ、あの場で毅然としていた様子の方が嘘のように思えてきて。

あの言葉が本心じゃなかったのは内心うすうす感じていた。俺に對してぶつけられた言葉は正論だったし、むしろ俺の方がおかしかった。

それなのにヴェイルさんは自らこちらに出向いて、俺に頭を下げている。国王たる威厳と、同時に持ち合わせている優しさ、心の広さ。それがこの人の人柄なのかもしれない。

だから俺は……それに甘えていたんだと思う。何でもしてくれるだろうと、無茶な要求すらあの場で言っつてのけていた。

国王たる者が人間に對して猫又の秘密を暴く。そんなことをすれば他の猫又たちはどう思うか？ ……否、そんなことなど分かりきっていることだ。

非があるのはむしろ俺の方だ。そう思っつた故に……頭を深々と下げた。下げて、もう一度謝つた。

「謝らなくてもいいですよ。ヴェイルさんが俺を思ってた言ってくれていたのは間違いありませんし、俺も頭でしつかり考えずに行動していました。……軽率なことをしてすみません。それに、こんな手間までかけてしまった。……確かに人間は、その、信用できない部分もありますからね」

それだけ言うと、ヴェイルさんはふつと顔を上げた。少し疲れた顔をしていた。

「ありがとう。そう言ってくれると助かる。……それと、もう一人君に謝りたい者がいるのだが……セツナ。そこに隠れていないで、出てきなさい」

「セツちゃん？」

そう言い、ヴェイルさんの周囲を見ていると、数メートル先の廊下で、何やらこちらを覗き見しながらもじもじしているセツちゃんの姿があった。

彼女は俺と眼が合うと、途端に泣き出しそんな顔で後ずさりとした。そんな彼女をヴェイルさんは逃がすまいとしてか、しっかりと捕まえて俺にこっさり言ってくる。

「私は少し準備をしなければならぬ。それまで……ゆっくり二人で話し合っていてくれ」

準備とは。そう尋ねようとしたが時既に遅し。ヴェイルさんはセツちゃんを無理やり部屋に押し込んでドアを閉め、さっさと足早に去っていつてしまった。

部屋に入ってきたセツちゃんは、ものすごい不安な顔で俺の顔を

見ていた。

……うわぁ。すげえ気が重くなる。すごく気まずいよこれ。

直立姿勢でいつまでも突っ立ってもらうのも疲れるだろうし、とりあえず彼女にベッドの上に座るように促した。

セツちゃんはカチコチに固まった身体をぎこちなくロボットのよう
に動かして、俺のベッドに腰をかけた。……かけたのはいいんだけど、話題が無い。

つてかそれ以前に、とても気まずい。昼にあんなことがあったので、
どうやって話を切り出そうか迷っている。彼女も額に脂汗をびっし
りかいて、震えながら俯いている。

……。

……うーん。

……怒られることを覚悟の上で、いつちよやってみるかな。

いつまでもこんな様子じゃ埒があかないし。そう思って俺は彼女の
横に座ると（俺が隣に座ったので、セツちゃんはめっちゃ肩を跳ね
上げてた。脱臼するぞ）、彼女の方を向いて真面目な口調で言った。

「セツナ」

「はいっ!」

返事早っ。『ナ』と言った瞬間返って来たぞ。

んまあ、そんなことはどうでもよくて。俺の方は向いているけれど
眼をあっちこっちに泳がせている彼女をきつと見つめ、そして

「……おお、柔らかい柔らかい。これ柔軟剤使ってるでしょ?」

「ふ、ふあああつ!? ちょっと、啓太どのっ! ほ、ほっぺをそんなぐにぐにしたら駄目でごぞ……いああつ、ひ、ひっはっすららめへっ……!」

彼女のすべすべな頬をいじりまくった。引っ張ったりぐにぐに遊んだり。うむ、柔らかいなこれ。サクラのと同じくらい柔らかいな。うむ、やはり気を紛らわせるためには頬いじりが一番だ。俺もやって楽しいし、やられた方も気が緩む。もちろん加減もしてるからお肌にも優しい。

でも最後は気合入れないとな。痛くない程度に引っ張って、その後ばちーん!と。やられたセツちゃんは「ふわわあ!」と悲鳴を上げて後ろに倒れこんだ。いいリアクションだ。

「ひ、ひろいでござるよ啓太殿……」

「ふふん、俺に刃物向けた罰だセツナよ。……どうだ? ちっとは緊張がほぐれたか?」

「あつ……」

まるで思い出したかのようにセツちゃんが顔を翳らせる。せっかく緊張をほぐすつもりでやったんだから、そんな顔するなよ。と笑いかけてやったが、彼女は再び俯いてしまう。やれやれと腕を組んで唸ったが、少し彼女の様子が先ほどまでとは違うことに気づいた。そして、彼女は弱弱しく感じる瞳を俺にむけ、途切れ途切れになりながらも言葉を続けた。

「啓太殿……昼間は……本当に、申し訳ございませぬ。啓太殿の気持を痛いほど分かった上で、あのような叱責を飛ばして……許されぬとは思いますが、それでも謝ります、本当に……申し訳ないで

「ござる」

それは昼にあつた、あの「出来事」の謝罪の言葉だつた。

確かに、びっくりはした。彼女が、こんなにも俺のことを嫌っていたのかと思つて。あの優しげな表情は全て偽りだつたのかと思つて、少し絶望しかけた。

せつかく出来た友人だつたのに、人間と猫又という境界のせいで関係が有耶無耶になつてしまふんじゃないのかつて、怖かつた。もちろん、彼女に刃物を向けられたことも怖かつた。

「……世迷いごとを言つていたのは、拙者の方でござる。拙者が述べたことは、啓太殿を追い詰める理由の他ならなかつたでござる。

本来ならば拙者は啓太殿の傷を心配し、明るく励ますつもりでござつた。けれど、拙者は啓太殿に、追い討ちをかけるかのように心身ともに傷つけるようなことを言つて……本当に大馬鹿者でござる。

拙者は……拙者、は……！」

そこまで言つて彼女は再び顔を俯かせた。嗚咽交じりの彼女の言葉は果たして心からの思いなのか、それともまやかしにしか過ぎないものなのか。

……もちろん、俺はまやかしたとは思つちやいないが。あの笑顔が、誰に対しても優しかつた彼女が、こんな嘘を平気でつくはずがない。そう信じていたから、あんなことがあつても俺は彼女を憎むことが出来なかつた。……といつても、憎むこと自体がそもそもお門違いなんだけど。セツナはただ、やるべきことを成しただけ。理不尽なことなんて一つもなかつた筈だ。

それでも……ヴェイルさんと一緒に、俺に謝りに来てくれた。こんな、ただの一般人でしかない俺なんかのために。

セツナは震えた肩をぎゅっと押さえ、もう一度俺に顔を向けた。そ

の瞳には溢れんばかりの涙が浮かんでいた。

「腑抜けたことを言っているのは百も承知です。ですが、啓太殿。どうか、どうか、猫又を……つく……嫌いに……嫌いにしないで欲しいでござる……！」

どうしてだろうな。

さっきまでは怖いと生きていたはずなのに。こんなにも健気な彼女のことを、やけに愛しくなった。

友人を失うまいと躍起になって、自分の本音を伝えてくれる彼女にいつしか気づかされる。こんなにも俺は信頼されていたんだということに。

だからなのかもしれない。奥底から湧き上がってきた思いを拒めずに俺は……彼女を動かせる方の腕で、ぎゅっと抱きしめた。

本来なら、もっと気の利いた言葉をかけて安心させるのが一番なのかもしれない。でも、手っ取り早く落ち着かせるにはこれが最良なのではないのかと思った瞬間、身体が無意識に動いていた。

「ふああっ……！？」

……もしかしたら、俺自身も「安心」したかったのかもしれない。ガキっぽい発想だけれど、誰かの温もりを感じることで、早くなた心拍数も、呼吸も、正常になるのではと思って。

彼女にとっては逆効果だったのかもしれない。下手すれば、拒絶をされてしまうかもしれない。

でも、拒絶されたとしても、今だけは人肌を感じたかった。折れかけた心を支えようとしていた。

「嫌いになんか、ならないよ」

きゅ、つと。柔らかな彼女の肢体を抱きしめる。温かな体温が心地よい。

「あんなことを言った拙者を……許してくださいるのですか……？」
抱きしめられたまま、セツナが俺の耳元で囁く。少し呂律が回っていないかったのは緊張だろう。俺も、ちよつと緊張してるし。そんな彼女をすつと離し、頬に手を当てて、優しく言ってやった。

「俺はセツちゃんが大好きだよ」

もちろん、みんなのことも大好きだ。そう言おうとした。言おうとしたんだけど……なんかセツちゃん。変なスイッチが入っちゃったみたい。

俺のその言葉を聞いて、ぴしつと身体を硬直させ、猫耳と尻尾はぴーんと超がつくほど垂直に立たせて、涙でぬれた顔はいつしかゆでたこみたいに真っ赤になって、何かを言おうとしているのか口を魚のようにぱくぱくと動かしていた。

……あれ。よくよく考えなくても、これって普通にどうみても告白と変わらないのでは……。

……。

やっ、やべええええええっ!?

て、訂正だ！ 訂正！ 最速に迅速に、言い方が悪かったと伝えねばっ！

い、いやでも待てよ！ 頭のいいセツちゃんなら分かるはずだ。こんなところで告白なんぞするはずがない。

きつと友好の証。そう、友達として大好きだって、伝わっているは

ずだ！

……そう信じたかったけれど。

「せ、拙者も わた、わたしも啓太殿のことが」

小声ではそばそと云っているせいか聞き取れない。なんだ、あれか？ 小声で言うってことは、「は？何言ってるんだコイツマジキモイ」とか言われてるんだらうか。うわぁ嫌だ嫌過ぎる！

もしそんなこと言われたらしばらく立ち直れないかもしれないが、一応聞いておかないことには始まらない。だからもう一度言ってくれと言おうとしたんだが……。

それを言う前に、彼女は俺の方をじっと見詰めると、ごほんとせきを一つして、そのままゆっくり

……へ？

えっ、ちょ……まっ……！？

「……パパに言われて呼び戻しにこよーと思っただけどきー。なーんで二人してイチヤイチャしてるワケ？ ちよつとアシユリーさん不愉快なんですけどー？」

「ひにゃああああああああっ！？」

うお、セツちゃんまたしても飛び上がった。これで三度目ですね。しかも今度は座ったまま飛びおったぞこの娘。

声がる方向へ視線を向けると、ドアに背をもたせかけてこちらを眺めているスノウの姿があった。

んで、セツちゃんはセツちゃんです。もう一度ベッドに着地しようとしてたが、よつぽど慌てたのかベッドでなくマットレスへお尻から落ちていった。

いたにやああつ！ と叫んでお尻をさするセツちゃんになんか萌えた。

しばらくその体勢のまま微動だにしていなかったけれど。スノウの存在に改めて気づいたのか、彼女は、「ばっ！」と直立姿勢で立ち上がって、すたすとスノウのところまで歩み寄ると、「びっし！」と彼女に綺麗な敬礼をした。その瞬間スノウに頭をチョップされたけど。

やたらと不機嫌そうなスノウが、何かスケバン（死語）並に睨みをきかせて彼女に尋ねた。

「ってゆーかセツナー。どさくさにまぎれて、なんで啓太に顔を近づけてたのかなー？ ぬー？ 理由があるなら話してみー？ こっさりお姉さんに話してみー？ 別に怒んないからさー」

「なっ、なななな！？ ち、違うでござる違うでござるー！ せ、拙者は別に見つめた後にもう一度謝罪を告げようと思っていただけで、べ、別にキスなどといったような不純で破廉恥なことをしようとしてたわけじゃないでござるー！」

「ぬー？ そうなの？ でもわたしは『キス』とか『不純』とか『破廉恥』とかだなんて一言も言っていないけどねー？ まさかしよう

としてのたの？」

「え、セツちゃん。それマジ？」

それは驚きましたよワトソン君。確かに私も突然至近距離になったのでドキドキしましたがね。

といった感じでしごく冷静な顔で問うと、欧米諸国でも爆発的ヒットを促すかのような勢いでセツちゃんの顔が真っ赤に染まった。いつか黒髪も赤髪に変わるであろう真っ赤っ赤な様子で、涙目になって、「あ、あうあうあう！ ちつちが……にやああうう！」と言葉にならない声を上げてアタフタと身振り手振りで説明しようとしたり、頭を抱えてあわあわ言い出したりと、よく分からないジェスチャーをはじめだした。おお、へなへなした垂れ猫耳と垂れ尻尾が可愛い。冗談半分に言ったのにこんな反応されるとは。これ動画に撮っていいかな。

しっかしまあ。これが昼の彼女とは到底思えないな。絶対別人だろこの人。

まあ……なんだかんだあつたけど、仲直りできたから一件落着……ん？ 俺ら仲直り以前に喧嘩してなくね？ ……まあ、いいか。考えるだけ疲れるし。

「……んで、スノウ。ヴェイルさんがどうしたって？」

「ん……ああ、そうそう。啓太を連れてきてくれてって言われてね。もう一度謁見の間に来てくれて言ってるんだけど……大丈夫？ 身体は無理しなくてもいいのよ」

「いや、大丈夫だ。それよりも早く行こう」

「はいよ。……んで、この子はどつするの?」

じろりとセツちゃんの方へ視線を向けるスノウ。彼女は放心状態で何かうわごとを呟いていた。別の意味で怖い件。

「……今は一人にさせておいた方がいいんじゃないかな」

「まあ、そうかもしれないわね。……啓太。前々から思ってたけど、あんたって結構天然ジゴロよね」

「?」

天然ジゴロ?

「……うーん、よく分からないから流しておこう。とにかく。今はヴェイルさんの下へ行くべきだ。きつと、きつと何か分かるはずだ。」

謁見の間に行くと、ヴェイルさんが待ちかねたような表情で俺を一瞥した。

やべ、もうちょっと早くに来るべきだったかな。社会人として失格だ。

「来たか。それでは……参るとするか」

「はい……えっと、参るって何処へ？」

「そなたが知りたいと思っていた情報が眠る場所だ」

どくん。と心臓が鼓動を増す。

もう知ることが出来ないかと思っていたこと。もう知らないまま終わってしまうかと思っていたこと。

それら全てが、ついに分かる。分かってしまう。

「どうした啓太。震えているのか？」

「はい………すみません。いざとなったら、急に震えが………」

「……まあ、仕方がないことかもしれないな。……だが、君はそれでも知りたいと願ったんだ。私はそれを甘んじて叶えようぞ。……ふふ、願いを叶える、か……。神にでもなった気分だな」

その言葉に面倒という思いは込められていなかった。むしろ、子供のような無邪気さを含めた物言いでもあった。

「ありがとうございます……」

自分の白い長髯を撫で、ニコリと笑うヴェイルさんにただ一言だけ言った。

それ以上の言葉ははっきりいっていらぬ。向こうもそう思っているだろう。

こちらへ。そういつてヴェイルさんは背を向けて謁見の奥の部屋へ入っていく。

言われるがまま、俺もヴェイルさんの後を追って、奥の部屋へと入った。

越権の奥の奥にあった部屋は、蛍光灯の薄暗い蒼光が不気味に輝く書庫だった。本棚にはファイリングされた資料が隙間無く綺麗に整頓されている。

まるで宇都宮の屋敷の地下にあった図書館　いや、それ以上に膨大な資料が収納されているそこは、どこか居心地が悪く、まるで神聖な場所に入り込んでしまったかのような、奇妙な雰囲気を感じた。幾重にも広がる本棚の列の中、ヴェイルさんはこの居心地の悪い空気を物ともせず、ずんずん進んでいく。その後を黙ってついていった俺だったが、やがてヴェイルさんはぴたりと足を止めた。入り組んだ場所にある本棚の一番隅。そこからファイルを二、三冊取り出して、俺に手渡した。表紙には「風土病」と「転生書」と書かれている。記入者は　　m a c h i n a | S i l v e r t と書かれてあった。

「それに君の知りたい情報が記載されているだろう。……開いてみるよ」

促されるまま俺はファイルを開き、まずは一枚目の資料をはぐった。最初は記載者の報告書が書かれていた。

>風土病における犠牲者及び観察、症状 1<

新暦 年×月×日。上層からの伝達を受け、病が発生した土地へ足を踏み入れる。そこには我々が想像していたものを遥かに凌ぐ地獄絵図が広がっていた。

地域住民は既に場を離れ隔離されているせいか、猫又たちは一人も見受けられない。予防衣を来た数名の調査員が巡回している以外は、そこは酷く閑散としている場所だった。

歩き渡っているうち、やがて現地住民の一人を発見。発見はされなかったんだらう。幼い少女だった。少女は血を吐き苦しみ悶えていたが、私にはどうすることも出来なかった。不可視を外して調査員に知らせることも出来たが、規律は破れない。それにこの少女は誰が見ても、もうすぐ死ぬ兆候にある。これ以上死に向かう者を冒瀆する気はない。せめて向こうでは望んだ人生を歩めるよう手配をするつもりだ。それが我々にとっての仕事でもあるし、最良の手段であると思う。

風土病がどこから発生しているのかは、残念ながら今日の時点では不明瞭に終わったが、じき猫又たちが解決するだらう。由々しき事態であることには間違いないが。

「……………」

何だこれ。報告書にしてはえらく日記染みているな。それに意味がよく分からない文章もあったし……………。

まあいいか。俺が知りたいのは此処ではないし、もう少しパラパラ

と捲ってみてみようか。

しばらくページを捲っていたら、名簿が表示されていた。おそらく犠牲者の一覧だろう。

巻末にある索引を確認、名前は……えっと、シ……ああ、やっぱりあった。やっぱり……風土病の犠牲者だったんだ。

ページ数を確認して、俺はそのページを開いた。そこには、彼の事細かな情報が記載されていた。俺とよく似た青年の写真が……映っていた。

>シキ・エヴェレート<

享年18歳。シックザールにて突如発生した風土病に感染、二日後に死亡が確認。

寒村シックザールの長、アルス・エヴェレートの一人息子で、風土病発生時に同村の>ソフィア・ルードリツヒ<と挙式をあげる予定だった。

転生遺伝については別冊を参照。

>ソフィア・ルードリツヒ<

その言葉を見た瞬間、俺はまた索引を開いてページ数を確認した。

この名前には聞き覚えがある。とても懐かしい響きと、悲しい記憶が何処か胸の奥にある。

俺が見たあの景色の中、彼と一緒に事切れていた女性。それが“彼女”なのだろうか。

心臓の鼓動が増していく中、彼女のページを開いた。そこには、先ほどのシキさん同様の情報が記載されていた。

同時に胸が張り裂けそうなほどの胸痛。それが精神的なものであると直ぐに理解した。

……だつてさ、普通はありえないんだぜ。
こんな、アイツと　「彼女」とそっくりな女性を見るなんてさ…
…。

でも、まだだ。まだ分からない。まだ、そうであると確証したわけじゃない。他人の空似かもしれない。

俺は持っていた風土病のファイルをヴェイルさんに返し、持っていた転生書を借りて、パラパラとページを開いていった。

そこには、猫又に関しての事細かな情報が記載された文章と、びっしりと書かれた出生から死までの経歴が記載されていた。

俺は間髪空けず、ソフィアのページを開いた。事細かな情報と一緒に、経歴もきちんと書かれてある。

そして、ふと眼に入った、文末に書かれている「ある一文」を見て俺は絶句した。声をあげることも出来なかった。

思わずファイルを落としそうになったが、それをヴェイルさんがしっかりと受け止めてくれた。その様子を見たスノウも「どうしたの？」と怪訝そうな顔で俺を見てくる。

驚きのあまり声を出せなくなった俺に向けて、ヴェイルさんが口を挟んだ。

「その転生先の女性の名に、君は見覚えがあるのか？」

見覚えがある。

いや、見覚えがある以前の問題だ。覚えが無いなんて、絶対にありえない。

……一体、どういうことだよ、これ。もう、ワケがわからねーよ。どうして……どうして此処でこれを見るんだ。どうして……

「記憶を引き継ぐということは極めて異例だが……パラフィリアと関わったせいだろう。彼の記憶を呼び覚まして、そして 再び、その姿を私に晒して、合間見えたということか」

「？」

「啓太。先ほどの話に戻るが……君はカノンに、国王に話があるところ行って、謁見の間まで歩いてきた。それに間違いは無いな？」

「え、ああ、はい……それが、どうかしましたか？」

「その後、休憩室で休んだのも確かか？」

「えっ……？」

何で、ヴェイルさんがそんなことを知っているんだ？

確かに俺は謁見の間に行く前に、急にめまいがして休憩室で休んだ覚えがある。

……起きたときは、何故だか謁見の間付近にいたけれど。

「……はい、確かに休みました」

「……そうか。それで、君が起きた場所は？」

……ッ！

間違いない。ヴェイルさんは知っている。謁見の間に行くまでの経過を、間違いない知っている。

「……謁見の間付近です」

それを聞いたヴェイルさんは、やはりかと言った調子でため息をついた。

「啓太。疑問に思わなかったか？ 休憩室で寝ていたはずなのに、どうして謁見の間付近にいたのか」

「……はい。最初は疑問に思いました。でも、あれは何かの病気だと思って……」

「病気。それは違うな。……君は一度来ているんだよ、謁見の間に……『藤咲啓太』でなく『シキ・エヴェレート』として、だ」

「えっ……？」

シキとして？

それって……それって、まさか……。

「そう、君の察する通り。彼は君の寝ている間に憑依して、私たちの前に現れた。パラフィリアは本当に危険な世界だ。まさか干渉することで、転生前の、死した者の魂までも呼び起こすとはな……実に感慨深い」

……もう、さっぱりワケがわからねえよ。

知りたいとは思ったけれど、ここまで話が複雑化するなんて思ってもみなかった。

頭を抱えて唸る俺を見て、ヴェイルさんが補足をするかのように言った。

「啓太。前置きが長くなってすまないな。頭が混乱する前に教えて

やろう。輪廻転生遺伝とは何なのかを……」

そう言ってヴェイルさんは語り出した。

その口調は御伽話をする人のような語りで。自然と俺はその声に耳を傾けていた。

輪廻転生遺伝

それは人間界、猫又界で死没した遺伝等を、空間世界　パラフィリアを経て、もう一度構成・構築させていく輪廻転生。それらを総括するパラフィリアは人間界と猫又界の狭間に位置する。引き継がれるものは遺伝子・記憶のみで、魂は空間世界を通じた後、人間、および猫又界で再生され、再び新たな肉体を経て生を受ける。

だが、遺伝子を引き継ぐ裁量は至極微々たるもので。そうした細かな情報が肉体に悪影響を及ぼさないよう細分化され、パラフィリアで厳正な審査を受けた後に二つの世界へ提供される。記憶も普通は開示されず、本来の記憶の奥底に幽閉され、転生先の生物は知らずに生をまっとうすることがほとんどである。ごくまれに人間界で超人的な能力を持つ人間などが生まれてくるが、そのような類は猫又の遺伝子を強く受けた要因がある。逆に、猫又界で生まれた非力な猫又も人間の遺伝形質を受けて弱体化したものと見られている。

一通り話し終えたヴェイルさんは、やれやれと言った感じで、直ぐ近くにあった椅子に腰をかけた。大まか、本当に大まかには理解できた。

けど、まだ腑に落ちないことがある。シキさんの件はパラフィリアの干渉が原因で魂を呼び起こした（おそらく、未だにあの世界にいたのだらう。千春と同じく）のは理解したが、それ以前に、どうしてソフィアさんの転生先が千春なのかってことだ。あの世界で、てつきり俺は千春がサクラに生まれ変わったものだとばかり。

……いや、待てよ。

よく考える藤咲啓太。あの風土病でソフィアさんはシキさんとともに亡くなった。そして、輪廻転生遺伝を経て人間「桜井千春」に転生した。

もし、もしもだ。千春の肉体に、ソフィアさんの 猫又の遺伝子が大量に引き継がれてしまったのなら？

先ほどのヴェイルさんの説明で、猫又の細かな情報（遺伝子）が肉体に悪影響を及ぼさないように細分化されるってことに観点を置く。悪影響を及ぼすほどの大量の遺伝子 そうだ、千春は何故あの時、あんなに短い生涯を終えてしまったのか。何故死ななきゃならない運命になってしまったのか。

それは、猫又の遺伝子を必要以上に受け継いでしまったことに原因があるんじゃないのか？ 現代医学で治せない心臓病というものは、猫又の遺伝子が原因ではないのか？

そこまで考えた俺は、それをヴェイルさんに伝えた。ヴェイルさんは意外そうな表情で俺を見て、言った。

「左様。猫又は人間と違い、肉体を再生させる治癒細胞が存在する。だが、その細胞は爆発的なエネルギーを要するため、強靱な肉体と常人離れた そう、我ら猫又のような種族にしか存在しない。人間などに存在しようものなら……即刻死に至るだろう。その細胞は、身体の中で一番動力を要する……すなわち心臓を拠点に、全身に浸潤させていくのだからな」

……やっぱりか。

猫又にしかない治癒細胞。詳しく聞いてみると、名はハイレンと呼ぶそうだ。遺伝子と一緒に、その細胞が千春に組み込まれていたのだと思う。

おかしいと思っていた。怪我をしても普通の人より早く治っていた彼女を見て。病弱だと思ってたのに、あんな元気に俺と遊ぶ千春を見て。

じゃあ俺は。俺だってシキさんの生まれ変わりだ。それなら俺にだって心臓病になるのではと、そう思ったけれど。おそらくそれは男性女性の差ではないのだろうかと思う。

ただでさえ病弱だった千春と、健常な俺とではワケが違う。心臓がその細胞に取り込まれて、あっという間に着床し、取り囲まれてしまったんだろう。

切除しても、かなりの速度で再生する。そこに心臓が、命の源がある限り、ハイレンは行動をし続ける細胞だとヴェイルさんは言った。

そうして17年の生涯を終えた千春の遺伝子と記憶、そして魂はパラフィリアへと戻っていく。ここでもまた障害が発生すると仮定しよう。

ソフィアさんの遺伝子情報が多いのならば、おそらくそれらが強く具現化されていくことになる。そして今は千春の遺伝子と記憶を、誰かに継がせようとしている。

パラフィリアへと戻ったのならば、その遺伝子と記憶は新たな肉体へ。魂も別の存在へと変わる。

……だが。もし遺伝子情報が、「細分化されず明確に残ったら」どうなる？

そして戻るべき千春の魂が、遺伝情報が何らかのトラブルで「パラフィリアに戻らなかつたら」どうする？

サクラは老猫に魂を憑依させて生きていた。つまり、老猫に千春の魂と、二人分の遺伝子情報を憑依させて生きていたんだ。

記憶喪失は、その時のショックなかもしれない。膨大な遺伝子と記憶を受け継いだら、そりゃあ頭だってパニックになる。

そうして二人の遺伝子を継いで、記憶喪失の猫又　サクラが生まれた。断片的にあった知識を、僅かながら残っていた二人の記憶を

使って彼女は……今まで生きてきたんだ。

トラブルってというのは……おそらく、亀裂や、次元流砂が関係しているのだと思う。それら二つに何かあって。

……え。

待て。ちよつと、待てよ。

サクラが千春の魂を受け継いでいるのなら。あの空間世界で、パラフィリアで千春を見たということは。サクラの肉体は今。あの時の俺と同じ、生死の狭間をパラフィリアでさまよっているってことか？

そこまで考えて俺は、ファイルのスノウに手渡し、全力で駆けた。ヴェイルさんの制止も聞かず俺は書庫から出て、謁見の間を抜け、動かない腕を邪魔に思いつつもサクラの部屋めがけて走った。

あそこで千春と出会った頃から、嫌な胸騒ぎはしていた。まるで千春がサクラのように思えて仕方が無かった。

その予感は的中している。まだ推測の段階にしかないが、おそらく、当たっている。

……馬鹿だ俺は。あの時に千春に言われた言葉が、やっと理解するなんて。

「私からは全ては言えない」……そうだ。言えねえよこんなこと。言えるわけがねえよ。

最後に見た千春とサクラの姿がキーワードだった。重なっていく二人の姿が、全てを物語っていたんだ。

急げ、全てを失う前に。

これ以上彼女を。サクラを失ってなるものかよ

！！

サクラの部屋に來ると、彼女は未だに眠っていた。眠っている？ 違う、眠っていたとしても、「そこに彼女の魂はあるか？」
肉体は生きている。けど、その中身は無い。

「サクラ！」

呼びかけてみる。けど反応はなし。揺さぶって、もう一度、声を張り上げて叫んだ。

「俺の声が届いているのなら、眼を覚ませサクラ！ これ以上、これ以上眠っちゃ駄目だ！」

だけれど、反応はやはりない。

もう、届かないのか。彼女を呼ぶことなんて出来ないのだろうか。
いや。

「サクラッ……！」

届かないんじゃない。“届かせる”んだ。

たとえ次元流砂の向こう側でも。狭間にある世界へ。

この思いが本物ならば。彼女を想う気持ちが確かならば。

世界を越えて届くはずだ。この声が、この思いが。

パラフィリアにいる彼女に、きっと届くはずなんだ
！！

「サクラアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ふきゃあああああああああああっ！？」

……え？

ふきゃあああ、て。何？ ふきゃあああって。

目の前に、おかしいな光景が広がった。

さっきまで寝ていた人物が飛び上がって、何か知らんけど俺に向けてベッド上で拳法の構えをしながら威嚇している。

涙目でこつちを睨みつけてた。フットワークしてるのがシユールだった。

……。

……。

……。

……あれ？

おつかしーな。俺、何か間違えたか？ それとも、単に勘違いした？

「びっびびびっくりしました超びっくりしました！ 誰ですか耳元で私を呼ぶのは！ せつかくの気持ちのよい安眠を妨げる無粋な人は誰ですか全く！ 失礼にもほどがありますよ！ 温厚な私でもキレますよ！ 世間じゃ『キレたハサミ』で通ってるんですからね
私は！」

涙目涙声でにやーにやー威嚇する彼女　　サクラ。その彼女が俺のことを啓太だと認識するのに約数秒。

緊張の糸が切れたかのように「……ふえ？　あ、あれ、啓太さん……？」と声のトーンを落として聞いてきた。

そんな彼女に向けて俺は　とてつもなく疲れた顔で、けれど精一杯の笑顔で言っちゃった。

「……おはよう、サクラ」

その瞬間、彼女が赤を見た鬪牛並の勢いで俺に抱きついてきた。一応支えることは出来たが……。なんと奥さん。折れた腕が更にミキリって言ったんですよ……言っただけじゃなくて痛ったあああああそして逝ったあああああああつ！！？

「啓太さああああああんっ！！ 啓太さん啓太さん啓太さああああああんっ！！ うわああああああああんっ！！！！」

「あががが……し、死ぬッ……死ぬッ……サクラ、背中……圧迫して……死ぬっ……！！」

ぎゅうううつと。サクラはまるで悪魔超人さながらの拘縮力で背中を圧迫してくる。それに泡吹いて死にそうな俺。この悪行に正義超人も真ッ青だ。重傷人だということ理解してくださいこのアホ又。

とまあ、そんな俺の気苦労もまるで無視するかのように泣き喚くサクラ。ああもう、嬉しいっっちゃ嬉しいけど、もう少し静かに。

「うわああああああんっ！ ふええええええええええん！ ひぎいいいいいいい！ はああああどっこいしょおおお おおおー！！」

……おい、ちょっと待てやテメエ。真面目に泣いてねーだろ。真面目に俺のこと心配してねーだろ。

あまりにふざけたこと言ったらボコるぞコラ。啓太チョップで失神させるぞ。もう一回パラフィリアに送るぞコラ。マジで昇天させたるぞ。

そうして抱きしめられたまま幾数分。ひっくひっくと泣き続けるサ

クラの頭を撫でながら、言ってやった。

「心配かけてごめんな、サクラ」

「ひぐつ……じんばい、じました……！」

「俺も、死ぬかと思ったよ。死んだら、どうしようかと思った」

「げいださんがじぬなら、わだじもじぬうううううう……！」

あ、やべえ。また刺激させてしまった。よしよしと撫でてやっても、こりゃ泣き止みそうにないな。

……でも、これだけは伝えたかった、言いたかったことがある。

「それでな。夢を見たんだ。どこか別の世界で、千春と出会う夢」

千春、という言葉に反応して、サクラが嗚咽混じりにこちらを見上げてきた。

鼻水がだらしない。ポケットからティッシュ出して、ちーん！と鼻をかんでやる。

「そしたらさ。最後にお前とも出会った。……覚えてないか。俺は、お前と違う世界で出会ったんだ」

「……………」

彼女の嗚咽が止まった。鼻をすする音だけがやたらと聞こえてくるだけで、彼女は何も言おうとしない。

そんなサクラに向けて、俺は優しく、ゆっくり言い放った。

「思い出したんだろう、サクラ。自分のこと　二人のこと」

それでも彼女は、何も言おうとはしなかった。

無理に話さなくていいよ。そう言おうとした矢先、サクラが口を開いた。おそろおそろ、小さい声で。

「悲しかったです。ただ……悲しかったです」

それを口にする彼女の顔は暗い。

さっきまで泣いていたのが嘘に思えてくるくらいの声のトーンで、サクラは語り始める。

「頭の中でいろんなものが見えて、ごちゃごちゃになって、いろんなものが見えてきたその中心で……私とよく似た猫又さんがいて、千春さんがいて、その二人が私に『おい』って手を振ってくれるんです。笑顔で、こちらに手を振ってくれるんです。きっと二人なら私のことを知っている。そう思って……私も二人に手を振ろうとしました。振り返して、いろんなことを聞いたんです。でも……二人は私を呼びかけるだけで、返事を返してくれません。どれだけ声を出しても、私の声は届かないんです」

ぎゅっ、と手を握りこぶしにして彼女は話を続けた。

「いっぱい声を出して、叫びながら、私は手を振りました。喉がつぶれるくらい声を張り上げて、『教えてください！』と叫びました。でも……二人はやっぱり手を振るだけでした。悲しくなりました。苦しくなりました。涙が溢れました。暗闇の中で突っ伏して、わんわん泣きました。そんな時　眼に映ったんです。二人の姿が、いつの間にか、私の直ぐ近くにまであったことに」

「……………」

「私は自分のことを教えてもらうことに必死で、歩もうとしていなかったんです。二人は呼びかけながら、私に分からないくらいの歩幅で必死で歩んできていたんです。それなのに私は、他人に答えだけを求めて、自らの足で真実に向かい、それを知ろうとしていなかったんです……………」

自分のことを知りたいが故に躍起になって。

知ることだけを求め続け、そしてそれが叶わないと知って絶望して。そうして彼女は知った。歩み続ける努力をしていなかったことに。いつの間にか、他力本願になっていたことに。

だけど、それから自分を知った。こんな自分がいるということを認めた。

「そんな自分に恥ずかしくなって、私は何度も二人に謝りました。

謝って謝って……………そうしたら、二人が言ったんです。『ごめんね』

『遅くなって』と」

ふー、と。一端一息ついて彼女は再び話を始めた。

「それから 私は二人に連れられて、様々なことを覗いてきました。あの猫又さん……………ソフィアさんと、シキさんのこと。千春さんと、啓太さんのこと。全部、全部、知らなかったことを全部……………この眼で見えてきました」

ぽふつと。彼女の頭が俺の胸に埋まっっていく。

震えた調子の声で、サクラは続けた。

「みんな……………みんなっ……………苦しかった、ですよね……………っ!」

「……ああ、苦しかったと思う。俺も、辛かった。すごく……辛かった」

「悲しかった、ですよ、寂しかったですよ……！」

「……うん、悲しかった。寂しかった」

「あんなに幸せだったのに……大好きな人とずっと一緒にいられると、そう思っていたのに……っ！ どうして……どうしてこんなことが……！」

眼に浮かぶ涙をそっと拭いても。

彼女からあふれ出す涙はおさまることを知らない。

その悲しみが無限大であるように。

彼女の悲しみもまた、その眼で見続けた分だけ、たくさんあふれ出ていった。

「みんな、みんな……っ」

その悲しみがまるで自分のものであるかのように。

サクラはこぼれる涙を何度も何度も拭いながら

「本当は幸せになれるはずだったのに……！」

俺にしがみついたまま、感情を押し殺すかのように、静かにむせび泣き続けた。

幸福と不幸は、表裏一体なのかもしれない。誰かが幸せであると、他の誰かが不幸になってしまうのと同じで。

小さな彼女の身体をぎゅっと抱きしめて。俺は静かに語った。

「みんな……幸せだったんだよ」

幸せ。そう、幸せだったんだ。

毎日が楽しいと思えるくらい、充実した日常。それでいて、飽きることの無い日々。

愛する人とともに生きてきた世界で……確かにみんな、幸せだった。

「でもさ。そこで悲しんでちゃ駄目なんだ。立ち止まってたら駄目なんだ。……どうして、自分の過去をお前に見せたか分かるか？

どうして見つめなおしたくない悲しい過去をお前に見せたのか、分かるか？」

ふーっと。さっきのサクラと同じくらい息を吐いて。それから続けた。

俺の思いのたけを、あふれ出した感情を、ただひたすらに吐いていた。

「お前に幸せになっただけからだよ。これだけの経験をした分だけ、せめてお前だけは幸せになっただけ。二人は自分の過去を、悲しい出来事を見せたんだ。二人が経験した悲しい運命でない、幸せになれるような運命を、二人は望んでいるんだよ。……お前はソフィアさんと千春の思いを受け継いでいるんだ。受け継いでいるから……最後の幸せを、その手に掴んで貰いたかったんだ」

「……はい」

ぐずぐずと泣くサクラに向けて言い、頬を優しく撫でた。柔らかなその感触は、その人が生きていることを実感させてくれる。

「だからな……もう悲しむな。お前はもう充分に悲しんだ。これからは……前を向いて、笑顔で、歩み続けていこう。お前のそばには、俺がいる。他の誰でもない俺が、ずっとお前と一緒に歩み続けていく。これ以上お前を寂しからせたり、悲しませたり、苦しませたりはしないよ。……一緒に、お前とともに……生きていくんだ」

創り上げていくんだ、これからを。

みんなが残していった思いを忘れぬよう、二人で。

今、これからを創り上げていくんだ。

ぐしぐしと、彼女が自分の袖で涙をぬぐう。

そこから見えた表情は　とても愛らしく、裏表の無い笑顔だった。

……なあ、千春。

俺は、この幸せを守り続けていくよ。

お前とソフィアさん、そしてシキさんが残した、最後の幸せを。

しっかり。この手で守り続けていくよ。

今まで手から零れ落ちてしまうようなものだったけれど。

今度は離さない。みんなから受け継いだ全てを……この胸にしっかりと宿して。

夜が明けていく。また陽が昇れば暗いこの世界も別れを告げ、新しき光の世界が芽吹き出す。

そして
ていた。

この世界、シェアリスとの別れも、刻一刻と近づいてき

猫又のサクラ 1

季節は陽春。時は明朝。つい先月までは近来にないほどの寒波が襲い掛かるほどの季節ではあったけれど、降り積もる小雪の如く、それらはまるで解けて消え往くかのように過ぎていく。春の草花も新芽が出始め、次なる生が静かに芽吹いていく。白に染まった大地を緑に彩っていく様子は新しい季節の変わり目を意味していた。

カーテン越しの窓から垣間見える緑に染まった世界を眺め、俺藤咲啓太は荷物を纏め、帰り支度をせつせと整えていく。……まあ、こちらに持ってきたものはそんなに多くない。ほとんどがもらい物だったりする。それだけでも結構な量になったな。まだまだ増えそうだから取捨選択して決めていこう。

ベッドに置いていた荷物を降ろし、横に立てかけてから、少ししわの目立つシーツを外して洗濯籠へ。こうやって定期的に洗ったり畳んだりして整えておかないと、見栄えが悪いし寝るときもちよっと不快になるし。

……俺、結構潔癖症なのかなあ。綺麗にするのにはこしたことはないんだけど。

そんな感じでうむむと考え込んでいたら、ドーン！と笑わせえるすなんたらを彷彿とさせるようなドアの音が響いた。

その音が発生した場所には……いつでも準備OKと言わんばかりの春爛漫カジュアルファッション（肩にはトートバッグ）で出迎えに来た猫又　サクラが居た。

ドアは静かに開けなさい。近所の人に迷惑ですよ。

「おっはよーございます啓太さん！……あれ、何してるんですか？」

「ん？ いやな。シーツのしわが気になるからベッドメイキングしてたんだ。それくらいはしないとな」

やっているホテルマンさんの苦勞が分かる。結構大変なんだぞコレ。

「ベツ、ベベベベベツドでメイキング!? 誰と!? ナニを!?
? こ、こんな朝っぱらからどんな嗜好しているんですか啓太さん
!」

「そついうお前もこんな朝っぱらからどんな思考しているんですか
相変わらずこのアホ又は記憶が戻るうが戻らまいが脳内ピンク色の
ようです。」

結局記憶が戻って何が変わったのか……まあ何も変わらないことに
こしたことは無いんだけど、もう少しおしとやかさというか、変
態レベルを下げてほしいもんなんだがなあ。

「ちよつと聞いてるんですか啓太さん! この愛妻を差し置いて何
処の馬の骨もとい猫の骨とフィーバーナイトしたんですか! 何処
のボルトにドライバーを入れたんですか!」

「あー、はいはい。味噌田楽は美味しいよね。僕もそつ思うよ」

人の袖を乱暴に引っ張りながらぎゃーぎゃー言うアホ又にしれつと
返事をしながら残っていたシーツを片付けていく。

あの事故から数ヶ月。ヴェイルさんに輪廻転生遺伝のことを教
えてもらってからもうこんなに時間が過ぎた。

ヴェイルさんには失礼なことをしてしまったので、後ほど深く謝っ

ておいたが、本人は全く気にしていない様子だったのでよかった。それからもう一度詳しく話を聞いてみると、何とヴェイルさんとシキさんは親友同士だったらしい。

数十年前……詳しくは25年前らしいが、当時シックザールに住んでいた、寒村の一人息子のシキさんは、若かりし頃のヴェイルさんと仲がよく、二人でしょっちゅう遊んでいたらしい。

それからシキさんの結婚が決まった当日、ヴェイルさんは急な都合が出来て挙式に行けなくなったと彼に告げた。残念そうなシキさんだったけれど、その村で出会った女性　住み込みでシキさんの家で働いていたソフィアさんとの結婚が決まって、とても嬉しそうな様子だった。

あの病が村全体を覆いつくすまでは。

訃報がヴェイルさんに届いたのは数日後だった。悔しさと無念を押し殺して、友人の死を静かに受け入れたと聞いた。

それから風土病もカノンさんのご両親が作り上げたワクチンを頼りに、一応は終止符を打つことになった。だが、根源的な理由である「どこからこんな病が発生したのか」という根拠だけは未だに暴かれていない。暴いていたとしても、その理由は今は無きカノンさんの両親だけが知っている。

それから二十五年が過ぎた今日。シキさんは俺の身体を借りてこの世界へ再び姿を見せた。あれから二十五年の歳月が過ぎたというのに、その魂は未だにパラフィリアにあっただらしい。輪廻転生を行うまでの期間が長かったのか、もしくはそれ以外の理由があったのか。当人以外は、誰も知らない。分からない。

ちなみに俺の身体を借りたシキさんは、ヴェイルさんとこれまでの出来事を互いに語り合ったと聞く。

自分たちが知らないこと、空白の二十五年間を、水入らずで話し合っていたらしい。それから数十分程度語り合い、ひとしきり話し終

えた後でシキさんはヴェイルさんと別れを告げ、謁見の間を出た。おそらくそこでその魂をパラフィリアへ返していったんだろう。謁見の間付近で寝ていたのはそのせいだ。

……だからあの時、セツちゃんはあんな顔をしていたのか。ようやく合点がいった。あれほど不審な目で見られたのも納得がいく。彼女は話の本筋すら理解をしていなかった。ただろっし、ワケが分からずに混乱していたんだと思う。

そんなこんなで。いきなり衝撃の新事実を突きつけられた俺だったけれど、ぶつちやけて言えば、悪いけどもうあんまり興味はなかったりする。

だって、シキさんはシキさんだし、俺は俺だ。それに何か違いはあるだろうか。それを知って何か得ることがあっただろうか。

ヴェイルさんの言っていたことが正解だった。こんなことを知って何になる？ 知ったところで、俺に何が出来るだろうか。

……結局のところ、何も出来ない。自分であれこれ考えてみても、特にこれといって打開策もなければ、それを自分自身の糧にすることも出来なかった。

けれどその分、確かなものは生まれた。

過去を見据え、振り返り、その人たちが積み上げてきた『世界』を知ることで。

彼女を　　サクラを思う気持ちだけは、前以上に強くなった。

俺たちは……いろんな人の命を受け継いで生きているんだ。

それならば。その人たちに笑われないよう、精一杯今を生きる努力をしなくては。

悲しい過去があった。眼を背けたくなるような、辛い出来事もたくさんあった。

けど、眼を背けなかった。現実を直視した。そうすることで……ま

た新たな自分を知ることが出来た。

俺たちは輪廻転生というものを外せば、ただの他人だ。見たこともなければ話をしたこともない、ただの他人同士だ。

けれど、その彼らから受け継いだものだけは、ちゃんとこの胸に秘めている。忘れてはいけないう大切な思いを。心に宿している。

自分で言うのもどうかと思うが、少なくとも俺は……そう思っている。

……さて、長々と考え事をしながらもベッドメイキングは終了。見ると袖を引つ張ってたサクラが、なんかあうあう言いながらこっちを見つめてた。

……あ、涙目になってる。ちょっと放置しすぎたかな。

「あうあうあう。けいたさーん……無視しないでくださいいいい」

「悪い悪い。ちょっと考え事をしてな……それより、お前は準備できたのか？ やけにラフな格好だけだ」

「出来ました！ 荷物は全部部屋に置いてきます！ 必要なものはバッグの中に入れていきますし、いつでも一発できますよ！」

「出発な。とんでもないことを平然とした顔で言っんじゃありません」

やれやれ いつの間にか俺の口癖になってた気がするその言葉を吐いて、いつものようにため息をつく。

こうやって彼女と嗜むのも、いつからだろう。もう三年目を迎えるのではないだろうか。

時が流れるのもあつという間だな。もうガラスの10代も終わって、

成人期真っ只中になっちゃったし。

まあ、まだまだ人生は長い。

これからしつかりと 楽しんでいかないとな！

「よっし！ それじゃあ準備も出来たし、行くぞサクラ！ みんなでこの世界の……最後の思い出を残しに行くぞ！」

「おー！ 最後の思い出作りに向けて、れっつら・ごーです！」

大きく振り上げた彼女の向かいの手を、離さないようにしつかりと握りながら、しばらく来ないであろう自分の部屋を出て、みんながいる大広間へと向かった。

作ろう。最後の思い出を。猫又たちと一緒に。

「……んで。出発して早々。俺たちは一体何処に向かっているんだ？ また飛行機に乗るって事は……南の島か？ っていうかもう飛行機乗りたくないんですけど私……」

「はいはい、若いもんがうだうだ言わないの。……んー、まあ南の島で正解ね。それも最南端」

「最南端ってことは……レイシャンか？ にしてもなんで、そんなところに？」

「決まってんでしょ。思い出作りにはまず一番初めに行ったところへ遊びに行かないと！ 何か懐かしさも芽生えてじーんと来るじゃん？ その観照を体験できたらいいと私は思うわけよ」

「じーんと来るかなあ……俺は別に何処へでもいいんだけどさ」

「あら、何処でもいいの？　なら今すぐ窓開けて啓太だけ外に放り投げてもいいけど？　この高さだから水に飛び込むときは相当痛いと思うわよ」

「おいばかやめろ。早くもこの話は終了ですね」

ただでさえ高所恐怖症なのに、こんな高いところから紐無しジャンプなんぞしたら死ぬわ。漏らすわ。真顔でクールに漏らすぞ。

「前はバカンスを楽しんだけど、今回は南の島でちよつとしたイベントをしようかなと思ってさ。ふふ、みんな驚くわよ」

向かいの席から、不敵な笑みをこちらに向けてくるスノウ。

ちよつとしたイベントとは何だろうか。……まあ、コイツのことだから、前回の薬同様、またろくでもねーことでも企んでいるんだろうか。

そいつぁ期待して待ってるよ。とだけ言って、俺は隣にいた、やけに静かに座っているサクラを見た。真っ青だった。あ、こら酔ってるな。飛行機酔いしてるわコイツ。

「おい、大丈夫かサクラ。顔が真っ青だぞ」

「ふ、ふへへ啓太さん……？　私の顔がマサ　ですって？　いつから私はおにぎり頭の少年になったのでしょうか……？」

「いやそつちじゃなくて。マジでお前大丈夫かよ？　……ほら、薬があるから、飲んどけ」

「だ、大丈夫ですよこれくら　ぐふっ!?　ま、まずい……濁り薄汚れた世界が孕み、我から蠢くかのように芽吹こうとしておる……ふふ、ここいらが頃合か。よかるう、ここが我のサルガッソー(墓場)と化す運命ならば、その結末を甘んじて受け入れようぞ……出るがいい!　そして後悔せよ!　混沌と化した奈落のユニバアアアアアアアアッス!!」

「いやそれユニバースじゃなくてただのリバースだから!　かつこよく言つたつもりでも、それ大宇宙でも世界でも何でもなくただの吐瀉物だから　って人のバッグに顔突っ込んでぶちまけようとしてんじゃねえええええええッ!!」

とまあ、そんな感じで騒がしい飛行機の旅から始まる、最後の観光旅行。

はなから波乱に満ちた出来事が連発しているが……まあ、これくらいいしないと楽しくはならないのかな。

大絶叫の飛行機の中。窓の外を覗けば、レイシヤンの島々が小さく見えてきたところだった。

そんなわけで。久しぶりにやって参りました常夏の島　レイシヤン。

春爛漫かと思いきや、やはりこの島は常夏と言わんばかりに暑い。それでいて普通に水着とか着て海水浴とかできるレベルだし。

ビーチに降りても、砂浜がめっちゃ暑い。はだしじゃ焼けちまうな。ビーチサンダルを借りたからいいけれど、直射日光がきついなあ……。

「あー……だつりい……マジ最悪だわー……くっそ身体しんどいわあ……」

そしてこの乙女とは言いがたい台詞を吐きやがる猫又ことサクラちゃん、飛行機から降りて尚も不調なご様子。

そんな彼女の背中をぽんぽんと叩く彼女　スノウはやけにご機嫌な様子ではしゃいでいた。はて、一体何がそんなに楽しいのだろうか。

「ほらほら！　いつまでもそんな暗い顔しないの！　その気持ち悪さも吹き飛ぶくらいのサプライズを用意してるからさ！」

「サプライズ？　スキンが似合う、素敵なおじ様がどうかしましたか？」

「サクラ。それサプライズじゃなくサンプラザや」

思っではいたけど、やはり突っ込まずにはいらなかった。本能だろうか。

いかな。手にツッコミ職を持つと後先大変だぞ。この職業を休みなく続けると、ツッコミ死という過労死があつてだな……。

「まあ、サプライズでもサンライズでもいいから！　まずは水着に着替えましょうよ……って、くおらセツナ！　アンタまたこっそり逃げようとしてんじゃねーわよ！」

そろりそろりと。忍び足でその場から逃げようとしていた黒髪の猫又ことセツちゃんが、スノウの叱咤を聞いて肩をびくんと跳ね上げた。

こつちにぎこちない笑顔（凄い引きつつてる）を見せて、「あ、あははは……」といいながら、深々と俺らに頭を下げたと思つたら、今度はあさつての方向へ猛烈ダツシユで逃げ出した。だが、それを許そうとしないスノウは、口笛をぴーっと吹き、何処からともなく現れた黒服ガードマンたちを特殊召喚。あつという間に逃げ出したセツちゃんを捕獲。束縛。その姿はまるで某RPGの勇者から逃げ出すはぐれメルのよう。彼女の強力ちゆうりきを持ってしても、大量の鍛えた男どもには敵わないだろう。

「ぎにゃああああ〜！」と叫びながら黒服たちに投げ飛ばされながら受け渡され、彼女はあつという間にスノウの元へ連れていかれた。その様子に満足げなスノウ。……あ、なんかDSつ気な顔してる。普段はMなくせに。

「ふっふっふーん セツナア、あんた姫である私の命令に背いて逃げ出すなんて、いい度胸してんじゃない？ そんなに際どくてエツちな水着でも着たかったのかしら？ ん？ そーいやアンタ用にたくさん水着は用意してるんだけどねえ」 紐とかスケスケとか

その言葉を聞いてとたんに真っ青になるセツちゃん。スケスケ水着とかけしからんな。実にエロティックでけしからん。

そして出来ることなら、是非ともそのお姿を拝見させて頂きたく存じ上げ とか考えてたら、その思考を読まれたのか、サクラがヤンキーばりのガンを俺に飛ばして睨みつけてた。

あまりの怖さに思わず失禁しかけた。なんでコイツ俺の思考読めるんだ。エスパーか。それとも表情に出たか……まあ、出てたんだろ。俺顔に出やすいし、多分鼻の下伸びてたんだろ。うん。

「……さーて。そんじゃいつもの小屋でお着替えタイムよセツナ！ あ、ちなみに今度逃げたらブラジルの超エツちな紐水着着せるか

らね。マジで」

「あ、あうあうあ〜！ け、啓太どのお〜！ お助けくだされ〜！」
ごめんなセツちゃん。俺にはどうすることも出来ないよ。俺だつて隣にいる彼女にガン飛ばされて動けないんだ。蛇に睨まれた蛙状態なんだ。恨むなら自分の運命を恨んでくれ。

そして過ぎる事数分後。そこにはご満悦な表情でこちらに歩み寄ってくる、蒼ビキニ姿のスノウと、涙目でえぐえぐ言ってる黒のスク水姿のセツちゃんがそこにいた。セツちゃんの胸元にはご恒例と言わんばかりか「せつな」と平仮名で書かれてあった。オーダーメイドか。金持ちはほんと無駄なもんにオーダーメイドさせやがるな。まあ、そういうフェチの人にはたまらん仕様なのかもしれないが。……それにしてもデカイ。オーダーメイドだというのに、はちきれんばかりのサイズですな。……あ、いや、何がとかは省略して。もちろんビキニ姿のスノウも、依然見た白ビキニと同様に、清楚で可愛らしい雰囲気を出していた。うん、可憐だ。中は腹黒いけど。

「あ、ちなみに啓太。このスク水とビキニはミスリアが作ったのよ。彼女、やっぱり手先だけはいいいから」

「……むー。アシユリー、それは聞き捨てならないよ。手先だけいってどういうこと〜？」

ひょっこりと。何処からともなく現れたミスリアが、スノウの肩に首を乗せて唸った。重いから離れなさいと文句を言うスノウに対して、ミスリアはややご機嫌斜めに渋っている。

ほう、この水着はミスリアが作ったのか。スク水のセンスはともかくいい腕だな。将来はファッションデザイナーになれるぞ。

と、そんな感じでミスリアにありつただけの賞賛を浴びせてやったら、彼女は珍しく頬を染めて「えへへ……ありがとう」と照れた様子で笑った。元アインツェルの一人娘はファツションデザイナーか。あのお城、職人さんだらけの城になりそうだな。

そんな感じでのほほんとしてたら、何やらセツちゃんがその場で座り込んで、もじもじとし出した。

何だ、廁か？と女性に対して無礼極まりない発言をする一歩手前で、彼女は恥ずかしそうに震えながら、俺にむけてぼつりと言った。

「……………う、うう。こんな格好恥ずかしいでござるよお……………け、啓太殿。タオルか何か、身体を隠すようなもの、もしくは羽織るものなどはもってはござらぬか……………？」

もじもじとしゃがんだまま、上目遣いをしたままずっと身体をこちらに近づけてくる。その頬は少し紅潮していた。

……………いやまあ、そのしゃがんだままのポージングといい、仕草といい、水着といい、無意識に寄せているであろう谷間といい……………全てがけしからなかったので、俺は思わず。

「…………………………」

テイロリン

「む、無言で写メを取っちゃ駄目でござるよ啓太殿！」

おっといけねえ。俺ってば無意識に写メ撮ってたぜ。こりゃうっかりしてた。

うん、『無意識』って怖いね。無意識って。無意識なら仕方ないな、うん。不可抗力だし。

「あー！ 啓太さんいいなー。今のアングルのセツナさん凄く可愛かったですしー。後で私にも送ってくださいー！」

「お、いいぞ。お前まだガラゲーだから、後で編集して送っとくな」

「やたー」

「『やたー』じゃないでござるよおおー！ 消してー！ そんな画像消してくださいでござるうー！」

「……みー。レンくん、今度は誰を埋めちゃう？」

「にい。今度はカイお兄ちゃんを砂に埋めるつもりなのです」

「……あ、あはははー。二人とも、ちょっと砂を盛りすぎじゃないかな？ 私の力でも、で、出られないんだけど……」

「カノンさんはここで待っていてください。カイお兄ちゃんを呼んでくるです」

「え、いや、あの、ちょっとレンくんー！ そろそろ砂から出たいんだけどー!？」

「みい。お兄ちゃんはカノンさんの三倍埋めてあげるね」

「……え？ ミーナ。それってどういうこと？ 僕もここに埋め立て予定なの？」

「……みー」

「笑顔が怖いよミナー！」

それから俺たちは、つかの間のバカンスをゆっくりと堪能した。水着を用意していなかったのだが、スノウはそれも予測して事前に準備をしてくれていたらしい。相変わらず変なところで用意周到な奴だ。てまあ、そんなわけでバカンスを楽しみつつサクラにサンオイル塗ったり、スノウにサンオイル塗ったり、セツちゃんに塗ろうとしたら真っ赤になって逃げられて、仕方なくその辺に転んでたカイさんにサンオイル塗ったり　ってよくよく考えたら俺サンオイルしか塗ってないじゃん！　一体何しに来てんだよ此処に！　しかもなんでカイさんに塗ってたんだ！

そんな独り言を遠い海に向かって叫んでいると、キンキンに冷えたジュースを片手に持ったスノウ（それを首元に押し付けてきやがった。故に飛び上がった）が俺の隣にちょこんと座ってきた。その顔はえらく上機嫌で。悪巧みをしようなんていう素振りなんて一切見せ付けないほどの眩しい笑顔だった。どうしたんだるこの子。なんか良いことあったのかな。

「どうしたスノウ。今日はやけに上機嫌じゃないか」

「そお？　……まあ、確かに機嫌がいいか悪いかで言ったら良い方なのかもね。もうすぐ“アレ”が来るし」

「……アレ？　アレって何だよ」

「まーまー。それは見てからののお楽しみ！ それじゃあ、みんなをこっちに呼んできましょー！」

「おう、そりゃいいけど……呼んで何をするんだ？」

「今からみんなで向かうのよ。レーセン岩に」

レーセン岩？

えっと、あそこには何があったっけ……。

確か俺、あそこで以前、命の危険を感じまくってたような気がしたんだけど……なんだっけ。

何かが居た気がするんだけどなあ。

「ほらほら、ぼーっとしてないで呼んできて！」

と。スノウに背中を押しして促されつつ、その辺で遊んでいるみんなを呼んでくることにした。

……あ、何かみんなでビーチバレーしてる。しかし若干二名のボールのようでボールでない何かが見えんぞい揺れてたので、俺はあえて直視せず明後日の方を向いてみんなに呼びかけた。

……いやね、あれを直視するのは無理です。俺も男ですから。

そんなこんなで、みんなを集めてレーセン岩へ。しかし相変わらず此処は岩が多くて歩きにくい。転びそうになるミイちゃんやレノくんの手をしっかりと握って（何かミスリアに変な眼で見られたけど）岩数の少ない、海と隣接した砂地まで歩いて小休止。どこまで歩く

んだよ。とスノウに聞こうとしたが、奴さん、何やらいそいそと忙しなく辺りを見回している。何かを落としたのだろうか。

「どうしたスノウ。落し物か？」

「あ、ううん。そうじゃなくて、そろそろ来ると思っただけど……まだかな〜って思ってたさ」

「……来る？ そっぴやさつきも言ってたな。何が来るんだ？」

「それは来てからのお楽しみ おっ」

何かに気づいたように、スノウが声を上げた。彼女の視線は遠い海の方へ向いている。そこから何かを見つけたのだろうか。

「きたきたきたあ〜！」とはしゃぐ彼女の瞳は子供のように輝いていた。

一体何が来たんだよ、キタキタ親父か？ と不審そうに俺は海の方をじっくりと眺めて　そして驚愕した。

「お、おいスノウ……あれって、もしかして……」

「ほんっと、交渉しておいて正解だったわ〜　まさかこんなイベントが実行できるなんて！」

両手を胸の前で組んで、らんらんと大はしゃぎするスノウ　いや、アホ又が一匹。

他のみんなも海の方こうに見える“それら”に気づいて、目玉が飛び出るくらいの驚きを表情に出していた。

「ちびぢぢあ、と押し寄せてくる津波。いや、あれは津波なんかじゃない。津波の中で何かが動いているんだ。真っ赤で、大きな物体

が。

ああ、思い出した。俺はこのレーセン岩で、一生に一度もないだろう奇妙な体験をしたんだ。それもデッド・オア・アライブ並の恐怖体験をこの身で経験したんだ。

今まで相当なハプニングがあったから、すっかり忘れていた。けど、よく考えてみりゃあ、これもこれで結構なハプニングだったんだよな　　って。

「なんであの時のオオダコが出てくんだよおおおおおおおおおお！？」

しかも、その数は一匹でなく三匹と見た。中央にいるオオダコは両端にいるオオダコたちより一回り小さい。おそらく子供だろう。いや子供でも異常なほどビッグサイズなんだけど。

そのオオダコ親子はこちらに近づいてくると同時にスピードを緩め、こちらにまで被害をくうであろう津波の規模を最小限に留めながら、その身を俺たちに近づけてくる。

うわわわ、何だ。あの時の報復か！？

子供を苛めたから今度は親が出てきやがったのか！？

もう言葉の意味どおりのモンスター・ペアレンツじゃねーかコラ！勝てるわけねーだろコレ！　ウルト　マン呼んで来いよ！　人類じゃ勝てないからあんなの！

と、そんな何処に突っ込んだらいいのかわからない欲求を押し殺しつつ、とりあえず隣に居たスノウに突っ込みをぶつけていたら、俺はふと『とあること』に気づいた。

何やらオオダコたち、頭に奇妙なものを置いているのだが……なんだあれ。帽子みたいだけど。触手に大量の紐をつけて頭を固定しているんだが……何の意味があるんだありゃ。

そんな感じで若干大慌てしつつ冷静にそれらを分析してたら、とうとうオオダコ親子たちが俺たちのいる砂場まで到着。どこから取り出したか分からない短剣と真剣を手に構えるセツちゃんとかいさんだったけど、スノウがそんな二人を手で制止し、半ば無理やり武器を収めさせた。

一体コイツ何を考えてるんだよ……と、呆れるような眼で見ているら、俺の元へ子ダコがずるずると近づいてきた。

な、なんだ！？ あの時のリベンジか！？ 親が見ている中で俺とタイムンはるうってか！？

よかるう、ならば戦争だ。今度こそ料理してやる。海の藻屑もとい海のモズクを使用した海鮮料理を貴様で作ってやる。

とまあ、そんな感じで猫のように威嚇してただけど、どうやら向こうは俺とタイムンはるような（ていうかオオダコとタイムンはるうとする俺が大馬鹿なんだと思うけど）気は全くなく、つぶらな瞳でこつちをじっくりと見つめた後、触手を使って砂浜に何か文字を書き始めた。その砂浜には、こんな文字が書かれてあった。

『イタズラしてごめんなさい』

……なんつーか、呆気にとられた。その文字を見て、久々に頭がポカン状態になった。

そもそも何でダコが文字書けるんだ。おかしくね？ 絶対誰か教えただろ、それか相当頭の良いダコだろこいつら。

あまりの衝撃に脱力して声を出せない俺。そんな俺めがけて、スノウがぱしっと人の頭を叩いた。

「なに呆けてんよ啓太。この子ダコはあの時のことを謝ってんの

よ？ 何か言っただげたら？」

「え、あ、うん……い、いや全然キニシテナイヨ？ お、俺も苛めちやってゴメンネ。アツハツハー」

手を頭に当てて苦さ全開カタコト全開の大笑い。

いやだって、言っただげたらとか言われてもですね。きっと言葉なんて通じるわけが。

「……」

そんな俺の言葉を聞いて、何やら触手をひらひらと動かして嬉しそうな子ダコ。その子供の両隣で親ダコたちもまるで自分のことのように嬉しそうにしていた。

……ああ、はいそうですね。言葉って通じるのですね。世界が一つになった瞬間ですね、ハハハッ。

てかさ、俺タコと話なんて初めての経験だわ。全人類でも俺だけじゃね？ タコと話をする人間って。

……っーか、何コレ。何なのさコレ。

タコ萌え？ もしくはタコデレ？ 斬新すぎるし人類には早すぎるんだけど。

もうアレなのか。現実にとらわれちゃ駄目なのか？ この世界では現実にとらわれては駄目なのですか？

僕もうゲシュタルト崩壊しそうなんだけれど！ こんな現実嫌なんだけれど！ 分かりたくないから嘘だと言ってよバーニイ！

「わあー！ 速いはやーい 風が気持ちいいですー！」

「そうね。啓太みたいに早いわね」

「おいイ？ 俺の何が早いって？ 返答次第によっては俺の怒りが有頂天になるのだが？」

「……まさか、人生でこのような経験をするとは……感慨深いでござるな」

「……ミイ、何だか船に乗ってるみたいだね」

「わわわわ！ ミイちゃんそんなに出たら危ないよ！ 落ちちゃう」

……ああ、夕日が綺麗だなー。

なんか嫌なこと全部、全部忘れそうだなー……。

……
おっと現実逃避していた。

今、俺たちは何故だか分からないが、子ダコの頭（どうやら帽子みたいなものは人もとい猫又たちを乗せるための足場だったみたい）に乗って、大海原で風を切って海を渡っている。ぶっちゃけると、すっごい怖いよこれ。すげえスピード出てるし、今は海面だからいいものの、いつ海中に潜られるかなんて考えた日には……鳥肌がぞわっとしますはい。

それにしても、スノウが言っていた「イベント」というのはこのことだったのか。まあ、確かにサプライズっちゃサプライズだが……サプライズすぎるぞこれは。タコに乗って大海原を旅するなんて、

早々ないと思う。

……でもまあ、それが迷惑だとは思っちゃいない。

仮にも彼女は俺たちを驚かせるため、楽しませるためにこのイベントを準備していたんだから、それを無下にするわけがないし、何よりその気配りが嬉しかったりする。

涼しい顔で銀のショートを揺らしているスノウの近くに行つて、俺は落下防止用の柵にひじをかけながら静かに言った。

「ありがとな、スノウ」

その言葉に彼女は少しぼかんとしていたけれど。

少し経つてその意味を理解したのか「ぶいっ！」と笑顔で俺にピースサインを送ってきた。うむ、良い笑顔だ。

「……まあ感謝の気持ちがあるならこれくらいはしてもらわないとね、んっ。んん〜？ ほれほれ啓太〜、苦しゅうないぞもつと近う寄れい〜！」

「おい、馬鹿止める。感謝はしているがキスは許していない。唇を近づけるな。タコの上で口をタコみたいにさせんな」

……これがなかったら本当にいいのに。

「あー！ 何やってんですかスノウー！ 私の啓太さんにマーキングなんて許しませんよ！ 早く離れてください！」

「えー！ いいじゃん別にー！ キスくらいでケチケチするんじゃないわよー。……じゃあ別の口にキスを」

「それはもつと駄目エエエ！？ ほら、早くっ、啓太さんからっ、離れなっ、さいっ！ この、くぬっ、くぬっ！」

「こ、こら馬鹿お前らこんなところで暴れんな！ ただでさえ高いのにこんなところから落ちたら って、わっ、わわわっ、落ちっ、落ちるっううううううう！！！！？」

騒がしいレイシヤンの一日が過ぎていく。

夕日は背に映え、やがて沈んだ先の水面では月を大きく照らし、暗き世界を白黄の世界へと導いていった。

さて、明日は何処へ行くのだろう。またみんなで遊べるところがないな。そう思いながら俺は過ぎ行く時の中で静かに瞳を閉じた。

猫又のサクラ 2

場面は打って変わってあの温泉街 シャルバトーレ。確かここは温泉が豊かな地だったのを覚えている。

まあ、あの時は女の身体になっていたから、男に戻って多少は違う視点でこの街を眺められる。……そう思っていたけれど。

「な、なんだ、ここは……!?!」

見渡す限りに広がる「藤咲ハーマイオニー生誕の地」と書かれた大きな看板。入り口前には大きな銅像。来る猫又たちはその銅像前で写真を撮っていた。

それだけではない。温泉の品物を売っていたであろう店はいつの間にかグッズ販売店に早変わり。店内もそれから派生した品物が目白押し状況になっていた。

更に更に。まともであったらう温泉の雰囲気もいつの間にか大幅に崩れ、藤咲ハーマイオニー押しが強い温泉宿もちらほら。完全に完璧にそれらは謳い文句とまで化していた。

……あれ？ シャルバトーレって、こんな街だったっけ？

確か俺が初めて行ったときは、ごく普通の温泉街だった気がしたんだけど。

いつからこの街は秋葉原みたいなことになってんだ？

この一年で、この街に一体何が起きたんだってばよ？

「わーい！ あの映画監督さんから藤咲ハーマイオニーグッズ貰っ

……穴があつたら入りたい。この街に来て累計300回くらいそう思った。

「……………はあ」

街路樹をバックにした青いベンチに座つて一息ついた。……疲れた。この街に来てから、すっげえ疲れた。

レイションでは遊びまくつて疲れたけど、この街ではこう……なんというか精神的な意味で疲労が蓄積される。

その諸悪の根源とやらは今も街で飾られている……っーか、元を辿れば俺のせいなんだけどさ、自業自得なんだけどさ。

……なんか納得いかねー。

「なーにムツツリした顔で俯いてんのよ。疲れてんの？」

「おー、スノウ。疲れてるっちゃ、疲れてるなー……」

「ほら、そんな仕事疲れのオッサンみたいな顔してないで。藤咲八一マイオニーみたいに笑いなさいよ」

俺の目の前に来て、先ほど監督から貰ったであろうグッズをほれほれと見せびらかしながら言うスノウ。それを見て更に萎えた。

……ちつくしよー、みんなして俺をからかいかいやがって。弱み握つて復讐してやる。冷や汗かかせてやる。

そんな憎悪の炎をメラメラと燃やしていたら、スノウが俺の顔を見て、ふっと言った。

「まあ、そんだけあんたがこの世界に与えた影響は大きいってこと

がよく分かるわね」

俺が世界に与えた影響。

その言葉を耳にして、少しだけ俺は熱を帯びているであろう頭を冷ました。無論、それは恥ずかしさの方だけだ。

確かに、俺がここに来ただけで、この街の雰囲気はがらりと変わった。今までとは想像もつかないような風貌に変わった。

こんなちっぽけな人間が、猫又の街の雰囲気を変えちまったんだ。本当なら、凄いことなんじゃないのかなって思う。

関わる事で変わっていく。心に決めていた信念もまた、関わりあいを経て形を変えたり、消えていったりもする。

その事実だけは人間も猫又も変わらない。種族を経て、俺たちは様々な関係を築いているんだ。

今の俺が……そうであるように。

「そうかも……しれないな」

「そうかも、じゃないわよ。そうなのよ」

にしし、と無邪気に笑うスノウ。その表情に影はない。

こうやって他人と関わっていくことの大切さを、今この場で改めて思い知らされる。

「ふっふっふん　藤咲ハーマイオニー印の肉まん」

……んでまあ。サクラはサクラで。なんか知らんけど藤咲ハーマイオニーの絵柄がプリントされた肉まんをセツちゃんと食べてた。

おのれ肉まん屋まで侵食されたか！　この裏切り者め！　二人で交わしたあの誓いを忘れおったのか！？　と、いつ交わしたのかも分からないような理不尽な約束を肉まん屋に突きつけながら、俺はベ

ンチから腰を離し、スノウに行った。

「んじゃ、みんなと一緒に風呂へ行こうぜ。せつかく此処に来たん
だしさ」

そうして、シャルバトーレの温泉にゆっくり浸かって一休み。
露天風呂があったので、また後で行ってみようと思ってる。

前は女の姿だったからおちおち風呂を楽しむことも出来なかったし、何よりあれはドキドキが多すぎだと思う。あれもあれで今後味わえない経験になるんだろうな。

そんなことを考えながら俺はレンくんの頭をわしわしと洗ってやる。「にい、にい」と言ってる（てか、鳴いてる？）レンくんだけ、どうしたのかね。おじさんを萌え殺すつもりかね？

「啓太さーん」

お向かいの女風呂からサクラの声が聞こえてくる。

「ん、どしたー？」

「ちょっと観察してみたんですけどねー」

「おー」

「やっぱりGはありますよー。それが、多分G+でしょうかー」

「うん……で、何の話だ？ Gって何だよ？」

「セツナさんのトップサイズです」

「！？」

「さ、ササササクラ殿おおお！？ な、何を言っているでござるかああー！」

「……ほう、それで。見た感じはどうかね？」

「……へっへっへ。それが極上の一品ですぜダンナ。まるで国宝級の玉杯ですよ。なんといつても上向きの」

「にゃあああああああつ！！ せ、セクハラ！ セクハラでござるううううう！！！」

「えええい！ 胸糞悪い会話で盛り上がってんじゃねーわよこの爆乳どもがあああああー！」

「……ミイだつておつきいもん」

あーあ。女湯がカオスになっちゃったよ。発端はクラだったけど、それに乗ってしまった俺にも非はあるな。

反省している。だが後悔はしていない。……それにしてもこちらの男性陣はピュアな方が多いようで。顔を真っ赤っ赤にしている方がほとんどではありませんか。

いいですなあ、こういう純情なところ。女湯を覗きに行く命知らずのアホどもは少し見習え……はい昔の俺のことですいません。

そんな感じで雑談を交えながらレン君を洗い終えてやり、一緒に湯船へ。タオルを頭に乗せて再びふーっと落ち着く。

そついやここは露天風呂が有名なんだつ。ここは通常の銭湯よりも少し高いところに風呂を作っているらしく、シャルバトーレの街並みから離れて、雄大な自然の絶景が見えるとか何とか書いてあった気がする。それならば是非とも行ってみようかな。レン君を誘って湯船から上がり、露天風呂に入ろうとした……が。どうやら露天風呂は脱衣所から外に出るらしく、しかも専用の水着を着なきゃ駄目らしい。水着を着る……てことは、混浴か。まあ裸じゃない分、まだマシな方かな。

そう思いながら俺は脱衣所で水着を着て、その足で露天風呂へ。……おお、引き扉を開いた瞬間自然が映えた。一面オールグリーンな露天風呂とはこれまた眼に優しい仕様だな。

そんなことを考えながら二人で一番大きな風呂を探していく。で、一番大きなところが見つかったと思ったら、何とそこには用意された水着を着たサクラとスノウがいた。

「あ、啓太さーん！ ちょうど誘おうと思っていたところなんですよー」と言っつてサクラがこっちに手を振ってくる。それに手を振り替えて、俺たちは彼女たちのいる風呂へと入った。

外に映る世界 確かに美しい自然の景観が眺められる場所から、サクラは俺に向けて元気よく言った。

「啓太さーん。良い景色ですなー！」

「そつだな。広大な平地が見えるな」

「誰の胸が広大な平地みたいですか？！」

「それにあそこは断崖絶壁も見えますよー。ナイアガラの滝みたいですよー」

「誰の胸がナイアガラみたいだに断崖絶壁ですって!？」

「だから一々反応するなって。お前のことじゃないから。平たい世界の感想を淡々と述べてただけだからペタ又」

「そーですよー。ナイアガラのことを言っただけで、別にナイチチを批判してたわけじゃありませんからペタ又」

「思いつきり私のことガン見しながら言ってるじゃねーかコノヤロ
ー！ てかペタ又って言うんじゃないやねえー！」

第二次カオス会話勃発。ツッコミがスノウに入れ替わっての、無駄に洗練された無駄のない無駄な応酬が続いていく。

やがて会話が何故だか第一回全国乳討論に移行したところでサツパリ興味がなくなったので、俺はレン君と一緒に外の世界を眺め始めた。

この景色も、もう見納めなのかな。

気づけば俺は、本当に長い間この世界にいた気がする。人間界を離れて、もう一年が経過しようとしているのか。

意外とこちらの生活は大変ではあった。俺はまだ学生の身だし、大学の講義の履修科目とか、単位をとらなければいけない講義の授業は確認して全部通信で受けてきた。

桜ヶ丘大学は通信制の授業も兼ね揃えており、一身上の都合で出られない者、また病欠により講義に出られない者は独自の通信講座を開設することによって授業を受けることが出来る。もちろん授業料以外の別途料金も発生するために、今回は貯金を下したり大学の奨学金を借りるなどして今まで賄っていた。しかし授業料は思ったよりも高く、それらを駆使しても中々支払いが行えない現状。どうしたものかと嘆いていたら、なんと一国の王様であるヴェイルさんが

「娘の面倒に付き合ってもらったから」といった理由で資金を援助してくれた。なんと有難い話だ、と感涙の涙を出したけれど……
なんかヴェイルさん、すごい笑顔で「何、気にすることはない」とだけ言ってきたんだよね。あれ、俗に言う『含み笑い』じゃないの？ 絶対何か裏があるでしょアレ。超怖いんですけど。」

……つーか毎度毎度思っけれど、何でシェアリスは人間界と変なところで繋がっているんだ？ 提出物とか無理だろうなとか思っていたのに、普通に郵便で向こうに送れるし。空間転移装置でも開発してんのかこの世界は。生物は無理だけど物は送れるって言うのか。完成度たけーなオイ。

「だーかーらー！ 世の男性はツルペタを求めてんのよ！ 今時ポインボインのムチムチとか、ナウなヤングにバカウケの世代にしか流行らないわよ！ 今はスレンダーが注目されてるに決まってるじゃない！ 貧乳はステータスよ！ 希少価値なのよ！ だから少しは敬いなさい！」

「いーえ！ 今でも昔でも男はみな大きなおっぱいが好きなんです！ あれですよ！ 女性は三十歳まで垂れずに巨乳だったらプレストファイヤー放てるんですよ！？ 機械獣だってメロメロにするんですから！ 故にナイスバディ最強也！」

「あんた馬鹿ア？ そんなもん放てるわけないじゃん！ 世が求めてるのはスレンダーよスレンダー！ すらりとした美脚に見るもの全てを魅了する綺麗な肢体の曲線美。芸術といっても間違いないその気品漂うオーラはナイスバディを凌駕するのよ！」

「違います！ この世界はいつになろうと乳離れできぬ愚かな存在なんです！ 誰もを包容する豊かな双丘と引き締まったウエスト、

控えめでありながら大きなヒップ、それらを兼ね揃えたナイスバディこそ戦場で生き残れる存在なんです！」

「……こいつらいつまで話してんだろうな……。そろそろ他のお客さんに迷惑だからやめろよと制止しようとしたが、生憎お客さんは俺たち以外にいない様子。仕方ねーな。なら納得するまで話をさせてやるか。もし誰かが来たときは途中で話を中断させるけど。と、そんな感じで二人を見てたら、ぱつとこつちを見てずかずかと歩み寄ってくる二人。」

こつちみんな。こつちくん。俺を話に混ぜるな。

「「啓太はどつちが好きなのですか」！！？」」

「俺はミイちゃんとレンくんが好きだ」

「……うわあ……」

「……ペドってる……（人類には）早すぎたんだ……」

「……冗談だよ」

「……こう」

「あ、ああ！ 嘘嘘レン君！ 冗談じゃないよ！？ 俺はレン君のこと好きだよ！？ だからそんな悲しそうな顔しないで！」

うるうるしてるレンくんを必死で嗜めつつ、俺は彼女らの送る紫外線ならぬ痛々しい刺激線をモロに受けながらも、遠巻きに映るこの

世界をもう一度眺めた。

……もうすぐ来る。別れの時が。この世界ともお別れする時間が、明後日を迎えたらやってくる。

それまで、みんなで楽しんでいこう。この美しい世界を眺めながら、バカみたいな会話を繰り返しながら、過ごしていこう。

そう思うながら　眺めていた世界からふっと眼を離し、湯船に浸かって瞳を閉じた。

いつかは忘れてしまっただろう。

いつかは記憶から薄れていつてしまっただろう。

でも、俺が生きている限り　きっと今日のこの時も……いつかは思い出すから。

時は流れ、場面はシックザール。本来ならば今日はラインガルドで街並みを見て回るつもりだったが、サクラがどうしても最後は此処へ行きたいと言うので、仕方無しにみんなも了承してくれた。まあ、それを願う理由は誰しもが分かっていることだし、それに反対する者もいなかった。ラインガルドは夜からでも構わないだろうといい、朝と昼の時間はこちらでゆっくりとした時間を過ごすつもりだ。

それにしても……この地へ足を運ぶのもあの時以来だな。相変わらず人気（猫気？）の少ない寒村ではあるけれど、此処にはいろんな人たちの、たくさんの思い出が詰まっている。

それは俺たちだけではない。猫又たち全員に言えるくらい、色々な記憶が詰まった場所。それは楽しい思い出ではなく、悲しみや苦しみ、嘆きなどが詰まった、痛々しい記憶の地かもしれない。思い出したくもない過去が存在する地なのかもしれない。

けれど、その地でも猫又たちは気丈に生きている。猫又たちの死の間近で見えてきて、絶望の淵に追いやられながらも今を生きている。悲しい過去があるから、今の自分たちがいる。辛い出来事乗り越えてきたから、以前の自分とは違う今の自分が作り上げられている。たくさん別れをして、たくさん泣いて。そうして出来上がった自分が、生まれ変わった自分が……そこにはあったんだ。

「啓太さん、無理なことをお願いしちゃってごめんなさい。最後はここに寄ろうと思つてたから……」

「ん、気にすることは無い。俺も、此処には用事があつたからな……」

そう呟いて俺は、胸ポケットに入れていた懐中時計を取り出した。傷は入っているが、ちゃんと動くことは出来ている。

サクラから貰つた懐中時計だ。もう動くことはないと思つていただけ、あの時に時計職人のエルジさんに直してもらつて　そしてあの事故で破損せずに命を繋いだ懐中時計。

あの時、エルジさんと約束したことを果たしに行くつもりだったし、それに俺たちはまだ、しなくてはならないことがある。

みんなにはしばらく街並みを見学してもらつて、俺たちは別行動。まず最初に向かうのは……そうだ。ソフィアさんとシキさんのお墓参りだ。

彼らの名前が刻まれた墓地を探すのは一苦労だった。色んな猫又たちに聞いて回つたり、歩きつかれたのでその場でしばらく休憩したり。

それから、道中で俺を轢いた（事情は後々聞かせてもらった）猫又の人たちと出会つた。その人たちは本当に申し訳なさそうに俺に頭

を下げていたが……まあ、気にすることはないさ。

確かに死ぬかと思っただけで、それがきっかけにもなったんだし。子供さんも無事でよかった。誰も犠牲が出なくてなによりだった。で、その人たちから有益な情報を貰った。何でも、彼女 ソフィアさんの家族のお墓は、シキさんと同じところに建てられているらしい。家族になる予定だったので、事前にそういう話をしていたんだろう。その誓約通り、今ではみんなのお墓が密集されて、綺麗に並べられているとのこと。

その猫又さんたちに道中まで車で送ってもらい、そのお墓があるところまで向かった。その場所は かつて、シキさんたちが暮らしていたであろう一軒家の、直ぐ近くにあった。

並べられているお墓の前で手を合わせ、黙祷。来るのが遅くなってしまったが、この世界を離れる前に、此処に来られて良かった。

かつてあの風土病に侵され、苦しみながらも命を落としてしまった二人と、その家族の方々に、黙って俺は黙祷を続けた。

「……あの時言っていた言葉は、このことだったんですね」

ぽつりと、サクラが黙祷をやめて独り言を呟く。

その言葉がちゃんとは聞き取れなかったけれど、口を挟むことはせず、そのまま黙祷を続けた。

「ありがとう、リカルド兄さん。それから、お父さん、お母さん……私、わたしっ……」

ソフィアさんの記憶は、サクラの中にある。

そして シキさんの記憶は、俺の中にある。

ただ、輪廻転生として生まれ変わっただけ。俺たちはただの他人な

のかもしれない。
けれど

「みんなから貰った最後の幸せを、大切にします……！」

心半ばにして亡くなられた方々の　みんなの分の幸せを引き継ぐ
ことは出来るんだ。

過去が不幸であったとしても、今を幸せにすることは出来る。今と
いう未来は、これから何にでも変えていくことが出来るんだ。

苦しみはそこで断ち切られても、幸せはいつまでも繋がっていく。
何代、何世代と渡り歩いて、受け継がれた欠片はどこまでも、い
つまでも形を変えずに紡がれていく。

だから……シキさん。俺、最後まで頑張ります。

今まで積み重ねられた幸せだけじゃなく　自分たちで幸せを作っ
ていきます。

彼女とともに……限らない幸せを、作り上げていきます。

「さて。そろそろ行こう」

「あ、はい。……ねえ、啓太さん」

「ん？」

「……また、一緒に此処に来ましょうね」

「……ああ。またいつか、必ず此処に来よう」

ぎゅっと。彼女の手をしっかりと握っていく。

これまでに何度も繋いだ手。小さくはあれど、大切な、最愛な彼女

の手。

離さないように生きていこう。これからも、ずっと……。

向かうは、次の目的地　エルジさんの工場。

さあ、昼間のうちに顔を見せに行こう。あの時の約束を果たしに。サクラを連れて、行ってみようか。

頑固で、我侭で、それでいて寂しがりで、意地っ張りなところがあ
るけど……それでも、誰よりも優しく、誰よりも信賴していた

エルジ伯父さんのもとへ。

猫又のサクラ 3

「おい、サクラ。ちゃんと荷物は纏めてるのか？」

「はい、纏めました〜！」

「……部屋に財布とか置いてないよな？」

「ふえ？ 財布？ ……あわわちよつと見てきます〜！」

「大丈夫かよ……」

やれやれといった感じで頭を手で押さえる。いざ帰ろうというのに、こんなで本当に大丈夫だろうか。

ていうかお前、旅行前に準備できてたろが。アレはフェイクだったのか？ どたばたとたばたにゃーにゃーとやかましく走り回るサクラ。それを見て偏頭痛起きそうな俺。

もうちよつと落ち着いた感じで帰ってたよ。みんな外で待ってくれているのに。……そーいじゃジャックとミイちゃんは支度できてるのかな？ そー思っただけに見に行こうかと思っただけがやめた。あの兄妹はしつかりしてるから大丈夫だろ。涙目で「あれないよー！ これないよー！」とか言ってるアホ又と比べたら。

そして数分後。やつとの思いで帰り支度を整えた彼女から出発OKのサインが下される。

よし。と俺は意気込んで荷物を背にかけ、サクラを連れてジャックとミイちゃんのもとへ。彼らは既に準備が出来ていたみたいで、こ

こちらに向かおうとしていたらしい。流石ですな。
てなわけで。合流も出来たことだし早くみんなの待つ城門へ行こう。
待ちくたびれているはずだ……多分。

大きな荷物を抱えて城門へ。特別凄まじいファンファーレや合唱隊
がいるわけでもなく、そこにはボディガードだと思われる黒服数名
と、ヴェイルさん、そして「おっそーい！」と野次を飛ばすスノウ
を含めたみんながそこにいた。おお、何か全員集合って感じだな。
八時ダヨ！とか五時ダヨ！とか言ったらみんなノツてくれるかな。
多分場が白けると思うから実行にはうつさないけれど。

「来たか。えらく時間がかかっていたが……どうした？ 何か亡く
し物でもしたのか？」

「あー……いえ。ちょっとサクラが」

「どつたの？ なんか落としたの？」

「あー……まあ、そうですね。しいて言うなら、夢や希望を落と
しましたかね……」

ずびしっ！

「ひにゃー！」

「かばんの中や机の中でも探してる。んで夢の中でも行ってこいア
ホ又」

「探したけれど見つからなかったんですよー！ うふっふー！」

もう何か昭和のノリだなオイ。みんな苦笑いしてこっち見てるし、スノウにいたっては意味すら分かってないし。

そんな感じで漫才みたいなノリを繰り返して数分後。やっとシリアスな空気になったので空気を読んで黙った。

ヴェイルさんが俺の肩に手を置いて、ぽつりぽつりと語り出す。

「……思えば君には色々と考えさせられたな。生活を共にしていて気づいたが、君のような人間に会うのは初めてだった。心優しく、それでいてまっすぐな意思を持つ君に……いつしか私も揺れ動いていたのかもしれない」

「……よしてください。俺はそんな出来た人間じゃないですよ。ただ、自分の思うように、自分が感じるように動いていただけの、無知な人間なだけですから」

「……ふふっ、そうやって謙遜して、慢心しないところも君のいいところだ。……野暮な質問かもしれないが、もう一度だけ問おう。このまま……この地に永住する気はないのかね？ もちろんそうであるなら、生活は全面的に保障し、何一つ不自由なく暮らせるだろう。そうすれば娘たちも喜ぶだろうし……どうしても、帰るのか？」

「……はい。お気持ちはとてもありがたいんですが、俺は猫又ではなく、人間です。人間だから……やっぱり帰る家もありますし、それに……俺にも家族がいますから」

「そうか、それは残念だ。個人的にはアシユリーやセツナと婚禮して、この地を守ってもらおうかと思っていたのだが……」

「おおおおおおお王様ッ！！？ な、ななな何を言ってい

るでござるか!」

「私はそれでも構わないんだけどねー! ん? なんなら結婚する?
今すぐ子作りしちゃう?」

「にゃああああ! 私の啓太さんに触れるなこのスレンダーがああ
あー!」

「さり気なく褒めてんじゃねーよサクラ……はい、ヴェイルさん。
そんなわけでお世話になりました! ……あ、そういえば学校のお
金の件ですが……」

「ん? ああ、それが……ふふふ、それはまた“後で”返してもら
うとするかな。ふっふっふ……」

……あ、まただ。またこの含み笑いだ。何なんだろうコレ。相変わ
らず怖いんだけど。笑顔なのが怖いんだけどヴェイルさん。
向こうの世界に戻って請求書とか来たらどうしよう。俺バイトで払
っていく自信ないんだけど。

「さて」

意気込んで俺の前に来たのはカノンさん。何だかこの人には本当、
何から何までお世話になっちゃったな。
相変わらずの白衣ルックのぼさぼさで、いかにも研究者っぽそうな
風貌で、それでいてとても優しい人。

「啓太くん! 君と生活してて、とても楽しかったよ! また機
会があったらいつでもおいで! そのときは盛大に歓迎するからさ!」

「カノンさんも、お元気で。いつか、こちらの世界にまで名が届くような名医になってくださいね」

「ははっ……なかなかハードルをあげたことを言ってくれるね。ありがとう、向こうの世界でも、元気で！」

ひらひらと手を振って笑顔で言うカノンさん。両親に負けないほどの最高の研究者、そして医者を目指して、頑張ってください。

次に足を運んできたのは、カイさん……いやガイさんか。

何か最後までカイさんとはすれ違いになっちゃったなあ……ていうか、あんまり話せてなかったから消化不良だなあ。

「……啓太。これを受け取れ」

そう言って手に渡されたのは、一本の短剣。俗に言うダガーナイフだろうか。それにしても何故、この場面で……？

「人間界は物騒だからな。悪漢や強盗に巻き込まれた時は迷わず使え。ああ、刃先には毒が仕込んであるから迂闊に触るなよ」

「は、はい……あ、ありがとうございます……」

なんつーモンをプレゼントしてくれてるんだこの人は。まあ、俺の身を案じて言ってくれているわけだから、無下にはできないけれど。

「……それで彼女を守ってやれ。向こうでも、元気でな」

「はい……ガイさん。カイさんもお元気でと、伝えておいてください」

伝えておくよ、とだけ言ってガイさんはふつと笑い、俺から離れていった。サクラにも何かを渡しているようだったが……はて、何を渡しているのだろうか。

そんな感じで彼女を見ていたら、今度はレンくんミスリア。二人はニコニコして俺を見上げていた。

「啓太！ ほら、これ、プレゼント！」

「いい、お兄ちゃん。これ……プレゼントです」

二人から渡された物は、俺とサクラに良く似たぬいぐるみと、いつ撮ったのか分からない、みんなが映っている集合写真だった。

「へへー！ この人形はミスリアちゃんオリジナルの、世界で一つしかないプレミアムものなんだよ！ だから大事にしてあげてね！」

親指をサムズアップして、同時にウィンク。中々の芸当をしゃがると思いつつ、俺は二つの人形を眺めた。

なるほど、よく似ている。それでいて……その人形にはミスリアの愛情が、情熱がこもっていた。

「素敵なプレゼントをありがとうな。後でサクラにも渡しておくよ。お前も夢を頑張れよ」

へへへ、と鼻をこすって笑うミスリア。その隣にいたレンくんが俺に駆け寄ってきて、ぎゅつと俺の腰周りを抱きしめた。

「……いい、お兄ちゃん。本当は帰ってほしくないです。……けど、けど今は言います……さよなら。また、いつでもこっちに遊びに来

てください」

じわっと。その瞳から涙を落とすレン君。その健気なさにお兄さん感動した。深く感動した。この子だけ連れて帰っちゃ駄目ですか……あ、はい、駄目ですよそうですね。

また遊びに来るよ。その時はまたよろしくな。それだけ言って俺はレン君の頭を撫でた。涙を拭って「にい〜」と気持ちよさそうに鳴くレン君にまた萌えかけた。

「……………さーて。そんじゃ次は……………あ」

さっきまでサクラと会話をしていたセツちゃんが、気づいたようにこちらを向いてくる。

その顔は少し翳っていて。なんだか困ったような顔でこちらを見つめていた。どうかしたか？と尋ねる前に彼女は俺の手を引っ張って、城門側面の、影のある場所まで連れて行かれた。

他のみんなは疑問そうに「？」と首をかしげて俺たちを見ていた。太陽が隠れて、日陰が広がるその場所で俺は訊いた。

「お、おいおい。いきなりどうしたよセツちゃん。こんなところに来てさ……………」

「あ、あははは。申し訳ないでござる。ちよつと、渡したいものがあつて、でもこれはあまり人目に見せたくはなかったの……………」

頭をぼりぼりとかいて笑うセツちゃん。人目に見せたくない渡し物。そりゃ一体何なんだろうか。

……………あ、もしか秘蔵の「忍者グッズ」とか「月間忍者通信」とか、そういう忍者関連の物だろうか。自分の趣味を渡すのは、確かに恥ずかしいかもしれんな……………。

そんな感じで考えていたら、ざつとセツちゃんがこつちに歩み寄ってきた。その瞳は真剣以外の何物でもない。……あれ、なんか変にドキドキしてきたんだけど。

「そ、それじゃあ啓太殿。手渡すので、手を出して、そのまま眼をつぶっていて欲しいでござる」

「お、おお……分かった」

言われて、静かに眼を閉じる俺。これで蛙とか置かれたら俺飛び上がるかもしれない。とかアホみたいなことを考えていたら、何やら手に紙の感触が。それも複数あるみたいだ。

もう眼をあけてもいいでござるよ。といわれたのと同時に、俺は手に置かれていった物たちを見た。そこには……。

「これ……俺の、写真？」

色んな顔で映っている、俺の写真がそこにはあった。

怒った顔、泣きそうな顔、照れた顔、驚く顔……本当に、何から何まで、喜怒哀楽の表情をよく表した写真たちが、俺の手の中におさまっていた。

……こうやって見てみると、俺もいろんな顔してんだな。写真を通じて分かる自分の表情ってか。ていうか、セツちゃんよくこんな写真を取れたなあ。

撮られてるの全然気がつかなかったし……あ。盗撮って……もしかしてこれのことだったのかな。何だよ、こういう写真なら別に構わなかったのにな。

ふっと笑って、俺はセツちゃんに向けて微笑んだ。

「ありがとう、セツちゃん。でもこれ、別に他の人に見せたっていい

いんじゃないか？ だって俺の写真なら」

見られても構わない。そう言おうとした。けど、言えなかった。セツちゃんに 彼女に、唇を塞がれてしまったから。

それは、どれくらい重ねあっていただろう。数秒か、もしくはそれ以上か。脳に電流が流れたかのような衝撃と、それでいて柔らかい唇の感触が相反して、頭が正常に動くことが出来ない程のダメージを受けていた。その最中、永遠とも呼べる時間の中で彼女は俺から唇を離れた。そして、ふーっと深呼吸をして にこやかに笑って、言った。

「私はずっと あなたのことが大好きです」

その言葉を聞いて、呆気にとられる俺。……少し、いま少し時間が欲しい。理解できるまで時間が欲しい。……と、そんな野暮ったいことを考えていたら、しびれを切らした彼女が真っ赤な顔で、呂律の回らない口調で言い放つ。

「……そ、そそそそそれじゃ拙者は仕事があるので、じつじつじつこここれにして失礼します！ でっでっでっではっ！！」

それだけ言って、セツちゃんは風と共に去りぬよろしく風の如くその場を走り去っていく。

行き止まりに当たったと思ったら、そのまま屋根伝いにのぼって、軽快なステップで何処かへと消えていってしまった。

そんな彼女の後姿を見つめながら、はげしく鼓動するうるさい心臓を押さえながら、ふーっとため息をついた。

本当は気づいていた。

けれど、それを知るのが怖くて、自分じゃどうしようも出来なくて。

向けられる視線が、向けられる言葉が、俺に接する態度が、何もかもが全てを物語っていたはずなのに。

俺はそれを見ても、ただ見てみぬフリを繰り返していた。黙って、その思いから少しずつ逃れようとしていた。

嫌いなわけじゃない。俺だって、好きだ。彼女のことは、大好きだ。

けど 駄目なんだ。俺には、大事な彼女がいるから。あの子を、離したくは無いから。

ここに来て気づくなんて。俺は本当に臆病者だったんだな。それを改めて実感し、今度は落胆のため息をついて、みんなのところへ戻った。

唇に残る、わずかなぬくもりと柔らかな感覚を残しながら。

みんなのところに戻ってみると、なんかその場で座り込んで雑談をしていた。待ちくたびれていたのか、すまないことをしたな。

戻ったよ。とみんなに向けて言うと、スノウが再びふくれつつらで

「おっそーい！」と怒った。ごめんごめん。待たせちゃったな。

「あれ、そーいやセツナは？」

「あ、ああ……セツちゃんなら仕事があるからと言って城に戻っていったよ」

「ふーん？ 今日仕事なんてあったかしら……あれ、啓太。どうしたの？ 顔赤いわよ」

「え？ マジで？ あ、赤いか？ そりゃ参ったなあっはっは！」

「……？ あんた大丈夫？ 寂しさで頭がおかしくなった？」

不審そうに俺を見つめてくるスノウ。そりゃまあ……あんなことがあつたら顔だつて赤くなるわ。未だに心臓バツクバクしてるし。と、逸る心臓の音を抑えていたら、スノウが自分の頭をぽふつと俺の胸に預けてきた。さらさらの髪がくすぐつたい。彼女の手は、いつの間にか俺の背中に回っている。

「……本当に、帰っちゃうんだよね？」

「……ああ、今日で帰るよ」

「……もう、会えないの？」

「……会えるさ。また遊びに来るよ」

「……絶対？」

「ああ、絶対。また遊びに来る。だからさ……その時は盛大にもてなしてくれ」

「……一つ言っておくわよ」

ざつと。背に回っていた手を離してスノウが一方後ろに下がった。そして、誰にでも聞こえるかのような大声で俺に言った。

「あ、あんたはわ、私が唯一惚れた男であつて！　そ、それから大切な人でもあつて！　さ、サクラもそう！　大切な友人だし、ライバルだし、トモダチだし……ジャックだつて、ミイちゃんだつて、みんなみんな、大切な人たちであつて！　だから、だから……だから……！」

泣き始めたし。

それから泣きじゃくる事幾候。ようやく落ち着いたのか二人は互いに嗚咽を漏らしつつも涙を手で拭いながら、お互いの鼻水をティッシュでちーん！としながら立ち上がる。

息ピツタリだなお前ら。コンビか。未だに嗚咽を漏らし、真っ赤な顔で見つめてくる二人に向けて、俺は笑顔で言った。

「最後に一つだけ」

「ん？」

「最後は本名で呼んで」

「……ああ、分かったよ」

なんかしおらしい終わり方だな、と苦笑いして、俺は彼女を本名で呼んだ。

「……………いや、呼ぼうとした。」

「あー……………すまん。お前本名なんだっけ？」

「アシュリー・ラインハート……………！」

うおおお！？ すごい勢いで怒鳴られた！ びっくりした、すごいびっくりした！

他のみんなに「今のはお前が悪い」オーラが見え隠れしつつある視線に若干胸を抉られつつ、俺は謝りながらスノ アシュリーを呼んだ。

「それじゃアシュリー。また会おうな！」

軽く頭を撫でて、俺は近くに投げた荷物を背にかけて、踵を返して彼女から離れていく。

「それと みんなも元気で！」

サクラやジャック、ミイちゃんを連れて、城門前から城下町ラインガルドへ。それまでに俺は何度も手を振って、みんなの顔を眺めながら。

そして 俺はラインガルドへ入る前に気づいた。城門のてっぺんを見張り役がいそうな鉄の堀がある場所に、黒髪のポニーテールを靡かせている彼女がこちらを見ていたことに。

そんな彼女に向けて俺は大きく手を振ってやると、彼女は再び顔を真っ赤にして、すぐさま直立姿勢をとって深々とお辞儀をして微笑んだまま小さく手を振り返してきた。

今もなお城門（の上にも）にいるみんなに向けて。

そして、今までかかわってきた猫又たちに向けて。

俺たちは、この世界中に聞こえるであろう声を上げて叫んだ。

「さよならー！」

「どわああああー!？」

「きゃあああん!?!」

「みiiiiiiii!?!」

「わあああああ!?!」

悲鳴の四重奏が午前の桜並木を響かせていく。いやまあ、俺以外はちゃんと受身をとって着地したんだけど。俺だけ無様に落ちたけど……畜生、この一瞬だけでいいから猫又になりたいぜ。

あれから俺たちは黒服たちの指示を頼りに、一番最初にシェアリスへ来た時と同じ道を辿って、まるで暗黒面と繋がってそんな亀裂を抜けて人間界へ。

……やっぱり亀裂はなれない。再びアウト・オブ・ゲロという悲劇を繰り返そうとしていたぜ。そんなわけで受身も取れずに腰を強打した俺が真っ先に見た物は、樹齢数百年と言うくらいの大きさだろうか。大きな桜の木がそこにはあった。

……えーと、この木があるってことは。

……ああ、そうだ。帰ってきたんだ、俺たちは。

人間の世界へ……やっとな帰ってきたんだ……!

「iiiiiiやつふおおおおおおお! 帰ってきましたぞ人間界イイツイイイイ! わが世の春がキタアアアアアアア!」

ずびしっ!

「ひぎゃあああああ!」

「気持ちは分かるが、うっせえから叫ぶな! 近所迷惑だろうが!」

両腕を天に掲げてガッツポーズするサクラにチョップを浴びせつつ、俺はこの世界に帰ってきたことを心身とその身体に実感させていく。

……うーん、なんか空気悪い！ それでいてなんか臭う！ 焼きサ
ンマのような臭い！

間違いない！ ここは人間の世界だ！ 帰ってきたんだあああああ！

……。

……。

……あれ。

なんか自分で言ってみなしくなっただけだ。

道中でジャックとミイちゃんの二人と別れ、俺たちは自分の住んでいたアパートにめがけて歩いていく。

……おー、この公園も懐かしいなーとか、ちょっと休んだら桜ヶ丘商店街に行ってみようぜとか、懐かしい会話をしながら俺たちは歩みを止めない。

そして、目前に聳え立つアパート。ぼろっちい癖にオートロック式という生意気なアパート。俺たちはやっとここへ帰ってきたんだ……うわぁ、なんか感動。

……まさか部屋のカードキー忘れてないよな？ と若干焦った感じで探したが、ちゃんと持ってた。よかった安心安心。

カチャ、っとキーを差し込んで、俺たちは約一年ぶりのアパートへ

その身を入れた。気のせいか、懐かしい香りがした。

「……ふー」

「帰ってきましたねー。啓太さん」

「そうだな。帰ってきたなー」

……ああ、なんか凄い安心感。すごい安定感。やっぱり我が家はいいね。心からそう感じる。

部屋に上がったら埃が凄いんだろうと覚悟していたけれど、実際はそんなに汚れてはいなかった。多分大家さんが定期的に清掃業者を入れていたんだろう。

変なところで気の聞く人だ。まあ清掃代金はしっかり取られていたけどねコンチクショウ。

自分のベッドに腰をかけて一服。というのも俺はタバコ吸わないので、気のいくまま、気が晴れるまで思いつきり息を吐いてるだけなんだけど。

そんな感じでのほほんとベッドに座っていたら、すすすすと泥棒みたいな足捌きをしながらサクラがこちらにやってきた。なんだよ、と聞く前にそいつは俺の隣に座って、その身体をぴたつと俺に密着させてきた。自分の頭は俺の肩に乗せて、えらく上機嫌で甘えてくる。

「どうした、サクラ？」

「えへへへ。やっと二人きりですね、これでやっと誰にも邪魔さ

れないです」

「……そーだな。確かにここじゃ、邪魔は入らないな」

「んふー。いつにも増して啓太さんが積極的です。おお、これはもしかしてもしかすると……!?!」

「もしかして……なんだよ?」

不敵に彼女に笑いかけ。密着させていた身体を更に密着させ。

猫なで声で甘えてくるサクラの喉もとをそつとくすぐりながら、少しの間見つめあう。

そして 体の力を抜いて、うるんだ彼女の瞳をじつと眺めながら頬に手を当てて、そつと口付けを するはずだった。
するはずだったのに。

「ぎにゃああああああ!?!」

「ふにゃああああああ!?!」

「みにゃああああああ!?!」

「だわああああああ!?!」

再び絶叫の四重奏が発生。ベッドの上から、何か見慣れたような、とても見知った声の人物 いや、空気を読まない猫又どもが落ちてきやがった。

それも、あえて俺たちに直撃するようなコースで。

てゆーか! What's!?! なに!?! 一体何が起きてんの!?!

あまりのハプニングに驚きを隠せない俺だったが……ベッドの上の天上付近に、まるでワームホールのような歪な穴が出来ていたことに気づいた。

……え？

……な、なんで……。

俺の部屋に『亀裂』が生まれてんの……！？

「いったたたー。……あ、啓太じゃん！ もー、アンタが忘れもんしてたから、こうやって渡しに来てやったのよ！ 感謝しなさいよね！」

「あいたたた……姫、まだ啓太殿は帰っておらぬでござるよ。それに、拙者は啓太殿にお会いする前にさつさと帰 あ」

「……あ」

……なんだろう。ここで「眼と眼があう」のフレーズが流れてきたんだけど。

あ、と声を上げた彼女 セツちゃんは、俺の顔を見た瞬間、口元をわなわなと震えさせて、おそらく俺が見たことがないであろうほどに顔を真っ赤に染め上げて 叫んだ。

叫んで……天上にある亀裂へと向けて豪快にジャンプした。

「ひにゃあああああああああ……！ かつ帰る……！ 帰る帰る拙者は向こうに帰りますでござるううううう……！ うえええええええん……！」

「ちよ、こらセツナ！ アンタの上でジャンピングしてんじゃねーわよ！ つーか帰るか！ まだ用事終わってないじゃないの……！」

「ちょ、止めて止めて！ベッドが壊れる！　っていうか二人とも早く上からどいてくれ！　いい加減重たくして仕方がないし、それに一番下はサクラ」

「ぬがああああああああ！！　せつかくの良い雰囲気をぶち壊しておつてからアアアアアアアアアア！！　貴様ら表に出ろやコノヤロウがアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

ぎゃああああ！！？　一番下で黙つてたサクラがとうとうブチ切れたああああ！！？
ていうか上も下も暴れないでマジで！　真ん中で潰される身としては辛いから！　ダメージ半端ないっすから！

それから、しばらくの間一騒動が続いていく。

その最中で、俺はヴェイルさんが言っていた「あの装置」のことを思い出した。

……そういや座標軸を特定して、人間界のいたるところに「亀裂」を作り出す機械が完成したと、嬉しそうに話していたっけ。

あー、だからテストプレイとして、人間界と猫又界を繋ぐ一番初めは俺の部屋でやってみたと　　ってバカアアアアアアアア！

肩を落として人生で最高に落胆する俺。そんな俺を無視し、ぎゃんぎゃん騒ぎまくる猫又三匹。

近所迷惑だろうが！　黙らんか！　と雷親父の如く怒ろうかと思つたが、止めた。怒っただけ無駄だ。聞きやしないだろうし。

だから俺は、みんなが今一番聞いてくれそうな言葉で、その場をおさめた。

「よし！　みんな腹減ってるだろう！　今から商店街に行つて

「飯食いに行くぞ！」

ピタリ。あれほど騒がしかった奴らが、俺の言葉を聞いて静かに話を聞く体勢へと変える。

ああ、やっぱりコイツら腹が減ってたんだな。しかし分かりやすい奴らだ。飯って言葉だけでこれほど眼を輝かせるとは。

さすが猫 いや、猫又だな。そこら辺は脱帽するわ。

「マジ！？ ご飯おごってくれるの！？ ラッキー！ そんなじゃ早く行こ行こ！」

「いや、おごるとはいつてないんだが……まあいいや。おごってやるよ。その代わり、ちょっと準備するから二人で公園に行つてくれ」

「へっへー！ んじゃ私何食べよっかな」 OK、公園ね！ 準備できたら言つてね！」

「あ、姫！ ……申し訳ありません啓太殿。では、拙者もこれです…」

そう言つて二人は俺の部屋を出て、カンカンと階段を下りて公園まで行つてしまった。

二人が部屋から出て、途端に静寂が襲い掛かる俺のアパート。ちらりと天上を見る。案の定亀裂は閉じてしまっていた。

「はあ……………」

「はあ……………」

サクラとため息が八モった。珍しいことじゃない。お互い同じ気持ちなんだろう。

ため息混じりにサクラがとげとげしさを含めつつも呟く。

「……あーあ、せっかく啓太さんとイチヤイチャできると思ったのに。どーして邪魔ばかり入るんですかねー……」

「ほんとだな。……まあ、いいよ。これくらいの騒がしさが俺たちにはお似合いだろ?」

「本当なら静かにラブラブしたかったのい……まあいいや。今回は啓太さんのオゴリに免じて許してあげますよ」

「ははっ……ありがとな。サクラ」

頭を撫で、ぎゅっと手を繋ぐ。そうだ。あんまり待たせてたらスノウが怒るかもしれない。

ぎゃーぎゃー言われる前に、さっさと行くことにしようか。

「それじゃ、そろそろ行くこうか」

「はい！ あ。あのですね、啓太さん……」

何だよ。と聞く前に再び感じる唇の柔らかさ。

数秒だけ触れ合っていたそれを離してサクラは、元気よく、そして誰にも見せたことのないような可愛らしい笑顔を俺に見せて言った。

「私たち、これからもずっと、ずうっと一緒ですからね!」

その言葉を聞いて俺は、気づけば無意識に、反射的に答えてきた。

「……ああ、もちろん！ ずっと一緒だ！」

それだけ言っつて、俺は彼女の手をしっかりと握り、これからも手離さないよう玄関へ向けて歩む。

そして輝かしい世界に向けて　その身を投げ出した。

いつまでも、こんな日常が続けばいいのに。

そう思っただけど、俺は頭を振る素振りを見せて、また考えた。違う。『続けばいい』じゃない。『続けていく』んだ。

何度も悲しみ苦しんで。

そうしてやっと得られた幸せを。

不器用な俺が、ツギハギに結びながら紡いでいく。

彼女と一緒に　紡いでいくんだ。

こんなにも世界は美しく、それでいて尊い。

その美しい世界で　俺は彼女と出会った。かけがえのないくらい大切な　猫又と出会った。

愛する喜びを。

生きるための理由を。

この俺に教えてくれた……愛すべき彼女がいる。

そう。

それが……俺の……俺だけの　。

猫又のサクラ。

猫又のサクラ

おしまい

あとがき

最後までこの作品をご覧になりました皆様、誠にありがとうございます。
ます。作者です。

今作「猫又のサクラ につ！」は前作「猫又のサクラ」の正規続編
であり、リメイクを除きシリーズ完結作となっております。

公開日時が2009年の9月初頭で、完結日時が2011年の12
月末。……はい、2年間何をやっていただよって感じですね（汗）
その間でも私はめぐりゆく荒波を揉まれながら懸命に糸を手繰り寄
せ、ついには栄光の すいません蛇足ですね。ようは現実が忙し
くて右往左往していたのです。

それに、連載当時は全く何も考えていなかったというノープラン始
動という絶体絶命な状況かつキャラ設定も定まっていなままのスタ
ートでしたので、伏線回収も含め、相当な時間がかかってしまった
ことも事実です。その点につきましては作者の馬鹿さ加減に呆れる
始末であると思います。未熟ゆえに招いた不祥事……いや今も未熟
ではあるのですがね。

そんなこんなで尻切れトンボになるのかと恐れまくりながら始まっ
た続編。自分で撒いた伏線に何度も挫折を繰り返しながらシナリオ
を突き進め、現在に至ります。

色々ツツコミどころは満載だったと思います。作者ですら「何を書
いてんだ私は……」と頭を抱える事幾数回。改めてプロットの大切
さを理解した2年間でした。

さてさて。それでは話すこともそんなにありませんので、各話のコ
メントをしていきましょうか。

あ、本来なら挟むべきであったボツ話も一応追加しております。載
せなかった理由は各話のコメントにて。

『ひと時の幸福』

これはプロローグ的な物ですね。冒頭の啓太の夢から始まる、愛と笑いと涙のノンストップドラマ（長いので略）前作のノリから始められるように、彼らの日常を描いてみました。

サクラの髪の毛や尻尾が違うところが前作とは違うポイントですね。

『春の訪れ』正体不明のホワイト・キャット』

ラインガルドの姫、その名もアシュリー・ラインハート！（待）啓太がいない時の主人公とも言えるキャラクターであり、ヒロイン三人娘の一人です。

まあ、すぐに呼び名は「スノウ」に変えられちゃいますが。サクラのライバルにして、彼女と引けをとらないくらいの変態っぷりを見せるも、どこか常識的な振る舞いを見せるキャラです。

初期設定では名前の雰囲気からして「クーデレ」を導入すべきか悩んでいました。黙って黙々と主人公に襲い掛かるのもいいかなと思いましたが、押しの強い本作では影が薄くなるだろうと思い、従来のツンデレキャラを起用しました。……っていうか、ツンデレ？デレ成分の方が多い気がするような（略）

『〜行きはよいよい帰りは怖い……猫又の世界！〜』

ここいらで大量に主要キャラクターが登場します。その中でも本作で一番人気（？）があるであろう（あるのか？）忍者娘であり、ヒロイン三人娘の一人、セツナ・アカツキのご紹介を。

当初の予定としては、彼女は最初は「男」の猫又でありました。姫であるスノウを一途に思う少年にしようか悩んでいましたが、友人の一言「忍者娘でよくね？」で思い切りました。

今では純情で初心な可愛いキャラとして定着してしまいました（笑）啓太との和やかな会話が個人的に好きだったりします。

『水着姿でよっこらせ。ポロリはねえよ！南の島でのバカンス』
お色気回。ですがタイトル通りポロリはありません。爆乳になる薬を求めて、スノウが行くのは南国の島々。そこで起きる悲劇とは！隠された真実とは！スノウ「爆乳は一人だけで充分だ……お前たちはいらない！」悲鳴と怒号が飛び交う中、あなたはまた一つ知ることになる……。といったキャッチフレーズを考えて即ボツにして、のんびりバカンスを楽しむ話に差し替えました。道中でタコが出てきましたが、流石に年齢層的にイカンでしよと思ったので、啓太が犠牲になりました。哀れ啓太。何気にセツナとの絡みが多い回でもありますね。

『カノン先生の実験』どーも啓子ですコンチクショウ』
啓太が女の子になるお話。啓子さんが大暴れする回ですね。そして後々波乱を生むであろう藤咲ハーマイオニーが誕生する回です。あ、読者さんの方々はもうお分かりだろうと思いますが、藤咲ハーマイオニーは綾崎ハーマイオニーのパク……パロディです。

『かーにばる・おぶ・ねこまた！』しよーと・すとーりー』
猫回。和みたいあなたに向けて送る、猫だらけのお祭。って感じで考えましたが、どう見ても尺あまりでした。そんなわけで物語の伏線を絡みつつ、家族とのふれあいを大切にせねばと感じた回なのでした。なお、冒頭でまたしても啓介くんが登場してますね。それにサツキちゃんも初登場です。よく作中に登場する方々ですね、もしかして（待）

『カノン先生の実験2』キミがミーナでお前がサクラ！？』
記念すべき（全然記念じゃない）第一回のボツ話。カノンさんの作り上げた薬をジュースと間違えて飲んでしまった二人。そこには小さな子供に変わってしまったサクラと、最高のプロポーションを備えた、妖艶かつ大人の美麗なミイちゃんが！ ってな感

じで。

書かなかった理由は「大人になったミイちゃんなんてミイちゃんじゃない」って友人に言われました、ぐすん。まあ、纏まりのない文章になるだろうと思ったのが一番ですがね。

『ファンタジックオンラインin猫又！』

第二回目のボツ話。ネットゲーム内で盛り上がる猫又一同。スピードが売りの元魚売りの盗賊『キャプテン・ケイータ』率いる猫又たちが、ゲーム世界に君臨する魔王を退治しに行く話。ボツにした理由は「猫又関係ねええええ！？」それ以前に作者にオンラインゲームの知識が皆無だったので断念した話なのでした。ちよつと書きたかった。

『カノン先生の実験ふあいなる！〜青い薬と赤い薬〜』

第三回ボツ話。啓太が間違えて惚れ薬を飲んでしまった模様。それを聞きつけた猫又たちの仁義なき戦いが始まる……。ボツにした理由は「執筆時間が足りない」カノン先生シリーズは全三部あればいいかなと思っていましたが、流石にこれ以上時間をかけていては駄目だと思ひまして、断念しました。後から気づいたのですが、これによく似た話が他者の既存作品にあるみたいです。ボツにして良かった（冷や汗）

『糸と糸の纏れ合い』

当初は啓太とサクラの大喧嘩から始まる予定でした。が、すれ違う思いもいいかないと思ひ、予定を変更して書き加えていきました。この辺りで物語も終盤に向けての準備が行われてきました。登場する過去の人、そして風土病、更に思ひ出していく記憶……一気にシリアス展開になってますね汗

あのマキナという女性は一体誰だったのか その謎も、もうしばらくしたら解明されると思います。てか、されます。おまけで。

『輪廻転生遺伝と、空間世界の存在』

書いていて一番しんどかった回です。伏線に伏線を重ねた何十もの伏線を消しては積み消しては積みを繰り返して、なんとか命を繋ぐように書いていた回。

全ての謎が解明される　と思ったら解明されていなくて。補足説明も踏まえてこれから書いていきましょうね（待）

なお、この回でまたしても回想入れかけました。危ない危ない。私の書く回想は200Pを超すからなーアハハハハ（棒）

途中で一回だけ啓太の一人称が「俺」から「オレ」に変わっていたのも、ここまで読んでくださった読者の皆様は既にお気づきになられているだろうと思います。

『猫又のサクラ』

最終回。今までに向かった地へもう一度遊びに行こう！回なのでした。

そして猫又のみんなとお別れする回でもあり、実質のところ「猫又のサクラ」のフィナーレですね。

最高のエンディング！泣ける最後！そんなことを夢見ていましたが、やっぱり最後は変わらない彼らで終わるのが一番かなと思います。

隣にある幸せをこれからも大切にね、啓太。

はい、そんなわけで全話コメントし終えました。コメントすること自体は私自身の自己満足でしかありませんが、それでも作品への愛を感じていただけたら幸いです。

無印「猫又のサクラ」を2007年から開始（はじめはブログにて掲載。その後投稿小説へ移行し現在に至ります）させてから約4年が過ぎました。

長いようであつという間だつた四年間は、私自身にも大きな影響を及ぼしたと思います。様々な方々と知り合い、そして別れを繰り返しながら、切磋琢磨を繰り返して、こうして完結まで導くことが出来ました。それらは支えてくれたファンの皆様、読者の皆様、クリエイターの皆様の多大な恩恵と応援から成り立っている物だと私は思います。

書くことへの楽しさ。書くことへの意義。それらを踏まえ、あまり深く考えず突っ走る癖は自分でもなおした方がいいと思っています。

今作も前作と同様、読者様を「笑わせたり、感動させたり、胸キュンさせたりしたいな」と心に秘めて執筆をしていましたが、如何でしたでしょうか。

文章力もなく、語彙量も少なければ頭もよろしくない。そんなダメダメ作者が書いた長編ラブコメストーリーでしたが、少しでも「読んでよかった」と思って頂けるよう、今後も努力をしていきます。

それでは、長々と書き綴っていききましたが、そろそろお別れの時間です。

ではでは、今までお付き合い頂いた方々に、全ての感謝を込めて

Thank you for reading!

また、別作品にてお会いしましょう！

2011年12月27日

作者：arupetia

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144k/>

猫又のサクラ にっ！

2012年1月1日01時49分発行